プラトン全集 2

# クラテュロス

水地宗明訳

# テアイテトス

田中美知太郎訳

岩波書店

編集
田中美知太郎
藤 沢 令 夫

# 目次

# 凡例

一、本全集は底本として、バーネット版プラトン全集(J. Burnet, *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford Classical Texts)を用い、これと異なる読みをした箇所は注によって示す。

二、訳文上欄の数字とBCDEは、ステファヌス版全集(H. Stephanus, *Platonis opera quae extant omnia*, 1578)のページ数と各ページ内のABCDEの段落づけとの対応——おおよその——を示す(ただしAは省略した)。引用は、このページ数と段落により示される(例えば『パイドロス』253C)。

三、各対話篇における章分けは、一八世紀以降フィッシャー(J. F. Fischer)の校本に由来すると見られる一般に慣用のものに従う。ただし対話篇により章別の一定していないものもあり、この場合は適宜区別を設けた。

四、対話篇名につけられている副題(ないものもある)は、ローマ時代のプラトン全集(トラシュロス)以来の、あるいはさらに古い伝承によるものである。所伝によって異同のある場合は、適切と判断されるものを選んでつけた。

五、ギリシア語の片かな表記は、ΦΧΘとΠΚΤとを同じように「プ」「ク」「ト」とし、母音の長短は普通名詞においてのみ区別し(例、ソピアー)、固有名詞においては区別しない(例、ソークラテースでなく、ソクラテス)。

六、〔 〕の括弧は訳者による文意の補足を示す。

七、略記号　DK＝H. Diels u. W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*.　Diog. L.＝Diogenes Laertios.　古注＝*Scholia Platonica* (ed. W. C. Greene).

八、本全集における対話篇の収録順と各巻への配分は、古のトラシュロス編全集における九つの四部作集(tetralogia)の順序と括り方に従っている。

# クラテュロス

――名前の正しさについて――

水地宗明訳

## 登場人物

ヘルモゲネス
クラテュロス
ソクラテス

# 一

383 **ヘルモゲネス**[1]　ではどうだろう、こちらのソクラテス[2]にも、われわれの論争点をお話して、議論に加わっていただいては。

**クラテュロス**　君がよければ、どうぞ。

**ヘルモゲネス**　こちらのクラテュロスがね、おおソクラテス、こう主張するのです。名前の正しさ[3]というものは、それぞれの有るもの[4]に対して、本来本性的に〔自然に〕定まっている。そして名前とは、幾人かの人々がそう呼ぶことを申し合わせて〔取りきめて〕、自分たちの言語[5]の一部分として発音することによって、呼んでいるものなのではなくて、何か名前の正しさというものが本性的に〔自然に〕存在しているのであり、それはギリシア人に B も外国人にも万人に同一のものなのであると、このように彼は主張するのです。そこでぼくが彼に質問しました。クラテュロスという名前は、真実に彼の名前であるのかどうかとね。彼はそうだと肯定しました。「ではソクラテスには何という名前があるのか」とぼくがたずねますと、「ソクラテスという名前だ」と彼は答えました。「それでは、その他のすべての人間のばあいも、われわれが彼ら一人一人を呼んでいるまさにその名前が、各人の名前であるのではないか。」これに対して彼は「いや、少なくとも君にだけは〝ヘルモゲネス〟が名前ではないよ。たとえ世界中の人間が君をそう呼んだとしてもね」と言いました。そしてぼくが、いったい彼は何を言おうとし 384 ているのか、問いただし、理解しようと一生懸命になりましても、彼は明確なことを何も言わないばかりか、思

わせぶりな態度でぼくをからかうのです。つまり、彼は——彼自身が信じるところによれば——この問題については良く精通しているのであって、自分自身で自己の心中に何かいっかどの思想を形成しており、もしそれを彼が明確に説明する気になりさえすれば、ぼくをも同意させ、彼の主張の同調者とすることができるであろう、というふうに見せかけるのです。そういうわけで、もしあなたがクラテュロスのこの御託宣を何とか判じて下さるならば、喜んでお聴きしたいものです。いや、それよりも、名前の正しさについて、あなた御自身はどうお考えか、聞かせて下さる気がおありならば、もっと喜んで拝聴いたしましょう。

B **ソクラテス**　おお、ヒッポニコスの息子のヘルモゲネスよ、古くからのことわざにも、「うるわしきはむずかし」(6)、つまり価値あることについて、その真相を学び知ることは困難である、といわれているではないか。そして

---

1　二〇歳前後(?)の若者。相手のクラテュロスも、ほぼ同年輩か、やや年長の青年であろう。ソクラテスはかなりの年齢である。五〇歳前後から七〇歳までの可能性がある。解説四一四および四二三ページを参照。

2　「こちらの」とは、かたわらにいる第三者を指していうことば。本篇中でしばしば使用される。ソクラテスは少し前に二人の青年に出会って、すでに多少のことばを交していたらしい(そのことは、本篇の最後のソクラテスのことばから推定できる)。二人の青年はソクラテスに出会うまで論争していたが、その内容については後者はこれから知らされるわけである。

3　名前を正しい名前にする規準、よりどころ。なお解説(四一二ページ)を参照。

4　一定のものとして(何かであるものとして)存在しているもの。少なくとも当篇では「有るもの」(オン)と「事物」(プラーグマ)とは、同義的、相互交換的に使用されている。

5　ペルシア語、ギリシア語、あるいはギリシア語中のアッティカ方言などというときの「言語」。原語は「音声」という意味ももっているので、そう訳す人が多いのだが、ここでは各国語の違いを超越するものが問題にされているのではなかろうか。

6　立派なことをなし遂げるのは困難であるという意味。ソクラテスはこのことわざをここで特殊な場合に応用しているわけである。

名前についての学知だって、決してつまらない〔価値少ない〕ものではないのだよ。ところで仮にもしぼくがプロディコス(1)から五〇ドラクメ分(2)の講義を聴いていたならば、それを聴いた者は、かの人〔プロディコス〕のいうところでは、名前についての十分な教育を授けられるのだそうだから、名前の正しさについての真実を君が今ここで即座に知ることに、何の妨げもなかったことだろう。ところが実際はぼくは聴かなかったのだ。ぼくが聴いたのは、一ドラクメ分の講義だったのだ。(3) だからして、このようなことがらについて真実がいったいどのようであるか、ぼくは全然知らないのだよ。とはいうものの、君とでもクラテュロスとでも、力を合わせていっしょに探究することについては、喜んでお手伝いしたい。なお、〃ヘルモゲネス〃が真実に君の名前であるということを彼が否定する点についていうならば、ぼくの推測では、彼は冗談をいっているのだ。というのは、君が財産を得ようと望みながら、そのたびに失敗していると、彼は多分考えているのだろう。(4) しかし〔それはそれとして〕、今も言っていたように、このようなことがらを認識することは困難ではあるが、これをわれわれの共通の問題として立てて、真実は果して君のいうとおりであるのか、それともクラテュロスのいうごとくであるのか、考察しなければならない。

## 二

**ヘルモゲネス**　ええ、結構ですとも。〔それではぼくの意見を申しますが〕ぼくとしてはですね、おおソクラテス、これまで実に度々、この人とも、また他の多くの人たちとも語りあったのですが、取りきめ〔約束〕と同意以外に、何か名前の正しさ〔規準〕があるなどとは、どうしても納得できないのです。なぜなら、ぼくにはこう思え

るのです。だれかが何かにどんな名前でもつけたならば、それがそのものの正しい名前であるのだ。そして、もしあとになってですね、その人がそのものに別の名前をつけ換えて先の名前ではもう呼ばなくなったら、今度はあとの名前が先のに劣らず正しい名前となったのであり、それはちょうどわれわれが召使い〔奴隷〕たちの名前をつけ換えるばあいと同様である。なぜならば、本来それぞれのものに本性的に定まっている名前なんて、全然ありはしないのだから。むしろ名前は、それを言い慣わし、呼んでいる人々のしきたりと慣わし〔慣用〕によってできあがるものであると、このようにぼくには思えるのです。しかし事実が多少なりと違っているのであるならば、ぼくとしては、ひとりクラテュロスからだけではなく、他のだれからでも、喜んで学びもし、聴きもしたいと思

E

1　著名なソフィストの一人。生没年は定かでないが、『プロタゴラス』317C の記事からして、ソクラテスとほぼ同年輩と推定できる。『プロタゴラス』に登場するほか、プラトンの作品中でしばしば言及される。『テアイテトス』151Bを参照。ソクラテスがいつプロディコスの講義を聞いたかは不明。

2　ドラクメは貨幣単位の一つ。一ドラクメの銀貨があった。当時の貨幣価値はそうはっきりしていない。一ドラクメは大した金額ではないが、それでもかなりの購買力をもっていたらしい。当時アナクサゴラスの著書が一部一ドラクメ。前四世紀の始め頃には一ドラクメが小麦一七リットルくらいに相当したらしい。その頃のある時期には民会に出席した市民は半ドラクメの手当を支給され、この報酬は民衆に歓迎された。ソクラテスの全財産はクセノポンによると(家と家財道具を含めて)五ムナ(五〇〇ドラクメ)くらいだったという。

3　表面的には経済上の理由からそれ以上の講義を聴けなかったということらしいが、プロクロスの解釈ではこれもアイロニーで、実は一ドラクメ分聞いただけで、五〇ドラクメの講義も欺瞞的で、報酬目当てのものに過ぎないことを看破したからであろうという。

4　〃ヘルモゲネス〃とは「ヘルメス神から生まれた者」、「ヘルメスの子孫」という意味である。ヘルメス神の機能の一つは幸運や利益を授けることであるから、ヘルメスの子孫ならば貧乏であるはずはない、ということになる。なお〃ヘルモゲネス〃の別の解釈については408Bを参照。

385

います。

**ソクラテス**　いや実際君の言うことにはおそらく一理あるのだろうね、おおヘルモゲネスよ。だが考察してみようではないか。だれかがそれぞれのものを何とでも名づけて呼ぶならば、それがそれぞれのものの名前であるのかね。

**ヘルモゲネス**　ええ、とにかくぼくにはそう思えるのです。

**ソクラテス**　名づける者が私人である場合でも、国家(1)である場合でもかね。

**ヘルモゲネス**　そうです。

**ソクラテス**　ではどうだろう。ぼく個人が有るものを何であれ、例えば現在われわれが人間と呼んでいるものをだね、それをぼくが馬と呼称することにして、そして現在馬と呼ばれているものを人間と呼ぶことにするならばだ、同一のものに対して公共的には人間という名前があり、私的には馬という名前があることになるだろうね。また逆に、私的には人間と呼ばれるものが、公共的には馬と呼ばれることになるだろう。君が言わんとしているのは、そういうことかね。

B

**ヘルモゲネス**　ええ、ぼくにはそのように思えるのです。

## 三

**ソクラテス**　よろしい。さあ、それでは、次の点に答えてくれ給え。真実を言うということと、虚偽を言うということが、あると君は認めるかね。

C

**ヘルモゲネス**　認めます。

**ソクラテス**　それでは、ある言明(2)は真で、ある言明は偽であることになるのではないだろうか。

**ヘルモゲネス**　もちろんです。

**ソクラテス**　では、〔かくかくで〕有るものを有るがままに言う言明が真で、有るものを有らぬふうに言う言明が偽であるのかね。

**ヘルモゲネス**　そうです。

**ソクラテス**　してみると、言明によって有るものとないものとを言う〔言明する〕ことは、可能なのだね。

**ヘルモゲネス**　もちろんです。

**ソクラテス**　ところで、真である言明は、どうだろう、全体が真で、その諸部分は真でないのかね。

**ヘルモゲネス**　いいえ、諸部分も真であるのです。

**ソクラテス**　しかし、どうだろう、大きい部分は真で、小さい部分(3)は真ではないのかね。それともすべての部分が真であるのかね。

**ヘルモゲネス**　すべての部分が、だとぼくは思います。

**ソクラテス**　ところで、言明の部分として、名前よりももっと小さいと君が主張するようなものが、何かある

1　言語の公共的、社会的性格を指摘するために「国家」をもち出したのである。

2　原語はロゴス、文法学上の「文」(平叙文)である。言明は名前と述べことばとから成り立つことが431B〜Cで言われている。

3　「小さい部分」とは、大きい部分のそのまた部分である。

かね。

**ヘルモゲネス**　いいえ、それが最小の部分です。(1)

**ソクラテス**　してみると、真である言明の一部分をなす名前もまた、言われる〔言明される〕わけだ。

**ヘルモゲネス**　そうです。

**ソクラテス**　そしてそれは、君の主張するところによると、真であるのだ。(2)

**ヘルモゲネス**　そうです。

**ソクラテス**　他方、偽である言明の部分は、偽なのではないかね。

**ヘルモゲネス**　そのとおりです。

**ソクラテス**　してみると名前を偽あるいは真として〔偽あるいは真となるように〕言うことができるわけだね、もし言明をもそのように言うことができるのだとするとね。

D

**ヘルモゲネス**　もちろん、できますとも。

**ソクラテス**　さてそれでは、どんなものにでも各人が、これが名前だと言ったら、それがそのものの名前であるのだね。(3)

**ヘルモゲネス**　そうです。

**ソクラテス**　そもそもまた、人がそれぞれのものに、いくつであろうとも、言った〔つけた〕だけの名前が、またいつであろうとも、言った時に、そのものの名前であるということになるのだろうか。

**ヘルモゲネス**　もちろんです。なぜなら〔すでに申しましたように〕ぼくはですね、おおソクラテス、名前の正

しさ〔規準〕としては、これ以外のものを知らないのですから。すなわち、ぼくはぼくがつけた名前でそれぞれのものを呼ぶことができますし、またあなたはあなたのおつけになった別の名前でね。同様に国家の場合も、同一の事物にいくつかの国家[4]がそれぞれ独自の名前をつけている事実をぼくは見ます。あるギリシア人の国家が別のギリシア人の国家と、またギリシア人の国家が外国人の国家と、異なる名前をつけているのです。

E

## 四

**ソクラテス** よろしい。さあそれでは、おおヘルモゲネスよ、われわれは次の点を考えてみようではないか。どうだろう、〔名前だけでなく〕有るものもそうだと君には見えるのかね。つまり、有るものの有りかた〔本質、何で有るか〕は〔それをとらえる〕各個人にとって、それぞれ独自の〔個人的、私的な〕ものなのだろうか。ちょうどプロタゴラスが[5]「人間こそあらゆるものごとの尺度である」ということばによって言おうとしたようにね。つまり〔プロタゴラスのことばを解釈すると〕事物がぼくにしかじかに見えるならば、ぼくにとってはそのように有るのであり、また君に見えるように、君にとって有るのだということらしいがね。それとも事物は〔われわれとの

386

1 もちろん意味をもつ部分として最小だというのである。

2 真偽は言明（あるいは判断）の述語で、名辞には真偽がないというのがアリストテレス以来一般的な考え方であろう。プラトンも真偽が第一義的には言明に帰属すべきものであることをここで必ずしも否定してはいないようだが、とにかく事物に正しく照応する名前を真なる名前と呼んでいるわけである（430D参照）。

3 すでに385Aで出された質問だが、確認と、次の質問に移る足がかりのため、再度たずねたのであろう。

4 テクストはB、W写本のままとする。

5 プロタゴラスとその人間尺度説については『テアイテトス』152A sqq. 参照。

関係においてでなく〕それ自身が、それ自身の固定した有りかた〔本質〕を何かもっているように、君に思えるかね。

**ヘルモゲネス**　いや、すでにいつかぼく自身もですね、おおソクラテス、ちょうどその点で困惑して、プロタゴラスの説にまで押し流されたことがあるのです。とはいうもののぼくには、事実がそうで〔プロタゴラスの言うようで〕あるとは、すっかり〔全然〕信じられないのですがね。(1)

B

**ソクラテス**　ほう、ではどうかね。君はもう、劣悪な〔役に立たない〕人間が存在するとはすっかり〔全然〕信じられないところまで、押し流されたのかな。

**ヘルモゲネス**　とんでもない。ゼウスにかけて決して。ぼくはたびたびそのことを経験しましたので、ある人間ども、しかも非常に多数が、とても劣悪であると思えるのです。(2)

**ソクラテス**　ではどうかね。とても有用な人間が存在すると君に思えたことは、まだないのかね。

**ヘルモゲネス**　非常に少数ですがね。

**ソクラテス**　それでも、そう思えたのだね。

**ヘルモゲネス**　ええ、ぼくにはね。

**ソクラテス**　それでは君はその点をどう規定するのかね。こうだろうか。とても有用な者は、とても思慮ある者で、とても劣悪な者は、とても無思慮な者である。(3)

C

**ヘルモゲネス**　ええ、そのようにぼくには思えます。

**ソクラテス**　さてそれでは、もしプロタゴラスの語ったことが真実であり、真理はこれ、すなわち、事物は各人にそうだと思えるとおりに、有るのでもあるということ、ならば、われわれのうちのある者が思慮ある者で、(4)

ある者は無思慮であるということが、可能だろうか。

**ヘルモゲネス**　いいえ、決して。

**ソクラテス**　それでは君は、ぼくが思うに、少なくともこのことだけはすっかり信じているわけだね。つまり、思慮深さと無思慮とが存在する以上、プロタゴラスが真実を語っているということはすっかり〔全然〕不可能であることをね。なぜなら、もしも各人に思えることが各人にとって真であるならば、ある人が別の人よりも思慮があるということは、真実には全然ありえないことになるだろうからね。

D

**ヘルモゲネス**　そのとおりです。

### 五

**ソクラテス**　かといってまた君は、エウテュデモス(5)に従って、すべてのものにすべてのものが等しく〔同程度

1　以下数回ソクラテスが「すっかり」あるいは(原語では同じなのだが)「とても」というのは、ヘルモゲネスの口真似かもしれない。

2　このことばは、ヘルモゲネスの経済的困窮と関係があるのであろう。384C参照。

3　真の善についての知識をもつ者が、本当に思慮ある者である。そのような者こそ、真に善良で優良で有用な人間でありうる。

4　プロタゴラスの人間尺度説を述べた著書の題名はプラトンによれば『真理』であった。『テアイテトス』161C参照。

5　キオス島出身のソフィスト。プラトンの『エウテュデモス』に登場する。ソクラテスより年長であったらしい。その実在を疑う学者もあるが、アリストテレスもエウテュデモスに言及している(『詭弁論駁論』(177b12))ので、実在した人物であることは先ず疑えないだろう。

に〕、同時にそして常に備わっているのだと信じているわけでもないだろうと思う。なぜなら、この場合にも、ある人々が有用で他の人々が劣悪であるという区別が、なくなってしまうだろうからね。もしすべてのものに等しくそして常に優秀さと劣等性とが備わっているのであるならばね。[1]

**ヘルモゲネス**　おっしゃることは本当です。

**ソクラテス**　それでは、すべてのものがすべてのものを等しい程度に、同時にそして常に所有しているのでもないし、またそれぞれの人がそれぞれの有るものを独自に〔主観的に〕所有しているのでもないとするならば、事物はそれ自身でそれ自身の固定した有りかた〔本質〕を持っているのだということは明らかだ。つまり、事物はわれわれとの関係において〔相対的に〕有るのではなく、またわれわれの表象によって上へでも下へでも引き回されるというふうに、われわれに依存しているのでもなくて、それ自身において、それ自身の固有の有りかたに従って、本性的に定まっている仕方で存在するのである。

E

**ヘルモゲネス**　ええ、そのとおりだとぼくには思えます、おおソクラテス。

**ソクラテス**　ではどうだろうね、事物自身は本性的にそのようなものでありながら、他方事物の作用は、同様ではないのだろうか。いや、むしろ、それ――作用――だって有るもの〔事物〕の一種ではないのだろうか。

**ヘルモゲネス**　ええ、もちろん、それも〔有るもの〕です。



**ソクラテス**　してみると作用もまたわれわれの臆断〔思いなし〕によってではなく、作用自身の本性に従って、行なわれるわけだ。例えば、われわれが何か有るものを切ろうとする場合にだね、どうだろう、自分の好き勝手なように、また好き勝手な手段〔器具〕で、それぞれのものを切るべきだろうか。それとも、こうなのだろうか。[2]

もしもわれわれがそれぞれのものを、切る作用と切られる作用の本性に従って、そして本性にかなった手段で切ろうと欲するならば、われわれは切ることに成功するだろうし、正しく行なうことになるだろうが、他方もし本性に逆らって切ろうとするならば、失敗し、何もしないことになるのだろうか。

B

**ヘルモゲネス**　ぼくには後者のように思えます。

**ソクラテス**　それならばまた、われわれが何かを焼こうとするばあいでも、どんな考え〔思いなし〕にでも従うべきではなくて、正しい考えに従って焼くべきではないだろうか。その場合正しい考えとは、それぞれのものが、本性的に焼かれるためには、あるいはそれぞれのものを本性的に焼くためには、どのようになすべきか、またどのような手段を用いるべきか、を示す意見である。

**ヘルモゲネス**　そのとおりです。

**ソクラテス**　それでは、その他の場合も同様ではないだろうか。

**ヘルモゲネス**　もちろん同様です。

---

1　例えば、どの物体でも、白、黒などすべての色をもっているとか、どの人間でも徳性と悪徳のすべてを備えている、というわけであろう。従って、対象をどのように判断しても、その判断は真であることになり、結果的にはプロタゴラス説と同じことになる。『エウテュデモス』篇ではエウテュデモスは正確にこれに相当するような説を述べていない。しかしこの箇所は、読者がすでに『エウテュデモス』を読んでいることを予想していると見なす学者がある(ヴィラモヴィッツその他)。

2　何を切るばあいを考えてもよいのだろうが、二、三の学者が指摘しているように、外科的手術のばあいが特に念頭におかれているのかも知れない。次例の「焼く」も同様である。「切る」と「焼く」とは当時の外科的手術の主要な手段であったらしい。

# 六

**ソクラテス**　さて、そもそも言うということもまた、ある一種の作用ではないだろうか。[1]

**ヘルモゲネス**　そうです。

C **ソクラテス**　ではどうだろうか。だれかが、こういうふうに言えばよいと思って、そのとおりに言うならば、それでもう正しく言ったことになるのだろうか。それとも、事物を言うという作用と、事物が言われるという作用の本性〔自然〕にかなったしかたで、かなった手段〔道具〕を用いて言うならば、その人は成功し、言ったことになるだろうが、そうでないとその人は失敗し、何もしなかったことになるのだろうか。

**ヘルモゲネス**　あとで言われた方が正しいようにぼくには思えます。

**ソクラテス**　ところで、名づける〔あるいは、名前をいう〕ことは〔言明を〕言うことの一部分ではないだろうか。なぜなら、人々は名前をいいながら言明を言うようだからね。[2][3]

**ヘルモゲネス**　もちろんです。

**ソクラテス**　そうすると、名づけることもまた一種の作用ではないだろうか。言うことも事物にかかわる一種の作用であったのだからね。

**ヘルモゲネス**　そうです。

D **ソクラテス**　しかし作用は、われわれとの関係においてあるのではなくて、それ自身の独自の何らかの本性をもつものであることが、先ほど明らかになったのだったね。[4]

ヘルモゲネス　そのとおりです。

ソクラテス　従って、名づける場合も――さっき言われたことに一致するように言おうとするならば――われわれの欲するままに名づけるべきではなくて、事物を名づける作用と事物が名づけられる作用の本性に合うしかたで、本性に合う道具を用いて、名づけるべきではないだろうか。そしてそのようにするならば、われわれはそのことに成功し、名づけたことになるだろうが、そうでないと反対の結果になるのではないだろうか。

ヘルモゲネス　ええ、ぼくにはそのように見えます。

## 七

ソクラテス　よろしい。さあ、それでは、切るべきものをば――われわれがさっきから言っているところによると――何かでもって切るべきであったのだね。

ヘルモゲネス　そうです。

E

ソクラテス　また梭（ひ）する(5)〔織る〕べきものにしても、〔それをわれわれは〕何かでもって梭するべきであったし、

1　「言う」(legein)とは、ここでは文(logos)に対応する動詞で「言明する」、「文を発言する」という意味である。単なる語や句を発言することではない。

2　テクストはB、W写本に従う。

3　もちろん名前を並べるだけでは、まだ言明(文)にはならないが、名前をいうことが文を言うことの必要条件である。

4　387 A.

5　梭を用いて作業すること。はたおり仕事のうちの中心的な部分で、タテ糸にヨコ糸を通す作業。388 B 注1参照。原語が一語なので、強いて一語で訳した。

また孔をあけるべきものも、何かでもってあけるべきであったわけだね。

**ヘルモゲネス**　確かにそうです。

**ソクラテス**　そして、さあ、いいかね、名づけるべきものにしても、〔われわれはそれを〕何かでもって名づけなければならなかったわけだ。

**ヘルモゲネス**　そのとおりです。

388

**ソクラテス**　さて、われわれがそれでもって〔ものに〕孔をあけるべき器具は、何だったかね。

**ヘルモゲネス**　錐(きり)です。

**ソクラテス**　では、それでもって梭するべき道具は、何だったかね。

**ヘルモゲネス**　梭です。

**ソクラテス**　では、それでもって名づけるべき道具は何なのかね。

**ヘルモゲネス**　名前です。

**ソクラテス**　そう、そのとおり。してみると名前も一種の道具であるわけだ。

**ヘルモゲネス**　確かにそうです。

**ソクラテス**　さてそれでは、もしぼくが「梭とはどのような道具だったかね」とたずねるならば、「それでもってわれわれが梭する道具」と君は答えるのではないかね。

**ヘルモゲネス**　そうです。

B

**ソクラテス**　だが、梭することによって、われわれは何をしているのだろうか。入り混じっている経糸と緯糸

とを区分しているのではないかね。(1)

**ヘルモゲネス**　そうです。

**ソクラテス**　また、錐やその他の道具についても、君はそういうふうに答えることができるのではないだろうか。

**ヘルモゲネス**　ええ、確かにできます。

**ソクラテス**　さあ、それでは、名前についても、君はそういうふうに答えることができるかね。道具である名前でもって名づけることによって、われわれは何をしているのだろうか。

**ヘルモゲネス**　ぼくには言うことができません。

**ソクラテス**　では〔ぼくが言ってみるが〕その場合われわれはお互いどうしが何かを教えあっているのであり、また事物をその性状〔いかにあるかということ〕に従って区別しているのではないだろうか。

**ヘルモゲネス**　確かにそうですね。

1　織機の本体は垂直に立てた二本の柱の頂点に一本の横木をわたしたもので、この横木からたくさんのタテ糸を垂らし、下方に重しをつけてピンと張っておく。そしてこのタテ糸の間を、ヨコ糸をつけた梭(ケルキス)というものをくぐらせ、ヨコ糸をタテ糸の間に織り込みつつ梭を往復させるのが「梭する」である。これによってタテ糸は、ヨコ糸の上にくるものと下にくるものとの二群に区分されるし、一本ずつ別々に区分されることにもなり、またヨコ糸も一段ずつ区分されることになるというわけであろうか。そして、未区分のまま混在するものを区分するという点で、名前は梭になぞらえられているのである。

# 八

**ソクラテス**　してみると名前は一種の教示的な道具であり、そして事物の有りかたを区別する道具であるわけだ。ちょうど梭が織り糸を区分する道具であるようにね。

C

**ヘルモゲネス**　そうです。

**ソクラテス**　ところで、梭はとにかく機織(はたおり)に関する道具だろうね。

**ヘルモゲネス**　もちろんです。

**ソクラテス**　してみると、梭を上手に使いこなすのは、機織の技術をもつ人だろう。「上手に」とは、この場合「機織術的に」ということだ。また名前を上手に使いこなすのは、教示の技術をもつ人だろう。「上手に」とは「教示術的に」という意味だ。

**ヘルモゲネス**　そうです。

**ソクラテス**　さてそれでは、機織者(はたおり)が梭を使うときに、だれが作ったものを使うならば、上手に使いこなすのだろうか。

**ヘルモゲネス**　大工が作ったものです。

**ソクラテス**　だが、すべての人が大工であるのかね。それともその〔大工の〕技術をもつ人が大工かね。

**ヘルモゲネス**　その技術をもつ人がです。

D

**ソクラテス**　また、穿孔者が錐を使うときに、だれが作ったものならば、上手に使いこなすのだろうか。

**ヘルモゲネス**　鍛冶屋が作ったものです。
**ソクラテス**　うん、それではすべての人が鍛冶屋であるのかね。それともその技術をもっている人がかね。
**ヘルモゲネス**　その技術をもっている人がです。
**ソクラテス**　よろしい。さてそれでは、教示の技術をもつ人が名前を使うときに、だれが作ったものならば、〔上手に〕使いこなすのだろうか。
**ヘルモゲネス**　それもぼくには答えられません。
**ソクラテス**　じゃあ、これも君には答えられないかね。われわれが使うもろもろの名前は、だれがわれわれに授けてくれるのだろうか。
**ヘルモゲネス**　いや、とても〔答えられません〕。
**ソクラテス**　いったい君には法律(1)〔慣習〕が名前を授けるものであるとは思えないのかね。
**ヘルモゲネス**　なるほど、そのようですね。
E
**ソクラテス**　してみると教示の技術を持つ人が名前を使うときには、立法者〔法律、慣習を制定する者〕が作ったものを使うのだろうね。
**ヘルモゲネス**　ええ、ぼくにはそう思えます。

1　「法律」とは必ずしも成文法ではない。〃法〃(ノモス)という語には〃慣習〃の意味があり、ここでも慣習(社会のおきて)と法とは区別されていないようである。すぐあとの「立法者」は慣習制定者でもありうるわけである。名前は慣習によって与えられるのであるが、しかし慣習制定者によって気ままに定められるべきものではないのである。

(388)

**ソクラテス**　だが、すべての男子が立法者であると君に思えるかね。それともその技術を持つ者がかね。

**ヘルモゲネス**　その技術を持つ者がです。

389

**ソクラテス**　してみると名前を定めるということは、おおヘルモゲネスよ、すべての男子にできる仕事ではなくて、何か名前制作者とでもいった人の仕事なのだ。そしてこの名前制作者とは、どうやら立法者〔立法技術を持つ者〕がそれに当るらしい。そしてこれこそ、すべての制作者中で、人間世界に出現することの最も稀少なものなのだ。

**ヘルモゲネス**　そのようですね。

## 九

**ソクラテス**　さあ、それでは、次の点を考えてみたまえ。立法者は何を基準〔手本〕にして名前を定めるのだろうか。さっきの例から類推してみたまえ。大工は何を基準にして梭を作るのだろうか。梭する〔梭の作用をなす〕ことがその本性としてすでに定まっていたような何か[1]を基準にするのではなかろうか。

**ヘルモゲネス**　確かにそうです。

B

**ソクラテス**　ではどうだろうね。彼〔大工〕が梭を作っていて、途中でこわれた場合、またもう一つ作り直すのに、こわれたのを手本にするだろうか。それとも、こわれたのを作っていたときにも手本にした、あの模範の形〔形相〕をだろうか。

**ヘルモゲネス**　あのものを、だとぼくには思えます。

**ソクラテス**　それではあのものをこそ〝まさに梭であるもの〟〔梭それ自体〕と呼ぶことが至当ではないだろうか。

**ヘルモゲネス**　ええ、ぼくにはそう思えます。

**ソクラテス**　さてそれでは、大工が布地を——薄手のか、厚手のか、亜麻のか、羊毛のか、あるいはその他どんなのでも、〔どにかくある種類の〕布地を織るための梭を作る場合には、そのすべて〔の梭〕が梭の形をもたなければならないことはもちろんだが、さらに、それぞれの種類の布地に本性上最も良く適した性状を、それぞれの

C

制作物〔つまり梭〕に大工は与えなければならないのではないか。

**ヘルモゲネス**　そうです。

**ソクラテス**　また、その他の道具についても、同様だ。つまり〔制作者はそれぞれの用途に〕本性上適した道具〔の形〕を発見して、それを、道具がそれから作られるところのもの〔つまり材料、素材〕の中に与えねばならないのだ。何でも彼自身の欲するようなものをというのではなくて、本性上適しているような道具〔の形〕を、ということだ。例えば、それぞれの種類の用途〔孔〕に本性上適した錐〔の形〕を鉄の中に入れるすべを知っていなければならないのだ。

**ヘルモゲネス**　確かにそうですね。

---

1　大工の精神が眺める梭の理念、あるいは(ソクラテスからすると)梭のイデアということになるのであろう。「定まっていた」という未完了過去形は、具象的なものに先んじてそう定まっているという、理念の超越的永遠的存在を示すのであろう。ただし写本の読みに問題があって、「定まっている」という読みを採っている校訂者もある。

ソクラテス　また、それぞれの用途〔織物〕に本性上適した梭〔の形〕を木材の中にね。

ヘルモゲネス　そのとおりです。

D

ソクラテス　その理由は、それぞれの種類の織物に対して、本性上適した梭〔の形〕がそれぞれあったのだ、というように見えるからだ。そしてその他のものについても、そのとおりなのだ。

ヘルモゲネス　ええ、そうです。

ソクラテス　それでは、おお、いとも優れた人よ、名前の場合にも、あの〔さっきからわれわれが問題にしている〕立法者は、それぞれの用途に本性上適した名前〔の形〕を、音と音節の中に入れるすべを知っていなければならないのではないか。そして、あのまさに名前であるもの[1]〔名前それ自体〕を基準〔手本〕にして、すべての名前を作り、〔事物に〕命名しなければならないのではないか。もし彼が真に権威ある命名者であろうとするならばね。

E

なおその場合に、〔各国の〕それぞれの立法者が〔同じ名前の形を〕同じ音節の中には入れないということがあるわけだがね[2]、これについては次のことを知っておかなければならない[3]。つまり、鍛冶屋だって、同じ目的のために同じ道具を作っていても、みんなが同じ鉄材の中に〔その道具の形を〕入れるわけではないのだ。しかしそれでも、同じ姿を与える限りは、それぞれ違う鉄材の中にであっても、でき上がった道具は正しいものであるのだ。当地〔ギリシア〕で作ろうとも、外国でだれかある鍛冶屋が作ろうともね。そうではないだろうか。

ヘルモゲネス　ええ、確かにそうですね。

390

ソクラテス　それでは君は立法者の場合にも同じように、それが当地の立法者であろうと外国のであろうと、それぞれのもの〔事物〕にふさわしい名前の形を与えてさえいるならば、どんな音節の中に与えていようとも、い

ずれ劣らぬ立法者であると評価するのではないだろうか。それが当地の立法者であろうとも、他のどこの土地のであろうともね。(4)

**ヘルモゲネス**　確かにそうです。

## 一〇

**ソクラテス**　ところで、ある〔任意の〕木材の中に梭のふさわしい形が置かれているかどうかを認識するであろう人は、だれだろうか。制作者である大工だろうか、それとも使用者となる織り手だろうか。

**ヘルモゲネス**　それは使用者の方である公算がむしろ大ですね、おおソクラテス。

B **ソクラテス**　それではリュラ琴制作者の制作物を使用するであろう者は、だれなのだろうか。それはこういう人、つまり、リュラ琴が作られている途中で、だれよりも上手に監督するすべを知っており、また作り上げられ

---

1　「まさに名前であるもの」(名前のイデア)が出てくるのは、プラトンの著作中でもこの箇所のみである。名前のイデアは一つであるが、個々の名前は、名前のイデアを分有するだけでなく、それぞれが名づけるべき対象の本質に対応するような形相をも有しなければならないようである。横で聞いているクラテュロスはイデアというものを認めていないのだろうが、名前の意味のようなものとしての「名前の正しさ〔正しい名前〕」、というものを主張している(383A～B)。

2　例えば〝人間〟という名前の形相は一つであるはずだのに、人間を表わす語は各国語でそれぞれ違っている、というようなこと。

3　テクストは写本のとおりに読み、底本の読みに従わない。

4　鉄材はすべて同一種のものだが、名前の素材となる文字や綴は各国語で異なるので、完全なアナロジーは成立しないと非難する学者もある。もっとも鉄材にしても必ずしもすべて同一種でなく、いろいろの種類のものがあると考えることも不可能ではないであろう。

たものを、うまくでき上がったかどうか、だれよりも良く識別できるような人ではないだろうか。

**ヘルモゲネス** 確かにそうですね。

**ソクラテス** で、それはだれだろう。

**ヘルモゲネス** 琴演奏者です。

**ソクラテス** また、船大工の制作物を使用するであろう者は、だれだろう。

**ヘルモゲネス** 舵取りです。

C

**ソクラテス** では立法者が制作するものを、当地においても外国においても、〔制作過程で〕だれよりも上手に監督もするし、また作りあげられたものをだれよりも良く判定もするのは、だれだろうか。使用者となる人ではないだろうか。

**ヘルモゲネス** ええ、そうです。

**ソクラテス** ところでそれ〔名前の使用者〕は、問うすべ〔どのように質問すべきか〕を知っている人ではないかね。

**ヘルモゲネス** 確かにそうですね。

**ソクラテス** そしてまた、その同じ人が、答えるすべをも知っているのだろうね。

**ヘルモゲネス** ええ、そうです。

**ソクラテス** ところで、問うすべと答えるすべとを知っている人を、君は問答家〔対話術者〕と呼ぶかね。それとも、違った名称で呼ぶかね。

D

**ヘルモゲネス**　いいえ、そう呼びます。

**ソクラテス**　してみると、一方において、船大工の仕事は、舵取りの監督のもとで舵を作ることだ。舵が立派なものとなるためにはね。

**ヘルモゲネス**　明らかにそうですね。

**ソクラテス**　そして他方、立法者の仕事は、今思えるところでは、問答法を心得た人を監督者として、名前を定めることであるようだ。彼が立派に名前を定めようとするならばね。

**ヘルモゲネス**　そのとおりです。

**ソクラテス**　してみるとおそらく、おおヘルモゲネスよ、名前を定めるということは、君が思っているように[1]、つまらない仕事であるのではなさそうだし、つまらぬ人間の仕事でも、だれにでもやれることでもないようだね。

E

そしてクラテュロスが言っていることは真実なのだ。つまり、名前は事物に対して本性的〔自然的〕に定まっているということ、そして、だれでもかれでもが名前を作る技術者ではなくて、かの者——それぞれの事物に対して本性的に定まっている名前を手本として眺めて、それの形を文字と綴の中に入れることのできる者だけが、そうなのだということは、真実なのだ。

391

**ヘルモゲネス**　ぼくには、おおソクラテスよ、あなたの議論に対して反論するすべがありません。けれども、

---

1　ヘルモゲネスがはっきりそう言ったわけではないが、彼の意見からすると、名前を正しくつけるのは、だれにでも、いつでも、やれることなのだから、平凡な仕事だということになる。385D～E参照。

こんなに急に説得されて意見を変えることも、容易ではないようです。ですが、こうして下されば、もっとあなたのおっしゃることが信じられるようになると思います。つまり、名前の本性的〔自然的〕な正しさとはどのようなものであると、あなたは言われるのか、それを示して下さればですね。

**ソクラテス**　ぼくはねえ、おお、しあわせな〔おめでたい〕ヘルモゲネスよ、〔これが名前の正しさだと言えるものを〕何ひとつ主張してはいないのだよ。君は忘れたのだね。ぼく自身は知らないが、君と一緒に考察してみようと、ついさっきぼくが言ったのを。(1) だがとにかく今では、われわれ、つまり、ぼくと君が考察している間に、これだけのことは明らかになって、以前の状態に比べて前進した。つまり、名前は何らかの本性的な正しさをもつものであるということと、それから名前をどんな事物にであれ立派に(2)つけるすべを知ることは、だれにでもできる仕事ではないということがね。そうではなかったかね。

B

**ヘルモゲネス**　ええ、確かにそうです。

## 二

**ソクラテス**　うん、それでは次に、君が知りたいと望むならばだが、今度は名前の正しさとは、いったいどんなものなのか、これを探究しなければならないね。

**ヘルモゲネス**　いや、むろんぼくは知りたいと望んでいますとも。

**ソクラテス**　それでは研究したまえよ。

**ヘルモゲネス**　では、どうやって研究すればいいのですか。

**ソクラテス**　一番正しい研究の仕方はね、おおわが仲間よ、知っている人たちに教えを請うことだ。かの人たちにお金を支払い、感謝を捧げながらね。ぼくが言っているのはソフィストたちのことさ。ちょうど君の兄さんのカリアス(3)も彼らにたっぷりとお金を貢いで、知者であるとの世評を得ているではないか。だが君はお父さんの遺産を相続しなかったのだから(4)、この上は兄さんにしつこくねだり、頼み込んで、彼がプロタゴラスから習得したところの、この種のことがら〔名前〕についての正しさを教示してもらうほかはないね。

C

**ヘルモゲネス**　とんでもない。ぼくがそんなことを頼むなんて、おかしなことになるでしょうよ、おおソクラテス。それはつまり、ぼくが一方ではプロタゴラスのあの「真理」(5)を全然承認していないのに(6)、他方であのような真理に基づいて言われていることを何ほどかでも価値あるもののように歓迎するということになるわけですからね。

**ソクラテス**　いや、これもまた君のお気に召さないのなら、ホメロスやその他の詩人たちから学ばねばならないね。

D

**ヘルモゲネス**　おや、ホメロスが名前について何を言っていますかね、おおソクラテス。してどの箇所で。

---

1　384C.

2　テクストはB、W写本に従う。

3　ヘルモゲネスの異母兄。解説(四一一ページ)参照。豪奢な生活をして親譲りの富を蕩尽した。ソフィストたちのために莫大な金を費消したらしい。特にプロタゴラス説を信奉したもようである。『テアイテトス』165A参照。

4　解説(四一一ページ)参照。ヘルモゲネスの貧困については384Cを参照。

5　386C注4を参照。

6　386A参照。

**ソクラテス**　あちこち〔多くの箇所〕でね。だが一番偉大ですばらしいのは、同じ事物に対して人間と神々とが別々に呼んでいる名前を、彼〔ホメロス〕が区別している箇所だよ。それとも君は、彼がこれらの箇所で名前の正しさについて偉大で驚嘆すべきことを言っているとは、思わないかね。なぜといって、神々ならば、正しさに基づいて、本性的に定まっている名前でお呼びになるだろうことは、無論明らかだからね。それとも君はそうは思わないかね。

E

**ヘルモゲネス**　いや、もしも神々が名前をお呼びになるならば、正しくお呼びになるだろうということは、無論ぼくにはよく分かっています。ですが、あなたのおっしゃっているのは、どんな名前のことですか。

**ソクラテス**　君は知らないかね、トロイアにあって、ヘパイストスと一騎討ちをした川、あれについて

これを神々はクサントスと呼び給い、人間たちはスカマンドロスと呼ぶ

とホメロスが語っている(1)のを。

**ヘルモゲネス**　ああ、知っています。

**ソクラテス**　それならば、どうだね。いったいどうしてあの川をスカマンドロスと呼ぶよりも、むしろクサントスと呼ぶ方が正しいのか、これを知ることは大したことだとは思わないかね。それから君がお望みなら〔別の箇所をあげるが〕ホメロスが

392

神々はカルキスと呼び給い、人間たちはキュミンディスと呼ぶ

と語っている(2)あの鳥だがね、これについて、同じ鳥がキュミンディスと呼ばれるよりもカルキスと呼ばれる方がどれだけ正しいのであるかを知ることが、つまらぬ勉強であると信じるかね。あるいはバティエイアとミュリネ

B ー(3)とか、その他多くの〔そのような〕名前――この詩人の語ったものでも他の詩人たちのでも――については、どうだね。いやしかし、これらの〔神に関係する〕名前について答を見出すことは、多分ぼくと君との力に余ることだろう。(4)他方スカマンドリオスとアステュアナクスは――これらはヘクトル(5)の息子の名前であるとホメロスは言っているのだが――その正しさはどのようなものであると彼が言っているかを考察することは、もっと人間向きでより容易であるとぼくには思われる。無論君は、ぼくが言及している名前が出てくる箇所の詩句を知っていることと思うがね。

**ヘルモゲネス** ええ、知っていますとも。

**ソクラテス** それで君は、このうちのどちらを、あの子供につけられた名前として、より正しいとホメロスが信じていたと思うかね。〃アステュアナクス〃かね、〃スカマンドリオス〃かね。

C **ヘルモゲネス** ぼくには答えることができません。

---

1 『イリアス』第二〇巻七四行。クサントスは川(あるいはその川の神)だが、トロイア軍に味方してギリシア軍と戦ったことになっている。〃クサントス〃はギリシア名で、〃スカマンドロス〃は外国語ではなかったかと推測する説もある。ヘパイストスは神名。407C注5参照。

2 『イリアス』第一四巻二九一行。

3 『イリアス』第二巻八一一行以下「さてこの都市の前方に、平原の中に孤立して、四方から近寄れる一つの高い丘陵があった。人々はこれをバティエイアと呼ぶが、不死なるものたちは、疾駆するミュリネーの墓と呼び給う」。

4 神々の意図を探らねばならないことだから、困難だというのであろう。

5 ヘクトルはトロイアの王プリアモスの息子で、トロイア軍随一の英雄。スカマンドリオスはヘクトルのただ一人の息子で、まだ幼児であったらしい。

# 二

**ソクラテス**　こういうふうに考えてみ給え。もしだれかが君に「より思慮ある人とより無思慮な人と、どちらがより正しく名前を呼ぶだろうと君は思いますか」ときいたら、どうだね。

**ヘルモゲネス**　もちろん「より思慮ある人の方が、だと思う」とぼくは答えることでしょう。

**ソクラテス**　では一国において女性と男性とでは、総体的に言って、どちらがより多く思慮ある者だと、君に思えるかね。

**ヘルモゲネス**　男性です。

D

**ソクラテス**　ところで君は知っているのではないかね。ホメロスは、ヘクトルの幼児がトロイアの男たちによってアステュアナクスと呼ばれていると語っている(1)ことを、そしてスカマンドリオスという名前は明らかに婦人たちによって呼ばれていたものであるということをね。なぜなら男たちはアステュアナクスと呼んでいたのだからね(2)。

**ヘルモゲネス**　そのように見えはしますね。

**ソクラテス**　ところでホメロスにしても、トロイアの男たちをその妻たちよりも賢いと思っていたのだろうね。

**ヘルモゲネス**　ぼくはそうだと思います。

**ソクラテス**　してみるとホメロスは〝アステュアナクス〟の方が〝スカマンドリオス〟よりも、あの子供につけられた名前として、より正しいものだと思っていたのだね。

**ヘルモゲネス**　そうらしいですね。

**ソクラテス**　いったいなぜなのか、考えてみようではないか。いや、その理由はすでに彼自身がいとも見事に説き明かしてくれているのだろうか。というのは彼は

彼〔ヘクトル〕ただ一人(いちにん)彼ら〔トロイア人〕の市(まち)と長大なる市壁を守備せり

と語っているからね。(3) そしてほかでもなくこの理由によって——と見えるのだが——守護者の息子を、その父親が守っていたもの〔市〕のアステュアナクスと呼ぶことが、(4) ホメロスの語るところによれば、正しいのだ。

E

**ヘルモゲネス**　ええ、ぼくにはそのように思えます。(5)

**ソクラテス**　だがそれ〔息子が父親の名前で呼ばれること〕はいったいなぜだろう。というのは、ぼく自身にもまだ分かっていないんだがね、おおヘルモゲネスよ。だが君には分かっているのかね。

---

1　『イリアス』第六巻四〇二行以下（次注参照）、第二二巻五〇六行。

2　現存の『イリアス』第六巻には次のように語られているので、ソクラテスの推理には多少問題があるかも知れない。「その児をヘクトルはスカマンドリオスと呼ぶのを常としていたが、他の人たち（男たち？）はアステュアナクス（市の守護者）と呼んだ。ヘクトルただ一人がイリオスの市を守備したからである」。「他の人たち」は男性代名詞だが、女性を含めて一般の人々とも解釈できるだろう。しかしソクラテスはこれを文字どおり「トロイアの男たち」と解し、その上ヘクトルは婦人たちの呼び方に従ってスカマンドリオスと呼んだ、と解釈したのであろうか。

3　『イリアス』第二二巻五〇七行（ホメロスの原文とは少し違っている）。なお前注の引用をも参照。

4　〃アステュアナクス〃は〃アステュ〃（市、町）と〃アナクス〃（支配者）との合成語らしい。

5　ヘルモゲネスは、なぜ親の名前が子供に与えられるのかという理由を問題にしないで、単純に「そうらしい」と答えた。そこで以下のソクラテスのことばとなる。

**ヘルモゲネス**　いいえ、ゼウスに誓って、ぼくには分かりません。
**ソクラテス**　しかしいったい、おお善き人よ、ヘクトルにもホメロス自身がその〔ヘクトルという〕名前をつけたのだろうか。
**ヘルモゲネス**　なぜですか〔なぜ、そうお考えになるのですか〕。
**ソクラテス**　それは、この名前も〝アステュアナクス〟に〔意味の上で〕近しいものであるように、ぼくに思えるからさ。それに、これら〔二つ〕の名前は〔異人の名ではあるが〕ギリシア語のようだしね。なぜなら〝アナクス〟(支配者、主)と〝ヘクトル〟(所有者)とは、ほぼ同じものを意味するからね。(つまり、両方の名前とも、王を表わすものである。)(1)というのは、何かのアナクス(主)である人は、そのもののヘクトル(所有者)でもあるだろう



からね。なぜならその人は、それを支配しており、獲得しており、所有しているのだから。それとも、ぼくは無意味なことを言っているように君には思えるかね。ぼくは、名前の正しさについてのホメロスの考え方の、いわば何か痕跡のようなもの(2)を自分が探り当てたと信じているのだが、実は自分でもそれと気づかないで他愛もないことをしゃべっているのだろうか。
**ヘルモゲネス**　いいえ、ゼウスに誓って、ぼくに思えるかぎりでは、そんなことはありません。あなたは多分何かを探り当てられたのです。

## 一三

**ソクラテス**　うん、とにかく、ぼくに思えるかぎりでは、ライオンから産まれたものをライオンと呼び、馬か

ら産まれたものを馬と呼ぶことは、確かに正当なことなのだからね。[3] もちろんぼくは、馬から馬でない何かが、いわば[4]奇怪なものが、産まれる場合を言っているのでは決してない。自然的〔本性的〕にその種族から産まれたも

C

のであるようなものをぼくは言っているのだよ。もし馬が、自然的には牛の子であるものを、自然に反して産んだならば、そこに産まれたものは子馬とではなく子牛と呼ばれるべきだし、また人間から――仮にね――人間の子でないものが産まれる場合も、その産まれたものは、人間と呼ばれるべきではないね。また木についても、その他すべてのものについても同様だ。それとも君は賛成しないかね。

**ヘルモゲネス**　そうですね――賛成します。

**ソクラテス**　そう、その答え方は立派だ。というのも、ぼくが君をどうかして誤まらせることのないように君

D

は用心しなければならないからだ。というのは、同じ論法をもってすると、王から何かが産まれた場合にも、それは王と呼ばれるべきだ。ただしその場合に、同じ名前〔同じ意味〕がいろいろ違った綴〔語〕で言い表わされていても、少しも差し支えないのだよ。また一文字多くついていたり、一文字取り除かれていていても、その名前の中に表明されている事物の有りかた〔本質〕が優勢でありさえすれば、それもいっこうにかまわないのだよ。

---

1　かっこ内のことばは、原文では、文法的に前文に連結しがたい。あるいは、後人の傍注が本文中にざん入したものかも知れない。

2　つまり、子は親と同じ(意味の)名前をもつべきだという思想の痕跡。

3　アリストテレス哲学ではこの種の事実が一般化されて、あらゆるばあいに作用因とその結果とは同名的なものであるとされ、この法則――〃同名の法則〃――は彼の形而上学で重要な役割を演じる。

4　馬から子牛が生まれることは反自然的で異変だが、子牛それ自体は自然的なものであって怪物ではないので、「いわば」と表現を和らげたのであろう(プロクロスによる)。

ヘルモゲネス　それは、どういう意味ですか。

ソクラテス　何も複雑なことではなくて、例えばこういうことだ。君も知っているように、われわれは字母を呼ぶのに、それぞれの字母の音そのもので呼ばないで、名前をつけて呼んでいる。ただしエイ(e)、イュー(y)、オウ(o)、オー(ō)の四つだけは別だがね。(1)その他の字母には、君も知っているように、有声字〔母音字〕にも無声字〔子音字〕にも、他の文字を添加して、名前を作って、呼んでいるわけだ。しかしそれでも、われわれがその字母の力〔音価〕を名前の中に入れておいて、それ〔音価〕が明示されている限りは、その名前を呼ぶことは正しいのだ。なぜなら、それはその字母そのものをわれわれに示してくれるだろうからね。例えばベータ(bēta)だ。ほらね、ご覧のようにエータ(ē)とタウ(t)とアルパ(a)が〔bのほかに〕余分に付け足されているけど、立法者が表わそうと意図したあの字母の本性をこの名前全体でもって表わすことには、何の妨げもないよ。こんなにも彼〔立法者〕は文字に名前を立派につけるすべを知っていたのだねえ。

E

ヘルモゲネス　ええ、おっしゃることは真実であるように、ぼくには思えます。

ソクラテス　では王についても、同じことが言えるのではないだろうか。つまり王からは王〔たるべき者〕が生まれるだろう。また善い者からは善い者が、美しい者からは美しい者が、生まれるだろう。その他すべてのものについても同様で、それぞれの種族のものから、同種で別の個体である子が産まれるだろう。不自然で奇怪なものが生まれる場合は別としてね。だから〔親と子を〕同じ名前で呼ぶべきなのだ。が、綴はいろいろであり得るのであって、素人の目には、本当は同じであるものが、互いに異なる名前であると映るほどなのだ。それはちょうど、医者の薬が色や匂いの点でいろいろ違う場合に、同じものであっても、われわれには別のものであるように

394

B 思えるが、少なくとも医者には、彼は薬の力〔作用〕を考察しているので、同じものに見え、付加されているものには惑わされない、ようなものなのだ。名前について知識をもつ人だって多分同様で、名前の力〔意味〕を考察するだろう。そして、どれか一文字が余分についているとか、位置が変っているとか、除かれているとかしても、あるいは全然違う文字の中にその名前の力〔意味〕が込められている場合ですら、惑わされることはないだろうね。例えば今しがたわれわれが言っていた〝アステュアナクス〟(Astyanax)と〝ヘクトル〟(Hektōr)にしても、タウ

C (t)の字以外には〔互いに〕同じ字は一つももっていないのだが、それでも両方が同じものを意味しているのだよ。また〝アルケポリス〟(2)(Archepolis)という名前だと〔前二者双方ともと〕共通する文字など、何があるというのだね。しかしそれでも、この名前は〔前二者と〕同じものを意味しているのだ。またこのほかにも、王以外の何ものをも意味しない名前がたくさんある。

それからまた将軍を意味する名前〔固有名詞〕だって〔たくさん〕あるよ。例えば〝アギス〟(指揮者)、〝ポレマルコス〟(戦争を指導する者)、〝エウポレモス〟(良き戦士)だ。それから医者を意味する名前も〔たくさん〕ある。〝イアトロクレス〟(医において有名な者)や〝アケシムブロトス〟(人間を癒やす者)だ。そしてまだこのほかにも、文字と綴は違っているが力〔意味〕は同じである名前を、多分どっさり見つけることができるだろう。どうだね、〔君にも〕そう見えるかね、それとも見えないかね。

---

1 この四字母だけは字音そのもので呼ばれた(エプシーロン、ユープシーロン、オミークロン、オーメガの呼称はビザンチン時代に与えられたものである)。

2 「市(国)を治める者」という意味。

(394)
D

**ヘルモゲネス**　確かにそう見えますね。

**ソクラテス**　それでは自然的〔本性的〕に生まれたものに対しては〔親と〕同じ名前を与えるべきなのだ。

**ヘルモゲネス**　確かにそうですね。

## 一四

**ソクラテス**　他方、自然〔本性〕に反して生まれたもの――つまり、奇怪なものとして生まれたものということになるだろうが――に対しては、どうだろうね。例えば善良で敬虔な人から不敬虔な人が生まれた場合だが、どうだろう、これはさっきの諸例の場合と同様に〔考えるべきではないだろうか〕――つまり〔さっきの議論では〕馬が牛の子を生んだ場合には、生まれたものはたしか生んだものの名称をではなくて、自分の属する種族の名称をもつべきだということだったのだが。

**ヘルモゲネス**　ええ、確かにそうでした。

E

**ソクラテス**　してみると敬虔な人から生まれた不敬虔な人にも、その種族の名称を与えるべきなのだ。

**ヘルモゲネス**　そのとおりです。

**ソクラテス**　ではその人には、どうやら、〝テオピロス〟(神に愛される者)とか〝ムネシテオス〟[1](神を憶えている者)とか、そのほかこのようないかなる名前でもなくて、その反対を意味する何らかの名前を与えねばならないようだ。もし名前が正しさをもとうとするならばね。

**ヘルモゲネス**　ええ、これ〔不敬虔な人がそういう名前をもつこと〕くらい当然なことはありませんよ、おおソ

クラテス。

**ソクラテス**　ちょうどまた〃オレステス〃[2] (Orestēs 山の男) という名前にしても、おおヘルモゲネスよ、多分正しいであろうようにね。なぜなら、この名前を彼につけた者が何かある偶然であるにせよ、だれかある詩人であるにせよ、その命名者は彼〔オレステス〕の本性が野獣のように残酷で、野性的で、山岳的な (oreinon) ことを、この名前によって表示しているのだからね。

395

**ヘルモゲネス**　なるほど、そのようですね、おおソクラテス。

**ソクラテス**　うん、それからまた彼の父〔アガメムノン〕にも、その名前が本性的に〔本性に一致して〕つけられているようだ。

**ヘルモゲネス**　そのように見えますね。

**ソクラテス**　なぜならアガメムノン[3]は、自分が決意したことを、忍耐強く骨を折って最後までやり通して、自己の決意を徳性〔すぐれた、感心すべき実行力〕でもって仕上げするような人であるらしいからだ。その証拠は、

B

彼がトロイアに長期間大軍[4]を留め〔進駐させ〕たことと、その時の忍耐強さだよ。そこで、この人は留まること

---

1　当然のことだが、そのような名前の実例は存在しないので、例示できない。そこで代りに多少類似する例として次のオレステスの名をあげたのであろう。

2　アガメムノンとクリュタイムネストラの息子。母がアイギストスと密通しアガメムノンを殺したので、オレステスは両名を殺して父の仇を討った。ここでは、生母を殺したことが非難の対象となっているようである。

3　ミュケナイの王でトロイアを攻略したギリシア軍の総大将。遠く故国を離れて悪戦苦闘一〇年の後にトロイアを陥落させた。

4　テクストは底本によらず、写本どおりに読む。

(epimonē)において嘆賞すべき(agastos)人であるということを、この〝アガメムノン〟(Agamemnōn)という名前は意味しているわけなのだ。

それから〝アトレウス〟(1)(Atreus)という名前も多分正しいだろうね。なぜなら、彼によるクリュシッポスの殺害と(2)、テュエステスに対してしおおせたあれほどの野蛮な行為(3)、これらはすべて彼の徳性に対して有害で破壊的な(atēra)ものなのだからね。ところでこの名前は命名のさいに少しばかり〔語形が〕歪んで〔原意が〕覆い隠されているので、かの人の本性を万人に明示するまでには至らないが、名前について心得のある人に対しては、〝アトレウス〟〔という名前〕はそれが表わそうとするところのものを十分に明示しているのだよ。なぜなら強情(atei-

C

res)という点でも、大胆(atreston)という点でも、また破壊的(atēron)という点でも、どこから見てもこの名前は彼に正しくついているのだからね。

それからまたペロプス(4)(Pelops)にも似つかわしい名前がついているように、ぼくには思えるのだがね。なぜなら、この名前は「近くのものを見る人」を意味するのだからね。

**ヘルモゲネス**　いったいなぜですか。

**ソクラテス**　例えばこういうことが、かの人〔ペロプス〕を非難して、語られているようだね。つまり、彼がどんな手段を講じてでもヒッポダメイアと結婚しようと心を一途に逸らせていたときのことだが、ミュルティロス

D

を殺害してしまった際に、自分自身の一族全体が遠い将来にわたってどれだけの不幸に見舞われるかということを、予測することも予見することもできないで、ただ手近の、当座の——つまりpelas(身近)のことだけしか見ていなかったということがね(5)。

それからタンタロス(6)(Tantalos)にも、もし彼について物語られていることが真実ならば、これはもうだれだって、その名前が正当にそして本性に即してつけられていると、信じるだろうね。

**ヘルモゲネス**　その物語られていることとは、どんなことですか。

**ソクラテス**　彼がまだ生きているときにふりかかった数々の恐しい不幸――そのあげくの果てが彼の祖国全体の転覆だが――と、死んでから〔刑罰として〕受けたハデスの家〔冥府〕での頭上での石の揺れ動き(talanteia)と

E

---

1　アガメムノンの父。

2　クリュシッポスはアトレウスとテュエステスの腹違いの兄であったが、父に熱愛されたため、弟たち二人が彼らの母にそそのかされて彼を井戸に投げ込んで殺した。

3　アトレウスはテュエステスと王位を争って成功したのだが、テュエステスが自分の妻と密通していたことを知って、テュエステスの三人の息子を殺して偽ってその肉を彼に饗応したあとで、その事実を明かし、彼を国外に追放した。

4　ペロプスはアトレウスの父。ヒッポダメイアの父オイノマオスは、自分に追いつかれないよう戦車(馬車)で走った者に娘を与えると約束していたが、ペロプスが求婚者になったとき、オイノマオスの御者ミュルティロスが、ヒッポダメイアに頼まれて、車の輪どめをはずしておいたので、オイノマオスは死に、ペロプスはヒッポダメイアをめとった。しかしミュルティロスもまたヒッポダメイアを愛していたことから、ペロプスは彼を海に投げ込んで殺したが、そのときのミュルティロスの呪いのために、ペロプスの子孫は長く災いを受けることになった。

5　Pelops の ops は〝見た〟(opōpe)から来たものと考えるわけである。

6　ゼウスの息子でペロプスの父。ある地方の富裕な王であったが、偽誓したか、神々の飲食物を盗んだか、神々にかかわることを人間に洩らしたか、自分の息子の肉を神々に饗応して、彼らが獣肉とまちがえて食べるかどうか試したかした罪で、山から投げ落されるか、山の下に埋められるかし、死後は冥界で、あごの所まで水のある池の中に立ち、手近の両岸には果実のみのった樹木があったが、水を飲もうとすると水は引き、果実に手を伸すと、風がそれを高く上げて、永久に飢渇に苦しむ。また彼の頭上には大きな岩が吊り下げられていて今にも落ちそうで、絶えざる恐怖にさいなまれる。

さ。何とまあ、驚くほど〔このタランティアということは〕彼の名前に一致しているではないか。そして、これはまるでもう、だれかが〝この上なく惨めな者〟(talantatos)と名づけてやりたいと思いながら、その意図を包み隠して代わりに〝タンタロス〟と名づけたかのように、ちょうどそのような名前を伝承に際して偶然がこの人のために調達したのであるように見えるね。

396

それから、彼の父であるといわれているゼウス(1)(Zeus)にも、実にみごとにその〔ゼウスという〕名前がつけられているようだ。ただし、そのことを看て取るのは容易ではないがね。というのは、ゼウスの〔本当の〕名前は〔単語ではなくて〕まるでもう、言ってみれば文みたいなものなのだが、われわれはそれを二つにちょんぎって、ある者はその一方の部分を、他の者は他方の部分を用いているというわけなのだ。というのは「ゼウスを」と言うばあいに〕ある人々は'Zēna'と言い、別の人々は'Dia'と言っているが(2)、実はこの両部分が結合されて一つになったときに、始めてこの神様の本性を明示するのだよ――そして、この〔事物の本性を示すという〕機能を果すことこそ、まさしく名前の本来の仕事なのであると、われわれは〔さっきから〕言っているのだがね――なぜなら、すべてのものの支配者であり、王であるもの〔すなわちゼウス〕以上に、われわれ〔人間〕とその他すべての生あるもの

B

に対して、生きていることの原因であるものは、何も存在しないからだ。だからこの神様は正しく名づけられているということになるのだよ。すべての生命あるものには、いつでも、この方によって(di' hon=dia hon)生きている(zēn)ということが与えられるのだからね。だが、ぼくが言っているように、本当は一つである名前〔つまり、di' hon zēn〕が、ディアとゼーナの二つに引きちぎられているのだよ。

ところで、この神はクロノスの息子であると言われていて、これはいきなり聞くと不敬の言のように思えるか

も知れないがね、実はこれは、ゼウス(Dia)がある偉大な知性(dianoia)から生まれたものだということであって、もっともな話なのだよ。というのは〝クロノス〟(Kronos)はコロス(koros)を意味するのであって、そしてこの場合〝コロス〟とは子供をではなくて、彼の英知(nous)の純粋で無雑なことを意味しているのだよ。(3)ところでこの神〔クロノス〕は、伝承によると、ウーラノス(Ouranos 天)の息子だがね、これもやはり、上方へ

c の注視がこの名前——〝ウーラニア〟(ourania 天の)、つまり、〝上方を見る〟(horōsa ta anō)注視——で呼ばれ

---

1　クロノスとレアの息子。クロノスの支配した黄金時代の後では最高神で〝父ゼウス〟、〝人と神との父〟、〝王ゼウス〟などと呼ばれた。ここでは生命の付与者として説明されているわけである。後のストア哲学では最高の存在はゼウスとも呼称されたのだが、プラトンのばあいそのような徴候はなさそうで、本文中の「すべてのものの支配者にして王」という表現も、単に伝説に従ったまでか、さもなくば、この世界におけるすべてのものの生命の原因というくらいの意味であろうか。(新プラトン派の解釈では、この意味のゼウスは次に説明されるクロノスより下位の存在である。)

2　〝ゼウス〟は主格では Zeus だが、対格では Zēna と Dia の二形があり、そのほか属、与格にもそれぞれ二形があった。アッティカの散文や日常語では Dia が用いられたようである。

3　Kronos は koros という語に関係があると考えるわけだが、koros という音をもつ語がいくつかあって、それぞれ「少年」、「飽満」、「帚」、「純粋な(きれいな)」などを意味する。ところでクロノスは古く良き時代の神なので、クロノスという語が「前世紀の遺物」、「もうろくした老いぼれ」、「愚鈍」の代名詞としても用いられることがあった。本文中の「不敬」とは、ゼウスがそのようなものの子であるということは不敬だという意味かも知れない。あるいは、〝クロノス〟は「飽満」の意味のコロスであると解されやすいが、ギリシア人の観念では「飽満」は「不遜」につながる。だがクロノスが不遜だと言うことは、同時に人間の側のゼウスに対する不遜にもなるわけで、そこでソクラテスは「飽満」と「少年」の二義を捨てて、「純粋な」を取り、Kronos とは純粋な知性(koros nous)だと解釈したのであろうか。(なおこの箇所は新プラトン派のプラトン解釈の重要な典拠になった。彼らは〝クロノス〟に英知界のすべてを飽満するものという意味をも認めた。)

ているのであって、正当なのだよ。そしてまた実にこのこと〔上方の観察〕からして、おおヘルモゲネスよ、メテオロロゴス〔上空のことについて思索する人〕たちが主張するところでは、純粋な英知が〔われわれのもとに〕出現するのであり、そしてウーラノス(天)にも、名前が正しくつけられていることになるのだそうだ。

D さて、ぼくがもしヘシオドス(1)の書いた神々の系図を記憶していて、以上の神々のもっと前の先祖はだれであると彼が語っているか、忘れていなかったならば、ここで止めないで、それらの神々に名前が正しくつけられていることを、順々に示そうと努めたことだろう。そして、今しがたからぼくに、どこからともなく忽焉として降って湧いて来ているこの知恵がどうなるか、どこかで種切れになるものかどうか、見極めるまでは、決して止めなかったことだろうにねえ。

**ヘルモゲネス** いやもうほんとうに、今のあなたときたら、おおソクラテスよ、まるで神がかりにあった人たちが突然御神託を語り始めるようなあんばいですねえ。

## 一五

**ソクラテス** うん、だが、これはねえ、おおヘルモゲネスよ、ぼくの考えでは、何よりも第一番に、プロスパルタ区(2)のエウテュプロン(3)のせいなんだ。この知恵は、彼からぼくに降って来たのだよ。というのも、ぼくは今朝早くから長時間彼といっしょにいて、彼の話を傾聴していたのだからね。だから、どうも彼が神がかりになって、霊妙な知恵でもってぼくの耳を一杯にしたばかりでなく、〔その知恵を〕ぼくの魂にまで乗り移らせたらしい。と

E すると、われわれはこうするほかはないように、ぼくには思える。つまり、今日の日がある限りは〔今日のところ

397

は〕、それ〔この知恵〕を利用して、名前について残っている問題を考察する。だが明日になれば、君たちお二人が賛成するならばだが、だれかこのようなものを祓い清めることについての巧者——神官でもよしソフィストでもよし——を見つけて、それ〔この知恵〕をお祓い奉り[4]、われわれを清めることにしよう、というわけだ。

**ヘルモゲネス**　いや、それはもう、ぼくはおっしゃることに賛成です。といいますのも、名前についてのお話の残りの部分を聞きたくてたまらないのですからね。

**ソクラテス**　いや、それならば、そうしなければなるまい。では君、どこから〔どんな名前から〕われわれは詳しい考察を始めようかね。——われわれはすでに〔何が名前の正しさであるかということについて〕ある輪郭を得

---

1　ギリシア最古の詩人の一人(現在では、前七〇〇年前後の人と考えられている)。ここで言及されているのは、彼の『神統記』という詩で、そこでは「天」を生んだのは「地」で、これを生んだ(もしくは、とにかく地よりも先に、そして万物に先立って生まれた)のは「混沌」であるとされている。

2　クレイステネスの改革(前五一〇年)以来、アッティカを一五〇ないし一七〇くらいの地域に区分して、行政上の単位とし、これを区(村、デーモス)と呼んだ。ソクラテスはアロペケ区の人であった。

3　この人物については、同名のプラトンの対話篇と本対話篇に記されていること以外には何もわからない。一種の熱狂的神学者であったらしく、従って神名の語義、語源の研究にも従事したわけであろうか。本対話篇ではソクラテスは例のアイロニーで、自分の話すことの大部分をエウテュプロンの知恵のせいにしてしまうが、クラテュロスは、乗り移っているのはむしろ別のミューズかも知れないとも言っている(428C)。プロクロスはソクラテスが神名について思索するよう促された動機が、エウテュプロンのまちがった研究に接することによって与えられたのだという趣旨の解釈をしている。どうであろうか。

4　この語の原意は、ゼウスに供えられた羊の皮の上に罪で汚れた者が立つことによって清められたあとで、その羊皮を市の外にまで送り出すこと。転じてここでは、こわいものをうやうやしく遠ざけて厄介払いをすること。

たのだから――これからの考察の目的は、果して個々の名前自身が、自分はそんなにでたらめにつけられているのではなくて、何らかの正しさ〔根拠〕をもっているのだということを、われわれに向かって証言してくれるかどうか、知ることにあるのだがね。とすると、英雄や人間に与えられている名前は〔それらを考察しても〕恐らくわれわれをすっかり欺く〔誤った結論に達せしめる〕ことになるだろうね。なぜなら、そのうちの多くが先祖の名前に因んでつけられていて、最初にわれわれが言ったように[1]、中には当人に全然ふさわしくないものも、いくらかあるのだし、また多くは、人々がいわば祈願をこめて〔かなえて欲しいと願って〕つけた名前なのだからね。例えば〝エウテュキデス〟(幸運な男)、〝ソシアス〟(救う者)、〝テオピロス〟(神に愛される者)、その他多くの名前がね。というわけで、ぼくの意見では、この種の名前には、さわらないで放っておくべきだね。他方、正しくつけられている名前を〔他のどこにおいてよりも〕一番よくわれわれが発見する見込みの大きいのは、常に有り、かつ本性上常に有るべきものの所においてだね。なぜなら、そこにおいてこそ、名前を定める仕事が〔重大なこととして〕真剣に行なわれるのが、最もふさわしいわけなのだからね。いやそれどころか、ひょっとすると、これらの名前のあるもの〔いくらか〕は、人間の力よりももっと神的な力[2]によってすら、定められたのかも知れないね。

B

C

**ヘルモゲネス**　おっしゃることは至当だと、ぼくには思えます、おおソクラテス。

## 一六

**ソクラテス**　それでは先ず神々から始めるのが当然ではないだろうか。つまり、神々がほかならぬまさにこの名前――つまり〝神々〟(テオイ)という名前――で呼ばれたことが、いったいなぜ正当であるのか、を考察するわ

けだがね。

**ヘルモゲネス**　ええ、とにかくそれが、道理にかなっているようですね。

**ソクラテス**　それでは言うが、ぼく個人は、こういうことなのではないかと推測しているのだよ。ぼくに思えるところでは、ヘラス〔ギリシア〕の地に住んでいた最初の人間たちは、現在でも多くの異国人たちが信じている神々(3)――つまり太陽と月と地と星々と天――だけを信じていたらしい。ところで彼らは、これらの天体がすべて、いつも駆け足で行く、つまり走っているのを観察したものだから、この〃走る〃(thein)という本性から、それらを〃神々〃(theoi 走るもの)と名づけたらしい。しかし後日、彼らがその他の神々をも認識するに至ったときには、もはやすべての神々をこの名前でもって呼称するようになったらしい。(4)どうだね、ぼくの言っていることは、多少なりとも真実らしいかね。それとも全然だめかね。

D

**ヘルモゲネス**　ええ、それはもう確かに真実らしいですとも。

1　384Cで、ヘルモゲネスの名前が当人に似つかわしくないと言われたことをさす。

2　ダイモンあるいは神などをさす。言語神授説に関しては416C, 425D, 438C参照。この最後の箇所でソクラテスは神授説を否定しているように見えるが、それは基本的な名前すべてを神的な力が定めたというクラテュロスの主張を否定しただけであって、この箇所と矛盾しないと見るべきであろう。

3　テクストは底本によらず、写本に従う。

4　〃神〃を〃走る者〃と説明することはヘラクレイトス派のクラテュロスのお気に召すわけだが、しかしただそれだけの理由でソクラテスが戯れてそう言ったのかどうか、断定はできない。なぜなら、大多数の名前はヘラクレイトス派的な万物流動の見地から定められているらしいことを、ソクラテスも認めているからである(439C, 437D)。

(397)

**ソクラテス**　では次は何をわれわれは考察しようかね。いやそれとも、これは無論、ダイモンと英雄と人間を、[1]かね。

E

**ヘルモゲネス**　ええ、ダイモンをです。

**ソクラテス**　うん、実際の話、おおヘルモゲネスよ、この〝ダイモン〟という名前は、いったい何を意味しているのだろうね。ぼくの言うことに一理あると、君に思えるかどうか、考えてくれ給え。

**ヘルモゲネス**　どうか、ただおっしゃって下さい。

**ソクラテス**　それでは言うがね、君はヘシオドスが、ダイモンとはどういう者であると言っているか、知っているかね。[2]

**ヘルモゲネス**　どうも思いつきません。

**ソクラテス**　では彼が、人間の最初の種族は黄金の種族であったと言っていることも、君は知らないのかね。

**ヘルモゲネス**　いいえ、それならば知っています。

**ソクラテス**　うん、それならば〔君も知ってのとおり〕彼はそれ〔その種族〕について、こう言っている。[3]

398

　だが運命がこの種族を埋葬した後には
　彼らは地上に住まう聖なるダイモン(神霊)たちと呼ばれる。
　彼らは親切善良で、悪を防いでくれ、死すべき人間どもの守護者である。

**ヘルモゲネス**　ええ、で、それがどうだと、おっしゃるのですか。

**ソクラテス**　つまり、ぼくの解釈では、黄金の種族とは、黄金から生まれたという意味ではなくて、優良〔善

良〕で高貴な種族のことを彼は言っているのだ。そしてぼくの〔解釈の〕根拠は、彼がまた、われわれのことをも鉄の種族と言っているという事実だ。(4)

**ヘルモゲネス** なるほど、本当に、そうですね。

B **ソクラテス** とすると、たとえ現代人のうちにでも、だれかが優良であるならば、そういう人を彼〔ヘシオドス〕は、かの黄金の種族に属する者だと言うだろう、とは思わないかね。

**ヘルモゲネス** ええ、そのはずですね。

**ソクラテス** ところで優良な者とは、ほかでもなく、思慮分別のある者のことではないかね。

**ヘルモゲネス** ええ、思慮分別のある者です。

**ソクラテス** それならば、何よりもまさにこれ〔思慮分別ある者〕こそ、ぼくの意見では、彼がダイモンたち〔という名前〕によって言い表わそうとしているものなのだ。彼らが思慮分別をもち、〔善悪を〕わきまえ知っている

---

1 テクストは底本によらず、写本のとおりとする。

2 〃ダイモン〃という語は(1)神、あるいは神の力、(2)神と人間の中間的存在、(3)人間の守護霊、などの意味に用いられる。ホメロスでは主として(1)の意味だが、ヘシオドス以来(2)と(3)の意味が優勢になった。ここでソクラテスが問題にしているのも、このヘシオドス的意味でのダイモンである。

3 ヘシオドス『仕事と日々』一二一―一二三行。ただし現存のヘシオドスの原文とは多少字句が異なる。『国家』V. 468Eでも同じく引用されている。「地上に住まう」の原文はW写本による。

4 『仕事と日々』一七四―二〇一行。金、銀、青銅、英雄の各種族の時代の次に、現代の鉄の種族が現われた。道徳的に非常に劣悪な種族である。これに反して金の種族は、労働の苦しみを知らず、悲しみも老衰もなく、死ぬ時は眠るが如くであった。

者(daēmōn)であったからこそ、彼らをダイモン(daimōn)と彼は名づけたのだ。そして実際昔のわれわれの言語には、この〔ダエーモーンという〕名前自身も、見出されているのだ。[1] という次第で、この詩人〔ヘシオドス〕も他の多くの詩人たちも「だれであれ優良である人がこの世の生を終えたならば、大なる報償と栄誉を得、その思慮分別に因んだ名称〔つまり〝ダエーモーン〟〕のとおりにダイモンとなるのだ」と言うかぎりにおいては、正しいわけなのだ。そこでぼく自身もそのように、およそ優良であるすべての人間は、生きているときでも、この生を終えてからでも、ダイモン的〔神霊的、絶妙〕なのであり、したがってダイモンと呼ばれて正しいのであると、措定する〔意見を定める〕のだよ。

C

**ヘルモゲネス** そしてぼくは、この件に関して、あなたに全面的に同調する投票者であるべきことを決定いたします。しかし次に〝英雄〟(hērōs)とは何なのでしょうか。

**ソクラテス** それは、そう大して分かりにくくはないね。というのは、彼ら〔英雄たち〕の名前は〔語源となる名前から〕ほんの少しばかり変形しているだけなので、恋(erōs)という名前から派生したのであることを、はっきり示しているからだ。

**ヘルモゲネス** おっしゃることは、どういう意味でしょうか。

**ソクラテス** 君は知らないかね、英雄は半神だということを。[2]

**ヘルモゲネス** 〔もちろん、知っていますとも。〕で、それがどうなのですか。

D

**ソクラテス** 思うに英雄というものはすべて、男神が死すべき女性を、あるいは死すべき男性が女神を、恋した結果生まれたものなのだ。そこで、もし君がこの名前をも〔さっきのように〕昔のアッティカ語[3]に即して考察す

るならば、もっとよくこのことを理解できるだろう。つまり、恋から英雄たちが生まれたのだから、英雄という名前は、恋という名前から派生し、ほんの少しばかり――別の名前になるために――変形させられているということが、君に明瞭となるだろう。それで、英雄とはそのようなものであると彼〔ヘシオドスあるいは命名者〕は言っているのか、さもなくば、彼らが賢者であり、巧みな弁論家であり、また――質問すること(erōtān)と述べること(eirein)[4]に熟練しているので――対話術者〔問答術者 dialektikoi〕であったと言っているのだ。というのは、〃述べる〃とは〃話す〃(legein)を意味するのだからね。[5] だから、さっきから言っていることだが、〔旧〕アッティ

E

1　この箇所は難解である。daēmōn は日常用いられる語ではなく、元来イオニア方言の語であったらしい。それをソクラテスは、昔のアッティカ語にはあったと言っているのである。おそらく daimōn という語が昔は daēmōn(知者)を意味しえたと言っているのであろう。古いギリシア語で時に daimōn が daēmōn を意味しえたことは、詩人アルキロコス(イオニア方言)にその用例があり、ヘシュキオスの辞書などもそれを裏づけている。なお「昔のわれわれの言語」がアッティカ方言をさし、ホメロスなどの言語を意味しないことは、398Dからしても明らかである。

2　第四の種族である英雄は『仕事と日々』一六〇行で〃半神たち〃と呼ばれている。

3　アテナイではエウクレイデスという人がアルコンの年(前四〇三―四〇二年)に、従前のアルファベットを東イオニア風アルファベットに公式に改めた。もっともこれは綴字法の改正であって、必ずしも発音の改正を意味しない。なお新式アルファベットは私的にはそれ以前からかなり普及していたもようである。新旧の綴字法で問題の二語を対照させてみると次のようになる。

| | 恋(エロース) | 英雄(ヘーロース) |
|---|---|---|
| 旧 | ΕΡΟΣ | ΗΕΡΟΣ |
| 新 | ΕΡΩΣ | ΗΡΩΣ |

4　テクストはH・シュミットやメリディエに従う。

5　〃対話する〃(dialegein)という語は〃話す〃(legein)を含んでいる。

(398)

カ語で言われるならば、(1)英雄とは一種の弁論家であり、質問術者であって、結局英雄族は弁論家とソフィストたちの類(たぐい)ということになるね。(2)いやしかし、分かりにくいのはこれ〔〃英雄〃〕の方ではなくて、むしろ人間たちの名前の方、つまり、いったいなぜ彼らが〃人間〃と呼ばれるのか、ということだ。それとも君は説明できるかね。

## 一七

**ヘルモゲネス**　いったいまあ、どこから〔どうやって〕、あなた、ぼくにできるのですか。よしんばまた、ぼくが何かを見つけ出すことができるとしても、ぼくはむりにそんなことはしませんね。あなたの方が、ぼく自身よりも、もっとうまくお見つけになるだろうと、信じていますからね。

399

**ソクラテス**　ははあ、どうやら君は、エウテュプロンの〔彼からぼくに伝播した〕霊感(3)を信頼しているというわけなのだね。

**ヘルモゲネス**　ええ、ええ、もちろん。(4)

**ソクラテス**　うん、たしかに君がそれを信頼するのは正しいぞ。というのも、今も今、ぼくにまたまた妙案〔器用な思いつき〕が浮かんできたようだ。この分では、用心しないと、まだ今日のうちに、(5)ぼくは、あるべき程度以上に賢くなりすぎてしまいそうだ。さあ、それでは、ぼくの言うことを考えてみてくれ給え。まず第一に、名前について、次のようなことを理解しておかなければならない。すなわち、われわれは、あることばに由来する名前をつけようと欲して、そのように名づけるばあいに、〔もとのことばに〕新たに文字を追加挿入したり、省略したり、アクセントを変えたりすることが、しばしばある。例えば Dii phílos（ゼウスにとって親愛な）だ。この句

B

を名前にするために、われわれは、二番目のｉ（イオータ）を省略し、まん中の綴〔音節〕を鋭アクセントの代りに重アクセントで発音したのだ〔つまり、Díphilos〝ゼウスに親愛な者〟となる〕。また他のばあいには、反対に、文字を挿入したり、重アクセントを鋭アクセントに変えて発音するのだ。

**ヘルモゲネス**　なるほど、おっしゃるとおりです。

**ソクラテス**　うん、それならば〔話を先へ進めるが〕、人間たちの名前〔つまり〝アントローポス〟(人間)という名前〕も、やはり、そのような変化のひとつをこうむっているのだ、とぼくには思えるのだよ。というのは、この名前は、ある句から名前になったもので、その際に、一つの文字――a（アルパ）――が省略され、そして最後の綴〔音節〕が重アクセントになったのだ。

**ヘルモゲネス**　はて、おっしゃることは、どういう意味でしょうか。

C

**ソクラテス**　それは、こういうわけなのだ。この〝人間〟(anthrōpos)という名前が何を意味するかというと、他の動物たちが、自分の見るものを何ひとつ考察せず、検討もせず、観察もしないのに反して、人間は見た――つまり、視た(opōpe)[6]――だけでなく、同時に視たものを観察し(anathrei)、考量するということなのだ。まさ

1　英雄という語を旧綴字法で考えるならば。

2　第二の説明では〝英雄〟(hērōs)は〝質問する〟(erōtān)と〝述べる〟(eirein)から派生したことになる。

3　396D参照。

4　むろんヘルモゲネスにしても、ソクラテスの言う霊感エウテュプロン起源説を信じているわけではないであろう。

5　396Eの「今日のところは」のあたりを受けて、明日になればこの知恵を追払うのだが、それでは間に合わぬぞ、という気持ち。

6　「見る」と「視る」はここでは同義。opōpeは詩語。これが現在完了形なので、これに合わせて〝見た〟となっている。

にこのことからして、動物たちのうちでひとり人間だけが、正しくも〝人間〟(anthrōpos)、つまり〝視たものを観察するもの〟(anathrōn ha opōpe)と呼ばれたわけなのだ。

**ヘルモゲネス**　では、どうでしょう。次に取り上げる名前ですが、私の方から、自分の聞きたいものを、あなたに質問させていただけませんか。

**ソクラテス**　ああ、いいとも。

D

**ヘルモゲネス**　それでは申しますが、ぼくに思えるところでは、これらのもの〔神、ダイモン、英雄、人間〕のあとに順序として続く、ある物があるようです。といいますのは、人間に属するあるもの(1)を〝魂〟と、またあるものを〝からだ〟と、私たちは呼んでいるようです。

**ソクラテス**　うん、そうだとも。

**ヘルモゲネス**　ですから、これらをも、先のものと同様に、規定することを私たちは試みようではありませんか。

**ソクラテス**　つまり、魂を考察しようと君は言うんだね。魂がこの〔プシューケーという〕名前を得ているのが、なぜ当然であるのか、その理由をね。そして、そのあとで、今度はからだについて、同様なことをね。

**ヘルモゲネス**　そうなのです。

**ソクラテス**　それでは、先ず、考えないで即座に言うとすれば、魂(psȳchē)に名前をつけた人たちは、何か次のようなことを考えていたのだと、ぼくは思う。すなわち、この〔魂という〕ものは、それがからだについているあいだは——からだに呼吸する力を与え、活気づける(anapsȳchein)ので——からだにとって、生きることの原

E

400

因である。そして、この活気づけるものが立ち去ると同時に、からだは滅び、生を終えるのだ、とね。ここからして彼らは、このものを〃魂〃(psȳchē)と呼んだのだと、ぼくには思えるのだがね。だが、よかったら、ちょっと静かにしていてくれ給え。……というのは、これよりも、エウテュプロンの一党に[2]、もっと信じて貰えそうなあるもの〔ある説明〕を見つけたような気がするのでね。なぜなら、今の説明だとぼくに思えるところでは、彼らはばかにして、通俗的だと考えることだろうからね。他方、次の説明の方は、果して君にも気に入るかどうか、考えてくれ給え。

**ヘルモゲネス**　さあ、どうか、ただ〔ご遠慮なく、本論だけを〕おっしゃって下さればよいのです。

**ソクラテス**　すべてからだという物(物質的本性 physis)を、それが生きていて動きまわるように、抱きかかえて(echein)運んでやる(ochein)ものは、魂〔生命原理〕のほかに何があると君に思えるかね。

**ヘルモゲネス**　いいえ、ほかには何も。

**ソクラテス**　ではどうだね。〔生物のからだ以外の〕その他のありとあらゆる物(physis)をも、それを整形し[3]、抱きかかえる[4]〔維持する〕ものは、知性つまり魂である[5]という、アナクサゴラスの説を君は信じないかね。

---

1　テクストはW写本に従う。

2　(1)エウテュプロンに率いられる一派があったということか、それとも(2)エウテュプロンと考え方を同じくするような人々という意味か、あるいは(3)単にエウテュプロンと言うべきところを、あいまいに言っただけのことであろうか。おそらく(2)であろう。

3　原語はディアコスメイン。アナクサゴラスの用語である。

4　アナクサゴラスは世界形成の第一原因を知性としたことで有名だが、この箇所によれば、知性はまた今現に世界を維持する力でもあるらしい。

5　アナクサゴラスは魂と知性(心)とを区別しなかったようである。アリストテレス『霊魂論』第一巻($404^{b}$1 sqq.)。

ヘルモゲネス　信じています。

B

ソクラテス　してみると、物(物質的本性 physis)を運び、抱きかかえる(echein)この力に対して、〝ピュセケー〟(physechē)という名前を与えるのは、至当であるだろうね。そしてまたこれを、気の利いた風に〝プシューケー〟(魂)とも発音することができるわけだ。

ヘルモゲネス　確かに、おっしゃるとおりですね。そしてまた、ぼくには、あとの説明の方が前の〔活気づけるものという説明〕よりも、もっと技巧的〔専門家的〕であるように、思えます。

ソクラテス　うん、事実そうなんだからね。だけれども、この名前は、最初に名づけられたとおりの形〔つまり、〝ピュセケー〟〕だと、本当にこっけいなものに見えるね。(1)

ヘルモゲネス　ええ、しかし〔それはそれとして〕その次のものですが、これはどのようなものだと、われわれは言うべきでしょうか。

ソクラテス　君はからだ(sōma)のことを言っているんだね。

ヘルモゲネス　そうです。

ソクラテス　うん、これはねえ、いろいろに言う〔説明する〕ことができるように、ぼくには思えるのだがね。

C

先ず〔最初の二つの説明では〕ほんのわずかだけ〔名前の〕形を変えるならば、それで結構なのだ。というのは、ある人々の言うところでは、からだ(sōma)は魂の墓(sēma)なのだ。(2)つまり、魂は、この現世においては、からだの中に埋葬されているという意味だがね。それからまた、魂は、自分の示そうとすることを、からだでもって示す(sēmainein)ので、この意味でもやはり、からだは sēma(しるし、符号)と呼ばれて正しいのだ、と言われてい

る[3]。だけれども、ぼくに一番本当らしく思えるのは、この名前をつけたのはオルペウスの徒であるということだ[4]ね。つまり、〔オルペウス教徒の考えでは〕魂は犯した罪のために償いをしているのだ。そして保管〔拘束〕される(sōzesthai)ために、牢獄にかたどった囲いとして、からだをもっている、というわけなのだ[5]。だからそれ〔からだ〕は、名づけられている名前そのままに、魂が負目を償うまでの、魂の sōma(保管所、拘束所)なのであり[6]、この場合は全然一文字だって変える必要はないというわけだ。

## 一八

D

**ヘルモゲネス**　では、これら〔魂とからだ〕についての説明は、十分満足すべきものであるように、おおソクラテス、ぼくには思えます。ですが次に、神々の名前について——例えば、すでにゼウスについて今さっきあなたがご説明なさったようにですね[7]——どうでしょう、〔これまでと〕同じ仕方で、いったいどのような正しさ〔根拠〕によって神々の名前がつけられているのかを、われわれは考察することができるでしょうか。

---

1　諸家いろいろに解するが、physechē という(架空の)語の語形や発音がおかしみを誘うということであろうか。同時にこの説明を著者自身も信じておらぬことを告白したものか。ただし、語源説明としてはこじつけでも、思想内容はプラトン的である。

2　ピュタゴラス派のピロラオスらの説であろう。『ゴルギアス』493Aにも同じような説が紹介されている。

3　だれの説か不明。

4　オルペウス教の教祖とされる半ば伝説的神話的な人物。

5　『パイドン』62Bにも同様の思想が述べられている。

6　このばあい sōma は動詞 saoō(保存する)から派生したと考えるわけである。

7　396A～B.

**ソクラテス**　うん、できるとも、ゼウスに誓って、われわれには。もしもわれわれが分別をもっていさえすればね。まず、一つの仕方——これが最良の仕方なのだが——は、次のように言うことだ。「神々については、われわれは何も知らない。神々そのものについても知らないし、また名前についても、いったい神々が自分たちを何と呼んでいるのか、知らないのだ」とね。というのは、神々ならば、真実の名前を呼ぶことは、明らかだからね。

E　次に、二番目に正しい仕方は、ちょうど祈りの際のわれわれの慣わし(1)のように、することだ。つまり、どんな名前であろうと、何にちなんでの名前であろうと、とにかく神々のお気に召す名前を、われわれもまた呼ぶことである。それ以外の名前を、われわれは全然知らないのだと考えてね。実際これは立派な慣わしだと、ぼくには思えるのだからね。そこで、君にその意志があるならばだが、われわれは次のように神々に対していわば予告した

401　上で、考察を始めようではないか。すなわち、「神々については私たちは何も考察しようとしておりません。なぜなら、自分たちに考察しうる能力があるとは見なさないからです。むしろ私たちは人間について、彼らがいったいどのような意見に基づいて神々の名前を定めたのであるかを、考察しようとしているのです」とね。なぜなら、これならば神々のお怒りを招くこともないだろうからね(2)。

**ヘルモゲネス**　いやもうあなたは、おおソクラテス、〔人間の〕分際をわきまえた仕方でお語りになったように、ぼくには思えます。ですから、そうしようではありませんか。

B　**ソクラテス**　では、慣例に従って、ヘスティア(3)(Hestia)から始めるべきではないかね。

**ヘルモゲネス**　とにかくそれが正当なことですね。

**ソクラテス**　では、ヘスティアと名づけた人は、何を考えてそう名づけたのだと、人は言うことができるだろ

うか。

**ヘルモゲネス**　ゼウスに誓って、これもまた容易ではないように、ぼくは思います。

**ソクラテス**　とにかく、最初に名前を定めた人たちは、おお優れたヘルモゲネスよ、凡庸な人々ではなくて、だれか空論家〔高遠なることを論ずる者〕でおしゃべり屋(4)〔精緻な談論者〕であったようだね。

**ヘルモゲネス**　いったいなぜですか。

C **ソクラテス**　名前定めがだれかそのような人間のしわざであることが、ぼくにははっきり分かるのだ。それから、もし人が他国語(5)の名前を吟味してみるならば、それぞれの名前が何を意味するかが、やはり同様に〔アッティカ語の名前を考察する場合に劣らず〕発見されるだろう。例えば、われわれ〔アッティカ人〕がousia(6)(有性)と呼んだ

---

1　祈りの際に、次のような趣旨の文句で当の対象となる神に呼びかける慣わしがあったらしい。「神が何者にましますかは存じませぬが、何者とでも、何にちなんでも、とにかくそう呼ばれることが神にお気に召すような名前で、お呼びいたします」。

2　『ピレボス』12Cではソクラテスはこう言っている。「神の名前に対するいつも変らぬぼくの畏敬は、人間並みのものではなくて、最大の恐怖をすら超えたものである」。

3　クロノスとレアの間に生まれた女神。儀式や饗宴においては最初と最後にこの女神に酒が献じられ、祈りに際しても他の神々の前にこの女神の名が呼ばれるのが慣習であった。401D参照。

4　これら二つの名称はしばしば人を誹謗するために使用されたが、ここでは命名者が事物の根源にかかわる見解を抱いているように見えるので、こう呼ばれたわけで、非難の意味はこめられていないようである。なお「空論家」の原語は396Cの「メテオロロゴス」と同じものである。

5　アッティカ方言以外のギリシア語方言をさす。

6　有性とは、それぞれのものをしてその一定のもので有らしめる原因をいう。箇々のものの本質ではなくて、すべての有るものを有らしめる同一性の原因である。

でいるものの場合でも、それを essia と呼ぶ人たちもあれば、また ōsia と呼ぶ人たちもある。(1) そこで先ず第一に、このうちの一方〔つまり、essia〕に従って考えると、事物の有性がヘスティアと呼ばれるのは、道理にかなったことだね。また、われわれ〔アッティカ人〕が有性を分有するものを estin(有る)と言っているという事実からしても、〃ヘスティア〃は正しい名前であるだろうね。というのは〔われわれが estin と言うわけを考えてみると〕、

D

われわれも昔は有性を essia と呼んでいたらしいからね。さらに、犠牲を捧げる仕方から思いついて、これらの名前の命名者たちの意図は、やはりそのようであったと信じる人もあるかも知れないね。なぜなら、万物の有性をヘスティアと名づけた人たちならば、すべての神々に先立って、最初にヘスティア女神に〔供物の一部分を〕先献するのは、ありそうなことだからね。(2) 他方 ōsia と名づけた人たちは、反対にだいたいヘラクレイトスに従って、(3) 有るものはすべて行きつつあり、何ものも止(とど)まっていないと信じたのだろうね。そこで〔彼らの考えでは〕、有るものの原因、原動力は押すもの(ōthoun)であり、従ってそれが ōsia と名づけられているのは適切だというわけ

E

だ。だがこれらの名前については、われわれのような何も知らない者の言うこととしては、これで十分だとしておこう。次にヘスティアのあとにはレアとクロノスを考察するのが当然だね。(4) といっても、クロノスの名前は、既に検討済みだ。いや待てよ、もしかしたらぼくの言っていることは無意味なことかも知れないね。(5)

## 一九

**ヘルモゲネス** いったいなぜですか、おおソクラテス。

**ソクラテス** おお善き人よ〔驚いたねえ、君〕、何か知恵の大群(6)が、ぼくの心に浮かんで来たよ。

402

**ヘルモゲネス** それはいったいどんな〔大群ですか〕。

**ソクラテス** 口に出して言えばまったくおかしなものなのだが、それでも一種の信憑性をもっていると思うのだがね。

**ヘルモゲネス** それはどんな〔信憑性ですか〕。

**ソクラテス** かのヘラクレイトスが、実はある古来の智慮を語っているのであることを、ぼくは今明瞭に見てとったように思うのだ。それは、言うならば、まるでもうクロノスとレアの時代にまでさかのぼるほど古くからのもので、そしてホメロスも語っていることなのだ。

**ヘルモゲネス** どういう意味で、そう言われるのですか。

**ソクラテス** たしかヘラクレイトスは「すべては去りつつあり、何ものも止(とど)まらない」と言っているね。そし

1 essia と ōsia はドーリア方言であったらしい。

2 ヘスティアはいわゆるオリュンポス十二神の一人だが、この処女神だけはオリュンポスを離れることがない。また〝ヘスティア〟は日常語としては家の中心にある炉(かまど)を意味する。それやこれやで女神ヘスティアを有性と解釈する説がもっともらしく見えるわけである。なおヘスティアという語はギリシア語では〝立ち止まっている〟(hestanai)ということを連想させやすいのであって、その連想がここでも予想されているかも知れない。この箇所は新プラトン派によって注目された箇所の一つである。

3 ヘラクレイトスは前五〇〇年頃の人で ōsia という語はもっと古いかも知れない。「だいたい」とぼかしてあるのは、そのためか。

4 レアとクロノスは他のすべての神々の先祖だから(402B)。

5 先のクロノスについての説明(396B)をヘラクレイトス派の立場から否定しようとしているのであろう。

6 ホメロス、オルペウス、往古の命名者など(の知恵)をさす。

て有るものを川の流れにたとえて「汝は同じ川に二度と足を踏み入れることはできないであろう」とも言っているようだ。

**ヘルモゲネス**　そのとおりです。

B **ソクラテス**　では、どうだろうね。他の神々の先祖である神々にレア(Rhea)とクロノス(Kronos)という名前をつけた人〔昔の命名者〕が、ヘラクレイトスとは違った考え方をしているように君に思えるかね。いったい君は、その人が単なる偶然で両方の神に流動を意味する名前をつけたとでも思うのかね。[1] その上ホメロスだってやはり同じように

神々の生みの親〔父〕オケアノスと母テテュス

と言っているのだ。[2] それからヘシオドスもそうだとぼくは思う。[3] それからオルペウスもたしかこう言っているね。[4]

C 美しく流れるオケアノスが先ず結婚して

同母妹テテュスと結ばれた

見給え、これら〔の思想〕はお互いどうしでも一致しており、そしてまた、いずれもがヘラクレイトス説に帰着するではないか。

**ヘルモゲネス**　あなたのおっしゃることには一理あるようです、おおソクラテス。けれども、テテュスという名前が何を意味するのか、ぼくには思いつけません。

**ソクラテス**　いや、これならば、ほとんどそれ自身が告白しているようなものだ。自分は偽装してはいるが、D 水源を意味する名前であるとね。なぜなら「ふるい分けられたもの」(diattōmenon)と「漉されたもの」(ēthou-

menon)とは、水源〔泉〕の比喩だ。そしてこの両方の名前からテテュス(Tēthys)という名前が合成されているのだからね。(5)

**ヘルモゲネス** いや、この説明は、おおソクラテス、ずいぶんと手が込んでいますね。

**ソクラテス** そうでないはずはなかろうじゃあないか。(6) だがこの次は何にしようか。ゼウスについてはもう、われわれは説明した。(7)

**ヘルモゲネス** そうです。

**ソクラテス** では、ゼウスの兄弟たちを説明しようではないか。ポセイドンとプルゥトンと、それから人々が後者に与えている別名とをね。

**ヘルモゲネス** ええ、結構ですね。

---

1 レア(Rhea)は rhein (流れる)という動詞から、またKronos は krounos(源泉)に同じと見なすわけである。

2 『イリアス』第一四巻二〇一行(『テアイテトス』152E でも引用されている)。オケアノスは大地を取り巻いて環状に流れる大河。テテュスは天と地の娘で、オケアノスの妻。

3 ヘシオドスの『神統記』ではオケアノスは天と地の息子で、妹のテテュスと結ばれて無数の河川を生むが、神々の父母とはされていない。しかしヘシオドスでは万物の始元は混沌であり、プラトン(あるいはヘラクレイトス派)はこれを一種の流動と見たのかもしれない。ストア派のゼノンも〃混沌〃(chaos)は〃注ぐ〃(cheō)から派生した語で、水を意味すると解釈した。

4 オルペウスの作と称される、オルペウス教の教義や神話を述べた詩が多数存在したらしい。

5 つまり Tēthys は Diattēthys の最初の四文字が省かれたものと考えたわけであろう(プロクロスによる)。

6 いにしえの賢者の知謀をあばくのだから。あるいは、エウテュプロンの知恵のはたらきによるのだから。

7 396A～B.

(402)
E

**ソクラテス**　ではまずポセイドン(1)(Poseidōn)の名前だがね、最初に名づけた人(2)がなぜそう名づけたかというと、ぼくに思えるところでは、その人が歩いていたとき、海というものがその本性上彼を阻んで、それ以上前進するのを許さず、彼の足(podes)のいわば枷(desmos)となったのだね。そこで、この〔足を阻害する〕力の支配者である神を、足にとっての枷(posidesmos)という意味で、ポセイドンと名づけたというわけさ。e(エイ)の字(3)が余分にはいっているのは、多分装飾のためだろうね。だが、もしかしたら、そういう意味ではなくて、元来はs(シーグマ)の代りに1(ラブダ)が二つ発音されていた〔つまりPolleidōn〕のかも知れないな。この神はたくさんのこと(polla)を知っている(eidōs)という意味でね。あるいはまた、〃震動させる〃(seiein)ということばから、〃震動させる者〃(seiōn)と名づけられたのかも知れないね。そしてp(ペイ)とd(デルタ)が余分に付け加えられているのだろう。

403

次にプルゥトン(4)(Ploutōn)の名前だが、こちらの方は、富(ploutos)を与えることにちなんで、そう名づけられたものだ。なぜなら、富は大地の下から送り上げられて来るのだからね。(5)他方〔プルゥトンの別名の〕ハデス(Haides)の方は、どうも一般の人々はこの名前によって〃見えざるもの〃(aïdes)が意味されていると理解しているように、ぼくには思えるね。それで彼らはこの名前をこわがって、その代りに彼をプルゥトンと呼んでいるのだ。

B

**ヘルモゲネス**　ですが、あなたご自身には〔ハデスは〕どう見えるのですか、おおソクラテス。

**ソクラテス**　ぼくにはね、多くの点で人間たちはこの神の力について誤りを犯していて、そのために理由なく彼をこわがっているように、思えるのだよ。というのは、まず、われわれのうちのだれであれ、ひとたび死んだならば、以後は永久に〔二度と地上に帰ることなく〕あそこ〔ハデスの家、冥府〕にいるのだということを彼らはこわがっているのだし、また魂は肉体を脱ぎ捨てて裸であの神のもとに行くということを、彼らはひどくこわがっているのだ。だがこれらのことはすべて、ある同一のことがらに帰着するのだ。この神の支配する力にしても、名前にしてもね。(6)

**ヘルモゲネス**　いったいどのようにしてですか。

c

**ソクラテス**　ぼくは君に、とにかく自分に思えることを語ろう。まず答えてくれ給え。任意のある生き物を任意のある場所に留まらせる絆(きずな)としては、強制と〔その生き物自身の〕欲求との、どちらがより強力なものだろうか。

**ヘルモゲネス**　それは欲求の方が、はるかに勝っておりますよ、おおソクラテス。

**ソクラテス**　では、もしもハデスがあそこへ行く者を最も強力な絆で縛りつけているのでないならば、多数の

1　クロノスとレアの息子で、ゼウスの弟(ホメロス)、もしくは兄(ヘシオドス)。海と水と地震の神。
2　テクストは底本によらずB、T写本に従う。
3　Poseidōn の e。
4　ハデスの別名。ハデスもクロノスとレアの息子。ゼウスが天を、ポセイドンが海を領するに対して、地下の世界と死者とを支配する。ギリシア語では冥土のことを「ハデスの(家)」と表現する。
5　富とはここでは農産物をさす。
6　この箇所から、プラトンは魂の輪廻転生を信じていなかったと断定する人がある(アーペルト)が、むろんここでは一般人の信念が記述されているにすぎない。ただしこのあとに続く説明にも、輪廻転生は前提されていないかのごとくである。

者が逃亡するだろうとは、君は思わないかね。

**ヘルモゲネス** それは明白です。

**ソクラテス** してみるとハデスは、何らかの欲求によって彼らを縛りつけているらしいね。もしも強制によってではなくて、最強の絆によって縛りつけているのだとするならばね。

**ヘルモゲネス** 明らかにそうです。

**ソクラテス** さて、欲求といっても、これがまた多種多様だ。

**ヘルモゲネス** そうです。

D

**ソクラテス** してみるとハデスは、欲求のうちでも最強のものによって彼らを縛りつけているのだ。もしも最強の絆によって引き留めるのだとするならばね。

**ヘルモゲネス** そうです。

**ソクラテス** ところで、ひとはだれかといっしょになれば、この者のゆえに自分がより良い人になるだろうと思うばあいをおいて、それよりもっと強い欲求をもつことがあるだろうか。

**ヘルモゲネス** いいえ、ゼウスに誓って、決してそれ以上のものはありません。

**ソクラテス** してみるとわれわれはこう主張しようではないか、おおヘルモゲネスよ。まさにこれらの理由からして、あそこに住まう者たちのだれ一人として、実にセイレンたち(1)すらも、こちらに帰ってくることを欲しな

E

いで、むしろ彼女たちも他のすべての者たちも、魅了されてしまっているのだ、とね。それほどに美しい——と思えるのだが——何かしらある言説を語るすべを、ハデスは心得ているらしいね。だからこの神は、このわれわ

404

れの議論からする限りでは、完全な知者であり、彼のもとにいる者たちの大恩人であるのだ。何しろ彼は、この地上の者たちにだって、これほどの善を送り上げてくれているくらいだからね。それほどにあり余る善が、あそこにはあるのだ。そしてこのことから彼はプルゥトン〔富を与える者〕という名前を得たわけなのだ。それにまた彼が、肉体をもっている人間たちとはいっしょにいることを欲しないで、魂があらゆる肉体的な諸悪と欲求から離脱し浄化されたとき、初めて彼らと交際するという事実は、ハデスが愛知者であり、よく次のことがらを理解している者だということを示している、とは君は思わないかね。すなわち、その場合には彼らを、徳性への欲求によって縛りつけることによって、引き留めることができるだろうが、他方彼らが肉体のざわめき〔動揺、興奮〕と物狂おしさをもっている間は、たとえ父クロノスが彼を助けたとしても、あの伝説的な彼〔クロノス〕の鎖[3]に彼

1　セイレン(Seirēn)は、その歌声や楽器によって聴く者を魅了し、すべてを忘れしめる女性。その数は二名か三名、時に四名。ホメロスより後の伝説では上半身が人で下半身が鳥。この箇所の意味は、他者を魅惑するセイレンたちすら、逆にハデスに魅了されたらしく、地上に戻ってこない、ということであろう。なぜセイレンが冥界にいるか、はっきりしないが、後代の伝説ではオデュッセウスを魅惑することに失敗して死んだことになっている。また、死者の魂を冥界に送る鳥のようなものとも想像されたり、墓標などにその姿が画かれることもあった。

2　農産物、あるいは、はなはだうがった(うがちすぎた?)解釈(フリートレンダー)によると、限界状況(死)の知識。

3　クロノスはゼウスとの戦に破れたのち、地底に幽閉されたことになっているが、その時にゼウスがクロノスを縛った綱(絆)のことであろうか。ホメロスもヘシオドスもこの綱のことは語っていないが、プロクロスは切断不能の綱によってクロノスが縛られたと言っている(『ティマイオス注』vol. 2, p. 209)ので、あるいはそのような伝説もあったのであろうか。とにかく、ハデスの絆とクロノスの絆と二種あって、後者の方がより強力だが、それでも肉体をもつ者を引き留めることはむずかしいというわけである。

らを縛りつけ、引き留めておくことはできないであろうということをね。

**ヘルモゲネス** あなたのおっしゃることに一理あるようです、おおソクラテス。

B

**ソクラテス** そしてハデスという名前はね、おおヘルモゲネスよ、〃見えざるもの〃(aïdes)から名づけられたというのは、とんでもない話で、むしろすべての美しきものを知る(eidenai)ということから、立法者によって〃ハデス〃と名づけられたのだと考える方が、はるかに真実に近いのだよ。(1)

## 二

**ヘルモゲネス** 〔その説明で〕結構です。では次に、デメテル、ヘラ、アポロン、アテナ、ヘパイストス、アレス、およびその他の神々については、どうですか。われわれはこれらを、どのように説明すべきでしょうか。

**ソクラテス** デメテル(2)(Dēmētēr)は、〔この女神が人間に〕食物を与えることから、母の如くに与えるもの(didousa....mētēr)という意味で、デメテルと呼ばれているように見えるね。

またヘラ(3)(Hēra)は、愛らしい(eratē)者という意味だよ。ちょうどまた実際に、ゼウスがこの女神を愛して妻としたと言い伝えられているようにね。あるいはまた立法者は、思弁を上空に馳せて(4)、空気(aēr)をヘラと名づけたのかも知れないな。そして最初の文字(a)を最後にまわして偽装させたのさ。だが君がヘラという名前を何度も繰返して唱えてみれば、それを見抜くことができるだろう(5)。

C

次にペレパッタ(6)(Pherrephatta)はというと、多くの人はやはりこの名前も、それから〃アポロン〃〔の名前〕もこわがっているが、それはどうやら彼らが名前の正しさについて無経験であるためのようだ。それというのも特

D に、彼らはこの名前をペルセポネ(Phersephonē)と言い替えた上で〔その意味を〕考察するものだから、それで彼らには、それがこわいもののように見えるのだよ。[7] だが本当はこの名前は、この女神が知者であることを告げているのだ。なぜなら、事物は運動しつつあるのだから、それに接触し、それを把握し、随従〔理解〕することのできるものが、知恵であるだろうからね。そこでこの女神は、その知恵、つまり運動しつつあるもの(pheromenon)への接触(epaphē)のゆえに、〝ペレパパ〟(Pherepapha)とか、あるいは何かそのような名前で呼ばれるならば、正しいことになるだろうね。——またそれゆえにこそ知者であるハデスがこの女神と生活を共にしているのでもあるわけだ。女神がそのような者〔知者〕であるがゆえにね。——ところが現状では、人々は真実よりも口調の良さを大切にして、女神の名前をねじ曲げてペレパッタと呼んでいるありさまなのである。

---

1 Haidēs は Haeidēs がつづまったものというわけである。このばあい a は「全部いっしょに」という集合的な意味に解されているのであろう(405C 参照)。

2 クロノスとレアの娘で穀物の神。(プロクロスはこれを肉体の糧のみならず、魂と精神の糧を神と人とに供給する神と拡大解釈している。)

3 ゼウスの姉もしくは妹で彼の妃でもある。女性と結婚の神か。『イリアス』第一四巻三一四行以下でゼウスはヘラにむかい、かつてないほどに強い愛が自分の胸に湧いた、「われ今汝をしかく愛し、甘美なる欲情われをとらえたり」と言っている。

4 「思弁を上空に馳せる」は 401B の「空論家」、396C の「メテオロロゴス」に対応する動詞。

5 hēra, hēra と続けて何度も唱えて、その際 h の音を無視すれば、aēr(空気)の音が聞える。ヘラを空気と説明したのは、クラテュロスに気に入るためか。(プロクロスは、空気は魂の象徴と解する。)後のストア派もこのヘラ空気説を支持した。

6 ゼウスとデメテルの娘。ハデスが彼女をさらって妻とした。詩文では〝ペルセポネ〟と呼ばれるのが普通。

7 Phersephonē は〝もたらす〟(pherein)と〝殺害〟(phonos)との二語から合成されたかのように思えるので、恐ろしく感じられるのである。

(404) E

またアポロン[1](Apollōn)についても事情は同様で、さっきも言ったように、多くの人がこの神の名前を、これが何か恐ろしいことを告知しているかのように、こわがっている。[2] それとも君はこのことに気づいていないかね。

**ヘルモゲネス** もちろんです〔気づいていますとも〕。そしてあなたのおっしゃることは本当です。

**ソクラテス** ところが実際は、この名前は、ぼくに思えるところでは、この神の力を表現するという点からすると、いともみごとにつけられているのだがね。

**ヘルモゲネス** いったい、どんなふうにですか。

405

**ソクラテス** とにかくぼく自身に思えることを、説明すべく試みてみよう。というのは、一つの名前でありながら、この神の四つの力〔機能〕にうまく調和している——したがって四つすべてに触れており、音楽、預言、医、弓射の四術をある仕方で表現する——ものとして、これ以上のものは無いのだからね。

**ヘルモゲネス** さあ、どうかお話し下さい。この名前が何か変てこなものだと、ぼくにおっしゃるのですね。

## 二三

**ソクラテス** いやむしろ、よく調和した〔名前〕とね。何しろ音楽的である神の名前なのだから。というのは、まず第一にね、医術と預言術と両方の意味での浄化と、[3]〔そのための〕もろもろの浄化手続き、医術的および預言術的薬品による燻蒸、[4] そのようなばあいに行なわれる沐浴、それから灌水、[5] これらはすべてある一つのことをなしうるわけだ。すなわち、人間を肉体に関しても魂に関しても清浄にすることをね。それとも違うかね。

B

**ヘルモゲネス** 確かにそのとおりです。

**ソクラテス**　とするとこの方は、浄化する神、つまり洗浄し(apolouōn)、このような諸悪から解き放つ(apolyōn)神であるのではないだろうか。

**ヘルモゲネス**　確かにそのとおりですね。

c

**ソクラテス**　うん、それならばこの方は、そのような解放と洗浄にちなんで、これらの諸悪をいやす医者という意味で、Apolouōn(洗浄者)と呼ばれて正しいだろうね。また〔第二に〕、〔この神様の〕預言術と真実性あるいは単純性〔誠実さ〕(haplouṇ)――この二つは同じことだがね――にちなんで名づけるとすれば、現にテッタリア(6)の人々が呼んでいるように呼ばれるのが最も正しいことになるだろうね。というのは、テッタリア人はみんな、この神をAplounといっているのだからね。また〔第三に〕この方は弓術によって、射ることに常に巧みで自由自在であるので〝常に射当てる者〟(aei ballōn)である。また〔第四に〕音楽術の方面からすると、例えばakolouthos(同伴者)やakoitis(妻)のばあいのように、(7) a(アルパ)という文字はしばしば〝共に〟(homou)を意味することがあるということを知らなければならない。そして今のばあいも、〔すべてが〕共にめぐること(homou polēsis)が意味されていると考えるべきだ。天〔の運動〕に関しても――これを人々は回転(poloi)と呼んでいるがね――また

1　ゼウスとレトの間に生まれた息子。アルテミス女神と双生児で生まれた。音楽、弓術、預言(および罪を清めること)、医術などを司る神。

2　Apollōn の名は〝滅ぼす〟(apollynai)を連想させるから、こわいのである。405E 注2を参照。

3　例えば流血の罪を犯した人の(魂の)汚れを清めることなど。医術的浄化とは、病的な体液を排出させたり、嘔吐、下痢などを起こして胃を空にすることであろうか。

4　硫黄などでいぶすこと。

5　清めの水を(木の枝などで)ふりかけること。

6　ギリシアの北部の地域。

7　テクストは底本に従わず、写本どおりとする。

(405)
D
歌の調和に関してもね。この調和は諧調と呼ばれているがね。というのは、音楽と天文学の巧者たち[1]が言うところによると、これらすべて〔全天〕は一種の調和を奏でつつ、すべてが同時に回転しているのだそうだからね。そしてこの神が、神々の間でも人間の間でも、調和を司られていて、調和によってこれらすべてを共に回転させている(homopolōn)のだ。そこで、homokeleuthos(同道者)とhomokoitis(寝床を同じくする者、妻)が——homo-をa-に変えることによって——それぞれakolouthosとakoitisと名づけられたように、元来はHomopolōnであ
E
ったこの神も、Apollōnと呼ばれたわけだ。1をもう一つ中に入れてね。なぜなら、そうしないと、あのいやな名前と同じになってしまうだろうからね。[2] そしてまさにそいつ〔そのいやな名前〕を現代でもある人々は〔アポロンという名前の中に〕感じとっていて、この名前〔"アポロン"〕を、何かある破滅を意味するものとして、こわがっているのだが、それは彼らがこの名前の力〔意味〕を正しく考察しないからにすぎない。本当はこの名前は、今
406
しがた言われていたように、単純〔誠実〕であり、常に射当て、洗浄し、共に回転させるこの神の、すべての力にふれるようにつけられているわけなのだ。

次にムゥサ(Mousa)たち[3]と広く学芸(mousikē)全般だがね、これを〔立法者は〕、どうやら、"熱烈に希求する"(mōsthai)ということから、つまり探求と愛知〔哲学〕から、この名前〔"ムゥサ"〕でもって呼称したのであるようだね。

次にレト[4](Lētō)は、この女神の柔和さから、われわれのお願いを喜んで聞き入れる者(ethelēmōn)という意味で、そう名づけられたのだろうね。[5] だが、もしかしたら、他国の人たち[6]が呼んでいる呼び方に従って、考えるべきかも知れないね。というのは、多くの人がレトゥホ(Lēthō)と呼んでいるからだ。そこでこの呼び方からする

と、性格(ēthos)が荒々しくなくて温和でやさしい(leion)ということにちなんで、レトゥホと、こう呼ぶ人たちによって呼ばれているように見えるね。(7)

B 次に〃アルテミス〃(8)(Artemis)は、この女神が処女性を欲求するという理由からして、保全されたもの(artemes)で行儀正しいものであるようだね。(9)だが、もしかしたら、名づけた人は、徳を知る者(aretēs histōr)とこの女神を名づけたのかも知れないね。あるいはまた、男性の女性における耕作を憎む者(aroton misēsasa)(10)という意味で、かも知れない。これらのどれかひとつ、あるいはこれらすべての理由で、命名者はこの名前を女神につけたのだ。

---

1 ピュタゴラス派をさすのであろう。

2 apolōnは〃破滅させる(殺す)であろう者〃を意味する語(apollynaiの未来分詞)である。404E参照。

3 英語のミューズ。ゼウスとムネモシュネ(記憶)の間に生まれた九名の女神。詩歌、文芸、音楽、学術の守護者。ここでは特に哲学、あるいは学問と結びつけて考えられているわけである。ドーリア方言ではムゥサはMōsaであるので、mōsthaiから説明するのがいっそう容易であったと思われる。なお『パイドロス』259Dでも最年長の二人のムゥサが哲学の保護者として語られ、『パイドン』61Aでは「哲学は最大のムゥシケー(音楽、文芸)である」と言われ、『国家』Ⅷ.548Bには「言論と愛知をそなえた真正のムゥサ」ということばがある。

4 コイオスとポイベの間に生まれた女神。柔和で慈悲深い神である。ヘシオドスはレトについて「いつも優しく、人間にも神々にも親切で、始めから(もともと)優しく、オリュンポスにおいて一番思いやり深い」と語っている。ゼウスにより、アポロンとアルテミスの双生児の母となった。

5 〃喜んで聞き入れる〃に当る動詞としてドーリア方言にlēnがあるので、これからレトという名前ができたと言っているのであろう(プロクロスに依る)。

6 アテナイ人以外のギリシア人であろうが、どの地域のギリシア人のことか、わからない。

7 つまりLētōはLeiētōまたはLeētōがつづまったものというわけであろうか。

8 ゼウスとレトの娘。出産を助ける女神であるが、それ自身は処女神である。新プラトン派流に言えば、生成を超越しつつ、生成を保護する。『テアイテトス』149B参照。

9 テクストは底本に従わず、写本どおりに読む。

10 つまり生殖行為。

二三

**ヘルモゲネス**　ではディオニュソスとアプロディテは、どうですか。

**ソクラテス**　やあ、これは何と、おおヒッポニコスのむすこさん、君が提起しているのは大変な問題だ。まあ、とにかく〔答えねばならないとすると〕、この神々の名前には、まじめな意味とふざけた意味とがあるのだ。で、まじめな方は、だれか他の人たちにきき給え。[1] ふざけた意味の方は、〔今ぼくが〕説明して何ら差し支えがない。なぜなら、この神々ご自身も、ふざけるのがお好きな方々だからね。まずディオニュソス[2](Dionysos)は、酒を与える者(didous oinon)として、戯れに〃ディドイニュソス〃(Didoinysos)と呼ばれているのだろうね。また酒(oinos)は、それを飲む人の多くをして、分別(nous)をもっていないのに、もっているかのように思い(oiesthai)こませるので、極めて正当にも〃オイオヌゥス〃(oionous)と名づけられているのだろうね。

次にアプロディテ[3](Aphroditē)については、ヘシオドスに反対しなければならぬ理由もないので、彼に従って、水泡(みなわ)(aphros)から生まれたゆえにアプロディテと名づけられたと言うべきだろうね。

**ヘルモゲネス**　ところでアテナも、あなたは正にアテナイ人でいらっしゃるのですから、おおソクラテス、よもやお忘れにはならないでしょうね。[4] またヘパイストスとアレスもね。

**ソクラテス**　むろん〔そういうことはないし、また〕ありそうもないことだしね。

**ヘルモゲネス**　そうですとも。

**ソクラテス**　それではまず、この女神の片方の名前だが、これがなぜつけられているかを言うことは、難しく

ないね。

**ヘルモゲネス**　どの名前のことですか。

**ソクラテス**　たしかパラス(5)(Pallas)とこの女神をわれわれは呼んでいると思うがね。

**ヘルモゲネス**　もちろんです。

E

**ソクラテス**　うん、それならばこの名前だがね、これは武具をつけての舞踏から、つけられたのだとわれわれが信じるならば、正しく――ぼくが思うにはね――信じることになるだろう。なぜなら、自分なり他の何かなり

---

1　ヘルモゲネスは軽い気持ちで尋ねたのだが、ソクラテスは「大変な問題だ」と言い、「まじめな意味」が別にあるとことわったのである。その真意が那辺にあるか、推測は困難である。ここではこれら二神の最も低次元の――しかし人間生活に大影響をおよぼすところの――機能についてのみふれられているのだが、さらにより高次元の機能が考えられうるというわけであろうか。アプロディテの機能に関しては『饗宴』180Dsqq.、『ソピステス』242Eを参照。

2　ゼウスがセメレという人間の女性を愛することによって生まれた男神。ブドウ栽培とブドウ酒の醸造の術を人間に教えたとされる。繁殖(特に植物の)に関係する神でもあるので、その意味でもここでアプロディテに並べられたのであろうか。

3　よく知られた愛と生殖の神。クロノスが父ウーラノスの男根を切って海に捨て、それから出た白い泡の中から生まれ出た女神(ヘシオドス『神統記』一九〇行以下)。プロクロスの解釈では、泡は精液で、アプロディテは性交時の快感をあらわすというが、果してプラトンがそう考えたかどうかは、わからない。

4　アテナ女神はアテナイ市の守護神で、アテナイの名称もこれに由来する。

5　〝パラス〟は元来(ホメロスなどで)アテナの別名というよりも冠称であって〝パラス・アテナ〟というふうに言われていたのだが、後には独立的に別名のようにも使用された。アテナはゼウスの娘で、ゼウスの頭から生まれたとき、すでに武具を着し槍を手にしていた。戦の神、また知恵(すなわち技術工芸と学問)の神である。

を、地面から、あるいは手にもっていて、上方に上げることをpallein(振り上げる)とか、pallesthai(自分を揺り上げる、跳ねる)とかと、つまり踊らせるとか、踊るとかと、われわれは呼んでいるように思うのだがね。

**ヘルモゲネス** 確かにそのとおりです。

**ソクラテス** だから、そういう意味で、われわれはこの女神をパラス〔つまり、振る者、踊る者〕[1]と呼んでいるわけだ。

**ヘルモゲネス** そしてそれで正しいわけです。ですが、もう一方の名前を、あなたはどう説明されますか。

**ソクラテス** アテナ(Athēnā)という名前の方かね。

**ヘルモゲネス** そうです。

**ソクラテス** これはもっと難物なのだよ、おお、わが友よ。では〔説明するが〕、古人もすでに、アテナについて、現代のホメロス解釈の巧者〔専門家〕たちと同様の見解を抱いていたように見えるのだ。それというのも、後

B

者の大多数は、この詩人〔ホメロス〕を解釈する際に、彼〔ホメロス〕がアテナによって〔人間の〕知性と理性を表現したと主張しているのだが、名前の制作者もまたこの女神について何かそのような考えをもっていたように見えるのだ。ただしもっと高次元的に、神の知見(theoū noēsis)であると言っているのだがね。彼は、いわば、この女神がhā theonoā(神の思惟)であると言っているのだ。つまり〔hē theoū noēsisにおける〕ēの代りに他国風[2]にāを使い、またiとsを取り除いたわけだ。だがもしかすると、そういう意味でもなくて、この女神が他の者に比べて遙かによく神に関すること(theia)を知っている(noousa)という理由で、Theonoēと名づけたのかも知れないね。[3]しかしまた、こう考えても少しも差し支えない。すなわち、命名者は、この女神が性格(ēthos)におけ

c る〔つまり、本性的な〕知見(noēsis)であると考えて、Ēthonoē と呼称しようと欲したのだが、ところが彼自身なり、だれか後世の人たちなりが、これをもっときれいなことばに――と彼らは信じたのだがね――するつもりで、Athēnaa[4] と呼んだのだ。

**ヘルモゲネス** では、ヘパイストス[5](Hēphaistos)はどうですか。どう説明されますか。

**ソクラテス** 君がたずねているのは、かの高貴なる光の知者(phaeos histōr)のことかね。

**ヘルモゲネス** ええ、そのようですね。

**ソクラテス** うん、それならば、この神は Phaistos であることは、万人の目に明らかではないかね。そして頭に ē〔hē〕がくっついたのだよ。

**ヘルモゲネス** なるほど、そのようですね。ただしあなたに、まだ何か別のお考えが浮かんで来ないとして――どうも来そうですが――の話ですがね。

---

1 出陣や勝利の踊りか。クゥレーテスと呼ばれる下級の神神は武具をつけて戦の踊りを踊る。オルペウス断片 134 によるとアテナはクゥレーテスの指揮者だという。

2 ドーリア方言では、アッティカ方言の ē が ā になる。なお hē は定冠詞である。

3 つまり、これに定冠詞をつけてドーリア化すると Hā theonoā となり、さらにこれをつづめると Athēnā になる。

4 アテナ(Athēnā)の別形(原形)に Athēnaia, Athēnaa などがあった。なお「性格における知見」とは「性格を知るもの」従って「良き性格の原因」と解釈する説(例えばプロクロス『プラトン神学』p. 372 Port.)もある。

5 火(元来火山の火か)と火を必要とする工芸技術(鍛冶屋の技術など)の神。火の神であることに引っかけて語源説明に好都合なように「光の知者」と呼んだのであろうか。この表現がヘパイストスについて通常用いられるものでないので、ヘルモゲネスが「そのようだ」と答えたのであろう。工芸の神であるゆえに、工芸に長じたアテナイ人から特に尊崇されたのであろう。

D

**ソクラテス**　いや、それならば、浮かんで来ないうちに、次にアレス[1](Arēs)について、たずね給え。

**ヘルモゲネス**　では、おたずねします。

**ソクラテス**　では、まず一つの説明では、君が〔この説明に従うことを〕お望みならばだが、この神は男らしさ(arren)と勇猛さのゆえに、アレスであるのだろうね。あるいはまた、峻厳であとへ引かぬ性質――これはarraton(不退転)と呼ばれているが――のゆえだとしても、やはり、戦を好む神には、アレスと呼ばれるのが、どう見てもふさわしいだろうね。

**ヘルモゲネス**　確かにそうですね。

**ソクラテス**　さあ、それではわれわれは、神々については、神々にかけて〔お願いだから〕、もう話をおしまいにしようではないか。ぼくは神々について問答することを恐れているのだからね。[2]もし何か他のものについて君がお望みならば、問題提起をしてくれ給え。君がエウテュプロンの「馬はいかばかりの逸物なりや、見んがため」[3]にね。

E

**ヘルモゲネス**　いや、それならば、おことばに従いましょう。ですが、もう一つだけ、ヘルメスについて、お尋ねした上でです。何しろクラテュロスが、ぼくがヘルモゲネスであることを否定していることでもありますのでね。ですから、われわれは〝ヘルメス〟を、この名前がいったい何を意味するのか、考察しようではありませんか。それはまたこちらの人〔クラテュロス〕の言っていることに一理あるかどうかを、われわれが知るためでもあるのです。

**ソクラテス**　うん、それならばこれは、言説に関する何かであるようだ、〝ヘルメス〟[4](Hermēs)という名前は

408 ね。つまり、通訳(hermēneus)であること、伝令であること、盗みに長じていること、言説でもって欺くのがうまいこと、商取引きに巧みであることなど、〔この神の〕これらの活動はすべて言説にかかわっているのだ。ところで、これはわれわれがさっきも言ったことだがね、(5) eirein(話す)とは言説を用いることだ。またホメロスも度々使っていることばだが、emēsato(しくんだ、発明した)は〝工夫した〟ということだ。そこで、この神を、この両方のことばから、言うことと言説を発明した者——〝言う〟(legein)とは〝話す〟(eirein)ことだがね——と呼ぶ

B ように、立法者はわれわれにいわば命令しているのだ。こう言ってね。「おお、人間どもよ。話すこと(eirein)を発明した(emēsato)者は、汝らによってEiremēsと呼ばれて正当であろう」とね。ところが現在ではわれわれはこの名前を美々しく——とわれわれは信じているのだが——化粧して、ヘルメスと呼んでいるわけなのだ。

**ヘルモゲネス** ゼウスにかけて申しますが、なるほどそれではクラテュロスが、ぼくがヘルモゲネス〔ヘルメスから生まれた者〕でないと言う(6)のも、もっともだとぼくには思えます。何はともあれ、ぼくは言説を工夫すること

1 ゼウスとヘラの息子で、血なまぐさい戦を好む荒々しい神。アテナイは、アレオパゴス(アレスの丘)とこの丘で開かれた評議会(その第一回は殺人を犯したアレスを裁くために神々によって開かれたと言われる)のゆえに、この神と縁が深い。
2 401A 注2を参照。
3 『イリアス』第五巻二二一—二二二行からの引用。エウテュプロンの知恵を駿馬にたとえた。
4 ヘルメスはゼウスの息子、母はマイア。ゼウスの伝令で、弁舌にたける。夜明け方に生まれ、その日の昼頃には、龜を捕えてその甲からリュラ琴を作って演奏していた。夕方にはアポロンの牛五〇頭を盗み、詰問されて、赤ん坊の自分は牛ということばも知らぬと白ばくれ、ゼウスとアポロンの前で雄弁をふるって自己弁護するなど、発明工夫の才あり、盗みに長じ、言い逃れがうまく弁論の神である。また商人の神であり福の神であって富を授ける。
5 398D.
6 383B.

に長じてはおりませんからね。(1)

二四

C

**ソクラテス**　それから、パン(2)(Pan)がヘルメスのむすこで二形的だといわれるのも、おお、わが仲間よ、もっともな話だねえ。

**ヘルモゲネス**　いったいどうしてですか。

**ソクラテス**　君もご存知のように、言説(logos)というものは、すべて(pān)〔の事物〕を表現する。そしていつもコロコロ転がり、動きまわる。(3)そして真偽の二面性をもっている。

**ヘルモゲネス**　確かにそうですね。

**ソクラテス**　そこで、言説のうちでも真なるものは、すべすべしていて滑らかで神的で上方の神々の間に住まっているのだが、他方虚偽は下方の、人間の大多数の間に居住していて、ざらざらと感触が悪く、山羊的(4)〔悲劇的〕なのだ。なぜなら、ここ地上の、山羊的〔悲劇的〕な生においてこそ、作り話と虚偽の大多数が存在しているのだからね。(5)

**ヘルモゲネス**　確かにそうですね。

D

**ソクラテス**　してみると、すべて(pān)を告げ知らせ、いつも移動するもの(aei polōn)〔つまり言説〕が、Pan aipolos(牧者パン)であるのは、正しいことだろうね。彼はヘルメスのむすこで二形的で、上半身は滑らかで下半身はざらざらしていて山羊の姿をしている。そこでパンは、言説であるか、言説の兄弟であるか、どちらかだね。

いやしくもヘルメスのむすこであるからにはね。兄弟が兄弟に似ていても、何の不思議もないね。いやしかし、さっきも言ったように、おお、しあわせな人よ〔君は忘れているではないか〕、神々の話はやめようではないか。

**ヘルモゲネス** ええ、そのような神々についてはですね、おおソクラテス、あなたがお望みならば。でも、次のような神々については、あなたが議論なさることに、何の差し支えがありましょうか。つまり、太陽、月、星々、大地、アイテール、空気、火、水、季節、年などです。

E

**ソクラテス** これはまた、たくさんの仕事を、君はぼくに課するのだねえ。けれども、そうすることが君を喜ばせるのならば、ぼくは喜んでそうしよう。

**ヘルモゲネス** ええ、そうして下さればうれしいです。

**ソクラテス** さあ、それでは、どれを最初にお望みかね。それとも〔問うまでもなく〕君が言った順に、まず太陽(hēlios)をわれわれは論じようかね。

---

1 ヘルメスやソフィストたちのように弁説巧みでないことを、むしろ喜んでいるのでもあろう。なお解説四一二ページ参照。

2 ヘルメスの息子、母はいろいろに言われている。森林、牧畜などの神(いわゆる牧羊神)。上半身は人間だが、下半身と頭上の角などは山羊の形をしているので、ここで「二形的」と形容されて、真偽二形的である言明(文)にたとえられているのである。

3 言説が人から人へと口伝えに広まることをいうのであろう。他方、牧羊神も山野を神出鬼没し、また牧人たちも畜群を率い牧草を求めて移動する。

4 〝悲劇〟(tragōidia)という語はギリシア語では〝雄山羊〟(tragos)と〝歌い手〟(aoidos)から来ているようである。その理由についてはいろいろな説がある。

5 神と人とについてのありもしない不道徳的な作り話を創作する悲劇詩人たちへの皮肉もこめられているようである。

**ヘルモゲネス**　ええ、結構ですね。

**ソクラテス**　それでは〔言うがね〕、この名前の意味は、ドーリア弁を使うと、〔アッティカ弁で考える場合よりも〕いっそう明瞭になるようだ。というのは、ドーリア人は太陽を hālios と呼んでいる。そこで、まず一つの解釈では、太陽は、昇っている間、人間を同一の場所に集める(hālizein)ということから、ハーリオス〔つまり、集めるもの〕であるのだろうね。それともまた、大地のまわりを常に〔休みなく〕回転し(aei heilein)ながら行くことによって、ハーリオス〔つまり、常に回転するもの〕であるのかも知れないね。それともまた、大地から生じるものを多彩にいろどり(poikillein)ながら行くからだと思えるかも知れない。poikillein は aiolein と同じ意味だからね。(1)

**ヘルモゲネス**　では、月(selēnē)はどうなのですか。

**ソクラテス**　うん、この名前は、アナクサゴラスを苦境に追い込む〔彼の栄誉を奪ってしまう〕ようだね。

**ヘルモゲネス**　いったいなぜですか。

B

**ソクラテス**　かの人が最近唱えた説、(2)つまり、月はその光(phōs)を太陽から受けているのだという説が、もっと古くからのものであることを、この名前が暴露しているかのようだからね。

**ヘルモゲネス**　いったいどんなふうにですか。

**ソクラテス**　まず、selas(輝き、光)と phōs(光)とは、同じ意味だと思うのだがね。

**ヘルモゲネス**　ええ、そうです。

**ソクラテス**　他方、この光は月のまわりで、常に新しくもあり、かつ旧くもあるようだ。もし果してアナクサ

ゴラス派の言うことが真実であるならばね。なぜなら、太陽は常に月のまわりをぐるりと周行しながら、常に新しい光を投げかけるし、他方先月の光は〔依然そこに留っていて〕旧いのだからね。

**ヘルモゲネス**　確かにそうですね。

**ソクラテス**　ところで、多くの人が月を Selānaiā と呼んでいる。

**ヘルモゲネス**　確かにそうですね。

**ソクラテス**　そこで、月は光(selas)を新しい(neon)のと旧い(henon)のとを、常に(aei)もっているのだから、Selaenoneoaeia と名づけられるならば、ありとあらゆる名前のうちでも、最も正しい名前であるだろうね。だが
c
これが短縮されて Selānaiā と呼ばれることになったのだよ。

**ヘルモゲネス**　いやあ、この名前はいかにもディテュランボス風(3)ですねえ、おおソクラテス。しかし〔まあ、これでよろしいとして〕月(4)(mēn)と星については、あなたはどう言われるのでしょうか。

---

1　aiolein(多彩にいろどる)から hālios(太陽)という語が派生した、というわけである。

2　アナクサゴラス Fr. 18(DK)「太陽が月の中へ輝きを置くのである。」ただし、月の光が月自身のものでないことは、すでにパルメニデスやエンペドクレスの断片にも暗示されているので、アナクサゴラスが初めて発見したわけではないという説もある。

3　ディテュランボスは元来ディオニュソス神を讃える歌。音楽にあわせて合唱隊が歌った。ヘルモゲネスは「セラエノネオアエイア」という複雑で独特な音調の名前が、ディテュランボス(の詩句あるいは曲)を思わせると言っているのであろう。同時にこの説明に対して軽い不信の念を表明しているのかもしれない。

4　年月日の「月」。この語は単数主格で mēn と meis の二形を有する。アッティカの散文では前者がむしろ普通に用いられたが、ソクラテスは後者を説明したわけである。「小さくなる」は月の欠けることか。

**ソクラテス**　まず月(meis)は、〃小さくなる〃(meiousthai)ことから、正しくはmeiēsであるだろうね。また星(astra)は電光(稲妻astrapē)にちなんで、その名前を得たようだね。また電光は、それがわれわれの目(ōpa)をそむけさせる(anastrephein)ので、anastrōpēであるはずなんだろうがねえ、今では体裁よくastrapēと呼ばれているわけだ。

**ヘルモゲネス**　では、火と水はどうですか。

D **ソクラテス**　火(pўr)にはお手上げだ。どうやら、エウテュプロンのムゥサ〔ミューズ〕もぼくを見捨てたか、それともこの名前がとびっきり難しい奴なのか、二つに一つであるようだね。さあ、それでは、この種の、自分が行き詰って立往生する問題〔名前〕すべての解決策としてぼくが持ち出す手立てを、〔正しいものかどうか〕吟味してくれ給え。

**ヘルモゲネス**　いったいどのような手立てですか。

**ソクラテス**　説明しよう。まず答えてくれ給え。君は火がどういう理由でそう名づけられているのか、言うことができるのかね。

**ヘルモゲネス**　いいえ、ゼウスにかけて、ぼくにはできません。

## 二五

E **ソクラテス**　では、ぼくがそれ〔火〕についてこうでもあろうかと推測していることを、吟味してくれ給え。ぼくはこう思っているのだ。ギリシア人、特に外国人の支配する土地に居住するギリシア人は、外国人〔外国語〕か

らたくさんの名前を採り入れたのだとね。

**ヘルモゲネス**　それでどうだと、おっしゃるのですか。

**ソクラテス**　もしだれかが、それらの名前について、どういうふうに正しくつけられているかを、ギリシア語に則して探究して、当の名前が由来する言語に則して探究しないならば、むろん君におわかりのように、その人は行き詰ってしまうことだろうね。

**ヘルモゲネス**　それは当然ですねえ。

**ソクラテス**　それでは気をつけ給え。この火という名前も、外国起源のものかも知れないよ。なぜならば、これをギリシア語に結びつけることも容易でないし、またプリュギア人[1]がそれを、ほんの少しだけ違った形で、同じように呼んでいることも、明白な事実なのだからね。それからまた〝水〟(hydōr)や〝犬〟(kyōn)や、その他多くの名前にしてもそうだ。

**ヘルモゲネス**　なるほど、おっしゃるとおりですね。

**ソクラテス**　だから、このような名前を無理やりにこじつけて〔ギリシア語として説明して〕はいけないのだ。なぜなら〔こじつけるならば〕何とか説明をつけることはできるだろうからね。さて火と水とは、ぼくはこのようにして追っ払っておく。

1　プリュギアはヨーロッパからの侵入者が小アジアに建てた国だが、リュディアに征服された。ここでプリュギア人とは、アテナイにいるプリュギア人の奴隷たちをさす。プリュギア語もインド＝ヨーロッパ語族に属する。

(410)
B

次に空気(aēr)だが、これはそもそも、おおヘルモゲネスよ、大地から発生するものを上へ上げる(airei)[1]から、aēr と名づけられているのだろうか。それとも、常に流れている(aei rhei)からだろうか。それとも、空気が流れると、そこから風が発生するからだろうか。というのは、たしか詩人たちは風(pneuma)のことを aētai と呼んでいる。だから、もしかするとこの語〔″空気″(aēr)〕は aētorrhous(アエータイの流れ)を表わすのかも知れないね。pneumatorrhous(風の流れ)という意味でね。

次にアイテール[2](aithēr)については、ぼくはおよそ次のように理解している。つまり、それはいつも走っている(aei thei)。空気(aera)のまわりを、流れながらね。だから aeitheēr と呼ばれて正当だろうとね。

C

次に大地(gē)だが、これは gaia[3] と呼ばれるならば、言わんとすることをよりよく表現するよ。なぜなら、gaia は、正しく解釈されるならば、産む女性〔母〕であるだろうからね。ホメロスの言うところによればね。というのは、彼は「生まれた」ということを gegaasin(彼らは生まれた)と言っているからね。さて、これはよしと。お次のわれわれの問題は何だったかね。

**ヘルモゲネス**　季節ですよ、おおソクラテス、それから年と歳です。

**ソクラテス**　ではまず季節(hōrai)だがね、これの確からしい意味を君が知りたいと思うならば、昔のアッティカ弁で発音してみなければならない[4]。というのは、季節は〔昔の発音では〕horai だが、これは季節が冬〔寒期〕と夏〔暖期〕や風や大地からの農産物を定める(horizein)からなのだ。定めるもの(horizousai)なのだから horai と呼ばれて正当だろうね。

D

次に年(eniautos)と歳(etos)とは、どうやら一つのものであるらしい。というのは、生えるものや生成するも

のをそれぞれ順次に発生せしめ、自己の内部で自身で調整するもの、これを――ちょうど、さっきの説明で、[5] ゼウスの名前が二つに切り離されて、ある人々はゼーナと呼び、他の人々はディアと呼んでいたように――この場合も、ある人々は〝自己の内部で〟(en heautōi)だから eniautos と呼び、他の人々は〝調整する〟(etazei)のだから、etos と呼んでいるわけだ。だが完全な説明はこうだ。この〝自己の内部で調整するもの〟(en heautōi etazon)という名前が、一つのものであるのに二つにちぎられて呼称されて、その結果、年と歳との二つの名前が一つの

E

言いまわしから生じたのである。

**ヘルモゲネス**　いや本当に、おおソクラテス、あなたは〔説明の仕方が〕ずいぶんと上達なさいましたよ。

**ソクラテス**　うん、思うにぼくは知恵のコースを既に長駆した[6]〔知恵において大いに進歩した〕らしいね。

**ヘルモゲネス**　ええ、まさしくそのとおりです。

**ソクラテス**　〔まあ見てい給え、〕もうじき君は、もっとそう言って感嘆するようになるぞ。

## 二六

411

**ヘルモゲネス**　しかし〔まあ、それはそれとして〕、この種の名前の次に、観ることができれば嬉しいとぼくが

---

1　煙、水蒸気などであろう。
2　アイテール(エーテル)は上空にある青い火〔青空〕で、空気のさらに稀薄化したもの。火と空気の中間の物質。
3　gaia は gē の詩語である。
4　旧綴字法(398D 注3参照)では ō も o であった。
5　396 A.
6　二頭の馬に引かせた二輪車でコースを疾走する競技からきた言い方らしい。

希望致しますのは、次のような美しい名前がいったいいかなる正しさ〔根拠〕によって定められているのか、ということです。つまり、徳性に関するもの[1]、例えば〝思慮〟、〝理解〟、〝正義〟、その他このようなすべての名前なのです。

**ソクラテス**　これは何と、侮り難い一類の名前を君は呼び起こしたものだねえ、おおわが仲間よ。だけれども、ぼくが既にライオンの皮を被っている以上は[2]、今さらしりごみもできない。思慮、理解、認識、知識、その他君が言うところのこのような美しい名前を、すべて考察しなければならないようだね。

B

**ヘルモゲネス**　そうですとも。われわれは決して中途で放棄してはなりません。

**ソクラテス**　それでは〔説明するが〕、犬に誓って[3]本当の話、ぼくは次のように推測し、そして自分は決して下手に占っているのではないように、われながら思うな。つまり、これは先ほども思いついた〔想定した〕ことなのだがね[4]、名前を定めた太古の人間たちは、現代の知者たちの大多数と同様に、何よりも、有るものがいかなる状態にあるかを探究する際に甚だしく振り回されて目まいを起こすものだから、あげくの果てには、事物の方が回転し、あらゆるふうに変動しているかのように、彼らには見えるのだ[5]。そこで彼らは、自分たち自身の内部の異状こそこの臆断の原因であるとは責めないで、事物自体が本性的にそのようなものであり、いかなる事物も静止的でなく、確固たるものでなく、流れつつあり動きつつあり、あらゆる種類の変動と生成に常時充たされているのだと、責めを事物に帰しているわけだ。ところで、ぼくがこういうことを言うのは、今われわれの問題になっている名前すべてを考慮してのことなのだよ。

C

**ヘルモゲネス**　それはどういう意味ですか、おおソクラテス。

**ソクラテス**　恐らく君は、今ぼくが述べたこと、つまり、これらの名前はもうすっかり、事物が動きつつあり、流れつつあり、生成しつつあるという想定に立って、事物につけられているという事実に、感づいたことがないのだろうね。

**ヘルモゲネス**　ええ、全然気がつきませんでした。

D **ソクラテス**　しかも実際まず最初に、そもそもわれわれが最初にあげた名前からして、もうすっかり、事物がそのようなものだという想定に立って、事物に与えられているのだからねえ。

**ヘルモゲネス**　どの名前のことですか。

---

1　徳性（アレテー、優秀性）とは、性格上の優秀性のみでなく、知的な優秀性をも包括する。

2　借り物の（エウテュプロンの）知恵が自分に乗り移っていることをいうのであろう。ろばがライオンの皮を被って人間や動物をおどしたが、やがて露見した話がイソップにある。また英雄ヘラクレスは退治したライオンの皮を身につけて冒険にのぞんだ。アリストパネスの『蛙』では、ディオニュソスがライオンの皮を着込みヘラクレスに扮して冥府へ出かける。（アンティステネスはヘラクレイトスを模範としていたので、この箇所をアンティステネスと結びつける解釈もある。解説参照。）

3　犬や雁など神以外のものにかけて誓う慣習もあって、「ラダマンテュスの誓い」と呼ばれたらしい。プラトンの著作に登場する人物のうちでは、犬に誓うのはソクラテスだけで、そのソクラテスも神に誓う方がむしろ普通で、犬に誓うのは一二回くらいであり、自己の判断や確信、自己自身にかかわることを述べるばあいに使用しているようである。古注では、神名をもち出すことがはばかられるばあいにラダマンテュスの誓いが行なわれると説明している。犬に誓ったからといって、誓いの厳粛さが薄れるものでないことは、ソクラテスが裁判で自己を弁護するばあいにこれを使用していることからわかる。

4　401D, 402Bなど。なお439C参照。

5　主語は「太古の命名者」のはずだが、「現代の知者たち」も含めて考えられているので述語が現在形になっているのであろう。

**ソクラテス**　〃思慮〃(phronēsis)さ。なぜなら、これは運動と流動との覚知(phorās kai rhou noēsis)なんだ。あるいは、運動の利用〔享受〕(phorās onēsis)と理解することもできるだろうね。いずれにせよ、運動することに関係しているのだ。

次に、君によれば、認識(gnōmē)だが、これはもうまったく生成の(gonēs)考察、つまり思いめぐらすこと(nōmēsis)を表わしているのだ。〃思いめぐらす〃(nōmān)と〃考察する〃(skopein)とは同じことだからね。

次に、君によければ、今のその〃覚知〃(noēsis)だが、これは新しいものの希求(neou hesis)だ。そして有るも E のが新しいということは、常に生成しつつあることを意味するのさ。そこでね、これ〔新しいもの〕を魂が希求することを、この名前、つまりneoesisを定めた人は告知しているのだ。というのは、昔はnoēsisと呼ばれたのではなくて、ē(エータ)の代りにe(エイ)を二度言わねばならなかったのだよ。noeesisとね。[1]

次に〃節度〃(sōphrosynē)は、たった今われわれが考察したばかりのもの、つまり思慮(phronēsis)の保存(sō- 412 tēria)だ。[2]

そしてまた実際〃知識〃(epistēmē)にしても、事物が運動していて、言うに足るほどの魂はそれについて行く(hepomenē)、遅れて取り残されもせず、先走りもしないということを、告げているのだ。だから本当はe(エイ)を取り除いてpistēmēと名づけねばならないのだよ。[3]

今度は〃理解〃(synesis)だが、これもまた、なるほどこのままの形では推理(syllogismos)と同じような意味であるように思えるかも知れないがね[4]、他方〃理解する〃(synienai 共に行く)と言われる場合には、〃知る〃〔知識〕 B とまったく同一の意味になるね。[5] つまり〃理解する〃は魂が事物と共に歩むことを意味しているのだ。

しかしまた"知恵"(sophia)だって実際、運動との接触を意味しているのだ。もっともこれは〔今までの名前より〕もっと不明瞭でもっと他国風だがね。だがしかしわれわれは詩人たちのことばから、次のことを想起しなければならない。すなわち、彼らは多くの箇所で、何であれ急速に前進し始めるものについて語る場合に、「突進せり」(esythē)と言っている。[6] また、ある有名なラコニア男子でスゥス(Sous)という名前の人がいたがね。[7] それというのもラケダイモン人は、[8] 素早い動きをこの名前で呼んでいるわけだ。そこで、このような〔急速な、素早い〕運動との接触(epaphē 把握)を"知恵"は意味しているのだ。有るものは運動しているという想定でね。

c それからまた実際"善い"(agathon)にしてもね、これは全自然〔あらゆるもの〕のうちで嘆賞に値いするもの(agaston)を表わそうとしている名前なのだ。というのは、有るものは歩みつつあるので、してみればそこには速さがあり、また遅さもある。そこで、すべてのものがではなくて、その一部分、つまり速いもの(thoon)[9]こそ、嘆

---

1 つまり noeesis → noeesis → noēsis と変化した、と考えるわけである。

2 アリストテレスもこの説明を受け入れている(『ニコマコス倫理学』第六巻(1140b12))。

3 pistēmē は"忠実な"(信頼できる pistē)と"あり続ける"(menein)との合成語と見るのであろう。なお、この箇所のテクストは不確かであるが、一応コルナリウス、シュタルバウム、メリディエなどに従った。底本ではハインドルフの修正を採り、次のようになっている。「だから本当は e を插入して hepeistēmē と名づけねばならないのだよ」。

4 "理解"と"推理"は、どちらも原意は「一つに集める」というほどの意味である。

5 "理解する" syniēmi と"共に行く" syneimi とは別語だけれども、現在不定法では同形(synienai)であるので、このあいまいさを利用したのである。

6 つまり sy- は急速な運動を表わす、というわけである。

7 ラコニアはスパルタ市とその周辺の地域。"スゥス"は"素早"(英訳 Mr. Rush)くらいの意味。

8 ラコニア人のことを通常ラケダイモン人という。

9 このあたりのテクストはシュタルバウムに従う。

賞に値いするもの(agaston)なのだ。だから、この意味での嘆賞に値いする速いもの〔つまり、agaston thoon〕に対して、この〝善〟(agathon)という名称があるわけだ。

## 二七

次に〝正義〟(dikaiosynē)だがね、この名前が正しいものの理解(dikaiou synesis)に対して与えられていることは、容易に推測できる。だがその〝正しいもの〟(dikaion)はというと、これは難物だ。それというのも、ある D 点までは多数の人々の意見が一致しているように見えるのだけれども、それから先は議論百出なのだ。というのは、世界が運行しつつあると信じる限りの人たちは、次のように想定しているのだ[1]。つまり、世界の大部分は、移り動くということ以外の何ものでもないような性質のものであるが、このようなものすべてを貫通する何かがあって、すべて生じるものはこれによって生じているのだ[2]。そしてこのものは極めて速く、極めて細やかである。なぜなら、そうでないと、すべての有るものを貫通して進むことはできないだろうからね。極めて細やかでなかったならば、何ものかがそれの通行を妨げるだろうし、また極めて速くなかったならば、〔動いている〕他のもの E をまるで静止しているかのように自在に処置することができないだろうからね。そういう次第で、この何かは、他のすべてのものを貫通しつつ(diaion)養育するので、正当にもこの名前——'dikaion'(正しいもの)——で呼ばれたわけである。ただし口調を良くするためにk(カッパ)の音を付け加えてね。さてこの点までは、さっきもわ 413 れわれが言ったように、多くの人々によって同意されているのだ。正しいものとはこれだということがね。ただしぼくという人間が、おおヘルモゲネスよ、この件についてはしつこかったものだから、やっと、これだけのこ

とをすべて秘伝として、[3]聞き出したわけなんだ。つまり、これが正しいものであり、かつまた原因でもあるということをね。というのは、原因とは、それによって何か[4]が生じるところのものであるのだからね。それである人が、それゆえに取り分けてこのものを原因と呼ぶのが正当であると言ったものだ。[5]けれどもぼくが、これらのことを聞き終った上で、それでも〔得心できないで〕なお彼らに向かって穏やかに、こう言って――「そういうことであるとして、ではいったい何が、おおいとも優れたお方よ、正しいものなのですか」と重ねて質問したときにB は、〔そういう場合にはいつでも〕ぼくはすでにふさわしい限度を超えて質問し、溝線の向こうまで跳躍してしまったのであるらしい。[6]というのは、彼らは、ぼくがもう十分に聞いたと言うのだ。そしてぼく〔の詮索好き〕を堪能させてやろうとして、それから先は各人各様のことを言おうと試みて、もはや意見が一致しないのだ。というのは、ある人は太陽が正しいものだと言うしね。なぜなら、太陽だけが、もろもろの有るものの間を行きながら(diaiōn)、そして熱しながら(kaōn)、これらを養育するからだそうだ。ところが、それでまたぼくがその話を、

1 主としてヘラクレイトス派の人たちをさすのであろう。この派は当時イオニアのエペソスを中心に盛んであり(『テアイテトス』179D)、アテナイではクラテュロスがその代表的人物であったと思われる。

2 この貫通者の思想はストア派によって継承され、発展せしめられた。

3 『テアイテトス』155Esqq. の「外道の者」とか「秘密の教え」という表現を参照。

4 テクストはシュタルバウムに従う。

5 テクストは写本どおりとする。底本ではヘルマンの修正を採り「それゆえにディア(ゼウス)とこのものを呼ぶのが正当である」となっている。それ〝によって〟(dia)何かが生じるものをDia(ゼウスの対格)と呼ぶ、というわけである。

6 ことわざ的な表現。必要以上に、あるいは許容された以上に何かをすることをいう。幅跳び競技でこれ以上跳んではならない(あるいは跳べないだろう)という線が溝で表示されていたらしい。

C 何か立派なことを聞いたつもりで嬉しがりながら、別のある人に語ったときに、その人は聞き終ってからぼくを嘲笑して、それでは太陽が沈んだ後では、人間の間に正しいものは何も存在しないとぼくが思っているのかと、尋ねたね。それでぼくがまたしつこく、今度はこの人は何を正しいものだと言うのか、粘ったところが、火(1)がそれだと言うのだよ。しかしこいつは容易に理解できない説だね。また他の人は、火そのものがではなくて、火に内在する熱こそがそれだと言うのだ。それからまた別の人は、これらすべての説を自分は嘲笑すると言い、正しいものとはアナクサゴラスが言っているものだ、つまりヌゥス(知性)だ、と言うのだ(2)。なぜなら、このヌゥスというものは自立支配者であって、何ものにも混合〔同化〕することなく、すべての事物の間を進みながらすべてを整えるのだから(3)、とその人は言うのだ。いやはや、ここまで来るともうぼくはねえ、おお友よ、何が正しいものであるかを学ぶことに取りかかる以前よりも、はるかに大きな困惑に陥ったねえ。しかしとにかく、われわれの

D 考察の目的〔つまり正しいもの〕に話を戻すならば、この名前はそういった理由でこのものにつけられているように見えるわけだ。

**ヘルモゲネス**　おおソクラテス、あなたは今の諸説をば、この場で創作されたのではなくって、だれかから聞かれたのだとぼくには見えますよ。

**ソクラテス**　おや、それでは、他の部分はどうなんだね。

**ヘルモゲネス**　全然そうは〔他人から聞いた説のようには〕見えませんね。

二八

**ソクラテス** それでは、さあ、〔あとの説明を〕聞き給え。もしかすると残りの部分についても、ぼくは君をまんまとだましおおせて、受け売りでしゃべっているのではないと思わせることができるかも知れないからね。[4] では、正義の次に、われわれの課題として残っているのは、何だろう。勇気を、まだわれわれは検討していなかったように思うね。というのは、不正義(adikia)は、無論、正しいものであるところの貫通者[5](diaion)を妨害するものであることが明らかだからね。他方勇気(andreia)という名前は、勇気というものがその呼称を得たのは戦闘においてであることを、示しているね。ただし有るものの間での戦闘とは、もし有るものが流動しつつあるのだとすると、反対方向への流動にほかならない。だから、andreia という名前からd(デルタ)を取り去るならば、anreia という名前それ自身が〔勇気というものの〕はたらき〔本質〕を告げてくれているわけだ。[6] 従って、無論、どんな流動にでも反対の流動が勇気であるのではなくて、正しいもの(dikaion)に反して流れるものに反対の流動だけがそうなのだ。なぜなら、さもないと、勇気が賞賛されるはずはないだろうからね。

E

414

それから〝男性的〟(arrhen)と〝男〟(anēr)も、それに類似のものに、つまり上方への流れ(anō rhoē)に対して与えられた名前だね。

1 火はヘラクレイトス哲学では万物の始源である。

2 この論者は、ヘラクレイトス哲学とアナクサゴラス哲学とを折衷しようとしたのであろうか。

3 アナクサゴラス Fr. 12(DK)を参照。アナクサゴラスのヌゥスも万有を貫通する者である。

4 おそらくアイロニーであろう。

5 テクストは私見により一語を補充して ontos 〈dikaiou〉とする。

6 anreia の an は ana(反対に)で、reia は〝流れ〟、従って全体で〝反対方向への流れ〟。

また〝女〟(gynē)は〝産むこと〟(gonē)であることを意図しているように、ぼくには思えるね。[1] また〝女性的〟(thēly)は乳房(thēlē)から名づけられているように見えるねえ。[2] そしてその〝乳房〟だが、そもそもこれは、おおヘルモゲネスよ、水を与えられた植物のように元気横溢(tethēlenai)せしめるからなのだろうか。[3]

**ヘルモゲネス** ええ、そうらしくは見えますね、おおソクラテス。

B **ソクラテス** そしてまたその〝元気横溢する〟(thallein)にしてもだね、若い人の成長ぶりの急速で目ざましいことを比喩しているように、ぼくには思えるのだ。つまり、命名者は〝走る〟(thein)と〝跳ねる〟(hallesthai)とからこの名前を合成することによって、まさにそのようなことをこの名前でもって象り表わしたわけなのだ。いや、これはしかし、君はぼくが平坦な地に出てから、コース外に飛び出したことに気がついていないね。[4] だがぼくらにはまだ、立派だと思える仕事がたくさん残っているのだよ。

**ヘルモゲネス** ええ、本当にそうでした。

**ソクラテス** そして、〝技術〟(technē)がいったい何を意味するのかを見ることも、確かにその一つなのだ。

**ヘルモゲネス** 確かにそうですね。

**ソクラテス** ではこの名前だがね、これは心得(nous)を持つこと(hexis)を表わしているのではないだろうか。

C つまり〔technēから〕t(タウ)を取り除いて、ch(ケイ)とn(ニュー)の間、およびnとē(エータ)の間にそれぞれo(オウ)をはさんで〔すなわちechonoēとして〕考えるわけだがね。[5]

**ヘルモゲネス** 〔その説明は〕まことに四苦八苦〔やっとこさ〕[6]というところですねえ、おおソクラテス。

**ソクラテス** おお幸福な〔おめでたい〕人よ、君はわかっていないのだ。名前の最初に定められたとおりの原形

は、それを悲劇めかそう〔大げさなものにしよう〕と欲する人々の手によって、すでに埋没してしまったのだ、ということがね。彼らは口調を良くするために文字を付け加えたり、取り去ったり、その他ありとあらゆるやり方で〔原形を〕歪曲したのだよ。また、ことばを美しく見せようとする欲求や、時間の経過も〔原形埋没の〕一因となったのだがね。現に〝鏡〟(katropon)にしてもそうだ。この中にr(ロー)の字が入れられているのはおかしいと、(7)

D 君には思えないかね。しかしこういうことを——ぼくが思うに——真実についてはこれっぽっちも気にかけないで〔美しく発音しようとして〕口をいろいろにゆがめる人たちは、やるのだよ。その結果、名前の原形にたくさんのものを余分にはさみ込んで、あげくの果てには、その名前がいったい何を意味しようとしているのか、だれ一人として理解できないようにしてしまうのだ。例えばスピンクス(Sphinx)(8)にしても、人々はピクス(phix)と呼

1 〝勇気〟という語はギリシア語では〝男らしさ〟という意味なので、自然に話が〝男性的〟、〝男〟、さらに〝女〟へと移った。これらは徳性に関する語ではないけれども。

2 テクストはハインドルフに従いtiをtoiに改める。

3 乳児を「元気盛んにする」のか、若い女性を「みずみずしく花盛りの状態にする」のか、どちらかであろう。おそらく後者。

4 「コース外に飛び出す」は慣用的表現。説明しやすい名前に出くわして脱線し、徳性でない名前を説明していたことをいう。

5 echonoē は echein(持つ)と nous(心得)とから合成されたものと見るのである。

6 435C参照。

7 〝鏡〟は〝見える〟という形容詞 katoptos から来ているように思えるので、rの字がはいるべき道理がない、というのであろう。なお〝鏡〟は写本および底本では katoptron だが、前四世紀の碑文には katropon という形が見られるので、リデル、スコットの『希英辞典』に従い、この形に改めた。前者の -tron は道具をあらわす普通の接尾辞であって、プラトンもそれには不審をいだかなかったかも知れない。

8 人間の(女性の)顔とライオンの胴体をもち翼のある神話上の怪物。エジプト起源のものらしい。ヘシオドスの『神統記』ではピクスと呼ばれている。

ぶべきところをスピンクスと呼んでいるのだし、他にも同様な例がたくさんあるよ。

**ヘルモゲネス**　これら〔今あげられた例〕に関しては、確かにそのとおりですね、おおソクラテス。

**ソクラテス**　しかしまた他方で、〔名前の説明に際して〕どんな文字をでも好き勝手に名前にはさみ込んだり取り去ったりすることを許すとするならば、ずいぶん安易なことになるだろう。そして、好きな名前を好きな事物に結びつけることができるようになるだろうね。

E

**ヘルモゲネス**　本当に、おっしゃるとおりです。

**ソクラテス**　うん、本当にそうなのだ。だから、むしろ君は、この場での賢明な監督者として、中庸〔程良さ〕と蓋然性とが失なわれることのないよう努めなければならないのだよ。

**ヘルモゲネス**　ええ、そうありたいものだと、ぼくは望みます。

## 二九

415

**ソクラテス**　そしてぼくも君といっしょに、それを望むよ、おおヘルモゲネス。しかしね、君、おお神霊的な〔すぐれた〕人よ、余りにも精密な〔細部にわたる〕ことを要求しないでくれ給え。

汝がわが力を殺ぐことのなからんために(1)ね。それというのも、技術の次にわれわれが工夫を考察したならば、そのあとでぼくは、これまで説明したもの(2)の頭株であるものに立ち向かうからなのさ。

まず〝工夫〟(mēchanē)は、ぼくに思えるところでは、広範囲に(epi poly)達成する(anein)ことを表わす記号

〔語〕だね。なぜなら、mēkos(長さ)は、ある意味で、広範囲(poly 多量)を表わすからね。そこでこの両方——mēkos と anein と——から、〃工夫〃という名前が合成されているわけだ。

B しかし、今も言ったように、これまでに説明されたものの頭株のものに進まなければならない。すなわち、〃徳性〃と〃悪徳〃という名前が何を意味しようとするのか、探究しなければならない。さてそこで、二つのうちの片方はぼくにもまだはっきりしないのだがね、もう一方は明瞭であるように、ぼくには思えるのだ。なぜなら、これまでに言われたことのすべてに整合するからね。すなわち、事物は行きつつあるのだから、すべて悪く〔下手に〕行くもの(kakōs ion)が悪徳(kakia)であることになるだろうね。だが、これが魂の内にあるばあいに、つまり魂が事物に向かって悪く行くばあいに、〔これは悪く行くことの一種に過ぎないけれども〕とりわけて悪徳という全体的な名称を得ているわけなのだ。

C ところで、その悪く行くということはいったい何であるのかというと、これは〃臆病〃を考察してみても明らかだと、ぼくには思われる。われわれはこれを勇気の次に考察すべきであったのだが、見過ごして、まだ検討していなかったね。だが、ほかにもたくさん、われわれが見過ごしたものがあるように思うね。とにかく、その臆病(deilia)だがね、これは魂を縛る強い絆(desmos)を表わしているのだ。なぜなら lian(余りに)は一種の力だからね。そこで臆病とは、魂の余りにも強い絆(desmos ho lian)、つまり最大の絆であることになるだろう。同様

---

1 『イリアス』第六巻二六五行からの引用。トロイア方の雄将ヘクトルが戦場から一旦退いて、母ヘカベから酒を勧められ、辞退したときのことばの一部である。

2 411 A sqq. で問われている徳性に関するもろもろの名前をさす。

に、困惑(aporia 魂の行きづまり)だって悪だし、またおよそ行くこと、進むことの妨げであるものは、すべてそうであるように見えるね。従って〝悪く〔下手に〕行く〟(kakōs ienai)とは、邪魔され妨害されながら進むことを表わしているのだ。そしてこのことを魂が〔自己の内部に〕持つときに、魂は悪徳(kakia)で充たされるわけだ。

さて〝悪徳〟という名前がそのようなものを表示しているのであるならば、〝徳性〟(aretē)はその反対であるだろう。つまり、それは第一には良好な進行(euporia)を、第二に、善い魂の流動は常に束縛から自由であることを、意味しているのだ。従って、邪魔なく妨害なく常に(aei)流動しつつあるもの(rheon)が、この名称を得たのであるように見える。だから、これを aeirheitē と呼ぶのが正しいわけだが、もしかしたら命名者は、この状態が選択されるに最も値いすると考えて、hairetē(選択されるべき〔状態〕)と言っているのかも知れない。[1] そしてこれが〔そのどちらかが〕短縮されて aretē と呼ばれているわけだ。もしかしたら、君は今度もまた、ぼくが創作したのだと言うかも知れないな。[2] だが、ぼくはこう断言する。もしぼくが前に説明した名前、つまり〝悪徳〟が正しいのであるならば、この名前――〝徳性〟――だって正しいのであるとね。

**ヘルモゲネス** ですが肝心の〝悪い〟(kakon)は――あなたはこれによって先の名前の多くを説明されたわけですが――この名前は何を意味するのでしょうか。

**ソクラテス** いやこれは、ゼウスにかけて、不思議で推し測ることの難しいやつだと、ぼくには思えるのだよ。それでぼくは、これに対しても、例の便法〔工夫〕を用いることにする。

**ヘルモゲネス** どんな便法ですか、それは。

**ソクラテス** この名前も外国起源のものだと主張する、あれさ。[3]

**ヘルモゲネス**　ああ、なるほど。実際そのご説明で正しいように見えますね。(4) しかし、およろしければ、これらの名前はもう放免して、次に〃美しい〃と〃醜い〃について、どうしてこれらがもっともな名前であるのかを、知るべく試みようではありませんか。

**ソクラテス**　ではまず〃醜い〃(aischron)だがね、これが意味するところのものは実にもう明白であるように、ぼくには見えるね。それというのも、これもまた以前のものに一致〔整合〕するからなのだがね。(5) すなわち、名前を定めた人は、有るものの流動を妨げ、引き止めるものを、一貫して非難しているように、ぼくには見えるのだ。B そして今の場合も、彼は、常に流動を引き止めるもの(aei ischon ton rhoun)に対してこの名前——aeischorrhoun——を定めたのだ。だが現在では人々はそれを短縮して aischron と呼んでいるのだよ。

**ヘルモゲネス**　では〃美しい〃(kalon)はどうですか。

**ソクラテス**　これは〔その意味を〕看て取るのが、もっと困難だね。(6) とはいっても、この名前それ自体が、意味

---

1　「もしかしたら……知れない」の部分は、底本では後人の傍注として削除されているが、一応写本どおりに訳しておいた。あるいはこの部分にこそ、プラトンの真意が述べられているのかも知れない。

2　413Dのヘルモゲネスのことばを受けている。

3　409D〜E参照。

4　ヘルモゲネスが簡単に納得したのがやや不審。〃火〃のばあいのようにプリュギア語などに類似の語があったのか、それとも悪という語が元来ギリシア語でないということに満足をおぼえたのか、あるいは説明に窮した著者の単なる便法か。

5　415B参照。

6　384Bでも言及された「美しいことは困難である」という諺に引っかけて、〃美しい〃という名前も説明困難であると洒落たのである。

を語っているのだがね、ただ声調〔アクセント〕とo(オウ)の〔音の〕長さの点で、変えられているだけなんだ。[1]

**ヘルモゲネス** どのようにですか。

**ソクラテス** この名前は、理性の一つの名称であるらしいね。

**ヘルモゲネス** おっしゃることは、どういう意味ですか。

C

**ソクラテス** さあ、考えてみようではないか。いったいそれぞれの有るものが名前で呼ばれることの原因〔起因者〕は何であると、君は思うかね。そもそも、名前を定めたものが、[2]それではないだろうか。

**ヘルモゲネス** 絶対にそうだと思います。

**ソクラテス** ところでそれは、理性であるのではないだろうか。神々の理性であろうと、人間のであろうと、あるいは両者のであろうとね。

**ヘルモゲネス** そうです。

**ソクラテス** ところで、事物を名づけたもの(kalesan)と名づけているもの(kaloun)とは、この同じもの——理性——であるのではないか。[3]

**ヘルモゲネス** 明らかにそうですね。

**ソクラテス** ところでまた、知性と理性が作り出すかぎりのものは、すべて賞賛に値いするものであり、そうでないものは非難されるべきものであるのではないだろうか。

**ヘルモゲネス** 確かにそうですね。

D

**ソクラテス** ところで、もろもろの医術的所産(ta iatrika)を作り出すのは医術的能力(to iatrikon)であり、

もろもろの建築術的所産(ta tektonika)を作り出すのは建築術的能力(to tektonikon)である。それとも君はどう言うかね。

**ヘルモゲネス**　ぼくとしては、そのように申します。

**ソクラテス**　してみると、もろもろの美しいもの(ta kala)を作り出すのも美(美的能力 to kalon)なのだね。

**ヘルモゲネス**　とにかく、その点はそうでなければなりません。

**ソクラテス**　だがそれ〔つまり美、美的能力〕は、われわれが主張しているところでは、理性なのだ。

**ヘルモゲネス**　確かにそうですね。

**ソクラテス**　してみると、この〝美しい〟という名称が思慮〔＝理性〕に与えられているのは、正当なわけだ。それは、もろもろのわれわれが美しいものと呼称して歓迎するようなもの(4)を作り出すのだからね(5)。

**ヘルモゲネス**　明らかにそうですね。

---

1　つまり、以下で明らかになるように、kaloûn(名づけているもの)がkalón(美)に変えられた、と言っているのである。

2　原語は中性形。「名前を定めた能力」。

3　〝名づけたもの〟では〝美しい〟という語にすぐつながらないので〝名づけているもの〟という形の方を使ったのである。そしてそのために両語が同義であることをことわったのである。

4　徳性(知的あるいは性格的、人格的な卓越性)とその作用や結果をさすのであろう。

5　ここの説明は少しわかりにくいが、要するに美(カロン)とは名づけるもの(カロウン)であり、またもろもろの美しいものの原因でもある。そしてそれは具体的には知性だ、というのである。むろん意識的なこじつけだろうが、美しいものの原因は知性だということが言いたかったのであろう。

三〇

E ソクラテス では、この類のもので、まだわれわれの課題として残っているのは、何だね。

ヘルモゲネス 善と美に関係する次のようなものです。すなわち、ためになるもの、引き合うもの、有用なもの、得なものと、これらの反対のものです。

417 ソクラテス ではまず〃ためになる〃(sympheron)だがね、これはもう多分君だって、これまでに言われたことに基づいて考察すれば、発見できるだろう。というのは、これは知識の一種の兄弟であるらしいんだ。(1) なぜなら、これは、ほかでもなくまさに〔字義どおり〕魂の事物と共にする運動を表わしているのだよ。(2) そして、そのような運動によって行なわれるもの〔こと〕が、〃共にぐるりと運動する〃(sympheresthai)ということから、〃ためになるもの〃(sympheronta)および〃ため〃(symphora)と呼ばれているのであることを〔この名前は〕示しているのだ。

ヘルモゲネス そのようですね。(3)

B ソクラテス うん、それから〃得な〃(kerdaleon)は得(利益 kerdos)から来ている。そして〃得〃は、この名前の中へd(デルタ)の代りにn(ニュー)を置く(4)人に対して、その意味を顕わすね。すなわち、この名前は、善を別の仕方で表現しているのだ。(5) というのは、善はすべてのものの中を通り抜けて進みながら、すべてのものに交じっている(kerannytai)ので、〔命名者は〕善のもつこの機能を名称して、この〔kernos という〕名前を定めたのだよ。だが彼はnの代りにdを入れて kerdos と発音したのだ。

**ヘルモゲネス**　では〝引き合う〟(lysiteloun)は、何でしょうか。

**ソクラテス**　どうやらこれはねえ、おおヘルモゲネスよ、小売商人たちの言うような意味ではなくて――彼らは採算の取れるばあいにこれを使っているのだが[6]――そういうことを言い表わしているのではないようにぼくには思えるのだがね、この〝引き合う〟は。むしろ、善は有るもののうちで最も速いものであって、事物が立ち止まることを許さないし、また運動が運動することを終えて立ち止まり、休んでしまうことも許さないで、何らかの終止が生じようとするならば、その度にいつでも運動を終止から解放して、止むことのない不死のものとするので、その意味で〔命名者は〕善を lysiteloun と呼称したのであるように、ぼくには思えるのだ。つまり、運動を終止(telos)から解放するもの(lyon)を lysiteloun(引き合う、利益ある)と呼んでいるように思えるのだよ。

C　次に〝有用な〟(ōphelimon)だが、この名前は他国弁だね。ホメロスも多くの箇所でこれを、ophellein(増す)という形で、用いている。これは〝増大させる〟、〝ふやす〟[7]ということの名称だ。

---

1　412A の〝知識〟の説明を参照。

2　sympheron の sym(syn)は〝共に〟で、pheron は〝運ぶ〟という動詞から来ている。

3　テクストはシュタルバウムに従う。

4　つまり、kernos とする。

5　〝善〟と〝得〟(利益)は元来同じ意味の語である。そこで、万有の貫通者が善あるいは得と呼ばれていると、いうわけである。412C の〝善〟の説明を参照。

6　〝引き合う〟(lysiteloun)の原意は「費用(telē)をつぐなう(lyein)」である。

7　写本どおりに訳すと「作る」(poiein)だが、Orelli の修正を採り、「ふやす」(pleon poiein)に改めた。

## 三一

D

**ヘルモゲネス**　では、これらと反対のものは、われわれから見て、どうなっているのですか。

**ソクラテス**　それらのうちで、単に否定している限りのものは、ぼくに思えるところでは、全然検討する必要がないね。

**ヘルモゲネス**　それはどんなもののことですか。

**ソクラテス**　〝ためにならない〟(asymphoron)と〝有用でない〟(anōpheles)と〝引き合わない〟(alysiteles)と〝得でない〟(akerdes)とさ。

**ヘルモゲネス**　なるほど、本当にそうですね。

**ソクラテス**　しかし〝有害な〟と〝損な〟とはどうしてもね〔検討しなければならない〕。

**ヘルモゲネス**　そうです。

**ソクラテス**　そこで先ず〝有害な〟(blaberon)だが、これは流動を阻むもの(blapton ton rhoun)を意味している。またその〝阻むもの〟(blapton)は、ゆわえようと欲するもの(boulomenon haptein)を表わしているのだ。

E

そして〝ゆわえる〟は〝縛る〟と同じ意味で、これを〔命名者は〕あらゆるばあいに非難しているのだ。そこで、流動をゆわえようと欲するもの(boulomenon haptein rhoun)は boulapterhoun と呼ばれるのが最も正しいのだろうが、粉飾されて blaberon と呼ばれているのだ、とぼくには見えるのだよ。

**ヘルモゲネス**　いや、あなたの手にかかると、名前がまことに多彩〔複雑〕なものとなって出て参ります。現に

418

今も、あなたがこの boulapterhoun という名前を発音されたときに、ぼくはあなたが、まるでアテナのノモス（歌曲）の前奏曲[1]を横笛ならぬお口でもって吹奏されたかのように錯覚しましたよ。

**ソクラテス** ぼくじゃあないんだよ、おおヘルモゲネス、責任者は。この名前を定めた人たちなんだよ。

**ヘルモゲネス** なるほど、おっしゃるとおりですねえ。さて次は〝損な〟(zēmiōdes)ですが、これは何でしょうか。

**ソクラテス** うん、〝損な〟とはいったい何だろうね。見給え、おおヘルモゲネスよ、ぼくの言っていることが[2]いかに真実であるかを。すなわち、人々は文字を付け足したり、取り除いたりして、名前の意味を甚だしくねじ曲げる。そのひどさといったら、ほんのわずか変形するだけで、時には正反対の意味をもたせるほどだ。例えば

B

〝なすべき〟〔義務的 deon〕の場合でもそうだ。ぼくが今この名前を思いつき、想い出したのは、次のことを君に話そうとしていたからなんだ。それはね、われわれの新時代のこの美しき言語は〝なすべき〟と〝損な〟とをでんぐり返して、なんと正反対のことを告げるように仕向け、本来の意味を隠蔽したのだが、他方昔の言語は、両方の名前のそれぞれが言い表わそうとしていることを、顕わに示しているのだよ。

**ヘルモゲネス** おっしゃることは、どういう意味でしょうか。

---

1 ノモスは特定の種類の歌曲で、七部分から成り、それに前奏曲がついている。アテナのノモスは、アテナ女神に捧げるそのような曲で、複雑多彩なものであったらしい。「前奏曲」と言ったのは、まだあとに、もっと複雑な説明が続きそうだという予感を表現したものと解する人もある（シュタルバウム、メリディエ）。

2 414C～D.

ソクラテス　説明してあげよう。君も知ってのとおり、われわれの父祖たちは、i（イオータ）とd（デルタ）を

C　非常に多く使っていた。とりわけ婦人たちがね。そして婦人たちこそ一番良く昔のことばを保存しているものなのだ。ところが現代では、iの代りにe（エイ）かē（エータ）を、またdの代りにz（ゼータ）を代替しているのだが、それもこちらの方がもっと威厳があると思ってのことなんだ。

ヘルモゲネス　どのように〔代替しているの〕ですか。

ソクラテス　例えば、ずっと昔の人たちは日〔昼間〕をhimeraと呼んでいたのだ。だが別の〔もっと後代の〕人たちはhēmeraと呼び、さらに現代の人たちはhēmeraと呼んでいる。

ヘルモゲネス　そのとおりです。

ソクラテス　さて、君は知っているかね。〔これら三つのうちで〕この昔の名前だけが、命名者の思想を明示し

D　ているのだが。というのは、夜の暗黒から昼の光が、嬉しく待ち望む(himeirousin)人間たちに現われて来たので、この理由で彼ら(1)はそれをhimeraと名づけたのだよ。

ヘルモゲネス　そうらしいですね。

ソクラテス　ところが現代ではこれが悲劇めかされて(2)〔もったいをつけられて〕いるので、〝日〟(hēmera)が何を言い表わそうとしているのかを看て取ることが君には〔そしてだれにも〕できないだろう。もっともある人たちは、日〔昼間〕は〔すべてのものを〕飼い馴らされた〔温順な hēmera〕ものにするので、こう名づけられたのだと、思っているけれどもね。

ヘルモゲネス　おっしゃるとおりだと、ぼくにも思えます。

E

**ソクラテス** それから〝軛(くびき)〟(zygon)だって、君も知ってのとおり、昔の人は dyogon と呼んでいた。

**ヘルモゲネス** 確かにそうですね。

**ソクラテス** そして zygon の方は全然何も明示しないけれども、他方 dyogon の方は、二匹の(dyoin)動物に対して、引っ張る(agōgē)ためにいっしょにくくりつけられているという理由で、正当にも与えられた名称であることが明らかだね。だが現代では zygon と呼ばれているのだ。そしてこのほかにも同様な例が山ほどある。

**ヘルモゲネス** なるほど、そのようですね。

419

**ソクラテス** そこで、同じように、先ず第一に〝なすべき〟(deon)だがね、これはこのままの形では、善に関係するすべての名前とは正反対のものを意味している。[3] なぜなら、deon は本当は善の一つの形態であるのだけれども、運動を束縛する絆(desmos)であり、障害物であるように見えて、あたかも〝有害な〟(blaberon)の兄弟であるかのようだからね。

**ヘルモゲネス** ええ、しかも大いに、おおソクラテス、そのように見えますよ。

**ソクラテス** だが、そうは見えないだろうね、もし君が昔の名前を考えるならば——これは今の名前よりは正

---

1 すぐ前の「命名者」は単数なので「彼ら」は「人間たち」をさすことになる。その人間たちが命名者でもあったわけであろう(しかしハインドルフは「彼ら」を「彼」に修正している)。

2 414C の「悲劇めかす」、418C の「もっと威厳がある」などを参照。

3 deon(なすべき、義務的)は〝縛る〟(dein)という動詞から派生しているので、一般人の語感からしても、強制的で悪いことのように思えるのである。しかし義務は善でなければならないはずなので、命名者が自己矛盾を犯したのではないかという疑いが生じるわけである。

しくつけられている見込みがはるかに大きいわけだがね――むしろ〔この名前は〕先の善を表わすもろもろの名前に一致することになるだろう、もし君が昔流に〔deon の〕e の代りに i をおいてやるならばね。なぜなら dion〔間を通り抜けて行くもの〕もやはり善を表わしているのだからね。deon はそうでないけれども。そしてまさにこれ〔善〕を彼〔命名者〕は称揚しているのだ。従って、名前を定めた人は、自己矛盾を犯しているのではなくて、むしろ〃なすべき〃と〃有用な〃と〃有益な〃と〃得な〃と〃善い〃と〃ためになる〃と〃行きやすい〃〔euporon 豊かな〕とは、同じことであるように見えるね。つまり、秩序づけるもの、行くものが、いろいろ違った名前でもっ B て表現され、称揚されているのであり、他方引き止め、束縛するものは、非難されているわけだ。[1]

そしてまた〔第二の課題であった〕〃損な〃(zēmiōdes)にしても、君がもし昔の言語に従って z の代りに d をおいてやるならば、この名前は、行くものを束縛するもの(doun to ion)につけられていて、dēmiōdes と呼称されたものであることが、君に明らかになるだろう。

## 三二

**ヘルモゲネス** それでは〃快〃と〃苦痛〃と〃欲求〃と、その他これらに類するものはどうですか、おおソクラテス。

**ソクラテス** それらは、非常に難しいものではなさそうに、ぼくには思えるのだがね、おおヘルモゲネスよ。というのは、先ず〃快〃(hēdonē)だが、これは味わい楽しむこと(onēsis)に帰着する活動[2](hē praxis)が、この名 C 前を得ているらしいね。ただし d が〔余分に〕中にはさまっているので、その結果 hēonē ではなくて hēdonē と呼

ばれているわけだ。

また〝苦痛〟(lypē)は、この状態にある肉体がこうむる分解(dialysis)から名づけられているようだね。

また〝悲しみ〟(ania)は〝行く〟(ienai)のを妨げるものだ。(3)

また〝痛み〟(algēdōn)は、他国弁のようにぼくには見えるのだが、(4)〝痛い〟(algeinon)から名づけられたものだ。

また〝苦しみ〟(odynē)は、苦痛が深くはいり込むこと(endysis)から、そう呼ばれているようだ。

また〝悩み〟(achthēdōn)は、だれの目にも明らかなように、この名前は運動を妨げる重荷に譬えられているのだ。(5)

また〝喜び〟(chara)は、魂の流動(rhoē)の四方八方にゆったり注ぐこと(diachysis)、つまり行きやすさのゆえに、名づけられているようだ。

D また〝ここちよさ〟(terpsis)は、〝ここちよい〟からで、〝ここちよい〟(terpnon)は、それ〔ここちよいもの〕が魂を通って這って行くこと(herpsis)から、いき〔気息 pnoē〕に譬えて、そう呼ばれているのであって、正当にはherpnoun と呼ばれるべきだろうが、時が経つうちに terpnon に変えられたわけだ。

---

1 テクストはT写本に従う。

2 活動(作用)とは、能動的あるいは受動的な(身体あるいは魂のその周囲に対する)運動であろうか。むろんヘラクレイトス派の立場からの説明である。『テアイテトス』156Bの前後を参照。

3 ania の an- は奪取、否定を意味する接頭辞と解するわけである。

4 元来はアッティカ方言でないというのであろう。イオニア方言だと考えたのであろうか。

5 achthēdōn は achthos(荷物)から派生した語で、それ自身も〝重荷〟という意味をもつ。

また〃愉快〃(euphrosynē)は、理由の説明を全然必要としないね。なぜなら、万人の目に明らかなように、これは魂が事物にうまく(eu)くっついて運動する(sympheresthai)ことから、この名前、つまり——正当に言うならば——euphrosynē を得たのだ。だけれども、われわれはそれを euphrosynē と呼んでいるのだよ。

それから〃欲求〃(epithymia)も難しくないね。なぜなら、この名前は、猛り〔奮起〕の方向に進む(epi ton

E

thymon iousa)力に与えられたものであることは、明白だからね。そして〃猛り〃(thymos)は、魂の荒れ狂うこと(thysis)、沸き立つことから、この名前を得ているのだろうね。

それから次に〃欲望〃(himeros)だがね、これは魂を最も強く引っ張る流れ(rhous)に与えられた呼称なんだよ。

420

というのは、この流れが突進しながら(hiemenos)、そして事物を求めながら(ephiemenos)流れ(rhei)て、そしてかくすることによって魂を流動への希求(hesis tēs rhoēs)によって強く引きつけるので、そこでこの作用の全体から himeros と名づけられたのだ。

そして今度は〃あこがれ〔惜しさ〕〃(pothos)だがね、これは、現在そこにあるものをではなくて、どこか他の場所に(allothi pou)あってここにはないものを対象としていることを、表わしているのだ。そこで、pothos と名づけられているわけだ。[1] 人が欲求するものが目前にあるばあいには〃欲望〃と呼ばれていたものがね。だが、遠く離れてあるばあいには、[2] その同じものが〃あこがれ〔惜しさ〕〃と呼ばれたのだね。

また〃恋〃(erōs)は、流れが外部から流れ込んで、その流れをもつ人に本来固有のものではなくて、目を通じて

B

移入されたものなので、[3] それゆえ〃流れ込む〃(esrhein)から esros と、少なくとも昔はね、呼ばれていたのだよ。というのは、昔は ō(オー)の代りに o(オウ)を使っていたのだ。[4] ところが現在では、o の代りに ō を代替したも

のだから、erōsと呼ばれているわけだ。さて、われわれが考察すべきもので、まだ何が残っていると君は言うかね。

**ヘルモゲネス**　思いなし〔臆断〕や、その他この類のものは、あなたにはどう思えますか。

**ソクラテス**　〝思いなし〟(doxa)はね、あるいは、追い求め(diōxis)――つまり、魂が事物はいかにあるかを知ることを追い求めて旅するときの追い求めだがね――から名づけられているのか、あるいはまた、弓(toxon)を射ることからか、どちらかだね。だが後の方が、より真実らしいね。とにかく〔思いなしとほぼ同義である〕〝思い〟(oiēsis)の方は、この説明に調和しているからね。なぜなら〝思い〟は、魂が有るもののそれぞれがどのようなものであるかを知ろうとして、〔当面の目標である〕事物[5]に向かって〔矢のように〕飛んで行くこと(oisis)を示しているようだからね。ちょうどまた〝意志〟(boulē)にしても、どうやら、射ること(bolē)を意味しているし、また〝意志する〟(boulesthai)は狙うこと(ephiesthai 欲求すること)を意味しているし、〝熟考する〟(bouleuesthai)もそうであるようにね。これらの思いなしと同類の名前は、すべて射ること(bolē)に譬えて言われたものであるようだ。ちょうどまた、反対のばあいにも、〝考えの無さ〟(aboulia)は命中しないこと〔失敗〕であるように思えるようにね。つまり、射た的、意志した対象、それについて熟考したもの、目指したものに当らない(ou balon)

---

1　本文では明示されていないが〝ある所に〟という意味の語にpothiがあって、これからpothosが派生した、というのである。

2　「遠く離れてある」は原文では手もとにあったものが「遠く離れる」こととも解しうるので〝あこがれ〟は〝惜しさ〟を含みうるのだと解する人がある。

3　むろん恋の対象からの流れである。直接の関係はないが『パイドロス』251Bを参照。

4　旧綴字法ではerōsはerosと書かれたのである。410C注4参照。

5　テクストは底本によらず、B、W写本の読みに従う。

D

し命中しないのだという意味でね。

**ヘルモゲネス**　これらの説明をあなたは、おおソクラテス、今までよりももっと固めて〔密集させて、矢継ぎ早に〕持ち出されているように、ぼくには思えます。(1)

**ソクラテス**　うん、そのわけは、霊感がもうときぎれかけているからなんだ。(2) だがそれでも〝強制〟と〝随意の〟とだけは、やり遂げておきたい。以上の名前に関連しているからね。そこで先ず〝随意の〟(hekousion) だがね、これは譲歩する、つまり反発しないで、行くものに——今言ったように(3)——譲歩する (eikon. . . . ionti) ことが、この名前——〝意のままに生じる〟(4) という名前——によって表わされているのだろうね。

E

他方〝強制的な〟(anankaion)、つまり〔行くものに対して〕〝反発的な〟ことは、意に反するものであるので、失錯と無知に関係しているだろうね。(5) そして谷間 (ankē) の歩行に譬えられているのだ。谷間は歩きにくく嶮しく草木が生い茂っていて、行くのを妨げるからね。だから恐らくここから〝強制的な〟(anankaion) と呼ばれたのだろう。谷間 (ankē) を通っての歩行に譬えられてね。(6) さて〔霊感の〕力がぼくに臨んでいる間は、遊ばせないようにしようではないか。君も力を弛めないで質問し給え。

三三

421

**ヘルモゲネス**　それでは質問します。最も重要で最も美しいものについて。すなわち、真理と虚偽と有るものについて、それからまさに今のわれわれの対話の主題そのものである名前 (onoma) ですが、これはなぜその名前

をもっているのでしょうか。

**ソクラテス**　では〝探り求む〟(7)(maiesthai)は君にとって何かを意味するかね。

**ヘルモゲネス**　はい。探求する(zētein)ことを。

**ソクラテス**　うん、それならばこの〝オノマ〟というのは、「これは探究がそれにかかわるところの有るもの(on hou....zētēma)である」(8)という文〔定義〕が短縮されてできた名前らしいね。だが、このことを君は〝名づけられるべきもの〟(onomaston)をわれわれが言う〔定義する〕ばあいに、もっと良く認識するだろう。なぜなら、このばあいには、「それは探り求めの対象である有るもの(on hou masma)である」と、はっきり言われているからね。

B

次に〝真理〟(alētheia)だがね、これも他の名前の場合と同じように、短縮されたもの(9)であるらしいね。なぜな

1　説明のテンポが速くなって、ついて行きにくいことを言っているのであろう。

2　この箇所は写本の読みが不確実である。一応シュライエルマッハーやビュデ版などに従って訳した。底本では「ぼくはもうレースの終りを走っているのだから」、「ゴールにさしかかっているのだから」、となっている(競走にたとえることについては、410E, 414Bを参照)。

3　つまり「行くものの意志に」。「行くもの」とはわれわれ、あるいはわれわれの魂。それとも端的に意志のことをここでは「行くもの」と呼んだのであろうか。

4　〝随意の〟という語を言い換え、説明した表現である(シュタルバウム、ハインドルフ)。

5　「失錯と無知」は行く者のそれであろう。

6　anankaionをana(に沿って)とankē(谷間)とion(行くもの)とから合成された語と見るわけである。

7　maiesthaiは詩語である。

8　厳密に言えば、名は探究の対象となる有ではなくて、その有を表わすものである。しかしクラテュロスの立場からは、名が探究の対象となる。435Dsqq. 参照。

9　テクストは底本によらず、写本どおりに読む。

ら、有るものの神的な運動が、神的な(theia)放浪(alē)であるとして、このalētheiaという言い回しで呼称されているようだからね。

また〃虚偽〃(pseudos)は運動と反対のものだ。というのは、またもやここでも、引き止められているもの、強いられて静止しているものが、非難されて出て来たわけだ。そして眠り込んでいるものに(katheudousi)譬えられているわけだ。だがね、ps(プセイ)が余分にくっついて、この名前の意図〔意味〕を隠蔽しているのだよ。

また〃有るもの〃(on)と〃有性〔有りかた〕〃(ousia)は、〔失っている〕i(イオータ)を取り戻すならば、真実のもの(1)(alēthes)に一致する。なぜなら、行くもの(ion)を意味しているのだからね。(2)そしてまた〃有らぬもの〃(ouk on)にしても、ある人たちが実際にそう名づけているように、(3)行かぬもの(ouk ion)を意味しているのだよ。

C

**ヘルモゲネス** なるほどこれらについては、おおソクラテス、あなたは実に勇敢に分析されたように、ぼくには思えます。他方しかし、もしだれかが、まさにこの〔あなたが説明のために常にもち出される〕〃行くもの〃と〃流動するもの〃と〃束縛するもの〃について、これらはどのような正しさをもっているのかと、尋ねるならば

……

**ソクラテス** その人に何とわれわれは答えるのだろうかと、君は言おうとしているのだね。そうではないか。

**ヘルモゲネス** ええ、そうなのです、まったく。

**ソクラテス** うん、それならば、われわれは一つの答を今さっき用意したように思うね。これを答えれば、われわれは一理あることを言っているように見えることだろう。

**ヘルモゲネス** どんな答ですか、それは。

**ソクラテス**　われわれに〔その原意が〕分からない名前については、これは外国起源のものだと言ってのけるやり方さ(4)。そこで〔そう答えるならば〕、一方では、もしかしたらこれら〔〃行くもの〃、その他〕の名前のあるものは実際にもそのようなものであるかも知れないし、他方ではまた、最初の名前(5)は、古代性〔長い時間の経過〕のために(6)、発見不可能なものであるかも知れない。というのは、名前はありとあらゆる仕方でねじ曲げられているのだから、古代の言語が、現代のそれと比較すれば、外国語と少しも違わないとしても、全然不思議ではないだろうからね。

D

**ヘルモゲネス**　ええ、おっしゃることは少しも見当外れではありません。

**ソクラテス**　そうだとも。ぼくはありそうなことを言っているのだからね。だがそうはいっても、「裁判は口実を受け付けない(7)」ようにぼくには思えるので、心を励ましてこれらを子細に考察しなければならない。だが、

---

1　〃真実のもの〃とは、すぐ前で説明された〃真理〃と同じか、これから簡単に理解されるもの(つまり、神的な放浪をするもの)であろう。〃有るもの〃と〃真実のもの〃という二語は同意味であり得るので、その説明も一致させたわけである。

2　on は ion で、ousia は iousia だというのであろう。有るものとは行くもので、有りかたとは行きかたである、ということになる。

3　〃有らぬもの〃をイオニア方言では ouki on と言える。これを ouk ion(行かぬもの)だと、わざとこじつけているわけで、ユーモラスである。

4　409D～E, 416A 参照。

5　以下〃最初の名前〃〔第一次的な名前〕ということばがしばしば用いられるが、これは合成された名前の要素となっている最も単純な名前であり、同時にまた(概して言えば)時間的に最初に定められた名前でもあるだろう。

6　414C, 419D 参照。

7　ことわざ的な表現。「口実」とは裁判のために召喚された者が出頭すまいとして構える口実である。

(421)
E
われわれは次のことを心に留めておこうではないか。もし人がいつでも当の名前の元となることばを尋ね、さらにまたこのことばの元となったことばを問い、そういうふうにすることを止めないならば、最後には答える人が閉口する〔行きづまって口をつぐむ〕のは必然ではないだろうか。

**ヘルモゲネス**　ええ、そのとおりだと、ぼくには思えます。

**ソクラテス**　それでは、口をつぐむ人がいつ黙るならば、正当に話を打ち切ることになるのだろうか。そもそもそれは、その人が他のもの――文と名前と――のいわば元素〔要素〕である名前に行き着いた時ではないだろうか。なぜなら、これらの名前は、そのようなもの〔元素〕である以上、当然もはや他の名前から合成された姿を見せるはずはないからだ。例えば、今さっき(1)われわれは〝善〟(agathon)が〝嘆賞に値いするもの〟(agaston)と〝速

422

いもの〟(thoon)とから合成されていると言ったがね、この〝速いもの〟は別の〔複数の〕名前から、さらにまた後者も他の〔複数の〕名前から合成されていると、あるいはわれわれは言うことができるかも知れない。しかしもし

B

われわれが、もはや他のいかなる名前からも合成されているのではないものをいつか捕えるならば、「われわれはすでに元素に到達したのであり、もはやこれを他の名前に還元してはならないのだ」と言って正当であるだろうね。

**ヘルモゲネス**　ええ、ぼくにはあなたの言われることは正しいように思えます。

**ソクラテス**　では、そもそも今の場合も、君が質問しているこれらの名前が、まさしく元素(2)であるのだろうか。そして、これらの名前の正しさが何であるかを考察するためには、すでに何らかの別の方法が必要なのだろうか。

**ヘルモゲネス**　とにかくそれは、ありそうなことですね。

C **ソクラテス** うん、確かにありそうなことだね、おおヘルモゲネスよ。とにかく、これまで考察した名前はすべて、これらの名前に帰着したようだね。さて、この点がもしそうであるならば——ぼくにはそうだと思えるのだがね——ほら、今度は次の点も、ぼくといっしょに考察してくれ給え。ぼくが何かたわいもないことを言ったりしないようにね。つまり、ぼくは、最初の名前〔第一次的な名前〕の正しさは、どんなものでなければならないかを、言おうとしているのだがね。

**ヘルモゲネス** どうかただおっしゃって下さればよいのです。ぼくの力にかなう限りはごいっしょに考察いたしましょうから。

三四

**ソクラテス** それでは〔言うがね〕、先ず、すべての名前——最初のでも、最後のでも——の正しさは、何であれとにかく一つであり、どんな名前でも、名前であるという点では全然違わないのだということ、このことには君も賛成すると思うのだが。

**ヘルモゲネス** ええ、確かに。

D **ソクラテス** ところで、われわれが今まで検討したもろもろの名前に関する限り、その正しさは、それぞれのものの本性を示す

1 412C.

2 これまで考察した合成語のばあいは、その正しさを示すにはそれを分解してみせればよかったわけだが、単純な名前のばあいは、それができないということである。

有るものがどのようなものであるかを示すことのできるようなものであろうとしていたわけだ。

**ヘルモゲネス**　ええ、もちろん。

**ソクラテス**　してみるとこれ〔事物を示す機能〕だけは、最初の名前だって、いやしくも名前である以上は、より後の〔派生的な〕名前に劣らず、もっていなければならないわけだ。

**ヘルモゲネス**　確かにそうですね。

**ソクラテス**　しかし、より後の名前の方は――われわれに思えた限りでは――より先の名前を通じて、それ〔その機能〕を果しうるのだった。

**ヘルモゲネス**　そのようですね。

**ソクラテス**　よろしい。それではいよいよ最初の名前の方だがね、これらはもう他の名前の上へ乗っかってはいないのだが、どのような仕方で有るものをわれわれに、力にかなう限りで最大限に、明らかにしてくれるのだろうか。いやしくもこれらが名前であろうとする限りは、そうしなければならないはずなのだがね。

E

だが先ず次の点に答えてくれ給え。仮にもしわれわれが声も舌ももっていないで、お互いどうしに対して事物を示そうと欲するとするならば、どうだろう、そのばあいわれわれは、現実に唖の人たちがやっているように、手や頭やその他の身体の部分を使って表現しようと試みるのではないだろうか。

**ヘルモゲネス**　もちろんです。他にどんな方法がありましょう、おおソクラテス。

423

**ソクラテス**　例えば仮にもし――ぼくが思うには――われわれが上方にあるもので軽いものを表わしたいと欲するならば、われわれは天に向けて片手を上げることだろう。つまり、当の事物の本性そのものを模倣する〔ま

ねる〕わけだ。他方もし下にあるもので重いものを表わしたいならば、地面の方向にね〔手をさし伸べることだろう〕。また走っている馬とか、その他の動物を表わそうと欲するばあいには、無論君にもおわかりのように、われわれ自身のからだと姿勢をその動物のそれに、できるだけ似せることだろうね。

**ヘルモゲネス**　おっしゃるとおりであることが必然だと、ぼくには思えます。

**ソクラテス**　うん、そしてその理由は、そうすることによって、ぼくが思うに、身体によるある対象の表現[2]が生じるであろうからなのだ。いわば身体が、表わしたいと欲したところのものを模倣することによってね。

B

**ヘルモゲネス**　そうです。

**ソクラテス**　だが、現実にはわれわれは〔からだでではなく〕音声と舌と口で表現することを欲するのだから、これらを介して何らかの対象の模造品[3]が生じたときにこそ、これらから生じたものを当の対象の表現として、われわれが所有することになるのではないだろうか。

**ヘルモゲネス**　ええ、必然だとぼくには思えます。

**ソクラテス**　してみると名前とは、模倣される対象の音声による模造品である。そして音声で模倣する人は、何であれ彼が模倣するところのものを、名づけているわけなのだ。

**ヘルモゲネス**　ええ、ぼくにはそうだと思えます。

---

1　「身体を用いての」という意味。なおテクストは底本によらずW写本に従う。

2　表現することではなくて、具体的な表現(dēlōma)、表わすもの。

3　まねもの(mimēma)。

(423)
C

**ソクラテス**　しかしゼウスに誓って、ぼくにはまだ、これがうまく言われているようには思えないのだよ、おおわが仲間よ。

**ヘルモゲネス**　いったいなぜですか。

**ソクラテス**　〔この定義からすると〕羊やにわとりやその他の動物〔の鳴き声〕を模倣する〔まねる〕連中[1]でも、彼らが模倣するところのものに名づけているのだと、われわれは認めざるを得ないことになるだろうね。

**ヘルモゲネス**　なるほど、おっしゃるとおりです。

**ソクラテス**　で、これで結構だと君に思えるかね。

**ヘルモゲネス**　いいえ、思えません。しかしそれでは、おおソクラテス、名前はどんな〔種類の〕模倣なのでしょうか。

D

**ソクラテス**　先ず第一に、ぼくに思えるところでは、われわれが音楽術によって事物を模倣するようなふうに模倣するばあいは、なるほどその場合にもわれわれは確かに音声[2]で模倣するのではあるけれども、名づけているのではない。次に、音楽術が模倣する正にその対象をわれわれも模倣するばあいにも、われわれが名づけているのだとは、ぼくには思えない。ぼくが今言おうとしているのは、いいかね君、次のようなことなのだ。事物には、それぞれのものに音声があり[3]、形があり、また色だって多くのものにあるのではないか。

**ヘルモゲネス**　確かにそうです。

**ソクラテス**　うん、それならば、人がもしこれら〔音、形、色など〕を模倣するばあいには、そのような模倣に携わる技術も、命名術ではないようにみえるのだ。なぜなら、これは、一つは音楽術で、他は絵画術であるから

だ。そうではないだろうか。

**ヘルモゲネス** そうです。

**ソクラテス** 他方さてしかし、次の点はどうだね。それぞれのものに、色その他今われわれが言っていたものがあるように、有りかた[4]もまたあるのだとは君に思えないかね。第一に色や音声そのものにしてからが、そのどちらにも一種の有りかたがあり、その他〝有る〟という呼称に値いする限りのすべてのものに、何らかの有りかたがあるのではないか。

E

**ヘルモゲネス** ええ、ぼくにはそう思えます。

**ソクラテス** ではどうだろうね。もしだれかが、それぞれのものの正にここのところを——有りかたを——文字と綴で模倣することができるならば、どうだね、その人は、それぞれのものが正にそれで有るところのものを表わすことになるのではないだろうか。それとも違うかね。

**ヘルモゲネス** 確かにそのとおりです。

424

**ソクラテス** それでは君は、このことができる人を何と呼ぶのだろうか。前の人たちを、一方を音楽家、他方を画家と君は呼んだわけだが、この人は何だね。

1 軽蔑的なことば。そのようなことを得意とした特定の人たちをさすと解する説(ハインドルフ)もあるが、一般的に下賤な者や子供のうちで、そのようなことをする者と解する(シュタルバウム説)方が無難であろう。

2 原語は、人声をも楽器の音をも共に含み得る語である。

3 たとえば、風の音、波の音など。

4 それぞれの事物がまさにそれであるところのもの、本性、本質。

**ヘルモゲネス**　これこそ、おおソクラテス、われわれが長い間探し求めていたものであるように、ぼくには思えます。この人こそ命名術者であるだろうと。

## 三五

**ソクラテス**　それでは、もしそれが真実だとすると、われわれは今やすでに、君が質問していた(1)あれらの名前について、つまり、〝流動〟〔流れ rhoē〕と〝行く〟(ienai)と〝止め〟(schesis)について、果して彼〔命名者〕が、B これらの〔名前の〕文字と綴で有るものを捕えることによって、有りかたを模写しえているかどうかを、考察すべき段階に到達したようだね。

**ヘルモゲネス**　ええ、確かにそのとおりです。

**ソクラテス**　さあ、それでは、先ず次の点をわれわれは見てみようではないか。いったいどちらかね、最初の〔第一次的な〕名前はこれらだけなのか、それとも他にもたくさんあるのかね。(2)

**ヘルモゲネス**　他にもあると、ぼくは思います。

**ソクラテス**　うん、その方が本当らしいからね。しかしそれでは、模倣する人が模倣に取りかかる出発点となるのは〔模倣手段や模倣対象の〕区分なのだが、この区分はどんなふうにすればよいのだろうね。こうではないだろうか。有りかたの模倣はほかでもなく綴と文字で行なわれるのだから、先ず第一に字母〔文字要素〕を区分するC のが最も正しい手順ではないだろうか。ちょうど、韻律を研究する人たちが、第一に字母の音価を、次に綴のそれを区別するのが常であり、その上でいよいよ韻律に考察すべく立ち向かうのであって、それ以前にはそうしな

いようにね。

**ヘルモゲネス**　そうです。

**ソクラテス**　では、われわれもそのように、第一に有声字〔母音字〕を区別するべきだろうか。そして次にその他の字母を種別に従って、無声無音字(3)――と、たしかそのように、この道の巧者たちが呼んでいるのだがね――と、それからこれも有声ではないがさりとてまた無音でもないもの(4)とに区別すべきだろうか。さらに有声字そのものについても、互いに異なる品種である限りのものをね。そして、これらを区別した上で、今度は名前がつけられなければならない対象である有るものの方をすべて良く区分して、すべての有るものがそこに帰着するような要素的なもの(5)があるのかどうかを、調べなければならない。そうすることによって、有るもの〔事物〕そのもの〔の性質〕をも、有るものに種別があるかどうかということをも、字母のばあいと同じように、見ることができるだろうね。そして、以上すべてのことを十分に展望した上で、それぞれの字母を〔事物に〕類似性に従って割り当

D

1　421Cのヘルモゲネスの質問をさす。しかし名前の形は三つとも変えられている。

2　多数あるならば、その正しさを示すために先ず区分しなければならないから、こうたずねたのである。

3　例えばbのように、単独では全然音にならない黙音(字)。大多数の字母はこれに属するという。『テアイテトス』203B参照。

4　例えばsのように、音声とはいえないまでも、単独でかすかな音になるもの。いわゆる半母音(字)。『テアイテトス』同上参照。なお『ピレボス』18B〜Cでも字母の区分について記述がある。

5　これは、のちのアリストテレスのカテゴリアに対応するものである。もちろん、アリストテレスのカテゴリア論は、単に有るものの区分というだけのものではないし、またプラトンが有るものを区分したならば、アリストテレスの区分とは違ったものになるであろうが。

(424) E てるすべを知らなければならない。そのばあい、一つの字母を一つの事物に割り当てねばならないことも、また多くの字母の混合したものを一つの事物に割り当てねばならないこともあるだろうがね。ちょうど画家たちが写生しようと欲して、ある場合には単に紫だけを、ある場合にはどれか他の色を、また時には――例えば肌色とか、その他そのような色をこしらえる時のように――多くの色〔の絵具〕を混ぜ合わせて、割り当てる〔塗る〕ようにね。それは、それぞれの絵がそれぞれ特有の色を要求するように思われるという理由からだろうと、ぼくは思うがね。まさにそのごとくに、われわれもまた字母を事物に割り当てねばならないだろう。つまり、必要と思える一つ〔の字母〕を一つ〔の事物に〕与えることもあるだろうし、また多くの字母を合わせて、人々が綴と呼んでいるものを 425 〔一つの事物に〕与えることもあるだろう。さらにまたわれわれは綴を組み合わせ、そこから名前と述べことば(1)〔述語〕が合成される。そしてさらに名前と述べことばとから、とうとう、大きくて美しくもあり全体的な〔欠けた所のない〕あるもの〔つまり、文〕を、われわれは組み立てることになるだろう。ちょうどさっきの〔画家たちの〕例では生きものを絵画術で組み立てたように、この場合には命名術あるいは述言術あるいは、名称は何であれ、当該技術でね。いやむしろ「われわれが」ではないね。ぼくは口がすべって、そう言ったのさ。なぜなら、名前を現在組み立てられているように合成したのは、古人だからね(2)。他方われわれとしては、仮にも技術的〔学問的〕B にこれらすべてのことがらを考察するすべを知ろうとするかぎりは、以上のごとく区分した上で、最初の〔第一次的な〕名前と以後の〔派生的な〕名前とが正しい仕方でつけられているかどうかを、以上のごとく観察しなければならない。それ以外のやり方でつなぎ合わせる(3)のは、無価値で方法的でないのではないかと、ぼくは恐れるのだ、おお親愛なヘルモゲネスよ。

**ヘルモゲネス**　ゼウスに誓って、おそらくそうでしょう、おおソクラテス。

## 三六

**ソクラテス**　ではどうだね。君は自分がこれらを以上のごとく区分できるという自信があるかね。というのは、ぼくにはないものだからね。

**ヘルモゲネス**　いや、それではなおさらのこと、ぼくにはありません。

**ソクラテス**　じゃあ止めようか。それともどうだね、われわれの力にかなうような仕方で、たとえそれらのことのうちのほんの僅かしか看取することができないとしても、やってみようか。始めに前置き〔予告〕しておいてね。C ちょうど、少し前に(4)神々に対して「われわれは神々について真実のことは何も存じませんで、それについての人間の意見をこうもあろうかと推量いたしまする」と、あらかじめお断りしたように、そのように今も、今度はわれわれ自身に対して(5)、こう言っておいた上で、先へ進むことにしようではないか。すなわち、仮にもしだれ

---

1　原語はレーマ(のちに verbum とラテン訳された語)。「述べことば」とは何であるか、本篇では説明されていないが、『ソピステス』262A では、動作(作用——能動的であれ、受動的であれ)を表わす語がそれだと定義されている。大体動詞に相当するわけだが(426E の諸例参照)、例えば〝かしこくある〟(is wise)のような表現も述べことばであったらしい。

2　古人によって作り上げられた現実の言語は、理想的に構成されていないことを、暗示したのであろうか。

3　原語の意味がはっきりしない。(1)長々と議論を連ねる、(2)名前を事物と結びつける、(3)派生した名前を最初の名前に結びつける、などの意味に解することができそうである。

4　401A.

5　テクストは底本に従わず、写本どおりに読む。

か他の人にせよ、われわれにせよ、これらを何らか区分しなければならないのであるならば、今言われたふうに区分すべきであろう。しかし現実には、ことわざにもあるように[(1)]、われわれは自分の力にかなう仕方でそれらについて研究するほかはないだろう、とね。これでよいと思えるかね、それとも君はどう言うかね。

**ヘルモゲネス** ええ、ええ、ぼくは大賛成です。

D

**ソクラテス** 実際文字と綴で模倣されて事物〔の姿〕がくっきり顕わになるなんて、確かにおかしなことのように見えるだろうと思うがね、おおヘルモゲネスよ、しかしそれでも、そうあることが必然なのだ。なぜなら最初の〔第一次的な〕名前の真理性の根拠としては、これ以上に良いものを、われわれは何も持っていないのだからね。ただしもし君が、ちょうど悲劇作家たちが何かで行き詰った時に機械仕掛で神様を〔舞台上に〕せり上げると[(2)]いう逃避的手段に訴えるように、われわれも今同じように、最初の名前を定めたのは神々であり、それゆえにこれらの名前は正しいのだと言って、この問題を片付けてしまおうと望むのならば、別だがね。どうだね、これがわれ

E

われにとっても最上の説明の仕方だろうか[(3)]。それともこれ、すなわち、いずれかの異民族からわれわれはこれらの名前を伝承したのであり、そしてその異民族はわれわれよりも古い民族だ、という説明が最上なのだろうか。

426

それとも、古さのために、これらの名前を考察するのは、異民族の名前のばあいと同様に、不可能であるという説明がだろうか。というのも、これらはどれもこれも、最初の名前について、どういうわけで正しくつけられているのか、説明を与えることを欲しない人々にとっての逃げ口上、しかも大変器用なものであるだろうからね。とはいえ、どのような理由によってであろうと、最初の名前の正しさを知らない人が、後の〔派生した〕名前の正しさを認識することは、不可能だろうがね。後者は前者から明らかにされるのが必然であるのに、前者について

B 何も知らないのだからねえ。むしろ後者について識者であると自称する人は、最初の名前について、最も正確に最も純粋に証明することができなければならないのは、明らかだ。さもなくば彼は、後の名前について自分が語ることは、もはや他愛のないおしゃべりになるだろうということを、良く知っておくべきだね。それとも君には、違ったふうに思えるかね。

**ヘルモゲネス** いいえ、決して、おおソクラテス、違ったふうには〔思えません〕。

**ソクラテス** それならば〔言うがね〕、最初の名前についてぼくが感じていること(4)は、まったく勝手気ままでこっけいなものであるように、われながら思えるのだがね、これを君に、お望みならば、お分かち〔お伝え〕しよう。君も、もしもっと良い考えをどこかから得ることができるならば、ぼくにも分けてくれるよう努め給え。

**ヘルモゲネス** その点はおっしゃるように致しましょうから、しりごみなさらないでお話し下さい。

1 このことわざの正確な文句は不明だが、『ヒッピアス(大)』301Cによると「欲することをではなくて、できることをしよう」というような意味のものであったらしい。また『スーダ辞書』には「われわれは欲するふうにではなく、できるふうに生きよう」という形で、このことわざが引用されている。

2 もちろん、事件のもつれを一挙に神の力で解決するために、である。いわゆるDeus ex machina.

3 438Cでクラテュロスが、最初の名前についての神授説をもち出す。なお、ここではソクラテスは命名者が神であるということを否定しているのではなくて、そんなことを言っても名前の成立根拠を説明したことにならないと言っているのである。他の説についても同様である。

4 珍しくソクラテスが自分の意見として述べているようである。それとも、エウテュプロンの霊感によって「感じた」と言っているのであろうか。428Cのクラテュロスのことばを参照。

三七

C　**ソクラテス**　それならば〔言うがね〕、先ず第一にr(ロー)の字は、あらゆる動き(kinēsis)〔を表現するため〕のいわば道具であるように、ぼくには見えるのだ。
だが、これ〔動き〕がなぜこの〔キネーシスという〕名前をもっているのか、まだわれわれはその説明すらしていなかったのだったね。しかしこれはもちろんiesis(行くこと)[1]を意味しているのだ。なぜなら、昔はē(エータ)の代りにe(エイ)を使ったのだからね。[2]また語頭の字〔すなわちk〕は、kieinから来たのだがね、これは他国弁であって、[3]〔われわれのアッティカ弁で言うならば〕〝行く〟(ienai)だ。そこでもし人が動きの古名をわれわれのことばに合った形で見つけ出すとすれば、それはiesisと呼ばれて正しいだろうね。[4]ところが現実には、他国弁のkiein〔のk〕と、〔eの〕ēとの交換と、nの挿入とのために、それはkinēsisと呼ばれているのだ。[5]
D　それから〝止まり〟〔静止stasis〕は行くの否定〔つまり、aiesis〕たらんとしているのだが、例の取り繕い〔お化粧〕でstasisと名づけられているわけだ。
さて〔話を元に戻して〕字母のrだがね、今も言ったように、これは運動を模写するにはかっこうの道具であると、名前を定めた人には思えたのだね。とにかく彼はこの字母を、それ〔運動〕を表わすためにたびたび使っているよ。先ず第一にrhein(流れる)とrhoē(流れ)のばあいからして、彼はこの文字によって運動を模倣しているし、
E　次にtromos(震え、揺れ)において、次にtrachys(ぎざぎざの、粗い)において、[6]さらにまた次のような述べことばにおいてね。[7]例えばkrouein(たたく)、thrauein(砕く)、ereikein(裂く)、thryptein(こなごなにする)、ker-

matizein（寸断する）、rhymbein（旋回する）などだ。すべてこれらのことがらを命名者は主として r の字によって再現しているのだ。なぜなら彼は、ぼくの思うに、r の字の発音に際して舌が〔他の場合に比して〕静止することの最も少なく、震動することの最も多いのを看て取ったからなのだよ。それだからこそ彼は、これらのことを表わすのに、この字母をしきりに用いているのだと、ぼくには思えるね。

427 次に今度は i（イオータ）だが、彼はこれをすべて細やかなものに対して用いている。(8) 細やかなものこそ、他の何にも勝って、すべてのものを通り抜けて行くことができるだろうからね。それだから彼は、行くこと（ienai）と急ぐこと（hiesthai）とを i で写し取っているのだよ。

同じように、ph（ペイ）と ps（プセイ）と s（シーグマ）と z（ゼータ）でもって——これらは強いいぶき〔気息〕を伴って発音されるものなのだから——すべてそのような〔気息に関する〕ものを、これらの文字を用いて名づけるこ

---

1　テクストは底本によらず、T写本に従う。なお iesis（行き）は動詞〝行く〟（ienai）に対応する名詞だが、プラトンが造語したものである。

2　旧綴字法（398D注3参照）では e の字が e、ē、ei の三音を表わした。ただし 411E では ē の代りに ee が使用されたと言われている。

3　kiein はイオニア方言である。

4　つまり、kinēsis の原形は、（kiein から派生した）kiesis なのだが、これをアッティカ弁になおして言えば、（ienai から派生した）iesis だということになる、の意。

5　写本にはこの後に「だがそれは kieinēsis もしくは eisis（W写本は iesis）と呼ばれるべきであった」という文が続いているが、後人の傍注が本文に紛れ込んだものであろう。そしてこの傍注の内容そのものも誤解に基づくもので不当である。

6　テクストは底本によらず、メリディエの解釈に従い主要諸写本のとおりに読む。

7　425A 注1を参照。

8　I は字形が他の字に比して最も細いからであろう。発音の際の口形も小さい。

とによって、彼は模倣しているのだね。例えば〝冷たい〟(psychron)、〝沸きたっている〟(zeon)、〝揺れる〟(seiesthai)、一般に〝震動〟(seismos)などだ。それから風に関するものを模倣するときにも、だいたいすべての場合にこのような文字を当てがっているように見えるね、名前を定めた人は。

他方d(デルタ)とt(タウ)は反対に、舌を圧縮し〔歯の裏側へ〕押しつける作用をもっているので、束縛(desmos)と静止(stasis)を模倣するのに役立つと、彼は信じたようだね。

B

また彼はl(ラブダ)の発音の際に舌が〔他の字母の場合に比して〕一番よくすべるということを看て取って、〝つるつるした〟(leia)もの、〝すべる〟(olisthanein)そのもの、〝油のある〟(liparon)もの、〝にかわ質の〟(kollōdes)もの、その他このたぐいのものすべてを、〔この文字を用いて〕写し取りながら名づけたのだ。

また舌がすべる際にg(ガンマ)がそれを引き止める力をもっているので、〔gとlを用いて〕彼は〝粘り気のある〟(glischron)ものや〝甘い〟(glyky)もの、〝ねたねたする〟(gloiōdes)ものを写し取ったのだ。

C

さらに彼はn(ニュー)の音の内部性(1)に気づいて〝内に〟(endon)あるものと〝の中に〟(entos)あるものとに名づけたのだ。これらの文字でそれらの事象を写し取ろうというつもりでね。

さらに彼はa(アルパ)を〝大きい〟(mega)ものに、そしてē(エータ)を〝長さ〟(mēkos)にあてがったのだが、それはこの両文字が大きいからだ(2)。

また彼は〝丸い〟(gongylon)ものを表わすしるしとしてo(オウ)の字を必要としたので(3)、この文字をこの名前の中にふんだんに混ぜ込んだのだ。

そしてその他のもの〔事物、概念〕についても同様で、立法者はそれら〔事物、前例だと「大きい」〕を文字〔例、

a〕にも綴〔例、mega〕にも〔似通ったものに〕当てはめることによって、それぞれの有るものに対するしるし、つまり名前を作ったのであるらしいね。そしてそのあとで、今度は残りのもの〔派生的な名前〕を、今作ったこれら〔最初の名前〕そのものを用いて合成したのだろうね。〔やはり事象を〕模写しながらね。

D 以上がね、ぼくには、おおヘルモゲネスよ、名前の正しさがそれであろうと目ざしているところのものなのだと見えるのだよ、もしもこちらのクラテュロスが何か違ったことを言うのでないかぎりはね。

## 三八

**ヘルモゲネス** ええ、本当に、おおソクラテス、始めに言いましたように、[4] クラテュロスはたくさんのめんどうをたびたびぼくにかけます。一方で名前の正しさというものがあると主張しながら、他方それがどんなものであるかは明確なことを何も言わないのですからね。その結果ぼくには、彼が名前について〔語るたびごとに〕いつでもこんなふうに不明確に話すのが、わざとなのか不本意になのか、見きわめることもできないありさまなので E す。[5] だから、さあ今度こそぼくに、おおクラテュロスよ、ソクラテスの面前で、言ってくれ給え、名前について

1 Nの音は鼻音で、鼻腔内にこもるからであろうか。
2 A(ア)を発音する際の口形が大きいからであろう。またエータ(H)の音エーは長音であるからであろう。
3 Oの字は字形あるいは発音の際の口形が丸いからであろう。
4 383 A sqq.
5 クラテュロスは明確な思想をもっていないので、明確な説明ができないのだと解釈する人(シュタインタールなど)がある。『テアイテトス』180 A～B 参照。それともクラテュロスは高く己れを持してヘルモゲネスなどを相手にしていないのだろうか。なお、できるだけことば少なであるのがヘラクレイトス派の特色である(プロクロス)。

ソクラテスが語られた説に君は賛成するのか、それとも君自身がもっと立派な説を持っているのかをね。そして、持っているのならば、それを話してくれ給え。そうすれば、君がソクラテスから学ぶか、それとも君がわれわれ〔ぼくとソクラテス〕両名を教えるか、どちらかをすることになるだろうからね。(1)

**クラテュロス**　何だって、おおヘルモゲネスよ。何事についてであれ、そんなに手っ取り早く学んだり教えたりすることが、簡単にできると君には思えるのかね。ましていわんや、あるが中にも最重要であると思われる、これほどのことがらについてね。

428

**ヘルモゲネス**　いや、ゼウスに誓って、決してそうはぼくにも思えないよ。しかし「人が僅かの上に僅かを積み重ねても、有益である」というヘシオドスのことば(2)は適切であるように、ぼくには見えるね。だから、たとえ僅かでも君が付け加えることができるのならば、しりごみしないで、恩恵を施してくれ給え。こちらのソクラテスにも、そしてまたぼくにもね。ぼくに対しては、君は当然そうすべき負目があるのだから。(3)

**ソクラテス**　そうだとも、実際ぼく自身だって、おおクラテュロスよ、自分が言ったことを何ひとつ強情に言い張るつもりはないのだ。ぼくはただ自分にこうと思えるままに、ヘルモゲネスといっしょに考察しただけなのだからね。だから、この点に関するかぎり気兼ねしないで、もし君がもっと良い説を持っているのならば、言ってくれ給え。ぼくもそれを受け入れるだろうと期待してくれていいよ。それに実際のところ、君がぼくの言ったことよりも何かもっと立派なことを言うことができるとしても、ぼくは驚かないだろうね。なぜなら、君はこの

B

種の問題について、これまでに自分自身でも考察したようだし、他の人々からも学んだように、ぼくに思えるからだ。そういうわけで、君がもっと立派なことを言う場合には、名前の正しさに関しての君の弟子の一人として、

ぼくをも書き加えて〔登録して〕くれ給え。

C **クラテュロス** いや確かに、おおソクラテス、あなたのおっしゃいますように、ぼくはこれらの問題について心を砕いても来ましたし、あなたを弟子にすることも、あるいはできるかもしれません。とはいいながら、それとは正反対の結果に終りはしないかと恐れてもいるのです。なぜなら、どうしてだか分かりませんが、アキレウスが「許し乞い」(4)のなかでアイアスに向かって言うことばを、あなたに向かって言わねばならないような気がするからです。彼はこう言っています。

ゼウスの血を引く、テラモンの息子、民衆の統率者アイアスよ
汝の語れるすべてのことばはわが胸にほぼかなえるごとし

そしてぼくからすればあなたも〔アイアスと同じように〕ぼくの心に非常によくかなうふうに、神託を告げられたように見えます。あなたがエウテュプロンから霊感を受けられたのであるか、それともまた別の、だれかミュ(5)

1 いずれにしても有益なことである、という気持ちを含むのであろう。

2 ヘシオドスの『仕事と日々』三六一—三六二行に「もし君が僅かの上に僅かを積み重ねるとしても、しばしばこれをなすならば、たちまちそれは大きなものになるだろう」とある。

3 テクストの句読点は、シュタルバウム、メリディエらに従う。

4 『イリアス』第九巻のあたりが「許し乞い」(リタイ)と呼ばれていたらしい。引用は第九巻六四四—六四五行。怒りを静めて戦闘に参加してくれるよう説得したアイアスに対して、アキレウスが答えたことばの始めの部分。しかしアキレウスは、ついにアイアスの説得には応じなかったのである。

5 396Dにも「御神託を語る」とある。(原語は、ここのものと同一である。) 常日頃のソクラテスとは違い驚嘆すべきことを語ったからであろう。384Aの「クラテュロスの御託宣」に対するしっぺ返しとみるのは誤りだろう。

ーズの女神のお一方が先刻からこっそり〔あなたに気づかれることなしに〕あなたに乗り移っているのかは、とにかくとしてですね。

D

**ソクラテス**　おお善なるクラテュロスよ、実際ぼく自身も先刻からわれとわが知恵に驚嘆して、信じられないでいるところなのだよ。それで、いったいぼくは何を言っているのか、再吟味しなければならないように、ぼくには思えるのだ。なぜなら、自分が自分によってだまされるということは、何よりも危険なことだからねえ。なぜなら、だましてやろうと狙っている者が束の間も離れないで、しょっちゅう付きまとっているとするならば、どうして危なくないことがあろうか。だからしてわれわれは、すでに語られたことをしばしば振り返って、あの詩人(1)のことばを借りるならば、「先をも後をも共に」眺め渡すよう努めるべきだと思われる。そこで目下の場合もわれわれは、われわれによって言われたことは何であるかを、見てみようではないか。名前の正しさとは、われわれが主張しているところでは、当の事物がどのようなものであるかを示すであろうところのものである。こ

E

れでもう十分に説明されていると、われわれは言うべきだろうか。

**クラテュロス**　ええ、ぼくには実に申し分のないように〔説明されていると〕思えますね、おおソクラテス。

**ソクラテス**　してみると名前が言われるのは、教示のためなのだね(2)。

**クラテュロス**　確かにそうです。

**ソクラテス**　ではわれわれは、これ〔教示〕もまた一つの技術であって、それに関する工匠〔制作技術者〕が存在すると、言うべきではないかね。

**クラテュロス**　確かにそうですね。

429

**ソクラテス**　それはだれかね。

**クラテュロス**　あなたが最初におっしゃっていた人[3]たち、つまり立法者です。

**ソクラテス**　ではどうだね、この技術が人間たちの中に発生する状態は、その他の技術の場合と同様であると言うべきかね、否かね。ぼくが言おうとしているのは、次のようなことだ。例えば画家にしても、ある者は比較的下手で、ある者は比較的上手であるようだね。

**クラテュロス**　確かにそうですね。

**ソクラテス**　では、より上手な者は彼らの制作物を、より立派なものにして提供し、より下手な者は、より劣悪なものを提供するのではないか。また大工にしても同様で、ある者はより立派な家を、他の者はより劣った家を作るのではないかね。

**クラテュロス**　そうです。

B

**ソクラテス**　それならばそもそも立法者もまた、ある者は彼らの制作物をより良いものに仕上げて、また他の者はより劣ったものを提供するのではないだろうか。

**クラテュロス**　いいえ、その点はもう、ぼくには同意できません。

---

1　「あの詩人」はホメロス。少し前にクラテュロスが引用した詩人だから「あの」と言った。引用された句は『イリアス』第一巻三四三行から。（第三巻一〇九行にも同じ句がある。）

2　388B参照。

3　388E. 教示の技術（問答法）の道具である名前を制作するのは立法者である。

**ソクラテス**　してみると君には法律が、あるものはより良いもので、他のものはより劣悪なものであるとは、思えないのだね。

**クラテュロス**　思えませんとも。

**ソクラテス**　それでは名前もまた、どうやら君には、あるものはよりまずくつけられていて、他のものはよりうまくつけられているとは、思えないのだね。

**クラテュロス**　思えませんとも。

**ソクラテス**　してみると、有らん限りの名前がすべて正しくつけられているわけだね。

**クラテュロス**　少なくとも名前である限りのものはですね。

C

**ソクラテス**　ではどうかね、今しがたも問題になっていたことだが[1]、こちらのヘルモゲネスには、そもそもこの〔ヘルモゲネスという〕名前すらつけられていないと、われわれは言うべきだろうか。彼がヘルメスの血統にふさわしいものを何ももっていないとするならばね。それとも、つけられてはいるのだが、さりとて正しくはつけられていないと言うべきかね。

**クラテュロス**　つけられてすらいないのだと、ぼくには思えますね、おおソクラテス。否、つけられているように思えるけれども、実はこの名前は別の者の名前なのです。その本性〔ヘルメスの血統にふさわしい性質〕をも有している別の者のね。

**ソクラテス**　ではどうだね、彼はヘルモゲネスであると、だれかが主張する場合に、虚偽を語っているということにもならないのかね。というのは、この人がヘルモゲネスでないとするならば、この人はヘルモゲネスであ

ると主張することすら、やはりあり得ぬことではないかとぼくは恐れるのだがねえ。

**クラテュロス**　おっしゃることは、どういう意味ですか。

D　**ソクラテス**　そもそも虚偽を語るということが全然ありえないことだということ、そもそもこれが、君の言説の意味するところなのだろうか。というのは、このことを主張する人たちが、おお親愛なるクラテュロスよ、今も昔もいっぱいいるのだからねえ。(2)

**クラテュロス**　だってそうでしょう、おおソクラテス、人が、彼が語るところのものを語りながら、有るものを語らないということが、どうして可能でしょうか。それとも「虚偽を語る」とは「有るものをば語らない」ことではないとでもおっしゃるのですか。

**ソクラテス**　その議論は、ぼく〔の能力〕とぼくの年齢にとっては(3)、巧妙すぎて手に余るね、おおわが仲間よ。

E　とはいうものの、これだけのことは答えてくれ給え。虚偽を語るということがあるとは君に思えないとして、虚偽を主張する〔肯定する〕ことはどうなのだね。

**クラテュロス**　主張することも、あるとはぼくには思えませんね。

---

1　408B, 383B, 384C.「今しがた」とあるので、直接には408Bを指すのであろう。

2　プロタゴラス、エウテュデモスなどがこの中にはいる。(のちにソクラテスの弟子のアンティステネスもそのような主張をした。) なおヘルモゲネスは、虚偽を語りうることを簡単に認めていた(385B)。プラトンはこの箇所で特にアンティステネスを念頭においていると考えることもできる。

3　年をとりすぎているという意味らしい(逆に解する学者もなくはないが)。他方クラテュロスの若さに対して、君の年齢ではこの問題を処理できないという皮肉を含ませているのだろうか。

**ソクラテス**　では、話すことも、話しかけることもかね。例えば、他国の地でだれかが君を迎えて、君の手を取りながら、「よくいらっしゃいました、おおアテナイからのお客様、スミクリオンの息子、ヘルモゲネスよ(1)」と話すならば、この人がこれらのことばを語った、もしくはこれらを主張した〔言った〕、もしくはこれらを話した、もしくはそう話しかけたのは、君に対してではなくて、こちらのヘルモゲネスに対してなのだろうか。それとも、だれに対してでもないのだろうか。

**クラテュロス**　ぼくにはね、おおソクラテス、その人は空しくこれらのことばを発声したことになるだろうと、思えますよ。



**ソクラテス**　いや、その答でも結構だ。だって、どちらだね、これらのことばを発声した人は、真実を発声したのかね、それとも虚偽をかね。それとも、一部分真実で他の部分は虚偽なのかね。というのも、この最後の場合でも〔ぼくの議論にとっては〕十分なのだ。

**クラテュロス**　そのような人は単に音を立てているにすぎないと、ぼくは言いたいですね。ちょうどだれかが青銅鍋でもたたいて震動させるように、その人は自分で自分〔の舌〕を無益に震動させているのですよ。

## 三九

**ソクラテス**　よろしい。それではどうにかしてわれわれが合意点に達することができるものかどうか、いざ考えてみようではないか、おおクラテュロスよ。いったい君は、名前と、名前がそれの名前であるところのものとは、それぞれ別個のものであると、認めるのではないだろうか。

**クラテュロス**　ええ、認めます。

B

**ソクラテス**　それでは、名前は当の事物の一種の模造品であるということにも、君は同意するのではないかね。(2)

**クラテュロス**　もちろん、何よりも〔そのことに同意します〕。

**ソクラテス**　それでは、絵もまた、ある別の仕方で、ある種の事物の模造品であると、君は言うのではないかね。

**クラテュロス**　そうです。

**ソクラテス**　さあ、それでは調べてみようではないか。というのも、多分ぼくには君が言おうとすることがいったい何であるのか、分かっていないのであって、君の言っていることはおそらく正しいのだろうからね。これら両種の模造品、つまり絵とさっきの名前とのどちらをも、これらがそれの模造品であるところの事物に割り当て、結びつけるということは、できるのかね、できないのかね。

C

**クラテュロス**　できます。

**ソクラテス**　では先ず第一に次の場合を考えてみ給え。いったい人が男の肖像画を男に帰属させ、女のを女に帰属させ、またその他の場合も同様にすることができるだろうか。

---

1　ヘルモゲネスがヒッポニコスの息子であることは384Aから確実なので、「アテナイ人でスミクリオンの息子」は、クラテュロスの呼称として正しいものであろう。従って、この呼びかけで誤っているのは「ヘルモゲネスよ」の部分だけである。なお、この想定の中では、ヘルモゲネスはクラテュロスといっしょにいるわけではない。

2　423B参照。

**クラテュロス**　もちろんです。

**ソクラテス**　それではまた、その反対に、男の肖像画を女に、女のを男に、帰属させることもできるのではないかね。

**クラテュロス**　それも可能です。

**ソクラテス**　ではいったいこれらの割り当ては、両方とも正しいのだろうか。それとも片方だけがかね。

**クラテュロス**　片方だけがです。

**ソクラテス**　それは、ぼくの思うに、それぞれのものに、それにふさわしいもの、つまり似ているものを帰属させる方なのだ。

**クラテュロス**　ぼくにはそうだと思えます。

D **ソクラテス**　さあ、それではね、ぼくと君とは仲好しなんだから、論争なんかすることのないように、ぼくの言うこと〔定義〕を受け入れてくれ給え。すなわち、そのような割り当てをね、おお、ぼくの仲間よ、肖像画と名前とどちらの模造品の場合にも、正しい〔割り当て〕とぼくは呼ぶわけなのだ。そして名前の場合には、〝正しい〟に加えて、さらに〝真なる〟〔割り当て〕とも呼ぶのだ。そして他方の、似ていないもの〔模造品〕を〔事物に〕持って行き、帰する方〔の割り当て〕を〝正しくない〟ものと、そして名前の場合にはさらに〝虚偽の〟ものと呼ぶわけなのだ。

E **クラテュロス**　しかしね、ひょっとすると、おおソクラテス、絵の場合にはそのこと、つまり正しくなく割り当てるということが可能であっても、他方名前の場合にはそうでなくて、むしろ常に正しく割り当てるというこ

とが必然的である、のかもしれませんよ。

**ソクラテス**　どういう意味だね、君の言うことは。これとあれと〔二つの場合で〕どこが違うのかね。いったい、だれかある男の人の所へ行って「これはあなたの肖像画です」と言って、場合によってはその人の肖像画を示し、場合によっては女の人のを示すことが、できるのではないかね。「示す」とはこの場合「目が知覚するように前へ置く」という意味だが。

**クラテュロス**　確かにね〔できます〕。

**ソクラテス**　ではどうだね。もう一度その同じ人の所へ行って「これはあなたの名前です」と言うことは〔できるかね〕。名前だって肖像画同様に模造品だろうがね。つまりこういう意味だ。いったい、その人に向かって「これはあなたの名前です」[1]と言って、そのあとで、今度の場合は聴覚が知覚するように、場合によってはその人の模造品〔名前〕を前へ置く、つまり「男」と言う、あるいは場合によっては人類の女性のそれ[2]を置く、つまり「女」と言うことが、できるのではないだろうか。君にはこのことが可能であり、時折りは現実に起こっているとは思えないかね。

**クラテュロス**　ぼくはあなたに譲歩してあげたいのです、おおソクラテス。そうだということにしておきましょう。



1　「あなたの名前」とは、ここでは固有名詞でなく、「男」という普通名詞をいう。

2　特定の女性でなく、女性一般である。

**ソクラテス**　立派だよ、君の態度は、おお親愛な人よ、事実がそのとおりであるばあいにはね。なぜなら、今はこの問題であくまで言い争う場合ではないのだから。さて、このばあい〔名前のばあい〕にも何かこのような割り当てが可能だとすると、その一方〔の割り当て〕を〝真である〟と、そして他方を〝偽である〟とわれわれは呼ぶことにしたい。しかし、もしこの点がそうであるとして、そして名前を正しくなく割り当てることができ、それぞれ〔の事物〕にふさわしいものを帰属させないで、時折りはふさわしくないものを帰属させることが可能だとするならば、述べことば(1)に対してもその同じことをすることができるだろうね。また、述べことばと名前とをそのように置くことができるのであれば、言明〔文〕をもそうすることができるのは必然だね。なぜなら、言明とは、ぼくが思うところでは、これら〔名前と述べことば〕の組み合わせ(synthesis)なのだから。それとも君はどう言うかね、おおクラテュロスよ。

B

**クラテュロス**　そのようにです。あなたはうまく言われたように、ぼくに思えますからね。

**ソクラテス**　では、最初の〔第一次的な〕名前をやはり絵になぞらえて考えるならば、ちょうど肖像画の場合に、ふさわしい色と形をすべて帰属させることも、またすべてを与えないで、あるものを取り残したり、逆にまたあるものを余分に付け加えて、多過ぎさせたり大き過ぎさせたりすることができるように、〔名前の場合にも〕できるのではないかね。それとも、できないだろうか。

C

**クラテュロス**　できます。

**ソクラテス**　それでは一方、すべてを帰属させる人〔画家〕は、いい〔りっぱな〕絵、つまりいい模写品を仕上げたことになるが、他方付け加えるか取り除くかする人は、なるほどその人も絵、つまり模写品を制作するのではは

あるが、しかしまずいのを作ったことになるのではないかね。

D

**クラテュロス** そうです。

**ソクラテス** では他方、綴と文字を用いて事物の有りかた〔本質〕を写し取る人は、どうなのだろうね。やはり同じ理屈で、もしその人が事物にふさわしい〔本来帰属すべき〕ものをすべて帰属させるならば、その模写品すなわち名前はいいものとなるだろうし、もしまた少しばかりのものを落としたり、時にはまた付け加えたりするならば、模写品はできるだろうが、いいものはできないのではないだろうか。そしてその結果、名前のあるものはりっぱに、あるものは下手に作り上げられたものになるのではないかね。

**クラテュロス** あるいはですね。[2]

**ソクラテス** してみると、あるいは、名前の制作者のある者は良い〔上手な〕制作者で、ある者は悪い〔下手な〕のだろうね。

**クラテュロス** そうです。

**ソクラテス** ところで名前の制作者は〝立法者〟と呼ばれていたのだったね。[3]

**クラテュロス** そうです。

E

**ソクラテス** してみると、あるいはね、他の技術においてと同様に、ゼウスに誓って立法者もまた、ある者は

---

1　ほぼ動詞に相当する。425A 注参照。

2　すぐあと(431E)の反論からわかるように、クラテュロスはこの推論に不満なのである。

3　直接には 429A を指す。

良い〔上手な〕立法者で、ある者は悪い〔下手な〕ことになるだろう。もしも果して先のあの議論がわれわれによって承認されるとするならばね。

**クラテュロス**　それは〔そのかぎりでは〕そうです。しかしあなたもおわかりでしょうが、おおソクラテスよ、われわれが文字、つまりａ（アルパ）やｂ（ベータ）などの字母のそれぞれを文法術によって名前に割りふりするばあいに、もしどれかの字母を取り去ったり、付け加えたり、移動させたりするならば、その名前が書かれはしたが、しかし正しくなく書かれたことになるのではなくて、むしろその名前は全然書かれもしなかったのです。それは、これらの変化のどれかをこうむるならば、もうただちに別の名前であるのです。

432

**ソクラテス**　だがね、そういうふうな考え方をすると、われわれは正しく考えていないことになるのではないかねえ、おおクラテュロスよ。

**クラテュロス**　いったいなぜですか。

**ソクラテス**　有るか有らぬかを必然的にある数に依存しているかぎりのもの(1)は、多分君の言っているような、そういう目に会うことだろうね。ちょうどまた数自身(2)にしてからが、一〇だって他のどんな数だって、もし君が

B

何らかの部分を取り去るか付け加えるかすると、それでもうただちに別の数になるようにね。他方、性質的なものと〔そのうちで今問題になっている〕あらゆる種類の模写物のばあいには、その正しさ〔正しいものであることの規準〕はそういうものではなくて、むしろ反対に、模写物を得ようとするならば、われわれは、そもそも原物であるものがもっている形質をすべてそれに帰属させる〔再現させる〕ということが、そもそも許されてすらいないのではなかろうか。ぼくの言うことに一理あるかどうか、考えてくれ給え。次のようなものは、クラテュロスと

クラテュロスの模写品という意味での二つの事物であるだろうか。すなわち、だれかある神が、画家のように君の色と形を写し取るばかりか、内部のすべてをも君のとそっくり同じように作り、柔らかさと温かさも同じものを再現し、動きと魂と思慮も君の所にあるようなのを入れ、要するに、君がもっているすべてのものとそっくりのものを別に作って君の側に置くばあいにね。どうだね、そのときこのようなものは、クラテュロスとクラテュロスの模写品なのだろうか、それとも二人のクラテュロスなのだろうか。

**クラテュロス**　二人のクラテュロスだと、ぼくには思えます、おおソクラテス。

## 四〇

**ソクラテス**　それご覧、わかっただろう、おお友よ、模写品と〔したがってまた〕われわれが今も話していたもの〔つまり名前〕の正しさとしては、〔君が言っていたのとは〕違ったものを求めなければならないのだということが。そして、何らかの部分が欠如したり、付け加わったりするならば、もはやそれは〔当の事物の〕模写品でないことが必然的である、と考えてはならないのだということがね。それとも君は、いかに模写品が原物であるものと同じもの〔形質〕をもつにはほど遠いか、まだ悟らないのかね。

**クラテュロス**　わかります。

---

1　すなわち、三名とか五リットルなどの数量的なもの。

2　数量的なものに対して純然たる数を「数自身」といっているのである。

**ソクラテス**　うん、とにかく、もし名前が、名前がそれの名前であるところのものに、あらゆる点でそっくりであるばあいには、後者は名前のためにこっけいな目に会わされるだろうからねえ。なぜって、何もかもが二つずつになってしまって、どちらが原物で、どちらが名前か、区別することができなくなるだろうからね。

**クラテュロス**　本当です。

**ソクラテス**　うん、それならば、しりごみしないで、おお高潔な人よ、名前もまた、あるものはうまく〔適切に〕、またあるものはそうでなくつけられていることを承認し給え。そして、名前はそれの名前であるところのものにそっくりでなければならず、そのためには必然的に、もつべきすべての文字をもたなければならないのだと、強要し給うな。名前が〔事物に〕ふさわしくない文字をも〔事物に〕あてがうことを許容し給え。そして、文字がそうならば、言明〔文〕の内部の名前にしても、また名前がそうならば、言明にしても(1)、ふさわしくないもの〔名前、言明〕が事物にあてがわれることを(2)、そしてそれにもかかわらず、言明がそれについて述べられているところの事物の概型が〔名前に〕内在するかぎり、当の事物は名づけられ、言明されているのである(3)ということを、認め給え。ちょうど〔アルパ、ベータなどの〕字母の名前のばあいのようにね。君が、今しがたぼくとヘルモゲネスが言っていたことを(4)、おぼえているならばだが。

E

433

**クラテュロス**　いや、それはおぼえています。

**ソクラテス**　うん、それならば結構。で、今の話だが、それ〔事物の概型〕が内在するばあいには、ふさわしいものをすべてもっていなくても、とにかく当の事物は言明されていることになるだろう。ただし、すべてをもつばあいには、うまく、僅かしかもたないばあいには、まずく言明されたわけだ。だがとにかく、言明されるのだ

ということは、おお、しあわせな〔おめでたい〕人よ、われわれは承認しようではないか。さもないと、ちょうどあの、夜間に右往左往して道程が遅れ、物笑いの種となったアイギナ(5)の人たちのように(6)、われわれもまた何かそんなふうに、真に問題の本質的な点に到達するのが許された限度以上に遅れてしまって、笑いものになることだろうからね。それとも〔この点を承認しないのならば〕君は、名前の正しさ〔規準〕として、何か別のものを探すことだね。名前が綴と文字による事物の表示であることを認めてはならないのだ。なぜなら、君がこれらを両方とも主張(7)しようものなら、自己矛盾を免れることはできないだろうからね。

B

**クラテュロス**　いや、あなたのおっしゃることは妥当だと、ぼくには思えます、おおソクラテス。ですから、ぼくもそのように意見を定めます。

**ソクラテス**　うん、それならば、その点についてはわれわれの意見が一致したので、次にこのことを考察しようではないか。名前がうまくつけられるためには、われわれが主張しているところでは、ふさわしい文字をそれがもたなければならないのだね。

1　原文は、写本および諸版では「言明の内部の言明」となっているが、「言明の内部の」を訳者の一存で削除した。
2　431B〜C参照。
3　「当の事物について言明が行なわれている」ということ。
4　393E参照。
5　あるいは「刑罰を受けた」。原文の意味があいまいで、どちらともとれる。
6　ここで言及されているできごとについては一切不明である。アイギナはサロン湾に浮かぶ島。アテナイの南西にある。
7　すなわち、(1)名前は事物を文字によって写したものであるということと、(2)名前は事物にあらゆる点で似ていなければ、当の事物の名前でないという条件。

C

**クラテュロス**　そうです。

**ソクラテス**　で、そのばあい、ふさわしい文字とは、当の事物に似ているもののことなのだね。

**クラテュロス**　確かにそうです。

**ソクラテス**　では、うまくつけられた名前は、そういうふうにつけられているのだ。他方、どれかある名前がうまくつけられていないばあいには、それの大部分はおそらくふさわしい、つまり〔事物に〕似ている文字から成り立っているのだろう——模写品である以上はね——が、一部分はふさわしくない文字をもっていて、これのためにその名前がうまい名前でなく、うまく制作されていないのだろうね。われわれはそう主張しているのだろうか、それとも違ったふうにかね。

**クラテュロス**　あくまでも言い争うことは遠慮すべきだと思います(1)、おおソクラテス。もっともぼくには、名前ではあるが、さりとてうまくつけられてはいないと主張する点が、納得できないのですがねえ。

D

**ソクラテス**　どうなのだね、君には、名前は事物の表示であるということが、納得できないのかね。

**クラテュロス**　できます。

**ソクラテス**　しかしそれでは、名前のあるものは、もっと先の名前から合成されたものであり、またあるものは最初の〔第一次的な〕ものであるということが、適切に言われているとは君に思えないのかね。

**クラテュロス**　思えます。

**ソクラテス**　しかし、もろもろの最初の名前が何らかのものの表示となるためには、それらを、それらが表示

E

せねばならぬものに、できるだけ似たものにすること以上に、それらが表示となるための、もっとうまいやり方

〔方式〕を君は知っているかね。それとも君には、ヘルモゲネスやその他大勢が言っている次のやり方の方が、もっと納得できるのかね。すなわち、名前は取りきめられたものである、そして名前は取りきめをし、事物を前もって知っている人たちに対して事物を表示するのである、そしてこれこそ名前の正しさ〔規準〕である、取りきめこそね、そして、だれかが現在一般に取りきめられているとおりに取りきめても、また反対に現在〝小さい〟と名づけられているものを〝大きい〟と呼び、〝大きい〟と呼ばれているものを〝小さい〟と呼んでも、そこに何らの違いもないというわけだがね。どちらのやり方が君を納得させるのだね。

434

**クラテュロス** 雲泥の差です、おおソクラテス、人が表示しようとするものを、相似たもので表示して、手当り次第のものでは表示しない方が、絶対的にすぐれています。

**ソクラテス** そのとおり。さてそれでは、名前が当の事物に似たものであるためには、必然的に、人がそれから最初の名前を構成しようとするところの字母が、本性的〔自然的〕に事物に似ていなければならないのではないか。ぼくが言おうとしているのは次のようなことだ。さっきのように絵のばあいで考えてみよう。画かれるもの〔絵〕は絵具で構成されているわけだが、絵画術が模倣する対象に本性的に似ている絵具が存在しなかったならば、いったい何らかの有るものに似ている絵をだれかが構成する〔画く〕なんてことがいつかあるだろうか。それとも、そういうことは不可能かね。

B

**クラテュロス** 不可能です。

---

1 431A のソクラテスのことばを受けるのであろう。

2 430Bsqq.

**ソクラテス**　それでは名前だって同様で名前を構成しているもの[1]〔要素〕が、先ずもって、名前がそれの模造品であるところの原物に対して、ある種の類似性をもっているのでないかぎりは、名前は決していかなる事物にも似たものとなることができないのではないだろうか。そして、名前を構成すべきものとは字母のことではないかね。

**クラテュロス**　そうです。

## 四一

C

**ソクラテス**　うん、それならばこれから先は君も、さっきヘルモゲネスが加わっていた議論に参加してくれ給え。さあ、どうだね、r（ロー）が運動と動きと硬さ〔粗さ〕に類似すると、われわれが言った[2]のは、適切だと君に思えるかね、それとも適切でないとかね。

**クラテュロス**　適切だと思えます。

**ソクラテス**　また1（ラブダ）は、つるつるしたもの、柔らかなもの、その他われわれがさっき言っていたもの[3]に、類似しているのかね。

**クラテュロス**　そうです。

**ソクラテス**　ところで君は知っているかね、同じものをわれわれ〔アテナイ人〕は sklērotēs（硬さ）と呼ぶが、エレトリアの人[4]たちは sklērotēr といっていることを。

**クラテュロス**　ええ、もちろん。

**ソクラテス**　そのばあい、どちらだろうね、rとs（シーグマ）が両方とも同一のものに似ていて、したがって〔それぞれの文字が〕かの人たちに対しても――終りの文字はrだが――われわれに対しても――終りの文字はsだが――同一のものを表示するのだろうか、それともわれわれ〔アテナイ人とエレトリア人〕のどちらか一方に対しては〔そのものを〕表示しないのだろうか。

D

**クラテュロス**　むろん両者に対して表示します。

**ソクラテス**　で、それはどちらだろうね、rとsがまさに類似しているかぎりにおいてかね、それともそうでないかぎりでかね。

**クラテュロス**　類似しているかぎりにおいてです。

**ソクラテス**　では、そもそも両者はあらゆる点で類似しているのかね。

**クラテュロス**　とにかく両者が――おそらく――運動を表示している点[5]に関してですね。

**ソクラテス**　そもそもまた〔'sklērotēs'[6]の〕中間にはさまっているlも、そうなのだろうか〔rとsに似ているのだろうか〕。lは硬さとは反対のものを表示するのではないかね。

1　絵具が字母に、一つの絵が一つの名前に対応する。
2　426C～E参照。
3　427B参照。
4　エレトリアはエウボイア島（エビア島）の主要都市の一つであった。ストラボンの『地理学』第一〇巻一〇章に「エレトリア人はエリスから新しい移住者を受け入れて、その影響でrという文字を（語末だけでなく語中にも）しばしば用いるようになり、喜劇のからかいの対象となった」とある。
5　427Aでsは震動を表わすと言われた。
6　つまり、柔らかさ。434C参照。〃硬さ〃という名前の中に柔らかさを示す文字がはいっているのは変ではないか、というのである。

**クラテュロス**　それはね、1が間にはさまっているのは、おそらく正しくないのですよ、おおソクラテス。ほら、ちょうどあなたがさっきヘルモゲネスに向かって、必要な箇所では文字を取り除いたり挿入したりされながら、説明されたもろもろの名前のようにですね。あのときのあなたのなされようは、正しいようにぼくには思えました。そこで今のばあいにも、おそらく1の代りにrを言う〔発音する〕べきでしょう。(1)

E

**ソクラテス**　いやおみごとな答だ。ではどうだろうね。だれかが、現在言われているとおりにsklēron（〃硬い〃）と言ったならば、われわれは相手から何も学ばない〔理解しない〕のだろうか。また君にしても、今ぼくが何を言ったか、わからないのだろうか。

**クラテュロス**　ぼくにはわかりますが、それは慣用によって〔わかるにすぎないの〕ですよ、ね、おお親愛なお人よ。

**ソクラテス**　だが君は、慣用と言うことによって、取りきめとは何か違ったことを言っているように思っているのかね。それとも、君が言うところの慣用とは、ぼくがこの名前〔〃硬い〃〕を発音するときに、ぼくがかのもの(2)を思っており、そして君が、ぼくがかのものを思っていることを認識すること、そういうこととは違ったものなのかね。これを慣用と言っているのではないのかね。

**クラテュロス**　いや、そうなのです。

435

**ソクラテス**　では、ぼくが発音するとき君が認識するのであるならば、何らかの表示〔しるし〕がぼくから君に伝わるのではないかね。

**クラテュロス**　そうです。

**ソクラテス** そしてその表示は、ぼくが発音する際に思っている対象とは似ても似つかぬものから成り立っているのだ。もしも1が君の言うところの sklērotēs〔硬さ〕[3]というものに似ていないとするとね。だが、この点がそうだとすると、これはまさしく君が君自身に対して取りきめをしたということでなくて何であろうか。そして君にとっても名前の正しさ〔根拠〕は取りきめであるということになるのではないかね。なぜなら、〔事物に〕似ている文字でも似ていない文字でも、たまたま慣用と取りきめを受けたばあいには、〔事物を〕表示するのだからね。

B

またもし百歩譲って慣用は取りきめではないとしても、類似性が表示手段であると言うことはやはり妥当ではないだろうね。むしろ慣用こそそれであると言うべきだろう。なぜならこれが、どうもそう見えるのだが、似たものをでも似ないものをでも用いて〔事物を〕表示するようだからね。さて、以上のことをわれわれは承認するのだから、おおクラテュロスよ——というのは、君の沈黙をぼくは承認と受け取ろうと思うのだが——したがって取りきめと慣用もまた、発言するときにわれわれが思っているものを表示することに対して、何ほどか寄与するのであることが必然的であるようだね。早い話が、おお、いともすぐれた人よ、もしよかったら、数に目を向けてくれ給え。もし君が名前の正しさに関して、君の同意と取りきめが何ほどかの権能〔決定力〕をもっていることを

C

認容しないのであるならば、いったいどこから、ひとつびとつの数に対して、それに似た名前をもって来てあてがうことができると思うかね[4]。そういうわけで、なるほどぼく自身も、名前が可能なかぎりは事物に似ていると

---

1 つまり、skrērotēs と言うべきだ、というわけである。

2 硬いもの、あるいは硬いという性質。いずれにせよ、事物である。

3 434D 参照。なおテクストは、諸写本および底本の読みである sklērotēs の1をrに訳者の一存で改めてみた。

4 数と数とは量的に違うだけで質的に違わないから。

信じるのだが、しかしながら類似性のもつ〔相似る事物と名前との間の〕この牽引力は、ヘルモゲネスのことばを借りるならば、(1)本当にもうやっとこさというほどの〔微弱な〕もので、名前の正しさを説明するためには、やはりこの取りきめという平凡卑俗なものをも付加的に用いることも止むを得ないのではないかと、ぼくは恐れているのだよ。だがそうはいっても、用いられるすべての、あるいは大多数の名前が〔事物に〕似ている——つまり、ふさわしい——ばあいには、その言明はおそらく能うかぎりは最美のものとなるだろうし、反対のばあいには最悪Dのものとなることだろうがねえ。

だが、これらの点は片付いたとして、もうひとつ次の点に答えてくれ給え。名前はわれわれにとってどのような性能をもっているのかね。そしてどのような益をもたらすと言うべきだろうか。

## 四二

**クラテュロス** 名前は教える〔教示する〕(2)のだと、ぼくには思えます、おおソクラテス、そしてこれは絶対的に言えることですが、名前を知るであろう人は、事物をも知るのです。

**ソクラテス** 君が言おうとしているのは、おおクラテュロスよ、多分次のようなことなんだろうね。すなわち、だれかが名前がどのようなものであるかを知ったときには——ところで名前は当の事物とまさに同じようなものであるE——その人は当の事物をも知ったことになるであろう。なぜなら、それは名前に似ているのであり、そして互いに似ているすべてのものについては、無論同じひとつの技術〔学問〕で足りるのであるからと。まさにこの意味において、君は、名前を知る人は事物をも知るであろうと言っているように、ぼくに思えるのだがね。

**クラテュロス** 実にそのとおりです。

**ソクラテス** まあ待ち給え。この、君が今言っている、事物教示の方法が、いったいどんなものなのか、見てみようではないか。つまり、他にも方法はあるのだが、これの方がもっとすぐれたものであるのか、それともこれ以外にはありもしないのかをね。君はどちらだと思うかね。

**クラテュロス** あとのようにだと、ぼくは思いますね。他に方法は全然なくて、これが唯一でもあり、最良でもあるのです。

436

**ソクラテス** だが、どちらだね、有るものの発見もまた、その同じ方法によるのかね。つまり、名前を発見した人は、名前がそれの名前であるところのかのもの〔有るもの〕をも、すでに発見してしまったわけなのだろうか。それとも、〔事物を〕探求し発見することは、別の方法でなされねばならないのであって、他方学ぶことはこの〔名前を通じての〕方法でなされるべきなのかね。

**クラテュロス** もちろん何よりも確かに、探求も発見も、同一のものに関するかぎり、この同じ方法によってなされるべきです。(3)

B

**ソクラテス** さあ、それでは、よく考えてみようではないか、おおクラテュロスよ。もしだれかが事物を探求

1 414C参照。

2 428E, 388B参照。ソクラテスも名前は教示用の道具だと言って来たのだが、彼のこの主張の意味はクラテュロスのそれと完全に同じではないのである。

3 対象が同一の事物であるかぎり、みずから発見するばあいも(他人から学ぶばあいと)方法は同じだ、といっているのであろう。

していた際に、名前に導かれて、それぞれの名前がどのようなものを意味するか考察するならば、どうだね、その人が欺かれる危険が少なくないことに、君は気づいているかね。

**クラテュロス**　どうしてですか。

**ソクラテス**　むろん、最初に名前を定めた人は、事物はしかじかのものであると彼が信じたところに従って、名前をもまたそれに似たように定めたのである。われわれが主張しているところによればね。そうではないかね。

**クラテュロス**　そうです。

**ソクラテス**　とすると、もしかの人の信じたことが正しくなくて、しかも信じたとおりに名前を定めたばあいには、彼について行くわれわれがどのような目に会うだろうと君は思うかね。欺かれるほかはないのではなかろうか。

**クラテュロス**　いや、それはおそらくそうではないのですよ、おおソクラテス。むしろ名前を定めた人は〔事物について〕知識をもっていて定めたのであることが、必然的であるように思うのですがねえ。そうでないと、ぼくがもうさっきから言っていたことですが、[1] それらは名前ですらないことになるでしょうからね。しかし命名者が真理〔世界の実相〕の把捉にあやまたなかったということの最良の証拠は、これだと考えて下さい。すなわち、もしそうでなかったならば、彼の命名したすべての名前が、かくも相互に相調和〔整合〕しているということは、決してありえなかったことでしょう。それともあなたは、すべての名前が同じもの〔原理〕に従って、同じもの〔目的〕をめざして生じたのであるとご自分で言っておられたとき、[2] このことに気づかれなかったのですか。

C

**ソクラテス**　いや、それはねえ、おおすぐれたクラテュロスよ、全然〔命名者のための〕弁護にはならないね。

D なぜなら、命名者が最初の第一歩を踏み誤って、それ以後のすべてをこれに合うように無理じいし、互いに相調和〔首尾一貫〕するように強制したばあいには――ちょうど〔幾何学研究の際にえがかれる〕図形の最初の微細で見えにくい部分が時折まちがっていて、それでもそれに続く残りの部分が、非常に多大でありながら、相互に一致するばあいのように――少しも不思議ではないね。だからねえ、だれであれ、どのようなことがらについてであろうと、それの始め〔出発点、原理〕が正しく置かれているかどうかという点に、その言論と考察の大半をふりむけなければならないのだよ。(3) そして始めが十分に考究された上で、はじめて残余の部分がそれに随順して現われてくるよう配慮すべきなのだ。

E しかしそれはそれとして、実際に名前が相互に調和しているのかしらん、ぼくには疑わしいねえ。なぜなら、われわれが先に論じたことを、もう一度考察しなおしてみようではないか。われわれが主張しているところでは、名前は、万有が行きつつあり運動しつつあり流れつつあるかのように、〔すべてのものの〕有りかた〔本質〕をわれわれに示してくれているのだ。そのように表示していると君に思えるのではないかね。

---

1 429C, 430A 参照。クラテュロスは、すでに反駁された自己の意見に依然固執しているわけである。

2 つまり、万物流動の思想に基づいて、それを教示する目的で、ということであろうか。ソクラテスがこのとおりのことを言った箇所はないが、401D あたりから、この立場で個々の名前の正しさを説明して来たわけである。なお、411C のソクラテスのことばを参照。

3 これは、真正の第一流の哲学者の要件のひとつであろう。アリストテレスは『天体論』第一巻第五章において、おそらく当対話篇のこの箇所を受けて、「真理からほんの僅かはずれて歩み始めた人々には、先へ進むとその僅かが千倍万倍になる」、「始めにおける僅少が結末において巨大となる」と言っている。

**クラテュロス** ええ、実に強くですね〔そう思えます〕。そしてしかも、正しく示しているのですよ。

**ソクラテス** ではそのうちから、まず第一にこの"知識"(epistēmē)[1]という名前をもう一度取り上げて、これがいかに両義的〔あいまい〕であるか、考察してみようではないか。すなわち、この名前は〔ぼくがすでに言ったように[2]〕われわれの魂が事物と共にぐるぐる運動することを意味しているようでもあるが、むしろそれ以上に、それ〔知識〕が魂を事物の上に(epi)立ちどまらせる(histēsi)ことを意味しているように見えるね。従って、〔頭の〕eを取り除いてpistēmēと言うよりも、語頭を現行どおりに言う方が、より正しいわけだ[3]。

次に"堅固な"(bebaion)だがね、これは何らかの土台(basis 基礎)の、従って静止の模造品であって、運動のではないようだね。

B 次に"探求"(historia)は、多分この名前自体から一目瞭然であるように、流れ(rhous)を止める(histēsi)ことを表わしているのだ。

それから"信頼できる"(piston)はもう疑いもなく"静止させている"(histan)を意味しているね。

次に"記憶"(mnēmē)だが、これが魂の内部における留まり(monē)であって、運動でないことは、まず万人の目に明らかだろうね。

他方また、君がよかったら、"誤謬"(hamartia)と"災難"(symphora)だが、これらは、もし人が名前について行こうものなら、あの〔すでに説明された[4]〕"理解"(synesis)や"知識"(epistēmē)やその他のすべての、善きものを表わす名前と同じものとなって現われることだろうね。

それからまだ"無知"(amathia)と"無節度"(akolasia)だって、これらに近いものであるようだね。なぜなら

C 一方は、神と共に行くもの(hama theōi ion)の歩み(poreia)であるようだし、また〝無節度〟の方は、これはもう明らかに、事物について行くこと(akolouthia)であるようだからね。

このように、〔君の主張からすると〕われわれが最悪のものを表わす名前だと信じているものが、最良のものの名前と極めて類似しているように見えることだろう。それからまた、このほかにもたくさん次のような名前を、労をいとわないならば、だれかが見つけることができるだろうと、ぼくは思う。つまり、それらから判断して、今度は逆に、命名者は、事物が行きつつあるのでも運動しつつあるのでもなくて、静止していることを示しているのだと、その人が考えるであろうような名前をね。

D **クラテュロス** でもね、おおソクラテス、あなたもごらんのように、大多数のばあいに命名者は前者〔事物が運動しつつあること〕を示していたのですよ。

**ソクラテス** で、それがどうだと言うんだね、おおクラテュロスよ。われわれは、まるで投票〔に用いられる小

---

1 すぐ前に、名前を知る人は事物をも知る(435D)とか、命名者は知識をもっていた(436C)などとクラテュロスが主張していたから「この名前」と言ったのである。

2 412A.

3 この箇所のテクストは412Aと同様に不確かであるが、一応シャンツ、メリディエなどに従って訳した。底本では次のようになっている。「〔epistēmē に〕e を挿入して he-peistēmē と言うよりは、むしろそれの始め〔語頭〕を現行どおりに言う——ただしeの代りにiを挿入する〔つまりepiistēmē とする〕——方が、より正しい。」

4 412A参照。hamartia は homartein(共に行く)から説明できるし、symphora は sympheresthai(共に運動する)から派生した語である。従って、クラテュロスの立場からすると、悪いものが価値あるものと同じものになってしまう。

石〕の数を数えるように、名前の数を勘定すべきなのかね。名前の正しさ〔根拠〕はその点にあるのだろうか。〔事物の運動と静止のうちで〕どちらにせよ、より多数の名前がさし示していると判明した方が、これこそ真実であるのだろうか。

**クラテュロス** いや、それも本当らしくはありません。

**四三**

438

**ソクラテス** 絶対にそういうことはないのだよ、おお友よ。それで、もうこの件[1]はこのへんで手放そうではないか。そしてまたもとの——そこから曲ってわれわれがここまで歩んできた——地点に帰ろうではないか。すなわち、先の議論のなかで、つい今しがた[2]君は——おぼえているかね——命名者は彼が命名した事物を知っていて〔知識をもっていて〕命名したのであることが必然的だと言ったのだが、どうだね、今でもやはり君にはそのように思えるかね、それともちがうかね。

**クラテュロス** ええ、今でもです。

**ソクラテス** そもそもまた、最初の〔第一次的な〕名前を定めた者も、知識をもっていて定めたと、君は言うのかね。

**クラテュロス** ええ、知識をもっていてです。

**ソクラテス** では彼は、事物を学んで知ったにせよ、みずから発見して知ったにせよ、どのような名前を通じて、そうすることができたのかね。というのは、最初の名前だってまだ定められていなかったのだし、他方われれ

B

われ〔君〕の主張するところでは、事物を学ぶことも発見することも、該当する名前の性状を学ぶか、みずから発見するかしないかぎり、不可能なのだからね。

**クラテュロス**　おっしゃることに一理あるように思えます、おおソクラテス。

**ソクラテス**　では、どんな方法によって彼ら〔命名者たち〕は知識を得て名前を定めたと、あるいは立法者となったのだと、われわれは言うべきだろうか。どんな名前もまだ定まっていず、したがって――もしも名前を通じてのほか、事物を学ぶことができないのであるならば――彼らが〔事物について〕知識を得ていないときにね。

C　**クラテュロス**　ぼくはこう思います。この件についての最も真実なる説明はね、おおソクラテスよ、最初の名前を事物に与えたのは、人間のよりももっと大きいある力であり、従ってそれらの名前が正しいのは必然的であるということです。

**ソクラテス**　おや、そうすると君の意見では、命名者は、あるダイモン〔英霊〕もしくは神でありながら、自己矛盾するふうに名前を定めたというわけかね。それとも君には、つい今しがたわれわれの言ったこと(3)とは全然無効だと思えるのかね。

**クラテュロス**　いや、むしろこれら〔相矛盾する名前〕の一方は名前ではないように、ぼくは思うのですがねえ。

**ソクラテス**　どちらの方がかね、おお、いともすぐれた人よ、静止に帰着する名前の方がかね、それとも運動

---

1　436 C sqq. の議論。
2　436 B～C.
3　436 E sqq.

に帰着する方がかね。というのも、今しがた言われたことからして[1]、多数少数で〔どちらであるかが〕決定されるのではないだろうからね。

D

**クラテュロス** ええ、確かにそれは、正当なやり方ではありませんからね、おおソクラテス。

**ソクラテス** すると、名前どうしが仲間割れをして、双方がそれぞれ自分たちこそ真理〔実相〕に類似するものだと主張するわけだから、この上はわれわれは何によって、あるいは何に訴えて、判定すべきなのだろうか。というのも、これらとは別の名前に訴えることはできないだろうからね。なぜなら、そんなものは存在していないのだから。むしろ名前以外の何か別のものを求めなければならないことは明らかだ。つまり、名前に頼らないで、これらのどちらが真正の名前であるかを――無論、有るものの真実の姿を示現することによってだが――われわれに明かしてくれるようなものをね。

E

**クラテュロス** ええ、ぼくにもそう思えます。

**ソクラテス** してみると、どうやら、おおクラテュロスよ、名前抜きで有るものを学ぶということが可能であるらしいね。もしも今言われたことがそのとおりであるとするならばだが。

**クラテュロス** そのようですね。

**ソクラテス** では、他の何を通じて、有るものを学ぶことが可能だと、君はなお期待するのかね。それはほかでもなく、見込みも大きいし最も正当でもあるものを通じてではないだろうか。つまり、〔有るものの〕お互いどうしを通じて――それらが何らかの点で互いに親近性をもっているならばね――また、それら自身を通じて、ではないだろうか。なぜなら、それら〔それぞれの有るもの〕とは別で違っているものだったら、それらを表わさな

439

いで、何か別の違ったものを表わすことになるだろうからね。

**クラテュロス**　おっしゃることは本当であるように思えます。

**ソクラテス**　まあ、待ってくれ給え、ゼウスにかけて〔お願いだから〕。他方名前にしても、うまくつけられたものは、かのもの——名前がそれらの名前としてつけられているところのもの——に似ているのであり、当該事物の模写品であるということを、われわれは実に再三再四同意した(2)のではなかったかね。

**クラテュロス**　そうです。

**ソクラテス**　では、一方において、名前を通じて可能なかぎりは事物を学ぶことができるし、他方また事物自身を通じてもできるとするならば、どちらの学び方が、よりすぐれた、より精密なものなのだろうか。つまり、模写品に依ってこれ自身がうまく似せられているかどうかを学ぶとともに、またこれがそれの模写品であったところの実物をも学ぶということの方がそうかね。それとも、実物に依って、これ自身を学び、かつこれの模写品

B

が似つかわしく作り上げられているかどうかをも学ぶことの方がかね。

**クラテュロス**　それは実物に依る方であるのが必然だと、ぼくには思えます。

**ソクラテス**　うん、それならば、もろもろの有るものをどのような方法で学ばなければ、あるいは発見しなければならないかという問題は、あるいはぼくや君の力に余ることかも知れないね。だが、この点が合意されただ

1　437D.
2　430A(三九章)以下一貫してクラテュロスはこの点を認めている。なお433C, 434A参照。

けでも、満足すべきことなのだ。すなわち、有るものを、名前に依ってではなくて、むしろ名前に依るよりもはるかに強く、それらをそれら自身に依って学ぶべきでもあり、探究すべきでもあるということがね。

**クラテュロス** そのようですね、おおソクラテス。

**四四**

C **ソクラテス** うん、それならばもう一つ次の点をわれわれは考察しようではないか。それは、これらの大多数[1]の、同一のことを指向している名前が、われわれを欺くことのないようにするために〔考察しておきたいの〕だがね。というのは、もしこれらの名前を定めた人たちが、万物は常に行きつつあり流れつつあると本当にそう考えて命名したのであるならば――というのは、ぼくには実際彼ら自身もまた[2]〔もっと後世の、はっきりとそう言った詩人や思想家と同様に〕そのように考えていたらしく見えるのだがね――そして他方、事実〔万有の実相〕はもしかしたらそうではないのであって、むしろ彼ら自身がいわば一種の渦巻きの中に落ち込んで、くらくらと目がくらんだばかりでなく[3]、われわれまで巻き添えにして同じ所に引きずり込んだのであるならば〔あの大多数の名前がわれわれを欺むく恐れがあるのだから〕ね。そこで、さあ、驚嘆すべきクラテュロスよ、ぼくがしばしば夢見てきたものを[4]、考察してくれ給え。どちらだね、何かそれ自体で美しいものとか[5]、それ自体で善いものとか、そ

D の他有るもののそれぞれについても同様だが、そのようなものが存在すると、われわれは主張すべきかね、それとも否かね。

**クラテュロス** ぼくにはね、おおソクラテス、存在すると思えます[6]。

**ソクラテス**　うん、それならば、かのものそのものについて、われわれは考察しようではないか。ある顔だとか、何かそのようなものが、美しいかどうかだの、すべてこれらのものが流動しつつあるように思えるかどうかだのをではなくてね。そうではなくて、⑺美しいものそれ自体〔美そのもの〕――これをこそわれわれは語ろうではないか――は、それが〔現に〕あるようなものとして常にあるのではないかね。

**クラテュロス**　ええ、必然です。

**ソクラテス**　では、仮にもしそれが不断にわずかずつこっそり逃げ去って〔流動して〕いるとするならば、いったいわれわれはそれに向かって正しい名称で話しかける〔それを正しく規定する〕ことができるだろうか。第一に、

---

1　437Dでクラテュロスが言った「大多数の名前」。なお「同一のこと」とは、もちろん、万物の運動、流転。

2　テクストはB、T写本の通りに読む。解釈は大体シュタルバウムに従う。特にクラテュロスが代表するヘラクレイトス学派に対比して、「命名者たちにしても」と言われているのであろう。

3　411Bでもソクラテスは、大古の命名者たちと現代の知者たちに対して同様な非難を浴びせている。

4　なぜ「夢見る」と言われたのか、いろいろな解釈がある。⑴イデア論を唱えることによってソクラテスが世人や喜劇作家たちから嘲笑されたことを表わす。⑵推論によって明確に把捉されたものではなく、おぼろげに感知されたものであるから。⑶単なるアイロニーの一形式、あるいは謙遜した言い方にすぎない、など。あるいは、いわゆるこの世の現実に対比して言うならば、イデアは夢の如きものということであろうか。

5　美自体、美のイデア。

6　クラテュロスが簡単に承認したのは、プラトンがはやく対話を完了させるための便法にすぎないと解する説（ヴィラモヴィッツなど）がある。もっとも、クラテュロスは各国語の差異を超越する名前（の意味）のようなものを認めている（383A～B）ようであるので、そのような立場から美そのものの存在を認めたのかも知れない。

7　以下、構文が変わる（間接疑問文になるべきものが直接疑問文に移行している）。

かのものであることを、それから、そのようなものであることをね。それとも、われわれが言う瞬間に、もうそれは別のものとなり、身をかわして逃げ去っていて、もはや言われたとおりのものではないことが必然だろうか。(1)

**クラテュロス**　必然です。

E

**ソクラテス**　では、いついかなるときにも同一状態にないものが、どうして何か〔何らか一定のもの〕であり得るだろうか。〔不可能だ。〕というのも、もしそれ〔不断にわずかずつ変化していると仮定されたもの〕がいつかある時に同一状態にあるならば、少なくともその時間内だけは全然変化しないわけだし、またもしそれが常に同一状態にあり、同一のものであるならば、そのようなものがどうして変化したり動いたりするはずがあるだろうか。自己自身の姿〔形相〕を少しも失っていないのだからね。

**クラテュロス**　ええ、決して〔そんなはずはありません〕。

**ソクラテス**　いや、そればかりか、そのようなもの〔決して同一状態にないもの〕は、何者によっても認識されえないことになるだろうね。なぜなら、認識しようとする者がそれに近寄った瞬間に、それはもう別のもので別の性質のものになっているので、それがどのようなものであるのか、あるいはどのような状態にあるかは、もはや認識されえないだろうからね。そして、いかなる認識も、それが認識しようとする対象がいかなる一定の性状をもたないならば、これを認識することはないだろうからねえ。

440

**クラテュロス**　おっしゃるとおりです。

**ソクラテス**　そればかりか、認識すら存在しないと主張するのが理屈にかなっているだろうね、おおクラテュロスよ、もしすべての物が変化しつつあり、何ものもとどまっていないとするならばね。なぜなら、このもの自

身――つまり認識――にしてからが、もしこれが認識であることから変化しないならば、認識は常にとどまっており、認識であることになるだろうからね。他方もし認識の形相そのものまでも変化するならば、それは認識とは別の形相〔別種のもの〕に変化して、それと同時にもはや認識ではないことになるだろう。またもしそれが常に変化しているのであるならば、常に認識でないことになるだろう。かくして、この論(2)からすると、認識するであろうものも、認識されるであろうものも、存在しえないことになるだろうね。しかし、もし一方において認識するもの〔認識の主体〕が常に存在しており、他方において認識されるもの〔客体〕が常に存在しており、美が存在し、善が存在し、もろもろの有るもののそれぞれが〔常に〕存在しているのであるならば、われわれ〔ぼく〕が今あげたこれらのもの(3)は流動にも運動にも全然似ても似つかぬものであることが、ぼくには明白だね。

さて、この点について事実はいったいこのとおりであるのか、それともあのようで、すなわち、ヘラクレイトスに従う人たちや他の多くの人たち(4)が言っているようであるのか、これを見きわめるのは、おそらく容易なことではないだろうねえ。だが、そうではあっても他方また、次のようなふるまいも、十分に分別のある人間のすることではないように思うのだがねえ。すなわち、自分と自分の魂とを世話〔教育〕することを名前に委ねてしまい、それら〔名前〕とそれらを定めた者たちを信頼しきって、自分が何ごとかいっぱしのことを知っているかのように

1　実際歴史上の実在人物としてのクラテュロスは、このような見解に到達して、何ものについても何ごとも語らず、ただ指を動かしていただけであるという。解説参照。

2　すなわち、万物が変化しつつあるという論。

3　直前で言われたもの、すなわち、認識の主体と客体、美、善、その他の有。

4　プロタゴラス、エウテュデモス、ホメロス、昔の命名者など。402B～C参照。

自信たっぷりに主張すること、(1) そして自分自身をも〔すべての〕有るものをも断罪して、何もののいかなる点も健康〔健全〕ではなくて、すべて(パンタ)が泥〔陶土〕のように流れつつある(レイ)と責めること、そしてまるでもう

D 何のことはない、カタル(2)で病んでいる人間同然の状態に事物もまたあるのであり、万物が流出物(3)とカタルで悩まされているのだと思うこと、だがね。というわけで、おおクラテュロスよ、事実はもしかしたらこのとおりかも知れないし、もしかしたらそうでないかも知れない。だから君は、勇敢にそして十分に考察しなければならないのだ。安易に受け入れてはいけないのだ。なぜなら、君はまだ若くて、力盛んな年代にあるのだからね。そして考察した上で、もし発見したならば、ぼくにも分けて〔教えて〕くれ給え。

**クラテュロス** ええ、それはそう致しましょうとも。ですが、よく承知して下さい、おおソクラテスよ、ぼく

E は現在ですら未考察の状態ではないのです。考察し、労しているぼくに、事実はヘラクレイトスが言っているあのとおり(4)であるように、見えるのです。

**ソクラテス** うん、それならばまた今度、君が帰って来たときにね、おお仲間よ、ぼくを教えてくれ給え。だが今は、君の支度も整っていることだし、田舎へ向かい給え。(5) こちらのヘルモゲネスも君を送って行くだろう。

**クラテュロス** そう致しましょう、おおソクラテスよ。しかしあなたも、次はいよいよこの問題(6)を考えて下さるよう、なお努めて下さい。

1　クラテュロスの態度を念頭において言っているのであろう。直接かかわりはないかも知れないが、384Aのヘルモゲネスのことばを参照。

2　頭の内部から体液(鼻水)が流れ落ちること。カタル(ka-tarrous)の字義は「流れ下ること」。

3　医学的意味での流出物、体内から排出される液状のもの(鼻水、汗水その他)であろう。

4　万物流動説をいう。本対話篇で扱われた名前についての問題は、一応クラテュロスも了承した形になっている。

5　田舎にもっている農地や家屋敷などの管理に出かけるのであろうか。

6　万物が流動しているか、どうかの問題。

# テアイテトス

――知識について――

田中美知太郎訳

## 登場人物

エウクレイデス
テルプシオン
ソクラテス
テオドロス
テアイテトス
（ほかにソクラテスという名の青年など同座、発言せず）

142

**エウクレイデス**　ちょうどいま、テルプシオン、君はいなかから来たところなのですか。それともさっきから？

**テルプシオン**　ええ、かなり前から来ていたのです。それに、貴君をアゴラー(1)中探していたのですが、見あたらないので、おかしいと思っていたのです。

**エウクレイデス**　それはそのはず、市中を探したって僕はいなかったんですから。

**テルプシオン**　おや、するといったいどこにいたのです。

**エウクレイデス**　港(2)へ降りて行くわけだったんですがね、途中でテアイテトスに出会ったのですよ。コリントス(3)から、陣地を離れて、アテナイへ運ばれて行くところでした。

**テルプシオン**　運ばれてですって？　それは生きててなのですか、それとも、もう亡くなってしまってのことなのですか。

B

**エウクレイデス**　生きててなのですが、それこそもうやっと生きているというだけのことでした。何しろ、創(きず)を何か受けていて、それだけでもむずかしいのに、軍隊の中に発生したあの病気にやられて、むしろその方でいっそういけなくなっているんですからねえ。

**テルプシオン**　あの病気って、まさか赤痢ではないでしょうね。

**エウクレイデス**　ところが、それなんですよ。

**テルプシオン**　貴君のお話だと、あの人は危険状態にあるというわけですね。ああ何という人がねえ！

**エウクレイデス**　器量も力量もすぐれたりっぱな人物(4)がですよ、テルプシオン。ちょうどまた、どうでしょう！　そのことでは今も僕はある人たちから聞かされていたのです、戦場でのあの人のふるまいを大へん誉めていたんですよ。

1　アゴラーは本来は「集会」を意味する言葉であったが、後には集会の場所を指すことになる。はじめは公的な集会が主になったと考えられるが、後には市民たちがいろいろな用事で集って来る場所となった。「市場」という訳語があてられるような経済的機能も重要性を増し、市民の日常生活に欠くことのできない中心的な場所とも見られるだろう。いわゆる中央広場として、アクロポリスと並んでギリシア都市を特色づけるものと言える。

2　ニサイア港を指す。メガラから約二・四キロのところにある。

3　コリントスはギリシア北部とペロポンネソス地方を結ぶ地峡上に位し、その北方に隣してメガラがあった。またアテナイを首都とするアッティカはメガラを介してこのコリントス地方と相対するところにあった。ここでテアイテトスが参加したと言われているコリントス付近の戦いについては、テバイのエパミノンダスに対する、前三六九年のそれとする学説が有力である。

「解説」冒頭の「登場人物」テアイテトスの項参照。そしてこの三六九年にはアテナイは二回コリントスの地方へ軍を出している。その一回目には別に大衝突はなかった模様である。その第二回はエパミノンダスが奇襲を用いてアテナイ・コリントス軍の陣地を突破し、友軍たるアルカジア勢に合流したときに戦闘が行なわれたのでテアイテトスが傷ついたのはおそらくこの時の戦闘においてであろう。

4　原語「カロス・テ・カイ・アガトス」というのは君子とか紳士とかいうような特別語で、適当な訳語がないから説明的に訳しておいた。それは君子や紳士と同様、ただりっぱな身分の人という位の意味(ヘロドトス『歴史』第一巻(三〇)、クセノポン『ギリシア史』第五巻(三の九)、アリストパネス『騎士』一八五行、他)から、もっと深い意味のもの(プラトン『定義集』412E、アリストテレス『大道徳学』第二巻(1207ᵇ23))までいろいろある。

C

**テルプシオン**　それがまた、決して意外とするに当らないことなのです。むしろそういうところのない人だとしたら、その方がよほど不思議です。だがしかし、どうしてあの人はこのメガラ[1]に泊ろうとしなかったのです。

**エウクレイデス**　うちへ帰るのを急いでいたんですよ。僕としては頼んでもみたし、勧めてもみたんですが、しかしその気にはなってくれませんでしたからねえ。それでですね、あの人を見送って、その帰りに、思い出して驚いたことがあるんですよ、ソクラテスのことなんですがね、他のことでもむろんそうでしたけれど、特にあの人について言われたことがいかにも予言になっているのでしてねえ。というのは、あれは亡くなられる少し前[2]のことだったと僕には思われるんですが、あの人にお会いになったことがあるのですよ。あの人はまだ一人前にならない若さでしたがね。そしてあの人と仲よしになられて、いろいろ問答をされた結果、あの人の生まれつきの心にくいほどなのをたいへんめずらしく思われたらしいんです。僕にも、アテナイへ行った時、あの人と問答

D

なすった——それこそたいそう聞きがいのある——議論の一部始終を聞かせてくだすって、「テアイテトスは、相当の年輩になりさえしたら、きっと屈指の人物になる、それは万々間違いなしだ」と言われたものです。

**テルプシオン**　それに、どうやらその言われたことは本当だったようですね。ですが、それはそれとして、そのいろいろな議論というのはどんなのでした。すっかり聞かしてもらえるでしょうね。

**エウクレイデス**　いやとてもそれは——神明(ゼウス)に誓って申しますが——だめです。とにかくそう口に任せてやれるものではないんです。ただしかし、あの時僕は家へ帰るとすぐに自分の心おぼえを書き留めておいたのです。

143

そして後から暇をみては、思い出したところを書きつけることにしていました。その上、おぼえの不確実なところがあれば、アテナイへ行く機会のあるたびごとに、もう一度ソクラテスにお尋ねして、そしてこっちへ帰って

来てから、さらにまた自分のを直すことにしていました。その結果は話のほとんど全部を僕は書き物にしてしまったのです。

**テルプシオン** 本当にね！ 前にも貴君から聞いたことがありますよ。そしてその上また正直な話、それをちゃんと見せて下さいとお願いするつもりでいつもいたのですが、つい今日までのびのびになってしまったのです。が、それはまあともかくとして、どうです、今から僕たちでひと通り見るということにしては？ 別にさしつかえないでしょう？ なんにしても僕としては、いなかから来たところなんですから、休息も欲しいのです。

B

**エウクレイデス** いや、確かにそりゃ僕自身だって、エリネオスまで[3]テアイテトスの見送りをしたのですから、

1 メガラはこの会話が行なわれている場所。すでに、メガラ市を中心とするメガラ国(メガリス)はコリントス地方とアッティカとの中間にあって、コリントスと同じように南北ギリシアを結ぶ交通の要地に当り、東西にサロニカ湾とコリントス湾を控えていたので、早くから商業が盛んとなり、アッティカとサラミス島を争って二度の戦争をしている。ペロポンネソス戦争ではしかしながら、アテナイ軍の侵入によって大打撃を受けた。そしてその後はアテナイ・スパルタ・テバイの三強国の間に介在して賢明な平和主義的外交政策をとり、イソクラテスがその『平和論』183A～Bにおいて賞讃しているような繁栄と安定とを楽しんでいた。この会話の時代などもそれであったと思われる。

2 本篇の四四章によると、それはメレトスの告発に対してソクラテスがバシレウスの役所に出頭する当日をさす。

3 これはメガラ(もしくはニサイア港)の付近からアテナイの方へ二二キロほど行くと、すでにアッティカ領内のエレウシスを過ぎてそこに流れるケピソス河へ達することになるが、エリネオスはその付近の地点なのである。昔かの冥府王プルトスがデメテルの娘ペルセポネを攫ったのはここであるとも言われる。パウサニアス『ギリシア記』第一巻(三八の五)参照。エウクレイデスがここまでテアイテトスを見送ったとすると、往復で相当歩いた勘定になる。なお地名については、多くの訳書はエリネオンという名称を用いているが、ここでは上記パウサニアスの『ギリシア記』英訳における J. G. Frazer および W. H. S. Jones の呼び方を採用した。

(143)

休息は不可ならずというところなんです。とにかくまあ行きましょう。そして僕たちは休息しながら、同時に召使いの者に読ませて聴くとしましょう。

**テルプシオン**　ああそれは妙案です。

**エウクレイデス**　書物というのは、テルプシオン、ほかでもない、これなんですがね、ただ中味の話の書き方を僕はこういう風にしたんです。つまり実際のとおりだと、ソクラテスが僕を相手に一部始終を語っておられるところを書くことになるんですが、僕はそうしないで、ソクラテスがその問答相手だと言っておられた、幾何学 c 者のテオドロスとわがテアイテトスとを相手に問答されることにして書いてみたんです。とにかく実際の話と話の間に入る説明というものは、それがソクラテスの自分自身について言われるいちいちの場合のもの、たとえば「そこで僕は言った」とか「そして僕は言った」とかいうようなものにしても、あるいは他方また応答する者についての、承認したとか、同意しなかったとかいうのにしても、それは書き物にすると厄介なものなんですが、この書物ではまさにそういう面倒のないようにと思って、そのために僕はその種のものを抜き去って、ソクラテスが直接相手の人々と問答される体(てい)に書いたのです。

**テルプシオン**　そしてまたそれで何も不都合はないわけですよ、エウクレイデス。

**エウクレイデス**　まあそれはとにかく……、おいおい！　この本を渡すから、読んでおくれ。

## 二

D

**ソクラテス**　これで私がキュレネ(1)のことの方を余計に心配しているのだったなら、テオドロス、あなたに私はあそこのことやまたあそこの人たちについて、誰かあそこの若者の中で幾何学とか、あるいは他の何か知識を求めることとかに、心を打ち込んでいる者があるかどうかということを煩(うるさ)くお尋ねしたことでしょう。ところが事実はすなわちこれに反して、私の大事に思っているのは、あそこの人たちよりはむしろこの地の者どもなのでして、つまりまた、私がぜひ知りたいと心がけているのも、われわれのところの若い者どものうちでは誰が大成の見込みある者なのかということの方なのです。このこととなると、私は自分でもできるだけ注意を怠らぬようにしていますが、またそればかりでなく他の人にも、それが若い者の間に人気のある人であると見れば、聞いてみ

E

ていることなのです。言うまでもなく、あなたの身辺にはすくなからぬ若者がついている。そしてまたそれはもっともなことでもある。なぜなら、その他の理由はしばらくおき、特に幾何学というものがそれだけの値打ちをあなたにつけているのだから。事実そういうわけで、もし誰か話すだけの値打ちのある者に出会われたのなら、

---

1　キュレネはギリシア人のアフリカ植民地中最も重要な都市。大体のところギリシア本土の真南に当り、今日のリビアの内でエジプト寄りに地中海へ突出した部分の中にある。海岸から約一六キロを離れた高地の上にあって、他のギリシア都市と同様、別にまたアポロニアという港をもっていた。南が山地になっているので、沙漠の猛威も避けられ、北は海に面していたので、気候も割に温和であった。産物も豊富で、エジプトやギリシア本土との貿易交通も盛んであったので、前六〇〇年代後半テラ島のドリス系ギリシア人の移住以来しだいに繁栄し、前五〇〇年代中葉さらに他の一般ギリシア人の移住があり、政治も始めは王政であったが前四〇〇年代の中頃には共和制となっていた。文化の発達もまたこれに伴っていちじるしく、ヘロドトス(『歴史』第三巻(一三一))にはキュレネ医学の盛名が語られている。また人も知るごとく、小ソクラテス派と呼ばれるものの中にはアリスティッポスのキュレネ学派がある。

その話をお聴きしたいと思います。

**テオドロス**　ええ、それがまた実に、ソクラテス、お国の人たちの中で私がどんな児に出会ったか、あなたにしてもたいへん聞きがいがあり、私にしても大いに話しばえのするのがあるのですよ。それも、これがもし見目よい児であったなら、私はその児におぼしめしがあるように誰かに思われるのもいやだから、まさにそのために熱をいれて話すのをはばかったことでしょう。ところが実際はべつに器量よしというわけではないのでして、そのまことにこう申しては失礼だが、鼻の上向いているところといい、目の飛び出ているところといい、あなたに似ているのですよ。(1) もっともそれはあなたほどではありませんがね。ですから、私ははばかりなくお話するのです。いいですか、私はこれまでにそれは非常に多くの人々と近づきになったのですが、まさにそのこれまでに出会ったことのある人たちの中で、こんなにも驚異すべき好天稟をもった者を私は請合って未だかつてひとりも認めなかったのです。それというのは、他の人には及びがたいほどものわかりがよくっていて、他方また穏やかなことも格別で、しかもその上男性的気魄(勇気)では誰にもひけをとることのないというようなのは、もしこの児を識らなかったなら、私としてはむろん現実にあるものとは思わなかっただろうし、またこの児を識った今日といえども、私はこれが日常普通の現実としてあるのをば見ないのです。むしろこの児のような鋭敏な頭脳の持主であって、才覚もよし物覚えもよしという者になると、多くは気分の方でも敏感なもので、(2) 底荷のない船のようにむやみと突進して、性情は勇といわんよりも狂に近きものがあるのです。またこれに反して重厚な者はというと、学問の方面が何となく遅鈍で、物忘ればかり多いものです。ところが、この児の学問研究に向かっているのを見ると、ちょうどそれは音もなく流れる香油の流れを見るようであって、一面は非常に落着いた穏やかさを保

ちながら、他面それはいかにもすらすらと蹉跌なく進行して、相当の成績をあげるから、見る人をして「これをこの齢でこんなに仕上げているのか」と驚歎させることになるのです。

**ソクラテス**　これは耳寄りなことをしらせてくだすった。だが、誰のところの息子なのでしょうかね、それにまたこの国の者でそういうのがいたですかねえ。

**テオドロス**　さあ、それは聞いたのですが、覚えていません。しかし、いいことがあります。というのは、あ C れ、あのこちらへやって来る人数の中で、真中にいるのがその児なのです。そういえば、今しがた外のドロモスで[3]、あれも、あれの仲間と見えるこの人たちも自分らの身体に香油を塗っていましたっけが、今度は塗り終えてこちらへやって来るところだと思います。とにかく、よく見て下さい。あの児がわかるかどうか。

---

1　ソクラテスの容貌については『饗宴』215 A sqq. 参照。テアイテトスについては本篇185E, 209C参照。鼻は凹鼻、低鼻、獅子鼻などといろいろに訳される。その特質についてはアリストテレス『形而上学』第六巻($1025^b31$)、第七巻($1037^a30$)参照。目については原語はいわゆる出目という意味のほかに、なおまたむしろ目と目との間が飛びはなれているという意味にも取られるのではないかとキャンベルは言っている。ただし、クセノポン『饗宴』(五の五)参照。なお「こう申しては失礼だが」に当る句のかかりは、「器量よしではなくって君に似ている」という全文にかかるものと解される。それは間接にソクラテスの不器量を言いたてることになるから詫びを言ったのである。

2　補注B1(四〇六ページ)を見よ。

3　このテオドロスの言葉からわれわれは、かれらがどこでこの話をし合っているのかを想像することができるように思う。すなわちドロモスの文字通りの意味は走り場であって、それは体操場(ギュムナシオン)や相撲場(パライストラ)に付属するものと考えられるからである。この場合有力な候補者としては、リュケイオンの体操場などが挙げられるであろう。そこでテアイテトスたちが身体に香油を塗っていたとあるが、後代の完備した体操場は脱衣場とか香油塗り場とか浴場とかいうものをそこにもっていたようであるから、ここでも何かそれに相当するものがそのほかのドロモスにあったのであろう。

**ソクラテス**　わかります。あれはスゥニオン区のエウプロニオスのところの息子ですよ。そしてそのエウプロニオスというのが、まったくのところ、あなた、ちょうどあなたが今あの児についていろいろお話しなすったような性質の男でしたよ。またそのほか評判もいい方でした。確かその上に財産も大へんたくさんのこしたはずです。だが、あの児の名前は私は知りません。(1)

D

**テオドロス**　テアイテトスというのが、ソクラテス、あれの名前です。それからその財産のことですが、それはしかし誰か後見の者どもがめちゃめちゃにしてしまったらしく私には思われるのです。しかしそれでも、あれは金銭に執着のない大まかな性質でして、この点でも感心な者なのです、ソクラテス。

**ソクラテス**　あなたのお話だと、あの男はいかにも上品な人柄なんですねえ。では、どうぞ、あれにここへ来て私のそばに坐るように言ってください。

**テオドロス**　そうしましょう。……テアイテトス！　こちらへおいで、ソクラテスさんのところへ！

**ソクラテス**　……いやまったくなのさ、テアイテトス、どうか、そうしてくれたまえ、ちょうどそれは僕が僕自身をどんな顔をしているかよく見てみようというためなんでねえ。というのは、テオドロスさんが僕は君にそっくりの(似た)顔をしていると言われるもんだからね。だが、待てよ、いま僕たちふたりがおのおのリュラの琴をもっているとして、このテオドロスさんがこれは同様の(似た)調子(音律)に合わされていると言われるとしたら、どっちかね、われわれはすぐにそのままそれを信じてるだろうか、それともその言われることが、音楽の心得ある人としてのそれであるか否かを一応調べてみるだろうか。

E

**テアイテトス**　調べてみることでしょう。

**ソクラテス**　で、もし音楽の心得ある人とわかれば、その言われるところに従うけれども、もしそうでなかったとしたら、信じようとはしないのではないかね。
**テアイテトス**　はい、それに違いありません。
**ソクラテス**　うん、ところが今は、僕の思うに、何か顔の類似がわれわれの問題であるとすると、見てみなければならないのは、テオドロスさんのことばは果して肖像画の心得ある人としてのそれであるか否かということでなければなるまい。
145
**テアイテトス**　ええ、私にはそう思われます。
**ソクラテス**　では、そもそもテオドロスさんは肖像画の心得がある人なのかね。
**テアイテトス**　いいえ、少なくとも私の知っている限りでは、そうではありません。
**ソクラテス**　果してまた幾何学の心得もない人なのだろうか。
**テアイテトス**　とんでもないことです、ソクラテス、何がどうあってもむろんそれの心得がある人だということは動かないと思います。
**ソクラテス**　そもそもまた天文、算術、音楽など、いやしくも教養に関係する限りのものは、これを心得ておられるというわけなのかね。

---

1　誰のところの子かということを知りながら、その子自身の名前を知らぬということは、ちょうどその苗字を知っていて、その名前を知らないという場合のようなもので、『リュシス』204Eにも事情は少し違うけれども同様の場合がある。

**テアイテトス**　はい、すくなくとも私はそう思います。

**ソクラテス**　したがって、その言われることが、何か賞讃の意味であるにせよ、また非難の意味であるにせよ、僕たちは肉体の何かの点で似かよっているというのであるならば、テオドロスさんのことを気にとめたりするのはぜんぜん無意義なことだ。

**テアイテトス**　ええ、たぶんそうかもしれません。

B

**ソクラテス**　しかしながら、その賞讃が僕たちふたりのどちらかの精神にかかり、それのもっている美点、すなわちその知恵(智慧)のあること(賢いこと)などに向けられているならば、どうだろう？　その賞讃された者をよく見るために自分から努力するということは、その賞讃を聞いた者にとって、そもそもそれだけの意味があることなのではないだろうか。また、自ら努めて自分というものをちゃんと見てもらうようにするということは、その賞讃された者にとって、それだけの意義をもつことなのではないだろうか。

**テアイテトス**　ええ、とにかくそれは意味のあることです、ソクラテス。

## 三

**ソクラテス**　それならば、いまがちょうどその時なのだ、愛するテアイテトス、君はちゃんと見せ、僕はよく見るというその時なのだ。というわけは、テオドロスさんが僕に向かってその賞讃を聞かせてくだすった人々というものは、よその人もこの都の人もそれはもうたくさんの数にのぼるのだが、今さっき君が受けたほどの賞讃を受けた者は請合ってまだひとりもなかったからなのだ。

C

**テアイテトス**　ええ、それなら結構なんですが、ソクラテス。しかしうっかりはできません、テオドロスさんのそうおっしゃったのは冗談かもしれませんからね。

**ソクラテス**　いや、そういうのはテオドロスさんのお人柄ではないよ。とにかく、それよりは、こちらのおっしゃったことは冗談かもしれんなどという口実で、いったん認めたことを引っこめたりしないようにしてくれ給え。そんなことをして、むりにもテオドロスさんに証人に立っていただかなければならんようなことになっては、それこそよくないからね。というのは、どうせその場合テオドロスさんに対して偽証の訴えをする者はひとりもないだろうからね。まあ、それよりは、何もこわいことはないのだから安心して、いったん認めたところに踏みとどまるようにしてくれたまえ。

**テアイテトス**　ええ、とにかく、あなたのお考えがそういうことですなら、そうしなければなりますまい。

**ソクラテス**　では、ひとつ僕に言ってもらおうか。君はテオドロスさんのところから、思うに、何か幾何学のことを学んでいるのだろうね？

**テアイテトス**　はい、そうです。

D

**ソクラテス**　また天文や音律や算術などに関することもなのかね。

**テアイテトス**　はい、〔わかるようになりたいと思って〕勉強だけはしております。

**ソクラテス**　そして僕もまたじつは、君！　それなのさ。このテオドロスさんのところはむろんのこと、また、これらの何かに通じている人だと思えば、そのほかの人たちからもなのだ。ただ、それだけれど、困ったことに、これらについてはほかのことはほどよくいっているのだが、少しばかりわからないことがあってねえ、それをひ

とつ君やここにいる諸君の御協力を仰いでぜひとも見てみることにしたいのだ。まあ、それでは僕に言ってもらうとしようか。いま「学ぶ」ということを言ったが、これはそもそもその学ぶ事柄に関して一段と知(知恵)者になることなのではないか。

**テアイテトス**　いかにもそれに違いありません。

**ソクラテス**　うん、ところで、この知者が知者であるのは、何はさておき、知(知恵)があるからだろうと思うのだが。

**テアイテトス**　はい、そうです。

E

**ソクラテス**　ところで、これは何も知識と異なるものではあるまい?

**テアイテトス**　とおっしゃるのは、どんなものがなのでしょうか。

**ソクラテス**　いまいった知がなのさ。つまり、何かの識者である者は、またそれの知者でもあるのではないか。

**テアイテトス**　ええ、それに違いありません。

**ソクラテス**　したがって、知識も知も同じものではないのか。

**テアイテトス**　はい、同じものです。

**ソクラテス**　ところで、僕がわからないで困っているというのは、ちょうどそれなのだ。つまり、まさに知識であるところのもの、それはそもそも何であろうかということが、僕には自分だけではじゅうぶんに把握することができないでいるのだ。ところで、さあ、どうだね、われわれは果してそれを言えるだろうか。諸君の主張では、それは何となるのかね。誰ぞわれわれの中でまず口を切ってくれる者はないだろうか。だが仕損じはいかん

よ。仕損じる者は、そして誰でももし自分の番にそれぞれ仕損じをするならば、毬遊びをするこどもたちのいわゆる「驢馬となって下に控える」[1]としなければならんだろうよ。そして最後までもし仕損じなしに残る者があるなら、それは僕たちの「王」となって、何でも好きなことについて答えをわれわれに課してよいということにしよう。どうしたのだ？　君たちは黙っているじゃあないか。よもや何かこれは、テオドロス、議論好きのあまり、私は無作法なことをしているのではないでしょうね、私としてはわれわれが問答によって互いに親しい仲となり、口をきき合う(合同の)間柄になるようにしたいと努力しているだけのことなのですがね。

B **テオドロス**　いや、ちっとも、ソクラテス、そんなことは無作法ではないでしょう。しかしあなたに答えをするのは、この児たちの中から誰かにさせて下さい。なぜなら、私はこういうふうな言論の仕方には不慣れだし、べつにまた今さら慣れるようにする齢でもありませんが、しかしこの人たちにはそれがかっこうのようだし、またじょうずになるのもずっと早いでしょうから。いや実際「何ごとにも上達は若い時代のこと」ですからなあ。まあ、とにかくそれよりは、始めの通り、テアイテトスを手放さないで、問をかけて行かれるのがよいですよ。

**ソクラテス**　ほらね、聞いているだろう、テアイテトス、君はテオドロスさんの言われることを。そして君と

---

1　古注によると、これは毬遊びの児らの用語から発して、一般に敗者について用いられるに至った特殊の言い方であるという。そして子供たちはまた、ここのソクラテスの言葉にもあるように、その勝者を王と呼んで、その指図には何でも従う定めであったという。ところで、その毬遊びとはどんなものであったろうか。ポルクスの『オノマスティコン』第九巻(一〇三―一〇六行)によると、それにはいろいろあって、空に毬を投げて受けるのや、地に突いて受けるのや、人と人とで投げると見せて投げたり投げなかったりするものから、団体的に互いに毬を飛ばしてこれを追う、今日の毬の遊戯の原型のようなものまであったという。ここではむろんそのどれと定める必要もないであろう。

(146) C

してもこちらの言われることに従うまいとするようなつもりはないだろうと僕は思う。またこういうような性質の事柄について、それの知者である人が指図をしてくれているのに、若輩の者がそれに聴従しようとしないなどというのは、それは法ではないとも思うのだ。まあ、とにかくそれよりは、何が君には知識だと思われるか、うまく言ってみたまえ、屈託しないで。

**テアイテトス**　ええ、とにかくそうするよりほかはありますまい、ソクラテス、そうしろとわざわざあなた方が〔おふたりで〕おっしゃってくださるのですから。それはつまり、何してもあなた方は、もし私が何か仕損じても、直してくださるというわけなのでしょうから。

## 四

**ソクラテス**　うん、むろんそれは、もう僕らにできさえしたら、まちがいなくそうしてあげるよ。

**テアイテトス**　それでは申しますが、私には、ひとがテオドロスさんのところから学べるもの、つまり幾何学とかそれから、それはもうさっきいろいろとあなたのほうから名前をあげてくださいましたが、ああいうのも知識だと思われますし、またさらに履つくりの心得やそのほかの職人たちが心得ている技術も、その全部がおのおの知識にほかならぬと思われます。

D

**ソクラテス**　なるほどね、これは、君、屈託のない気前のいいやり方だ。求められたのは一つのものであるのに、君が与えてくれるのは多くのものなのだ。簡単なものではなくって複雑多様のものなのだ。

**テアイテトス**　とおっしゃると？　それはどういうおつもりなんでしょうか。何をそう仰るのでしょうか、ソ

クラテス。

**ソクラテス**　たぶん、愚にもつかんことをなんだろう。だが、まあ、僕の思っていることを打明けて話すとしよう。君が履つくりに関する心得ということを言う時に、君がこの言葉で言い表わすのは、履物（はきもの）製造の知識ということよりほかのものではあるまい。

**テアイテトス**　はい、それにほかなりません。

**ソクラテス**　では、木工の心得という場合はどうかね。これは木製器具製造の知識というのにほかなるまい。

**テアイテトス**　ええ、それもそれにほかなりません。

**ソクラテス**　すると、この二つのもので君がはっきりさせているのは、両者がおのおの何の知識であるかということ、その何のという点ではないのか。

E

**テアイテトス**　はい、そうです。

**ソクラテス**　うん、ところが、テアイテトス、問題の点はそれではなかったのだ。それは知識というものは何の知識と何の知識があるかというのでもなかったし、またそういう知識がおよそどのくらいの数だけあるかというのでもなかった。なぜなら、われわれの問題は、知識の数をきめる考えで問われていたのではなく、知識をそれ自体として、(1) 何が一体それであるか知ろうと思って問われていたのだから。それとも、どうかね、僕の言うこ

1　「知識をそれ自体として」という言い方の類例は『国家』II. 363 A, V. 472C 参照。なお、「何々の知識」と言われる場合の知識が多様性をもったものであるのにたいして、この場合の知識は単一なるものとして考えられているのであって、この一と多の対立におけるくいちがいは、『エウテュプロン』6D などにも見られる。

(146)

とは愚なこったろうか。

**テアイテトス**　いいえ、どういたしまして、おっしゃることはまったくごもっともです。

147 **ソクラテス**　さあ、それなら、またこういう場合を考えてみたまえ。ひとがわれわれに対して何か卑近なものの中から、例えば泥土のようなものについて、そもそも何であるかを尋ねるとして、もしわれわれがこれに対して、陶師（すえものし）のつかう泥土がそれである。竈師（かまどし）のつかう泥土もそれである、瓦師（かわらし）の用いる泥土もそれであるなどと答えるならば、われわれは笑止な者となりはしないだろうか。

**テアイテトス**　ええ、たぶんなるかもしれません。

**ソクラテス**　まず第一に、われわれはわれわれのこの答えから、泥土という言葉を使って――たといそれに人形つくりの使う泥土だとか、あるいはまた何かほかの工人のつかう泥土だとか言い足すにしても――問い手が了B 解するものと考えているが、思うにこれこそまさに笑止なのである。それとも、どうかね、それが何であるか知らない何かの名前を言われて、何とかそれを了解する者が誰かあると君は思うかね。

**テアイテトス**　いいえ、ありようがないと思います。

**ソクラテス**　したがって、また、「知識」というのを知らない者に「履物の知識」というのの了解がつくはずはない。

**テアイテトス**　ええ、それはそのわけです。

**ソクラテス**　したがって、知識というものを識ることのない者は、履つくりに関する心得ということを解するはずがなく、また何かほかの技術を了解するはずもない。

**テアイテトス**　ええ、そのとおりです。

**ソクラテス**　したがって、知識をだね、何か？ と問われて、何か技術の名前を答える者があるならば、その答えは笑止な答えなのである。なぜなら、それは何かの知識であるものをひとつ答えているわけなのであるが、問われたのはそんなものではないのだから。

**テアイテトス**　ええ、それはそうのようです。

**ソクラテス**　つぎにそれは、いいかね、手軽にまた手短かに答えることができるのに、際限ない廻り道をしていると思われるのだ。たとえば泥土の問題にしても、「何〔者〕の〔つかう〕」などということにはてんから触れずに、「土が水にまざると泥土なのである」と言えば、思うに手軽でまた簡単だったのである。

# 五

**テアイテトス**　はい、それはソクラテス、そうすればたやすかったのだということが今になるとはっきりわかります。そういえばしかし、どうやらお尋ねの問題と同類らしいものが、最近に私とそれからあなたと同名のこのソクラテスとで言論をまじえておりました時、ちょうどこの私たちの間にも入り込んで来たことがあります。

**ソクラテス**　ほう、それは一体どんなふうのものだったね、テアイテトス。

**テアイテトス**　それは〔ある種の〕平方根について、すなわち三平方尺の正方形や五平方尺の正方形などの辺に当るものについて、私たちのためにこのテオドロスさんは図形のあるものを描きながら、それは長さのままで計

ると一平方尺の正方形の辺とは同じ単位の尺度では計りきれないものであるということを明らかにされて行って、そして一七平方尺の正方形の辺までをおのおの一つ一つ取り出してそういうふうにしてくだすったのですが、それまできて、どうということはありませんでしたが、それを止められたのでした。(1) そこで私たちの間には何かこんなふうな考えが浮かんできたのです。それはこの種の平方根というものは無限に多くあるものだということが明らかなのですからして、これを一つに総括することを試みようという考えなのです。つまりこの種の平方根をわれわれが全部その言い方で呼べるようになるものを見出そうとする試みなのです。

E

**ソクラテス**　そして、どうだね、何かそんなようなものを君たちは見つけたのかね。

**テアイテトス**　ええ、見つけたように私には思われるのですが、しかし、まあ、あなたにも見ていただきましょう。

**ソクラテス**　言ってみたまえ。

**テアイテトス**　数を全体として私たちは二つに分けました。その一つは、等しいものの掛け合わせとなることができる〔例えば4＝2×2のような〕もので、図形でいえば正方形に比すべきものであるとしまして、これを私たちは正方形数とか等辺数などという名前で呼ぶことにしました。

**ソクラテス**　うん、それはまたうまい呼び方だ。

148

**テアイテトス**　次はその〔4と9、9と16などの〕中間にはさまれている数で、そのうちには3もありますし、また5もあります。つまり等しいものの掛け合わせとなることができずに、あるいは大きい数に小さい数を掛けたものとなり、あるいは小さい数に大きい数を掛けたものがすべてそうなのでして、〔図形の上では〕これを囲む

辺は常に一方が大きくて、他方が小さくなるようなものなのですから、これを別にまた私たちは長方形に比すべきものとして、長方形数と名づけました。

**ソクラテス**　うん、それは大へん見事だ。が、とにかくまあ、その後をどうしたのか聞かせてくれたまえ。

**テアイテトス**　それを一辺とする正方形〔の面積〕が等辺数となる線分は、これを〔そのまま〕「長さ」として取扱うことに決め、またその平方が不等辺数となる線分は、長さのままでは前者の線分と共通の単位によって計りきることができない(すなわち通約できない)けれども、それの平方によって得られる平面をもってすれば通約ができるという意味で、これを正方形の辺(平方根)としてしか取扱えないもの[(2)]としました。そして立方体についてもべつにまたこれと同様のことが言われるわけです。

B

**ソクラテス**　いや、これは世にもあっぱれなできばえだったねえ、少年諸君。これならテオドロスさんも偽証の罪なんかに問われるおそれはあるまいと僕は思う。

**テアイテトス**　ええ、それがまたしかし、ソクラテス、あなたが知識についてお尋ねになっていることはと申しますと、これにお答えすることは、いまの「長さや平方根として用いられるもの」についてのようにはでき

---

1　テオドロスはここで、当時正方形の一辺と対角線との関係として一般におそらくすでに知られていた$\sqrt{2}$の場合のようなものが、なおそのほかにもたくさんあることを示したわけなのであって、これもまたひとつの進歩であったと思われる。その示し方はしかし$\sqrt{3}$もそうである、$\sqrt{5}$もそうである、$\sqrt{6}$も$\sqrt{7}$も$\sqrt{8}$も$\sqrt{10}$も$\sqrt{11}$も$\sqrt{12}$も$\sqrt{13}$も$\sqrt{14}$も$\sqrt{15}$も$\sqrt{17}$もそうであるというふうに一つ一つの例について証明を行なうだけのものであって、一般にどういう場合にそうなるかという総括を欠いていたので、テアイテトスがこれを試みることになるのである。

2　これが不尽根すなわち無理数にあたる。

そうもないのです。しかも私にはあなたというお方のもとめておられるのが何かこのような種類のものであるとはおもわれるのですけれど。ですから、あべこべにまたテオドロスさんのうそということが明白になるわけです。

C **ソクラテス** しかし、どうかね。いま君をテオドロスさんが走りくらべのことにかけて、若い者の中でこんなによく走る者に出会ったことはひとりもないと言って賞讃されるとするね。そして後から君が体力の最もさかんな走ることの一番早い人と競走して負けたとするのだ。そうすると、こちらの賞讃はそれだけ真実の度が少なくなるだろうと思うかね。

**テアイテトス** いいえ、そうは思いません。

**ソクラテス** しかし知識なんて、これを見つけ出すのは、今しがた僕の言ったこと[1]ではあるが、ほんの小事であって、万事に頂上を極める人のなすことではないと考えるかね。

**テアイテトス** いいえ、どういたしまして、それは神明に誓って申しますが、頂上の頂上を極める人の、それこそ大いにあずかってしかるべき仕事だと私は思います。

D **ソクラテス** それなら、君は自信を出したがいい。そしてテオドロスさんの言われることを本当だと思うんだね。そしてむろんその他のこともだけれど、なかんずく知識について、何が一体まさにそれであるかということの言論を把握するために、あらゆる手段を尽くして懸命に努力してみたまえ。

**テアイテトス** ええ、懸命に努力するだけのことなら見ていただけるでしょう。

## 六

**ソクラテス**　よしきた、さあ、それでは、ちょうどいま君がうまい具合に道をつけてくれたので下地はできたわけだから、試みにいまの不尽根についての解答をまねて、ちょうどあの多数あった不尽根をただ一箇の定まった形式でもって包括したように、また問題のこの多数ある知識をもただ一箇の言論をもって言いあらわすようにしてみたまえ。

E

**テアイテトス**　ところが、請合ってそれは、ソクラテス、あなたのところから出ている問題を伝え聞いておりましたものですから、調べてみることはもう何度もやってみたんです。しかしどうもだめなんです。と申しますのは、自分でも、自分の言うことが充分ものになっているという自信はもてませんし、また他の人のも、あなたの御注文どおりに言われているのは聞くことができずにいるような始末なのですから。それでいて、他方これが事実また何とも解き放すことのできない気掛りともなっているのです。

**ソクラテス**　ほら、それがすなわち君の陣痛というわけなのだ、愛するテアイテトス、君が空でなくって、何か産むものをお腹にもっているから起ることなのだ。

**テアイテトス**　さあ、それは私にはわかりません、ソクラテス。ただしかし私は、私の容体を申しあげている

1　145Dの「少しばかりわからないことがあってねえ」の「少しばかり」を指す。これは原語でスミークロン・ティと言われ、さきの場合には量の小を意味していたのであるが、ここでは価値の小を意味するようにわざと取ったのである。

(148)

149 のです。

**ソクラテス**　おや、それでは、おかしいねえ、君は聞いていないのか、僕の母親のパイナレテは大へん由緒のある厳しいあの産婆のひとりだということを。

**テアイテトス**　いいえ、そのことなら聞いたことがあります。

**ソクラテス**　では僕がこの同じ技術の専門家だということも果して君の耳に入っているだろうか。

**テアイテトス**　いいえ、いっこうに聞いておりません。

**ソクラテス**　でも、よく知っておきたまえ、僕はそれなんだから。もっとも他の連中に向かって僕のそんなことを告げ口してはいかんよ。僕にこの技術の心得があろうとは、ここだけの話なんだが、気づく者はないんだからねえ。それで奴(やっこ)さんたちは、知らんものだから、僕についてはこのことを噂せずに、「じつにへんな奴だ、あいつのすることはといえば、ただ人間を行詰まらせ(困惑させ)るだけのことなんだ」と言っている。(1) どうだね、きっとこういう噂も聞いているだろう？

B **テアイテトス**　はい。

**ソクラテス**　では、どうして僕がそうなのか、そのわけを君に話そうか、どうだね、君の考えは？

**テアイテトス**　ええ、ぜひどうぞ。

**ソクラテス**　それなら、産婆たちを取巻く事情が全体としてどんなふうのものであるかを思い浮かべてみたまえ。そうすれば、僕が言おうと思っていることの理解は君にとって一段とたやすいものになるだろう。すなわち、君も知っていることだろうが、かれら産婆のうちには、誰一人として、まだ自分が妊娠をしたり産をしたりする

身でありながら、それで他人の産婆をつとめるというような者はいない。そういうことはもう産のできない者がしているのだ。

**テアイテトス**　ええ、まったくそれに違いありません。

**ソクラテス**　うん、ところで、どうしてそれがこういうことになっているのかというと、その起こりは生むことをしないアルテミス(2)の女神が生むことを世話する役に当られたからだと言われている。事実それだから——人

C 間の性(さが)というものは無力なもので、無経験な事柄については技術の会得(えとく)ができないものなので——産婆の役も

---

1　例えば『メノン』79E～80Bにおいて、メノンはソクラテスのことを次のごとくに語っている。「私はあなたに会って今また実地に経験することを得たのであるが、しかしすでにこれより先、噂は聞いておった。あなたという人は、自分自らが困惑の人であるばかりでなく、なお他人までも困惑におとしいれる人であるということを。今のことにしてもそうである。つまり何のことはない、私は呪文をかけられて、手も足も出なくなっているのである。それだからこそ困惑でいっぱいなのである。少なくとも私はそう思っている。すなわち私の考えをもってすれば、徹頭徹尾あなたは——こう言っては、あなたを笑い物にすることとなるかもしれないが、それでもなお何かその必要があるものとして、言わせて貰おう——顔形からその他のところまで、海にいる、あの平べったい顔をした痺鱏(しびれえい)にまるでそっくりなのだ。すなわちこの魚もまた、その時々に、近づき触れるものを痺れさせるが、あなたもまたいま何か同じようなことを私に対して為したものと私は考える。」

2　父はゼウス、母はレト、兄はアポロンと伝説される処女神。出産の神というのは、この神が生まれてすぐ、次に生まれたアポロンの産を母のために手助けしたという伝説に由来するものであろう(Apollodoros 1. 4. 1)。アルテミスは、一面においては、死や戦の神であり、他面には、動物界、狩猟、牧牛などの神であって、また一面、処女性、結婚、出産の神ともなっているが、本来は山野森林の到るところに見られる妖精の最大なるもので、そこに生存する一切の動物を支配する女王のごときものであったらしい。ラテン名はディアナ(Diana)である。

石女(うまずめ)には授けられなかったものの、年をとって産のできなくなった者にこれを命じなされたという話なのだ。これはつまりこの者どものもっている生まないという性質がアルテミスの女神御自身のそれに似ているところから、そこを嘉(よみ)せられたものであるということだ。

**テアイテトス**　それはいかにもそうありそうなことです。

**ソクラテス**　それなら、また次のようなこともいかにもそうありそうなことではないかね。いや、必ずともそれに違いないんではないか。すなわち妊娠か否かの識別は、他の誰かの仕事であるよりも、まず産婆の仕事なのではないだろうか。

**テアイテトス**　ええ、まったくそうです。

**ソクラテス**　そして実際また産婆たちの手でできる仕事には、ちょっとした投薬をしたり、唱えごとをしたりして陣痛を起こすことがあり、またその必要を認める場合には、これを和らげることもあるのではないか。そのほか彼らは産の困難な者に産をさせたり、あるいはまた胎児がまだ少(わか)いから流産させたほうがよいと考えられる場合には、流産させたりするのではないか。

D

**テアイテトス**　ええ、その通りです。

**ソクラテス**　それなら、なおこういうようなのもかれら産婆にはあるんだが、君は果してそれに気づいているだろうか。すなわちかれらは、いかなる女はいかなる男と一緒になって最良のこどもを産むべきかということを識ることにおいて言わば全知なる者であるから、結婚媒介者としても決してばかにできない者だというのがそれなんだがね。

**テアイテトス**　いいえ、そういうことは少しも存じません。

E

**ソクラテス**　でも、よく知っておきたまえ、このほうを臍の緒を切ることよりもいっそう得意にしているんだから。なぜって、考えてみたまえ。土地から出る果実の世話をしたり収穫をしたりすることと、それからまたいかなる土地に対してはいかなる植物を植えいかなる種子を蒔くべきかを識別することとは、同じひとつの技術に属する事柄だと君は思うか、それともそれぞれ異る技術に属することだと思うか。

**テアイテトス**　いいえ、それは同じひとつの技術に属することです。

**ソクラテス**　しかし女というものに対しては、どうだね君、こういうことをするのと、収穫をするのとでは、それぞれ異なる技術があるのだと思うかね。

**テアイテトス**　いいえ、断じてそれはありそうもないことです。

150

**ソクラテス**　うん、それはそのわけだからね。しかし、男女を結合させるのにも正しくない無知なやり方があって、ちょうどそれには「取り持つ」という名前がついているから、産婆は自分の尊厳のために、結婚媒介までも避けているのだ。それはつまり、この結婚媒介によって「取り持ち」の非難におちいることをおそれるためなんだ。しかしそれにもかかわらず、思うに真の産婆である者にのみまた正しい意味における結婚媒介ということも属するものなのである。

**テアイテトス**　ええ、それはそんなように見えますね。

B

**ソクラテス**　だから、産婆の役はこんなふうになかなか大へんなのだ。とはいえ、僕の役に比べると、これでもまだ足りないところがある。というのは、女たちには、このほかに、時によって為似物（にせもの）を産んだり真正物（ほんもの）を産

んだりして、しかもその識別が容易でないということはないからね。すなわちもしあったならば、その真偽を判別することが産婆の最大最美の仕事となっていたことであろう。それともどうだね、君はそう思わんかね。

**テアイテトス**　いいえ、そう思います。

## 七

**ソクラテス**　うん、ところが、僕の心得ている産婆取上げの術には、いま言った産婆たちのもっているほどのものは、むろんみな所属していて、ただ異なるところとしては、男たちのために取上げの役をつとめるのであって、女たちのためでないということ、しかもその精神の産をみとるのであって、肉体のをではないということがあるのではあるが、しかし、このほかに、僕たちの技術には、一番大事なことでこういうのが含まれている。すなわち当の青年が思考を働かして分娩したところのものが為似物や偽物であるか、それとも正物であり真物であるかを百方検査するということが〔この技術を心得ている者には〕できるというのである。なぜこれが一番の大事であって他にこれ以上のことはできないのかというと、それは次のような事情が産婆たちにあると同じように僕にもまたあるからなのだ。すなわち僕は知恵を生めない者なのだ。そしてそれはすでに多くの人たちが僕に非難したことなのだが、僕は他人には問いかけるが、自分は、何の知恵もないものだから、何についても何も自分の判断を示さないというのは、いかにも彼らの非難のとおりである。これにはしかし次のような仔細がある。僕は取上げの役の方をしなければならんように神が定め給うているのだ。そして生むことはしないようにこれを封じてしまわれたのだ。だから実際のところ、僕自身ちっとも知恵のある者なんかではないし、また僕には、僕自身

D の精神から出生したというもので、そんな知恵のある発見は何もない次第なんだ。ところが、僕と一緒になる者、僕と交わりを結ぶ者はというと、はじめこそ全然無知であると見える者もないではないが、しかしすべては、この交わりが進むにつれて、その人々に神がそれを許し給うならば、その者自身の見るところによっても、また他人に思われるところによっても、驚くばかりの進歩をすることは疑いないのだ。それがしかも、これは明白のことなんだが、何ひとつ僕のところからいまだかつて学んだことがあったためではなく、自分で自分自身のところから多くの見事なものを発見し出産してのことなのだ。もっともその際の取上げは神の御業であって、僕もまた

E それには微力をつくしているのである。このことはしかし次のことで判然するだろう。それはもうすでに多くの者どもが、このことを覚るにいたらないで、取上げも自力でなしたものと信じ、僕を軽蔑して、自分の独り了見か、あるいは他人のそそのかしによって、時機がなお早いのに僕のところを離れたものであるが、さて離れてみると、まだお腹にもっていた分は、兇しき交わりのために流産してしまい、僕が取上げてやったのも、偽物や為似物を真物よりも大事にした結果、栄養が悪くて死なせてしまい、ついにはしかし自分自身が考えてみても、他の人がみても、無知の者であると思われるにいたったものだ。そういうひとりにリュシマコスの子アリステイデ

151 ス(1)があり、その他非常に多くの者がある。この連中には、(2)もし彼らがもう一度やって来て、僕に一緒になってく

---

1 『テアゲス』130 A sqq. 参照。アリステイデスの父リュシマコスは、『ラケス』篇にも登場する人物である。またその父のアリステイデス、即ち、本文のアリステイデスの祖父は、きわめて著名な人物であった。すなわち前四八九年には、第一位のアルコンとなり、軍人としては、プラタイアイの戦いに、アテナイ軍の総帥として戦功があった。しかし孫のアリステイデスは凡庸の人物だったらしい。

2 ハインドルフ案により οὓς を οἷς とよむ。

れと願って、あきれるようなことまでして見せる場合、僕にいつも現われる例のダイモーンのしるし(1)が、そのあるものとは一緒になることを妨げ、他のある者とは一緒になることを許す。そして後者はふたたび進歩する。ところがさて、僕と一緒になる者たちだが、彼らはこういうことでも産婦らと同じ目にあうわけだ。すなわち陣痛で、昼夜困惑にみたされる。そしてそれもかの産婦たちよりはずっと多くそうなる。そしてこの陣痛を起したり、鎮めたりする力が僕の技術のうちにあるというわけなのだ。それでさて、これらの者どものことはいま述べたようなものであるが、しかしまたある者たちのためには、テアイテトス、それが何となく産むものをもっていると は僕に思われないような場合、この僕の必要は毫もないのだとわかるから、非常な好意でこれが配偶を求めてやって、誰と一緒になればしあわせかということの見当をつけるのだが、それは神明の御加護によるとはいえ全くの申し分なしなのだ。そしてこういう者どものうちには、プロディコス(2)のところへ出してやったのもむろんずいぶんとあるが、また別にほかの知恵ある者、神妙なる者のところへやったのもたくさんある。さて以上ずいぶん長い話を君にしてしまったが、これは君、こういうわけからなのだ。つまり君は、君自身も考えている通り、何か産み出したいものをお腹にもっていて、それで陣痛を感じているのではないかとにらんだからなのだ。そういう次第だから、僕に向かっては、僕は産婆のせがれで、自分も産婆の仕事をする者なんだという考えで向かってきてくれたまえ。そして僕の問いには、一生懸命にできるだけ答える努力をしてくれたまえ。ああ、それからまたもし万一君の言うことで、何かよく見てみて、為似物であって真物ではないと考えられるものがあって、その結果それを僕が取り出して投げ棄てようとするようなことがあるかもしれないが、そんな場合、まるで初産の者がその子どもについてするような狂態は演じないでくれたまえ(3)。というのは、もうすでにたくさんの人間が、

驚いたことには君！　僕に向かってそんなふうな気持をもち、その結果、一度僕が彼らからその何か愚劣な考えを取除こうとしようものなら、何のことはない嚙みつかんばかりの剣幕を示したものだ。そしてそれを僕が好意D　でしているのだとは考えてくれないのだ。それは、神というものは、いかなる神も、人間に対して悪意をもつものではなく、僕もまたこういうようなことを一つとして悪意でなしているのではないが、しかし偽物をそのままにしておいて、真物をくらますということは、断じて僕に許されてはいないのであるということが、彼等にはな

1　これについてはソクラテスが『テアゲス』128Dにおいて、「僕には、神のお授けで、子供の時から始まったのだが、あるダイモーン的なものがついている。それはしかし一つの声で、それが現われる時はいつも、僕がまさに為そうとしていることを僕に対して「為すな」と合図する。そしてそれは積極的にものを為せと勧めることは決してない」という説明を与えている。この不思議な声を、ソクラテスは「神的なあるもの」とか「ダイモーン的なあるもの」とか呼んでいる。『ソクラテスの弁明』31D参照。もっと精確には「ダイモーンの合図」「ダイモーンのしるし」などと言われている。『エウテュデモス』272E、『パイドロス』242B参照。おそらくまた本書のこの場合も「しるし」(セーメイオン)を補って考うべきであろう。くわしくは拙著『ソクラテス』(岩波新書)第四章「ダイモンに憑かれて」参照。

2　プロディコスはケオスの人で、言葉の区別を得意とした学者である。プラトンは多くの場合、言葉の問題に関連してプロディコスの名前を挙げている。『クラテュロス』384B、『カルミデス』163D、『ラケス』197D、『エウテュデモス』277E、『パイドロス』267Bなど参照、ここではもっと一般的な関連からその名が呼ばれている。類例、『弁明』19E、『メノン』96Dなどを参照。また上掲の『クラテュロス』『メノン』および『プロタゴラス』341Aの言葉から察せられるように、ソクラテスはプロディコスの講義を聞いたことがあるらしい。なおプロディコスの風貌については、『プロタゴラス』315C〜D, 337A〜C, 340A〜342Aなど参照。

3　かかる事実が実際にスパルタなどに行なわれていたのであろう。不具虚弱児を棄てることはその風俗であったのであろう。あるいはもっと広くかかる棄児が行なわれていたのかもしれない。そしてその際、初産の者がこれを拒んで、狂気のごとくになったであろうことは想像に難くない。

かなかもってわからないからなんだ。

## 八

**ソクラテス** もう一度、さあ、それでは、始めっから、テアイテトス、何がそもそも知識であるかを試みに言ってみたまえ。できないなんてことは、しかし断じて言わせないよ。なぜなら、神の御意がそこにあって、そして君にそれだけの男らしさがあるならば、君はできるはずなんだから。

**テアイテトス** いや、それは必ずもう御念には及びません、ソクラテス、ほかならぬあなたがそんなにまで励ましていて下さるのに、何でももし持っているものがあるなら、それを何とでもして言論にあらわそうと懸命の努力をしないとしたら、それはみっともないことです。では、とにかく私に思われているところを申しましょうなら、何かを知識している人というものは、知識しているそのものを感覚(感受)しているものなのです。すなわち、何はともあれ今あらわれているところでは、知識は感覚[1]にほかなりません。

E

**ソクラテス** やあ、これは君、うまい具合にやってくれたね、屈託しないで。実際そういうふうに、自分の思っていることは披瀝(ひれき)して、言論すべきものなのだからねえ。だが、それはまあともかくとして、さあ、いいかい、それがまさに純正のものか、それとも虚妄のものか、一緒によく見てみようではないか。君の主張だと、感覚がすなわち知識だというんだね。

**テアイテトス** はい。

**ソクラテス** まことにどうも、君が知識について語ったのは、容易ならん説のようだて。プロタゴラスの説[2]が

152

またそれらしいんでね。もっともこの同じものを語るのに彼はある違った言い方をしたにはしたんだがね。すなわちその主張には何でもこんなことが言われているようだ。「あらゆるものの尺度であるのは人間だ。あるものについては、あるということの、あらぬものについては、あらぬということの」ってね。むろん君は読んだことがあると思うんだが、どうだね。

**テアイテトス**　ええ、もうたびたび読みました。

**ソクラテス**　それでは、彼の言おうとしているのは何でもこういうようなことではないのか。おのおののものが何らかの様子(ようす)で僕に現われている場合、そのものは僕にとってそのようなものとしてあり、また君に何かの様子で現われておるならば、それはまた別に君にとってそのようなものとしてあるというのではないか。そして人

1　原語には、ものの感じがある、覚えがあるというだけでなく、もっとひろく直接的な把握を指し、感得する、見てとる(看取)、認知するの意味もあるので、すぐに「知る」に結びつくことができるわけである。また感じというのも、いわゆる感覚、知覚に限らず、156Bでも見られるように、視覚、聴覚、嗅覚、温覚のほか、快苦、欲求、畏憚の類までがこの名で呼ばれている。だから、感覚という訳語だけでは、狭い意味しか出て来ない。あるいは感受という語をあてでもいいかも知れないと思う。感受性などという言葉には、感情も含まれているように思われるからだ。そして今日の語をもってすれば、直接に経験し、体験されることの大部分がこれと範囲を同じうするであろう。ものを知るとはものを経験し、体験することだなどと言えば、今日でもなお多くの人々の帰依を得ることができるだろう。

2　プロタゴラスはアブデラの人であって、このことはすでに『プロタゴラス』309Cにも言われている。かれの思想については、プラトンのこの対話篇が重要な史料となる。かれの年代は伝説的には前四八〇—四四二年とされているが、実際は前五〇〇／四九〇—四三〇／四二〇年ぐらいになると考えられる。くわしくは拙著『ソフィスト』(筑摩書房)第三章参照。
　プロタゴラスの学説については、本対話篇が最も重要な史料であって、このほかに『クラテュロス』や『プロタゴラス』などの諸篇がやはり貴重な史料となっている。

間というのは、この場合の君や僕がつまりそれだというのではないか。

**テアイテトス**　むろんそうです、それが事実あの人の言おうとしていることなのです。

B

**ソクラテス**　ともあれ知者に妄語はあるまい。だから、彼の言う通りについていってみようではないか。そもそも風は同じ風が吹いていても、僕たちのうちで、ある者は寒気を感じるが、他の者は感じないというようなことが、どうだね、時折あるのではないか。またそれを感じるのにも、ひどく感ずる者とそれほど感じない者とがあるのではないか。

**テアイテトス**　ええ、それは大いにあります。

**ソクラテス**　それでは、そういう場合、そこに吹いているものが、他と没交渉にそれ自体で冷たいとか、冷たくないとかいうことをわれわれは主張したものであろうか。それとも、わがプロタゴラスの意見に従って、それは寒気を感ずる者にとっては冷たくあるが、そうではない者にとっては冷たくはないとすべきであろうか。

**テアイテトス**　それは後のようにするのがよさそうです。

**ソクラテス**　ところで、それは両者のおのおのに対してまたそういうように現われてもいるのではないか。

**テアイテトス**　はい。

**ソクラテス**　うん、ところが、その「現われている」というのは、ひとがそれを「感覚している」ということであろうが？

**テアイテトス**　ええ、それはそのわけです。

C

**ソクラテス**　したがって、ものの現われとそれの感覚とは、冷たいとか熱いとかいわれるようなものにおいて、

またこの類のものすべてにおいて同じなのである。すなわち各人が何らかのように感覚しているところのものは、そのようなものとして各人にまたおそらくありもするのである。

**テアイテトス**　ええ、そのようです。

**ソクラテス**　したがって、感覚には常に〔感覚した通りに〕あるところのもの(有)が対応するから、それは偽りなきものであって、その点それは知識そっくりなのである。

**テアイテトス**　明らかにそうです。

**ソクラテス**　すると、およそ微妙なるものの名において、(1)そもそもプロタゴラスという人は、きっとひと通りならん大知恵者だったのではないかね。つまり今のことも、われわれ凡俗の大衆には謎の形で示したが、しかし弟子たちにはその真意(2)を内密に語っていたというわけだったたのではないかね。

---

1　「カリスの神々も御照覧あれ」などの義であるけれど、本文のごとくに意訳してみた。原語カリスは「やさしさ」を意味す。アプロディテと共なる時は優美を示し、アポロンに伴われる時は、ムゥサイなどと一になり、詩文その他の諸芸術における妙味を示すものと解される。ここでは後者の意味であろう。アリストパネス『雲』七七三行の古注には、カリスの業、カリスの賜物は知恵なりとしてあるが、もしそうならば、この呼びかけがこの場所にあるのは、プロタゴラスを大知者と為すこの場合、いかにも似つかわしいことであると言える。またカリスとソクラテスとの特別な結びつきについては、アテナイのアクロポリスの入口にソクラテス作のカリス像があったとも言われている(Diog. L. II. 19)。

2　本篇161Cにおいても知られるように、「すべてのものの尺度であるのは人間だ」という言葉は、『真』(あるいは『真理』)という題名の書物の冒頭にあったものらしい。この「真意」という言葉も、155Dの「本当の意(こころ)」や166D, 170E, 171Cなどの「真理」と同じく、暗にこの書物を指して、それに引っかかりをつけているのではないかと思われる。

**テアイテトス**　とおっしゃると、ソクラテス、それはいったいどういうことなんでしょうか。

**ソクラテス**　いま僕が言おう。それは実に容易ならん言論なのだ。つまり何ものも他と没交渉にそれ自体でそれ自体にとどまったまま単一であるというものはないというのだ。それを君が何々とか何々様のものとか呼ぶのは、正当にはできないことなので、君がもしそれを大なりと呼ぶなら、それはまた小としても現われようというのだ。また重しといえば、軽しで、万事が万事かくのごとく、これらは皆あたかも単一なる何々とか何々様とかいうものが一つもないところからくるかのように考えられるのである。むしろ、すなわち、すべてのものは運動あるいはさらに一般的な動きというものからなり、また相互の混和からなるともいうのである。そしてちょうどこれらすべてのものをわれわれはあると言っているけれども、これらに対してこの語を用いるのは正しくないというのだ。なぜなら、何ものもいかなる時においてもあるということはないので、始終なるのだからというのである。そしてこのことについては、パルメニデスを除くすべての智者が相並んで同一歩調をとっているとみてよい。すなわちプロタゴラスとヘラクレイトスがそうであり、またエンペドクレスがそうである。(1) なお創作家の中では、両種の創作のおのおのの頂上に立っている者、すなわち喜劇ではエピカルモス、悲劇ではホメロスがそうである。(2) ホメロスはすなわち

E

神々の生みの父なるオケアノスとその母なるテテュス

と言って、万物は流と動との産物であるということを述べた。それとも、これはこういう意味のことを述べているのだとは思われないかね。

**テアイテトス**　いいえ、そう思われます。

153

## 九

**ソクラテス**　そうだとすると、ホメロスのひきいるこれだけの軍勢を向こうにまわして、異議を申し立て、それで物笑いの種にもならずにいるなんてことが誰かなおできるだろうか。

**テアイテトス**　それは容易ではありますまい。

**ソクラテス**　うん、それは容易なはずがないからね、テアイテトス。いまの「あると思われているものすなわ

---

1　これらの人々について一言すると、パルメニデスはエレアの哲学者で、その時代は普通前五〇四―五〇一年頃と考えられているが、これよりさらに三〇年ほど後におく説もある。存在の単一性を、存在するものは存在のみであるという一見自明な前提から主張し、なお、その不生、不滅、不動、不可分などを証明した。ヘラクレイトスはエペソスの人で、その時代は――これもいろいろと異説があるけれども――普通パルメニデスのそれとほぼ同じ頃であろうとされている。「万有流転」の説に結びつけられて、その名は今日のわれわれにも親しいものとなっている。ただし、直接こういうことを述べた言葉は今日のこされていない。多少これに関係ある言葉さえ多くはない(Fr. 91, 125, 12(DK))。むしろこの『テアイテトス』篇や『クラテュロス』402 A ほかが、かかる解釈の典拠となっている。エンペドクレスはアクラガスの人で、その活動期は前四七二―四四四年頃であったと思われる。彼の名もまた、その劇的な死の伝説と四元素説とのために、今日でも一般によく知られている。

2　エピカルモスはシケリアのメガラの人、その年代についてはいろいろの説があるけれども、大体前四八〇年頃と見てよいであろう。作品は断片が伝えられているだけであるが、ここにプラトンが言っているような内容のものとしてはFr. 2, 4(DK)などを挙げることができよう。またホメロスをいわゆる悲劇の祖として見ることについては、『国家』X. 595 B sqq., 598 D sqq. あるいはアリストテレス『詩学』($1448^b24$–$1449^a6$)など参照。引用のホメロスの詩句は『イリアス』第一四巻二〇一行、三〇二行などに見られる。同様の引用は『クラテュロス』402B、アリストテレス『形而上学』第一巻($983^b30$)などにも出ている。

ち生成は、動がこれを供給するが、あらぬこと、亡くなることは静がこれを提供する」という言論には、次のことだってじゅうぶん有力な証拠となっているんだからねえ。というのは、すなわち熱や火というものは、それはじつにまた自分以外のものを自分から生んでそして後見(うしろみ)しているものなんだが、それ自身はというと運動と摩擦から生まれるものなのであって、そしてこの〔運動と摩擦の〕二つがまた動だというのである。それとも、どうかね、これが火の生まれ（あるいは生みの親）(1)ではないかね。

B **テアイテトス** いいえ、それは確かにそうに違いありません。

**ソクラテス** それからじつにまた、動物の種属が同じこれらのものから発生している。

**テアイテトス** どうもそれに違いありません。

**ソクラテス** では、どうかね。身体の持前というものは、これを静止させて使役せずにおくとだめになるけれども、これに体育をほどこして動かしているならば、たいていのばあいは保全されるものなのではないか。

**テアイテトス** はい。

**ソクラテス** また、精神のほうの持前も、学習勉強などのいずれも動であるものの力によって、学識を得てこれを保全し、それで優良なものとなるのではないか。これに反して、もしそれを静止させておいて、学習もせず勉強もせずということにしておくならば、それは何ものも学得することなく、またいったん学得したことも忘却することとなるのではないか。

C **テアイテトス** 大いにそうです。

**ソクラテス** したがって、一方のものすなわち動は、精神のほうからいっても身体のほうからいっても、善き

ものであるが、他方のものはその反対だということになるのではないか。

**テアイテトス** ええ、そうのようです。

**ソクラテス** なお、それなら、君に僕は、無風だとか凪だとか、こういう種類のもののあらん限りをあげて、静止は腐敗させたり滅亡させたりするが、その反対は保全の用をすると、こう言ったもんだろうか。またその上、これがあのコロポンの決定投票(2)という奴なんだが、〔ゼウスの大神がそれを用いて万物を力ずくで宙につるしてみせるといった〕(3)あの黄金の綱をこれに付会して、それでもっていまの言論に必然性を与えるとした(4)ものであろうか。つまり、ホメロスはこの綱でほかならぬ太陽のことを言っているのであって、回転するこの蒼穹の動きと D

1 古代発火法については、ホメロスの『ヘルメス讃歌』一〇八―一一四行にすでにその記述があり、プリニウス『自然誌』第一六巻(二〇七)などにも比較的詳しい説明がある。いずれも木片その他の摩擦によって火を得るのである。

2 これには、古注によると、次のような由来があるらしい。すなわち昔イオニアの一二都市が共通の相談事でいわゆるパンイオーニオン(汎イオニア社)に会して、事を投票によって決した場合、もし賛否同数であったなら、コロポンの人々が同族ズミュルナの人々の分をもう一票投じて、それで決を定めたという故事から、有力な一票――言わば決定投票――についてこの言葉が用いられることとなったらしい。ただし、原語コロポーンについては、また別の説明(『ストラボン』第一四巻(一の二八)も行なわれている。しかしそれにしても大意に変りはないようである。なおプラトン第三書簡318Bにも類例がある。

3 『イリアス』第八巻一八行以下、ゼウスが神々を集めて、何神もトロイア方もしくはギリシア方に加勢してはならぬと厳かに申し渡している時の言葉で、他の神々が総がかりでこの黄金綱を引いてもゼウスはこの綱引で引き落されるようなことはない、むしろ神々も万物も逆にこれで空へ引き上げられることになるとて、ゼウスはそこで自分の力を誇るのであって、直接的にはソクラテスがここに言っているようなことには関係がない。

4 T、W写本に従って、ἀναγκάζω προσβιβάζων と読む。

太陽の動きとの存する限り、神々の間のものも人々の間のものも、皆あるのであり、みな保全されるのであるが、もし一度これが縛め（いまし）にあったかのように停止するならば、万物は崩壊して、みないわゆる「上を下へ」の乱脈におちいるであろうということを明らかにしているのであるというんだがね。

**テアイテトス**　いや、ソクラテス、私にはホメロスが明らかにしているのはちょうどあなたの言われているとおりのことなんだろうと思われますよ。

## 一〇



**ソクラテス**　それでは今度は、いいかね君、こういうふうに考えてみたまえ。まず最初は眼に関係したことなんだが、白色と君が呼んでいる当のものは、それ自体で君の眼の外に何か別箇のものとしてあるのでもないし、



また眼の中にあるのでもないというふうにだね。そして君はこれに対して何か特定の配置場所を考えたりしてはいけない。なぜなら、そうすれば、もうそれはどこかの場所で(1)一定の配置についていて、止まっていることとなり、したがって、生成のうちになりつつあるのではないということになるだろうからねえ。

**テアイテトス**　しかし、それでいけないとすると、どうするのでしょうか。

**ソクラテス**　さっきの説について行くとしよう。何ものも他と没交渉にそれ自体で単一にあるものではないというのがその前提だった。そうすれば、黒だって白だってその他の何の色だって、それは眼がおのれに適合する運動に向かってぶつかるところから生じたものであるということがわれわれにははっきりわかるだろう。そしてわれわれがそれぞれの色であると言っているものは、そのぶつかるものでもなければ、ぶつかられるものでもない

ということになるだろう。むしろ何かその間に〔相互的に〕生じたものなのであって、各者各別にできているということになるだろう(2)。それとも、どうかね、それぞれの色が何らかの様子で君に現われている場合、そのものはまた犬だとか何だとかいうような動物にも、そのような様子で現われていると君はあくまで主張するだろうか。

**テアイテトス**　いいえ、神明に誓って、そういうことはいたしません。

**ソクラテス**　では、どうかね。人間だったら、何か他の人に現われているのと君に現われているのとは同じようだろうか。どうだね、君が強硬に固持するのはこれだろうか、それとも、むしろずっと次のことのほうだろうか。すなわち、それが同じものとして現われるなんてことは君自身にとってさえないことなのではないか。なぜなら、君自身にとって君自身の身の持ち方は決して同様の時がないのだからねえ。

**テアイテトス**　ええ、私の考えは前のよりは、むしろこの後のほうです。

B

**ソクラテス**　ところで、いま僕たちが何かと並んで丈(たけ)を比べたり、それに触れたりするとして、その丈を比べる相手なり、触れられるものなりが、もともと大きなものであったり、白いものであったり、温いものであったりするとしたら、そのものはいやしくも自分が少しも変化しない以上、他のものに出会ったからといって、何も違った他のものになったりすることはなかったはずである。それから他方また丈比べをするとか、触れるとかする側のものも、もともとこれら〔大、白、温〕の各どれかであったとしたら、他のものがそこへやって来るとか他のものが何か作用を受けるとかしたところで、やはりまた、自分が何も受けたりしない以上は、違った他のもの

1　B、T写本の通り ἄν που と読む。

2　一二章にこれの詳細な説明がある。

になったりはしなかったはずである。それだのに、さて実際はというと、何と君！　これはプロタゴラスなり、あるいはプロタゴラスと同じことを言おうと試みる者なりが誰でも主張することだろうが、何だかこうたわいないような仕方で僕たちは奇妙なまた笑止なことを言わざるをえないようにさせられるのだからねえ。

**テアイテトス**　とおっしゃると、それはどういう意味なのでしょうか。どんなふうなもののことをおっしゃるのでしょうか。

C

**ソクラテス**　ちょっとした例だがひとつ出そう。そうすれば、僕の言おうと思っていることはすっかりわかってもらえるだろう。それは骰子（さいころ）をまあ六つばかりとって、それからそこへ君が骰子を四つもって来るとするのだ。そうすると、それは四つのより多くて、その一倍半あると、こうわれわれは言うことになる。つぎにそれを一二もって来るとするのだ。そうすると、それはこれより少ない、これの半分だと言うことになる。そしてこれよりほかの言い方は断じて容認されんわけだ。それとも、どうかね、君はほかの言い方を認めるだろうか。

**テアイテトス**　いいえ、認めません。

**ソクラテス**　それでは、どうかね。いま君に対してプロタゴラスなりほかの誰かなりが、こういう問いをかけるとするのだ。テアイテトス君、何かが増加させるよりほかの仕方で、大きくなったり多くなったりする道があるだろうかとね。そうしたら、君は何と答えるだろうか。

D

**テアイテトス**　それは、ソクラテス、もし今のこの問いに対する考えを答えるのでしたなら、「ない」と答えるでしょう。しかし前のほうのに対するのでしたら、矛盾したことを言わないように用心するかぎり、「ある」と答えるでしょう。

**ソクラテス**　これは君！　ヘラの女神[1]に誓って、まことにどうもうまい答だ。人間業ではないよ。だがしかし、「ある」と君が答える場合には、何かエウリピデス劇[2]の文句にあるようなことが起こりそうだね。僕たちの舌は、なるほどそれで論難される弱味はもたないことになるだろう。だが、われわれの胸のうちにはその弱味がないではないというわけでね。

**テアイテトス**　ええ、ほんとうです。

**ソクラテス**　そうしてみると、君や僕がこれで人から恐れられるような腕前をもつその道の玄人[くろうと]であって、胸のうちのことなんかはもうすっかりきわめつくしてしまっているのだったなら、それはもう残りの余った時間は、E 暇っつぶしにお互いの腕前を試し合うというわけで、互に会合してその道の玄人らしい仕方で玄人むきの闘技に

1　もとはアルゴスの地方神とも想像されるが、神話伝説ではゼウスの妃、クロノスとレアの娘、神々の女王となっている。婦人の誓に多く用いられるヘラの名が特にここで呼ばれているのは何故であろうか。ただし『弁明』24E、『ラケス』181A、『ゴルギアス』449D、『ヒッピアス(大)』287Aにも類例あり。特別の意味はないとも言える。なおクセノポン『ソクラテスの思い出』(四の四九)など参照。

2　エウリピデス『ヒッポリュトス』六一二行。第二幕(エペイソジオン)のはじめ、ヒッポリュトスは義母パイドラの乳母から義母の自分に対する恋を告げられたが、まだ年若かったこのアマゾンの子は、そのような事柄を特に嫌悪する傾きもあったので非常に激高し、後から乳母がすがるようにして、どうか他聞をはばかることだから、いったん誓ったこともあるし、何も言わずにくれと頼むのを、「舌は誓ったが、心まで誓いはしなかった」と答える、その文句を指す。もっともヒッポリュトスはかく言いはしたものの、その誓を守って義母の秘密を明さず、ために父テセウスの嫌疑を晴らすことができずに死ぬこととなる。ところがその後ヒッポリュトスのこの言葉は、この劇の前後関係を全く離れて、一般に偽誓の口実と見られるにいたったらしい。アリストパネスも数度(『蛙』一〇一、一四七一行、『女だけの祭』二七五―二七六行)この言葉を引用している。プラトンの引用もやはり何かこの種類のものであろうと思われる。

(154)

入り、お互い同士の言論と言論をぶっつけあっていたかもしれん。ところが、さて実際は、僕たちは素人なんだから、さしあたりまず僕たちとして望むべきことは、僕たちの考えに入って来るところでは、それらはそれらだけの相互関係において一体そもそも何なのか、それらは僕たちの見るところでは相互に一致するものなのか、それとも、どんなにしても一致しないものなのか、それをよく観てみるということであろう。

**テアイテトス**　ええ、全く本当に、それがはばかりながら私の望むところです。

## 二

155

**ソクラテス**　うん、それはむろん僕だってさ！　だが、そういうことになると、どうだね、僕たちは時間の余裕をうんとたくさんもっている者らしく、短気を出さずに、本当に僕たち自身を吟味しながら、僕たちのうちに現われるそれらのものが一体何々であるかを、ゆっくりともう一度見直してみるべきではないか。そしてそれらのまず第一には、よく見てみると、僕は思うんだが、こんなふうに言いあらわすべきものがあるのではないか。すなわち自分が自分に等しいままである限りは、嵩でいっても数でいっても、何ものも決してそれ以上に大きくなったり、小さくなったりすることはあるまいというのだ。どうだ、そうではないか。

**テアイテトス**　はい。

**ソクラテス**　うん、またその次には、付け加えられたり、引き去られたりすることのないものは、それは増大もなく減少もなく、いつでも等しいはずだということがね。

**テアイテトス**　ええ、正にそのとおりです。

B

**ソクラテス** それから、なお第三には、こういうのが果してありはしないかね。すなわち、前にあらなかったものが後になってしかしそれがあるということは、なることやなりゆくことなしには不可能であるというのだ。

**テアイテトス** ええ、とにかくたしかにそう思われます。

**ソクラテス** さて、これら、僕の思うに、同意された三つのものというのは、かの骰子(さいころ)についてのことなどいろいろ論じようとすると、僕らの心の内で、自分たち自身で同士打ちをするものなのだ。このことは、あるいはまた僕が、この齢であって、(1)丈がのびたり、あるいはその反対の変化をしたりすることがないとすると、一年の間に、若者の君よりも、今は大きくあるが、後になると、別に僕の身(み)の長(たけ)が何ひとつ引き去られたわけではないが、君が大きくなったために、君よりも小さいと僕たちで言うような場合にも見られる。なぜなら、ほら！ 僕は前にはそれでなかったのに、後には、それとなることなしに、それであるのだから。なぜ「それとなることなしに」であるかというと、なりゆくことなしになることは不可能であり、しかも身の長の何ものも失わない以上、決して僕は小さくなりゆくはずのものではなかったからだ。そして実にかかるわけあいのものは他にも、われわれがもしまさにいま述べたものどもを受けつけるとしようものなら、いくらでも無量に出てくるわけなのだ。むろん、テアイテトス、君は僕の言うことについて来ていてくれてるんだろうと思うがね？ 何しろ、こういうような種類のことに君はまんざら無経験な人ではないと僕には思われるんでね。

C

**テアイテトス** ええ、それがしかも、神々に誓って申しますが、ソクラテス、一体これらは何なのかしらと私

---

1 補注B2（四〇六ページ）を見よ。

は一方ならず驚き異(あやし)んでいる次第なのです。そして時には、いや本当に、これらに目を向けていると、目がくらむことさえあります。

D

**ソクラテス**　つまり、テオドロスさんは、君！　この様子では君の生れつきについて見当違いはしておられんのだよ。なぜなら、実にその驚異(タウマゼイン)の情(こころ)こそ知恵を愛し求める者の情なのだからね。つまり、求知(哲学)の始まりはこれよりほかにはないのだ。だからまた、天界の使者イリス(虹)をタウマスの子だと言ったかの人も、見たところへたな系譜家ではないようだということになる。(1)だが、それはまあそれとして、前の話だが、あれらのものがああいうふうであるのは、どうだね、われわれがプロタゴラス説であると主張しているものを基礎にして考えるならば、それは何によってであるということになるのか、君はもうすでにわかってきているかね。それともまだかね。

**テアイテトス**　いいえ、まだわからないように思います。

**ソクラテス**　それなら、いまもし僕が君に手を貸してあげて、さる有名な人の、いや、むしろ人々と言った方がよいかもしれんが、とにかくちょうどまさにそういう人たちの秘められた本当の意(こころ)を探り出してあげたなら、君は僕をありがたく思ってくれるだろうか。

E

**テアイテトス**　むろんですとも！　ありがたく思うだろうの何のって、まったくもうたいへんにです。

# 一二

**ソクラテス**　では、いいかね、誰も外道(げどう)の者は聞いていないだろうね、よくあたりを見て、気をつけてくれた

まえよ。この連中ときてはしかし、自分たちの手でしっかりとつかめるものでなければ、何ひとつだってあるとは思わないんで、作用だろうが、生成だろうが、目に見えないものはいっさい、有（ある）の部類に入れることを肯（うべ）なわぬやからなんだからね。(2)

156

**テアイテトス**　してまた本当に、ソクラテス、お話ですと、その人たちは頑固で、うっかり寄りつけないような連中なんですね。

**ソクラテス**　うん、何しろ、君、とても大へんな音痴なんだからね。これに比べると、他の人たちはもっとずっと洗練されているんで、僕はこれからそういう人たちのありがたい秘密の教えを君に話して上げようというわけなのだ。で、その第一の教義というのは、ちょうどいまし方僕たちで言っていた事柄もみなこれに依存させられてしまうものなのだが、それはこの人たちの教えだと、こういうのがつまりそれだというのだ。万有は本来が動なのであって、これを除外しては他の何ものでもないのであるが、その動にはしかし二つの相（あるいは品種）があって、多いことでいえば、両者いずれに属するものも無限なのであるが、しかし機能からすれば、作用を及

---

1　驚異（タウマゼイン）が哲学の始まりだという事はアリストテレス『形而上学』第一巻（$982^b12$）にも述べられている。虹をタウマス（驚異）の子だとすることはヘシオドス『神統記』七八〇行に見られる。しかしイリス（虹）とピロソピア（求知、哲学）との関係はあまり判然としない。これを『クラテュロス』408Bと398Dに関連させる解釈もある。

2　同様の人々が『ソピステス』246Aにおいても語られている。果して何人を指したものであるかについて、デモクリトスやヒッポンやクリティアスやアンティステネスの名が挙げられたが、確証はない。むしろそういう特定の学派人ではなく、もっと一般的な思想傾向が意味されているのだとも解されるであろう。例えば『パイドン』81Bを見よ。

ぼす機能をもつものと作用を受ける機能をもつものとの二つになるのである。そしてこれら相互の交合摩擦から

B 子孫が生成する。しかもそれは無限に多く生ずるわけなのだが、しかしいずれも一対ずつ双生児となって生ずる。すなわち一方に感覚されるものがあると、他方には感覚が、いつもその感覚されるものとともに、一緒に産み落され、生じてきているというようなわけなのだ。それでとにかくその感覚に対しては、われわれは次のような名前をつけている。すなわち視覚と聴覚、嗅覚、冷覚と温覚、さらにはまた快と苦、欲求と畏憚などと呼ばれたもの、その他、名前のないのも数知れずあるが、名前のあるのもずいぶん多い。他方また感覚されるものの種族は種族で、これら感覚のおのおのと生まれを同じくするものとして、視覚には色彩が、そのあらゆる種類に対して

C またあらゆる種類のものが、同様にしてまた聴覚には音声が、その他の感覚にもまたその他の感覚されるものどもが、その生成においてこれと生まれを共にするものとしてあるというわけなのだ。さあ、それでは、以上の神話風な物語は、テアイテトス、さきの事柄に対して一体何をわれわれのために語ってくれようとしているのか、それの考えがつくかね。

**テアイテトス**　いいえ、じゅうぶんにはつきかねます、ソクラテス。

**ソクラテス**　まあ、とにかく気をつけてみたまえ、この物語は何とかして大団円で結べるかもしれん。というのは、それはつまりこういうことを言おうとしているからだ。すなわち、いま述べたすべてのものどもは、むろん、われわれの語るがごとく、動いているものなのだが、しかしその動には遅速緩急の別があるというのだ。そ

D れがしかも、およそ動きの遅緩なものは、同じ場所にいて、その活動を近しい〔仲の〕ものに対して営むわけなのだ。そしてそのようにして子を生むのだ。ところが、こうして生まれる子の動きはもっと急速なのだ。なぜなら、

それは場所をかえて動くからだ。つまり、運動[1]ということにそれの生来の動があるからだ。かくて、いま眼とそれから眼に合性の何か他のものとが近しい仲になって、白色を生み、またこれと双生する感覚を生んだ時、そしてこの白色やこの感覚は、眼なり眼に合性のものなりのどちらかが、これ以外のもののところへ行ったのでは決して生じなかったはずのものなんだが、さて、これらをそれが生んだ時、視覚の方は目から出るし、これに合わせてこの色を産むものからは白色が出て、その間互いに運動して、それで目はすなわち視覚の充すところとなり、

E

そしてそのときじつに見るのである。すなわち目はその場合決して視覚となるのではなく、見ている目となるのである。また、これに合わせてこの色を生むものは、一面に白色で充されて、これはまたこれで、白色というものになるのではなくって、白くなるのである。そしてそのものは木材でもよし、石塊でもよし、何であれ、それの表面[2]がかくのごとき色によって彩られることとなるものなら、それでよいのである。そしてまたこのほかのものもむろんこのとおりで、硬いもの温いもの、すべて同じ仕方で考えられねばならぬ。すなわち、ちょうどこのことは先の場合にもわれわれが言っていたことなのだが、何ものも他と没交渉にそれ自体だけであるものではな

157

く、あらゆるもの、あらゆる性質は、動から、相互の交合によって生成するものなのだ。なぜなら、これらのものどもにあって作用を及ぼすとか受けるとかするものさえも、単独に何かであると固定的に考えることは、彼らの主張に従う限り、不可能なのだから。それはすなわち、作用を受ける相手と一緒にならないうちは、作用を及

---

1 「運動」(ポラー)という語は場所の動に限って用いられる。別して用いなければならない。本篇二八章(181C～D)参照。わが国では一般には運動という語は一般の「動」(キネーシス)と混同して用いられているが、概念的にははっきり区

2 原文 ὅτουοῦν . . . χρόα (ディエス案)とよむ。

ぼす何かであることはないのだし、また作用を及ぼす相手と落合(おちあ)わないうちは、作用を受ける何かであることはないのだ。そして何かと一緒になって、作用を及ぼすものとなっているものも、他のものと落合えば、別にまた作用を受けるものとなって現われることがあるのだ。かくて、これらすべてからの結論は、はじめから言っていたことだが、何ものも他と没交渉にそれ自体で単一に**ある**ものではなく、何かに対して常に**なりゆく**ものなのだ（B）ということになる。そしてこの「ある」というのは、これをあらゆるところから取除かねばならないのであるが、それをしかしながらわれわれは、習慣のためまた無知識のため、たびたび、この今でさえ、言葉の上に使用しなければならないように余儀なくされてしまっている。けれども、この知者たちの言論に従う限り、それはいかんのであって、「何か」とか、「何かの」とか、「私の」とか、「これ」とか、「あれ」とか、その他およそものを立ち止まらせることとなるいかなる言葉も、これを許容してはならないのである。われわれの口にすべきは、ものを「なりつつ」とか、「なされつつ」とか、「亡びつつ」とか、「変じつつ」とかいうように、その本性のとおりに言い表わす言葉でなければならない。それはもし何びとかが言論をもって何ものかを立止まらせるとしたら、このことをなすその人は苦もなく論破されるからだ。そしてこのことは、ただ箇々の分解されたものについて言うばかりでなく、(それの)多の集合(1)についても言わなければならないのである。この集合というのは、ちょうどそれ（C）に対して人々が「人間」とか「石」とかいって、それぞれの動物なり他の品種なりの名前をつけているものなのである。さて、以上は、テアイテトス、果して好いと君に思われるかね。これを君は結構だといって賞味してくれるだろうか。

**テアイテトス**　それは、ソクラテス、どっちとも私には請合いかねます。と申しますのは、実際の話が、あな

たのことにいたしましても、これをあなたは御自分でそう思っておっしゃってるのか、それとも、私をただ試していらっしゃるのか、それもはっきり識ることができずにいるのですから。

**ソクラテス**　おぼえていないな、君は！　これらこうしたものの中で、何ひとつだって僕の知っているものはないんだってことを！　何ひとつだって僕のだとするものはないんだってことを！　僕はこれらの不妊者なんだ。僕はただ君の産婆役をつとめているんだ。そしてそのために唱えごとをして、各種の知見を供え、君にこれを味わわせようとしているのだ。そして終に君の思想の結晶を、君の手助けをして、明るみへ導き出す時の来るのを待っているわけなのだ。そしていったんそれが導き出されたならば、その時は今度、それが虚妄のものか、それとも純正のものか、検査の結果どう出るか、それを見ることにしようというわけなのだ。が、それは、まあ、とにかく、怯まず弛まず、何でも僕の尋ねることに対して、君〔の心〕に現われているとおりを、何でもよいから、りっぱに男らしく答えてくれたまえ。

D

**テアイテトス**　では、さあ、お尋ねください。

---

1　『パルメニデス』164B～165E において、単一性が否定される場合、単一性を欠く事物がいかに考えられねばならぬかを述べて、それをやはり似たような言葉「集塊」(オンコス)を用いて規定している。そしてそれは、一つもののように見えるけれども、実は多なるものであるというふうに言われている。そういう場合は本篇166B においても、同一の人間と見えるものが実は無限に多くの相異なった人間であって、それが時間上連続集合していることが語られている。

一三

**ソクラテス**　それでは、もう一度くりかえすが、あるなんてことはちっともないんで、善でも美でも、また今しがたわれわれの述べたてたものどもはすべて、いつもただなりゆくのだというのは、これは君に結構だと思えるかどうかを言ってくれたまえ。

**テアイテトス**　ええ、それがさて、私としましては、あなたから今のような説明を承ってみますと、それは驚くばかり理のあることに見えるのでして、これはお説の通りに受取らねばならぬと思われるのです。

E

**ソクラテス**　そうか、それでは、これの残っているだけのものはのこさずやってしまわねばなるまい。そしてその残っているというのは、夢と病とについてなのだ。そして後者のうちでは特に精神病と、それから〔もっと一般的に〕錯聴するとか錯視するとか、または何か他にも錯覚すると言われる限りのすべてのものがそうなのだ。すなわち、君はおわかりだろうと思うが、これらのどれをとってみても、ちょうどわれわれはこれらの中においても虚偽の感覚というものを他のどの場合よりも多くもつようになるかのごとく考えられるからして、今しがたわれわれが通過して来た言論というものは異議なく論破されるように思われるのだ。すなわちここでは、各人に現われているそのものがまたありもするなどという沙汰ではなく、むしろまるで逆に、現われているもののうち何ひとつだってありはしないと思われるのである。

158

**テアイテトス**　ええ、おっしゃることは至極本当です、ソクラテス。

**ソクラテス**　ほう、すると、どうだね、おぼっちゃん、感覚を知識だとおいて、「各人に現われているそのもの

は、それが現われているその人にとって、またありもする」と主張している側の者には、一体どんな言い分が残されているのかね。

B

**テアイテトス**　私は、ソクラテス、こう言ってあなたから今さっきたしなめられたのですから、言うのをはばかりますけれど、何と言ってよいかわからないと申したいのです。なぜなら、精神病の人や夢をみている人たちの思いなすことが、その一方の者は自分を神であると思い、他方の者は、自分には翼があって、自分は飛行しているのだと夢の中で考えていたりする場合にも、これは虚偽ではないのだという異論を立てることは、真実、なかなかもってできそうもありませんからね。

**ソクラテス**　おや、それでは、それらのものに関しては、なかんずく夢と現(うつつ)について、次のような種類の異論が立つのに、君はそれも気がつかんのかね。

**テアイテトス**　と申しますと、それはどんな異論なのでしょうか。

**ソクラテス**　それをたびたび君は人々の問い(1)として聞いたことがあるだろうと僕は思うんだが、もし誰かが今この現在において、われわれは眠っているのだろうか、われわれの考えているのは、これはみな夢なんだろうか、それとも、われわれはこれで覚めているんで、お互いに話し合っているのは、これは現なんだろうかと尋ねたなら、どんな証拠をさし示して、ひとはこれに応ずることができるだろうかというのだ。

C

1　アリストテレス『形而上学』第四巻(1011a6)参照。この問いがデカルトの『省察』(*Œuvres de Descartes*, publiées par Ch. Adam & P. Tannery, Paris, 1904, p. 19)において重要な役割を演じていることは人も知る通りである。

**テアイテトス**　ええ、それはまた本当に、ソクラテス、どんな証拠をあげて証明したものかと言われるとたしかに困ることなんです。何もかも、まるで歌のくりかえしみたいに、相対応してどちらにも同じものがあるんですからね。なぜって、いま私たちが話し合ったことを、何の障(さわり)もなく、また眠りの中で互いに話し合っているものと思うこともできますし、またその上、夢の中で私たちが夢のことをいろいろ話しているつもりの場合などには、これと今の場合の似ていることといったらへんなくらいです。

D

**ソクラテス**　してみると、異論を立てるということは、少なくともこれなら、もう夢か現(うつつ)かということでも異論が立てられるとすれば、むずかしくはないということがわかるね。それに見たまえ、眠っている時間と覚めている時間が等しいものだとすると、これのどちらにおいてもわれわれの精神は、それぞれの時に現在して、それと思われているところのものを何よりも本当だとして、あくまでもそれを通そうとするから、したがってわれわれは等しい時間を、一方ではこれをあるものだと主張し、他方ではあれをあるものだと主張して、しかもそのどちらを主張するのにも同じような強硬さで押し通そうとしているということになるのだ。

**テアイテトス**　ええ、それはまったく事実たしかにその通りです。

**ソクラテス**　それでは、同じことは、時間が等しくないという点を除けば、病い、特に精神病について言われるのではないか。

**テアイテトス**　ええ、それはそう言われてさしつかえないことです。

E

**ソクラテス**　それでは、どうかね。真というものは時間の多少によって決定さるべきものだろうか。

**テアイテトス**　とんでもない！　そんなことをしたらいろいろおかしなことになるでしょう。

**ソクラテス**　しかしそうかといって、これら思いなされたもののうちどういうのが真かということについて、何か他に君は頼りになるものを出して見せることができるかね。

**テアイテトス**　いいえ、できそうにもないように思います。

## 一四

**ソクラテス**　それでは、それぞれの時に思われていることをもって、そう思われている者にとっての真なのであると定めている人たちが、以上のことがらについてどのようなことを言うだろうかということを、僕が話してあげるから、聞きたまえ。その人たちは、しかしながら、僕の思うに、こんなふうな問いをかけながら話を進めて行くことだろう。すなわち、テアイテトスよ、ものがもし全然異なっているとしたら、それが自分より異なるものと何か同じ機能をもつということはどっちみちないはずではないか。なおその際われわれは、問題のこのものを、この点では同じだが、かの点では異なるなどと考えずに、まる全体として異なっているのだと解するようにしたいのだ。

159

**テアイテトス**　ええ、そういうことなら、ものが正確に異なる場合には、機能にしても他の何にしても、何か同じものをもつということは不可能です。

**ソクラテス**　それでは、果してどうかね、当然、こういうような〔異なった〕ものは同様ではないもの（似てないもの）としても認めなければならんのではないかね。

**テアイテトス**　ええ、そのように私は思います。

(159)

**ソクラテス**　したがって、もし何かが、それは自分自身に対してであっても、また他のものに対してであってもよいのだが、何かに対して同様のもの(似たもの)になりゆくとか、あるいはまた、同様ではないもの(似てないもの)になりゆくとかいうようなことが起こるならば、同様のものになりゆくことによって、それは同じものになりゆくのであり、同様ではないものになりゆくことによって、異なれるものになりゆくのであるとわれわれは言うべきであろうか？

**テアイテトス**　ええ、そう言わねばなりません。

**ソクラテス**　ところで、前にわれわれはこういうことを言っておいたのではないか。すなわち、作用を及ぼすものはたくさんあって無限にあるが、しかしまた作用を受けるものだって同じなのだということを。

**テアイテトス**　はい。

**ソクラテス**　それからまた実にこういうことも言っておいたのではないか。すなわち、違うあるもの(例えばA)が他のあるもの(例えばB)と一緒になるのと、さらにまた別のあるもの(例えばC)と一緒になるのとでは、それの生むものが同じではなくって、異なっているはずだということをね。

**テアイテトス**　ええ、事実まったくその通りです。

B

**ソクラテス**　では、今度は僕や君やその他のものを同じ論法で論じてみようではないか。例えば健康体のソクラテスとそれからまた病体のソクラテスなどをね。どうだ、この後の者は前者と同様のものだと僕たちは言うべきであろうか。それとも同様ではないものだと言うべきであろうか。

**テアイテトス**　と申しますと、それは果して病体のソクラテス全体と健康体のソクラテス全体とがどうかって、

こうおっしゃるわけなんでしょうか。

**ソクラテス**　うん、君の把握はたいへん見事だ。僕の言おうとしているのはちょうどそれなんだよ。

**テアイテトス**　むろん、同様ではないものだと言うべきでしょう。

**ソクラテス**　したがってまた、同様ではないものであるだけ、それだけまた異なったものでもあるわけではないのか。

**テアイテトス**　当然そうでなければなりません。

**ソクラテス**　むろんその上は、眠れるソクラテスでも、またわれわれがいま述べたてたもののどれでも、君の言うことは同じだろうね。

c

**テアイテトス**　ええ、そうです。

**ソクラテス**　では、何か作用を及ぼすような性能をそなえているもののおのおのが、いま健康体のソクラテスをつかまえたとすると、それは病体のソクラテスをつかまえた場合とは、どうだね、その交渉相手たる僕を異にしているはずなのではないかね。

**テアイテトス**　むろん、そのはずです。

**ソクラテス**　その上また、この二つの場合それぞれでは、異なったものを僕とそのものとで生むはずなのではないか。僕は作用を受けるもの、それは作用を及ぼすもので。

**テアイテトス**　ええ、それに違いありません。

**ソクラテス**　かくて、いま僕が健康体で酒を飲むとすれば、それは僕にとって甘美（かんび）なるもの、甘旨（うま）きものとし

(159)

て現われるわけなのだ？

**テアイテトス**　はい。

D

**ソクラテス**　むろんそれは、先に同意されたことから説明してみるなら、作用を及ぼすものと受けるものとが甘旨とその感覚という、両者同時に運動するところのものを生んだということなのだ。つまり、感覚の方は、作用を受けるものから出ていて、それの舌を感覚する舌に仕上げたのであり、甘旨の方は酒から出て、酒の周囲を運動して、当の酒を健康な舌に対して旨くあるように作し、また旨いものとして現われるようにしたのである。

**テアイテトス**　ええ、事実まったくその通りで、前に私たちはそんなふうに同意しておきました。

**ソクラテス**　ところで、それが病体のソクラテスをつかまえたのだったなら、どうだね、まず第一に、それがとらえたのは、実際のところ、前のソクラテスと同一人ではないのではないか。なぜって、むろんそれは同様ではないソクラテスにぶつかったんだからね。

**テアイテトス**　はい。

E

**ソクラテス**　だから、このほうはこのほうで、両者の生むものは異なるわけだったのだ。こういう〔病体の〕ソクラテスとその酒を飲むこととではね。つまり、舌のあたりには苦味の感覚を生じ、酒の周囲には苦味が生まれて、運動しているわけなのだ。そしてそれらのものは酒を苦味というものにするのではなくって、苦きものにするのであり、また僕を感覚者とするのであって、感覚というものにするのではなかったのである。

**テアイテトス**　ええ、ちょうど間違いなくその通りです。

**ソクラテス**　ところが、僕としても、他のどんなものを感覚するにしたところで、それをこんなふうに感覚す

160 る者となることは決してないだろう。なぜなら、そうした他のものの感覚は他の感覚であって、この感覚がその感覚する者を他のようなものとなし、また他のものとなすからだ。(1) また僕に作用を及ぼすものにしたところで、他のものと一緒になったのでは、いまと同じものを生んで、この今あるようなものとなるということは、万が一にも決してないだろう。なぜなら、他のものからは他のものを産んで、他のようなものになるだろうからね。

**テアイテトス**　ええ、それはその通りです。

**ソクラテス**　むろんまた、僕が僕自身を相手にして、それで今のべているような者になるというはずもないし、また、そのものはそのもので、そのもの自身を相手にして、それで今のべたようなものになるというはずもない。

**テアイテトス**　ええ、それはむろんそのはずがありません。

**ソクラテス**　うん、だが、僕が感覚する者となる場合には、必然に何かのそれとなるのでなければならぬ。なぜなら、感覚者とはなるが、しかし何ものの感覚者ともならぬ(何ものの感覚者でもないものとなる)(2) なんてことは不可能だからだ。B また、かの物はかの物で、甘い(旨い)とか苦いとか何かそうしたものになる場合には、何かにとってそうなるのでなければならない。なぜなら、甘く(旨く)はなっているが、しかし何ものにとって甘く(旨く)なっているのでもない(何ものにとっても甘くはなっていない)なんてことは不可能だからね。

**テアイテトス**　ええ、事実まったくそれに違いありません。

---

1　補注B3(四〇七ページ)を見よ。

2　原語では「何ものの感覚者ともならぬ」が「何ものの感覚者でもないものとなる」と同じ表現である。同じく次の「何ものにとって甘くなっているのでもない」と「何ものにとっても甘くはなっていない」とが同じ表現である。

**ソクラテス**　すると、結局のこるところは、僕とそのものとが、お互いにとって——あるなら——ある、——なるなら——なるということになるのだと思う。なぜなら、僕のありよう(有)とそのもののありよう(有)とは必然によって結び合わされているのであって、僕とそのもの以外のいかなるものにも結び合わされてはいないのだし、またそうかといって僕の有は僕自身にだけ、そのものの有はそのもの自体だけに結び合わされているというのでもないからだ。つまり、のこるところは僕とそのものとの有がお互いに結び合わされているという場合だけになる。したがって、もし誰かが何かあるという言葉を用いる場合には、その人はそれを「何かにとってある」とか、「何かのである」とか、あるいはまた「何かとの関係においてある」とか言わなければならない。そしてこのことはなるという言葉の場合においても同様である。これに反して、何かそれ自体でそれ自体にとどまったま

c

まあるとか、なるとかいうようなものは、この場合自ら口にしてはならないばかりでなく、また他の者が言っていても、これを許容してはならないというのが、これがわれわれの通過して来た言論の指図なのである。

**テアイテトス**　ええ、事実まったくその通りです、ソクラテス。

**ソクラテス**　してみると、そもそも僕に対して作用を及ぼすものというのが、僕にとってこそそれなのであるが、他の者にとってはそうではないのだとすると、またこれを感覚しているのも、それは僕であって、他の者ではないのだということになるのではないか。

**テアイテトス**　ええ、むろんそうでなければなりません。

**ソクラテス**　したがって、僕の感覚というものは僕にとっては真なのだ。なぜなら、それはいつでも僕にとっての有を感覚させるものなのだから。すなわち僕は、プロタゴラスの言う通り、僕にとってのあるもの、あらぬ

ものの、あるということ、あらぬということの判別者なのだ。

**テアイテトス**　ええ、それはそういうことになるようです。

## 一五

D

**ソクラテス**　それならば、虚偽をしらぬ者であり、思考上あるものまたはなるものについて躓くことのない者である僕が、いやしくも何かを感覚する者としてある限り、まさにそのものについては、どうして知識する者ではないということがあり得ようか。

**テアイテトス**　ええ、それはないって法はどうしたってありません。

**ソクラテス**　してみると、君が「知識はすなわち感覚にほかならず」と言ったのは、なかなかもって見事なわけだったのだ。つまり、ホメロス、ヘラクレイトスなどの、ああした一族のものが全体となって唱えている「あたかも流れるもののごとく万物は動いているのだ」というのも、またこの上ない知者のプロタゴラスが主張する「すべてのものの尺度であるのは人間だ」ということも、またテアイテトスの「これらをこうだとすると、感覚は知識だということになる」という断定も、畢竟は同じことに帰着してしまうのだ。どうだ、テアイテトス、事

E

実きっとそうではないか。われわれは以上のものを、君にとっては新たに生んだ赤ん坊のようなものであり、僕にとってはその取り上げをなしたところのものであると、こう言おうと思うのだが、どうかね。ほかに何か言いようがあるだろうか。

**テアイテトス**　いいえ、必ずともそう申すよりほかはありません、ソクラテス。

**ソクラテス**　すると、どうやら、以上で――ちょうどそれがそもそも何であるにしたところで――僕たちはひとまずやっとお産をすましたことになるらしいね。だが、お産の後では、それのアンピドロミア(1)(すなわち、その赤ん坊を抱いて家の神竈のまわりを走りまわる儀式)として、僕たちはこの言論の上で、本当に周囲一円を走りまわって、もしやこの生まれて来ているものが、養育に値いしない虚妄虚偽のものであるのに、僕たちがこれに気づかずにいることがありはしないかと、あらゆる角度からよく見てみることをしなければならんのだ。それとも君はどっちだね。自分の子だからには何が何でもぜひ養育しなければならん、捨てるわけにはいかんと、こう思っているかね。それともまた、それが吟味されるのをじっと我慢して見てられるかしらん。いわば初産者である君からこれを取り去る者があっても、ひどく腹を立てたりしないでおられるかしらん。どうだろう。

161

**テオドロス**　それはテアイテトスなら、ソクラテス、がまんしていることでしょう。なぜなら、これは気むずかしやではないんだから。とにかくそれよりは、今までのことは、これはそもそもまたこうではないということになるのでしょうか、何とぞそれをひとつ聞かせてください。

**ソクラテス**　何のことはない、あなたは、テオドロス、言論狂ですよ、それもお人よしの！　なぜって、あなたは私を言論の詰っている嚢(ふくろ)かなんかのつもりで、そこからは何の造作もなく「これはまたこうではないんだ」というのを取り出して言えるものだと考えておられるんだからなあ。しかし事実は、あなたはお気づきになっていないが、その言論のうち何ひとつだって私のところから出ているものはないんですよ。いつもそれは私と言論を交える相手の方から出ているのです。そして私の知識していることといっては、ごくわずかなこと、つまり、ただ知恵のある他の人から言論を出させて、これを度に合った仕方で受けいれるという、それだけのことしかな

B

いのでして、それ以上のものは何もないのです。だから今も、この人からそれを試みることはするでしょうが、自分から言おうとすることは決してないでしょう。

**テオドロス**　それは、ソクラテス、あなたの言われる通りでいっそう結構なわけです。この上はその通りにしなさるがよい。

## 一六

**ソクラテス**　それでは、テオドロス、あなたは御存じかしらん、あなたのお仲間のあのプロタゴラスのことで、私は解(げ)せんと思っていることがあるのですよ。

C

**テオドロス**　それはまたどんなことでしょうか。

**ソクラテス**　それは「おのおののものに思われていること、そのことはそうありもする」ということを説くことにおいて、あの人はほかの点は私にとってたいへんおもしろかったのです。しかしその論のはじめが私にはとうてい解せんのです。何だってあの人は、あの『真理』(2)のはじめに、万物の尺度であるものとして、豚とか狒々(ひひ)

1　古注によれば、生後第五日に催される儀式。この日お産に立会った女たちは手を清めて、新生児を抱いて家の竈(かまど)のまわりを走ってまわる。そして新生児は名前をつけられる。親戚友人からは長命を祈ってたこやいかが贈物されたという。ただし、アリストパネスの『鳥』(四九四、九二二行)では一〇日目となっている。またアリストテレス『動物誌』第七巻(588a8)では命名日を七日としている。

2　この書物の「真理」という名前は、この論文の冒頭に「アブデラの人プロタゴラスは自ら真理なりと信ずるところのものを次のごとくに言わんとするものである。云々」というような言葉があったところから取られたのであろうと想像される。Fr. 1 (DK) 脚注参照。

とか、あるいは何か他のもっと奇怪なものの名を、およそ感覚をもっているもののうちから、あげることをしなかったのでしょうか。そうすることは、あの人がわれわれに向かって言論するのに劈頭まず豪気なふうをし、またひどく軽蔑的な調子を出すためにも効果的だったでしょうにねえ。つまり「諸君は自分を知者だといって、まるで神様かなんぞのように、驚異の眼をもって見てくださる。しかしご覧、自分はまさに人間の中の他の誰かは

D

おろか、蛙の子のおたまじゃくしに比べてみても、ちっとも知恵のすぐれているものではないのだ」ということを宣明することによってです。それともわれわれはどう言ったらいいのでしょうか、テオドロス。なぜなら、本当にもし何でも各自が感覚を通して思いなすところのものが、各自にとっては真であるということであろうものなら、また、ひとが作用を受けて、そこに受けとられたものを判定するのに他人のほうがうまいというようなこともなければ、またもし思いなしの正か偽かを検査する機能は当の者よりもむしろ他の者に属するとかいうようなこともないというのであろうなら、むしろ、もう幾度も言われたことですが、各自の思いなすところのものはただひとり各自自身がこれを思いなすのみであって、しかもそこに思いなされていることは皆ことごとく正しいのであり、真なのであろうならば、ここだけの話ですが、一体そもそも何が故にプロタゴラスは知者であり、し

E

たがってまた、それは正当なことになるわけですが、他の者どもの師として尊敬され、かつ、多額の謝礼金(1)まで貰っていたのでしょうか。これに反してわれわれは、各人各自の知恵の尺度で自身があるにもかかわらず、何が故に学知の劣れる者として、彼のもとに出入りして教えを受けねばならなかったのでしょうか。こんなことは、これはプロタゴラスが本気で言っているのではなくって、大向こうを喜ばすためだったんだと、こうわれわれは言っては悪いでしょうか。これで私は、私一個のことや私の産婆術についてなら、私たちがどんなにまで笑止な

162

者とならねばならないか、それは言わないことにしますが、しかしこれでは言論を交えて問答する業までが全体やはり同じことになると思うんです。すなわち、お互いに現われているものや思われているものを、誰のだってそれは正しいものなのに、これを検査したり、これを論破することを試みたりするなんてことは、もしプロタゴラスのいう「真理」が真理であって、うそや冗談に言われたものではなく、あの書物の不可侵の玄宮ともいうべきところから聞こえてきた声なのでしたなら、疑いもなくそれは無用の長談義であり、途方もない空談であるということになるのではないでしょうか。

**テオドロス**　あの人は、ソクラテス、あなたの今しがた言われたように、私の友人なのです。ですから、プロタゴラスの論破が私の同意を通してなされるということは、はばかりながら私としては忍びがたいことなのです。他方また、そうは思われないものを、ただあなたを相手にそうだと張り合いをするという役も、私にはお引き受けできんことなのです。ですから、お相手にはまたこのテアイテトスを取ってください。なんにせよ、今がたも大へん調子よくあなたの言われることに追随して来ていたようでしたし。

B

**ソクラテス**　果して、テオドロス、あなたはラケダイモンの相撲場(2)へ行っても、他人の裸体は――まずいのも

1　多額の謝礼金については『メノン』91D。Diog. L. IX. 52参照。他人の師となることについては『エウテュデモス』287A参照。

2　本篇169Bなどによって見ると、ラケダイモン(スパルタ)においては相撲をしないただの見物人というものは許されなかったらしい。裸体は今日漠然と想像されるほど自由に見られたのではないらしい。『法律』VI. 772A、アリストパネス『雲』九七四行、Aeschines I, 12など参照。アテナイにおいてさえ子供が実際に裸になって相撲している場所には大人の入場することが禁止されたこともあったと言われる。

中にはあるでしょうに——これを見物しながら、自分は、その側に着物を脱いで、こちらからも身体の恰好を見せるというようなことをしなくてもいいつもりでおられるのだろうか。

**テオドロス**　しかし、もし彼らが私の言葉を聴きいれて、それを私に許そうとするなら、一体どうだとあなたは思いますかな。今だってちょうどその通りです。あなた方は私の言うことを聴いてくださると思うんです。私はこんなにもう身体のこわばっている者なんだから、けいこ場なんぞへ引っ張り出したりしないで、ただの見物人にしておいてください、それよりもこのもっとしなやかな身体をしている、もっと若い者と取り組んでくださいというのをね。

## 一七

**ソクラテス**　まあとにかく、物の文句じゃあないが、そうするのが、テオドロス、あなたの御意にかなうなら、わたしもいやとはいうまい。さあ、それでは、向かって行かなければならぬ相手というのはまたもや知恵者(1)のテアイテトスだということになる。さあ、テアイテトス、では言ってくれたまえ。まず第一は、今し方われわれの通過して来た事柄だが、果してどうだね、突然こんなふうに君が知恵にかけては人間の誰かれはおろか、神々のうちの何神に比べても少しも劣ることのない者だということになって現われようものなら、君は奇異な思いをしはしないかね。それとも君は、プロタゴラスの尺度というのは、神々に対するのでは、人間に対するのより、意味の少ないものとして言われているのだと思うかね。

c

**テアイテトス**　いいえ、神明に誓って、そうは決して思いません。それからまた、お尋ねのことですが、まっ

たくそれは奇異な思いがいたします。と申しますのは、「おのおのに思われていることそのことは、かく思われ D ているその者にとって、またありもする」ということが、彼らによってどういうふうに言われているのかを私どもがつまびらかにしておりました際には、それは私にはまったくよく言論されているように見えておりましたが、今はたちまちその反対に変わってしまいました。

**ソクラテス** それはつまり君が若いからなんだよ、愛する坊やさん。それだからこそ君は、俗受けを主眼とするような議論にすぐ耳をかして、その気になれるんだ。というのは、いま言われたことに対しては、プロタゴラスなり、プロタゴラスの代弁者たる他の誰かなりが言うことだろう。「少年諸君ならびに老人諸君、諸君はいずれもりっぱな生まれの諸君である。それがここに集りを開いて何をしておられるのかと思えば、ただ俗耳に訴えることを目的としたような議論をしておられるのである。すなわち諸君が前面に持ち出して来ておられる神々な E どというものは、それは私が、そのあるかあらぬかについて、語ることからも書くことからも、除き去っておるところのものなのである。[(2)] また、人間のうちの誰をとってみても、家畜のうちの何をとってみても、社恵のあることにおいては、その間に寸毫の差異もないのであるというようなことがもしもあろうなら、それは容易ならん

1 知識(知恵)を感覚にほかならずと措くことによって、テアイテトスは次に述べられるように、すでに知者であることとなるので、ソクラテスはかく呼んだわけである。

2 Diog. L. IX. 51 の引用によれば、それは「神々について それがあるかあらぬか私は知りようがないのである。なぜなら知ることを妨げるものがたくさんあるからである。すなわち事柄が不明なのに加えて人間の一生は短いからである云々」というようなものであったらしい。そして同じディオゲネス(Diog. L. IX. 54)によれば、彼はこの論文を劇作家エウリピデスの家で朗読したということである。

ことである、というようなことを諸君は言っておられるが、それは聞き手が俗衆であったなら受けいれられるかもしれないようなことなのである。これに反して、諸君の言っておられることのうちには証明も、必然にそうなければならんようなもの何ひとつありはしない。ただ諸君はそこにおいてまことしやかなものを用いておられるのである。ところが、このものは、もしテオドロスなり、幾何学者の誰か他の者なりが、これを用いて幾何をやろうとするならば、ほんの釆の目一つの値打ちもないことになるかもしれないものなのだ。だからして、よく考えてほしいものだ、君にしろテオドロスにしろ、これだけ重大な事柄について、もしその言論がまことしやかなものを用いてひとを説得するだけの手段に出たものであるならば、諸君はこれを是認すべきであるかどうか。」

**テアイテトス**　いや、考えるまでもありません、そんなのを是認したりするのは、私たちばかりでなく、ソクラテス、あなたにしても正しいとはおっしゃらないでしょう。

**ソクラテス**　してみると、われわれの考察は、君の言葉にあらわれた君とテオドロスさんとの意向では、もっと別な道によらなければならないようだね。

**テアイテトス**　ええ、事実まったくもっと別な道によらなければなりません。

**ソクラテス**　では、次のような道によって見て行くとしよう。知識と感覚とは果して同じものであろうか、それとも異なったものであろうかってことをね。というのは、僕たちの論ってものは全体としてどうも結局この点に及ぶもののようであったし、また僕たちが以上の論においてあの多くの奇怪なことがらを動員したのもこのためのようだったしするからね。どうだ、そうではないか。

**テアイテトス**　ええ、事実まったくその通りです。

B

**ソクラテス** それでは、どうかね、われわれは次のようなことがらに同意すべきものなのだろうか。すなわちわれわれが視るとか聴くとかすることによって何かを感覚しておる場合に、われわれはそれらすべてのものを同時にまた知識しているのであるとなすべきであろうか。例えば外国人が物を言っている場合、われわれは未だその言語を学知していないとしたら、われわれはそれをわれわれが聴いているということを否定すべきであろうか。それともまたわれわれは、われわれがそれを聴いていることを肯定して、そしてわれわれは彼らの言うことが何であるかをも知識していると主張すべきであろうか。またさらに、文字の知識がなくって文字に目をやっている場合、われわれはこれを視ておらんのだと主張すべきであろうか。それともまた、視ているんだから、知識しているのだなんてことを強いて主張したものだろうか。

**テアイテトス** それは、ソクラテス、それの、私たちが視たり聴いたりしているまさにちょうどそのものだけを私たちは知識しているのだと言うべきです。すなわち後の場合なら、それの形と色が私たちの視て知識しているところのものなのです。前の場合なら、その音の高低が私たちの聴いて同時に了知しているところのことなのです。これに反して、読書の師匠や通訳の者がこれらについて教えてくれることはと申しますと、それはわれわれが視たり聴いたりして感覚していることではなく、また私たちの知識していることでもないと申さねばなりません。

C

**ソクラテス** いや、これは、テアイテトス、上できだった。君のいま言ったことに異論をさしはさむなんてことは、それにまた上策でもないんだ。ちょうどまた君にはこの上とも勢いづいてもらわねばならんのだからねえ。

一八

**ソクラテス** だけれど、ほら見たまえ、またこんなのがもう一つ押し寄せて来ているのだが、どうやってそれを切り抜けたものか、ひとつ考えてみてくれたまえ。

**テアイテトス** とおっしゃるのは、それは一体どんなもののことなのでしょうか。

D

**ソクラテス** それはこういうようなものなんだ。つまり、もしかすると誰かそれを問題にする人があるかもしれないんだが、いま何人かが何の時かに何ものかを知識する者(識者)となったとして、今だにちょうどそのものの記憶(思い出)をそこなうことなしに保持しているとするならば、そんな場合、その人はそれを思い出しているその時に、それが思い出しているちょうどそのものを知識していないなんてことが、果してありうるかどうかということなのだ。いや、これは回りくどい話になったようだ。要するに僕の問いの意味はだね、何人かが何かを学知した後、それを(記憶して)思い出すとしたら、その人はそれを思い出し(記憶し)てはいるが、それを知ってはいないなんてことがあるか、どうかっていうのだ。

**テアイテトス** して、どうしてそんなことが、ソクラテス。なぜって、もしお話のようなことがあるといたしますなら、それは面妖(めんよう)なことでしょう。

**ソクラテス** おや、それでは、いやだなあ、僕は無意味なことをしゃべっているのかしらん。まあ、しかし見てくれたまえ。どうだね、君は視ることを感覚することの一種だと言いはしないかね。そして視覚を感覚の一つだって?

E

**テアイテトス**　はい、そう申します。
**ソクラテス**　それでは、およそ何かを視た者は、今の言によると、それが視たところの、そのものの識者（知識する者）となっておるわけではないかね。
**テアイテトス**　はい。
**ソクラテス**　では、どうかね。記憶（思い出）というものを、無論君は何かとして認めるだろう？
**テアイテトス**　はい。
**ソクラテス**　ところで、それは単独に記憶（思い出）としてあるものなのかね、それとも、何かの記憶（思い出）としてあるものなのかね。
**テアイテトス**　それはむろん何かの記憶（思い出）としてあるものだと思います。
**ソクラテス**　それでは、その何かのっていうのは、ひとが学知したり、感覚したりした、何かそういうようなもののではないかね。
**テアイテトス**　ええ、それに違いありません。
**ソクラテス**　そうすると、時には、ひとは視たものを〔記憶し〕思い出すことがあるだろうと思うんだがね？
**テアイテトス**　ええ、思い出すことがあります。
**ソクラテス**　どうだね、目を閉じてもそうかね。それとも、そんなことをしたら、記憶は消えてしまうかね。
**テアイテトス**　いや、とんでもないことです、ソクラテス、そんなことを肯定するなんて。
**ソクラテス**　でも、そうしなければなるまいよ。もし僕たちが前の説を救うつもりならばね。そしてもしそう

しなければ、前の説はおさらばになってしまうんだ。

**テアイテトス**　私も、きっと――神明に誓って――そんなことではないかしらんと思っておりますが、しかしそうだということのじゅうぶんな理解はついておりません。まあ、何はともあれ、どういう筋道でそうなるのか、お話しください。

**ソクラテス**　それはこういう筋道なのさ。つまり、われわれの主張だと、視覚者というものは、それがその視覚者となっているところの、そのものの知識者となっているわけなのだ。なぜなら、視覚は感覚であり、感覚は知識であって、同じものだともう同意されてあるのだからね。

**テアイテトス**　ええ、まったくです。

**ソクラテス**　うん、ところが、この視覚者であり、またしたがって視覚したところのものの知識者ともなっておるところの者が、いま目を閉じるとすれば、彼はそのものを記憶(思い出)してはいるが、視てはいないわけである。どうだ、きっとそうではないか。

**テアイテトス**　はい。

B

**ソクラテス**　うん、ところが、「視ない」ということは「知識しない」ということである、もしまた「視る」ことが「知識する」ことであるならば。

**テアイテトス**　ええ、それはほんとうです。

**ソクラテス**　したがって、帰結はこうなる。すなわち、いま人が何かの識者(知識する者)となって、なおそれを記憶し思い出していても、視ていないからには、彼はそれを知識しているのではないということになる。しか

もこのことは、もし生ずるならば、面妖であろうと僕たちの言っていたことなのだ。

**テアイテトス** ええ、おっしゃることは至極ほんとうです。

**ソクラテス** してみると、何かありうべからざることが、もし人あって知識と感覚は同じものであると主張するならば、結果するように見える。

**テアイテトス** ええ、そのように見えます。

**ソクラテス** したがって、両者はおのおの別ものであると言わねばならん。

**テアイテトス** おそらくそうかもしれません。

C

**ソクラテス** それでは、いったいぜんたい何が知識なのだろうか。もう一度このことが始めっから言論されねばならんようだ。だが、待てよ、僕たちのしでかそうとしているのは、テアイテトス、こりゃいったい何だ！

**テアイテトス** とおっしゃいますと、それは何についてなのでしょうか。

**ソクラテス** 僕たちのやり方ってものは、僕の見るところでは、まるで種の悪い雄鶏（おんどり）の流儀だ。まだ勝ってしまったのでもないのに、当の言論を離れて、そこから飛躍して出て勝ちどきをあげている。(1)

**テアイテトス** それはいったいどうしてなんですか。

**ソクラテス** あの反対のための反対論をする専門家たち(2)のように、僕たちは、前提すべきものの折り合いをつ

---

1 アイスキュロスの『エウメニデス』五九〇行にも同種類のことが言われている。なお『リュシス』205D 参照。

2 原語はアンティロギケー。なお『国家』V. 454 A sqq. においてもこのアンティロギケーが例をあげて証明されている。

けるのに、ただ名目の一致を目当てにし、そして何かそのようなものによって、相手方の論の上を越し、それでいい気持になっているようなところが見えるのだ。しかも僕たちは、知恵の探求をなす者であって、言論の競技をなす者ではないと言っていながら、その作すところは彼ら言論競技の猛者たちと同じであるのに気づかんのだ。

D

**テアイテトス**　まだおっしゃる意味がわかりませんが。

**ソクラテス**　いや、それは僕が、少なくともそれらについて僕が考えているだけのことは、とにかくこれを判然させるよう試みるとしよう。すなわち僕たちの問題は何であったかというと、それは「ひとが何かを学知して、これを記憶し思い出している時、その何かを知識していないということがあるだろうか」というのだった。そして僕たちの証明は何であったかというと、それは視て、それから目を閉じた者は、それを記憶し思い出していても、視てはいないということであった。そしてすなわちその者はそれを知らない者なのであるが、また同時に記憶し思い出している者なのであるということであった。しかもそれはありうべからざることであるというのであった。そして実にこのようにしてプロタゴラスが物語るところの説はふいになってしまったのである。また同時に、君の知識も感覚も同じだという説も。

E

**テアイテトス**　ええ、見たところ、そうのようです。

**ソクラテス**　決して、ところが、君、そうはならなかっただろうと僕は思うんだ、真にもし今の君のでないほうの物語を作った父親が生きていたならばね。いや、むしろいろいろとそれを庇護したことだろうと思うのだ。ところが今この物語は孤児なんだ。そしてそういうのを僕たちはいじめているわけなんだ。それも、プロタゴラスが後にのこした後見人たち――というと、このテオドロスさんもそのひとりなんだが、さてその後見人たち

——さえこれを助けようとする気がないんだからねえ。かえって、何ということだろう！　おそらくこの様子では、公平を保つためにこれに助勢するということであれば、それは人もあろうにこの僕たちの仕事となるらしいんだ。

165

**テオドロス**　いいえ、それは私ではないんだから、ソクラテス、むしろヒッポニコスのところのカリアス(1)なんです、それらあの人のものの後見人というのは。私たちは、これと違って、かなり早くから、ただ素(す)のままの言論(2)があるばかりで他に何のよりどころもないこれらのものには見切りをつけて、幾何学の方へ河岸をかえてしまったのですよ。もっとも、もしあなたがあの人の助勢をしてくださるのなら、むろんあなたのことを私たちはあ

---

1　カリアスの一家は遠くソロンの時代から富裕をもって聞こえたアテナイの名家であった。プルタルコス『ソロン伝』一五章、ヘロドトス『歴史』第六巻(一二一)、第七巻(一五一)等参照。カリアスの平和(前四四九／八年)と呼ばれるものは同名の祖父の外交的功績によるものだとされている。父ヒッポニコスの妻は後にペリクレスに再婚した(プルタルコス『ペリクレス伝』二四章)と言われているが、彼の母はたぶんこの婦人であったろうと思われる。前三九〇年のコリントスにおける戦闘に重甲兵の将として出陣し、後にはスパルタへの外交使節となっている。クセノポン『ギリシア史』第四巻(五の一三)、第六巻(三の二)参照。彼の名はプラトンの『弁明』20A、『クラテュロス』391B～C、『プロタゴラス』311A, 335C, 338Bなどに出ていて、後者ではプロタゴラスが彼の家に他の多くのソピステスとともに来泊していることが書かれている。また前二書ではカリアスがソピステスのために多額の金を費したことが語られていて、『クラテュロス』では特にそれがプロタゴラスとの関係において語られている。同様のことはクセノポンの『饗宴』(一の五)にも出ている。

2　『パイドロス』262Cにおいても、見易い例を充分に挙げてくれない抽象論がこの名をもって呼ばれている。この場合にも何か幾何学の図形のようなものがなくっては、テオドロスにとって言論は拠りどころのない素のままの言論と感じられたのであろう。なお原語は音楽の助けを借りない言葉についても用いられる。『法律』II. 669D、『パイドロス』278C、『饗宴』215Cなど参照。

りがたく思うでしょう。

**ソクラテス**　いや、それを聞けば満足です、テオドロス。それでは、僕の助勢っていうのがどんなものか、ひとつよく見てください。つまり普通慣用のわれわれの肯定否定の仕方で、言葉づかいに注意を払うということが肝心(かんじん)なんですよ。だからもしひとがこの注意を怠ると、今のよりもっと容易ならんことまで同意することになろうというものなのです。それがどんなところがそうなのか、私はそれをあなたにお話ししたものだろうか、それともテアイテトスにしたものでしょうか。

**テオドロス**　いや、それはむろんどちらへという区別なしに話してください。しかし答えさせるのはこの若いB方のにさせてもらいたいですな。しくじっても不体裁の度が少ないでしょうからね。

## 一九

**ソクラテス**　いざ、それでは言いますが、僕の言おうとするのはその至極容易ならん問いなのです。それはそして何でもこんなふうなものだと思うのです。つまり、ひとが何かを知っているとして、その同じ人が、その知っている当のものを、知っていて知らないということが果してありうるだろうかというんです。

**テオドロス**　さあ、それでは、一体何とわれわれは答えたものだろうか、テアイテトス。

**テアイテトス**　そんなことはありえないだろうというのがわれわれの答えだと、少なくとも私は思います。

**ソクラテス**　いや、そうはいかんよ、もし君が視ることは知識することだと定めようものならばね。なぜなら、いま君が話にあるような陥穽(おとしあな)にはまって、手も足も出ない有様だとするんだ。そしてその時もし臆面のない男が

C あって、手で君の片方の目におおいをして、このおおいをされた目で君はその外衣を視るかどうかと尋ねるならば、どうだね君は、この場合の何とも退引ならん問いをどう処理するつもりかね。[1]

**テアイテトス** それは、とにかくその目では視ないけれども、しかしもう一つの目で視るって、こう答えようと思います。

**ソクラテス** すると君は、同じものを同時に、視て視ないということになるのではないか。

**テアイテトス** ええ、そうです、何かそんなふうなことをする限りはですね。

**ソクラテス** 断じてそんなことを言えって僕は注文しているんじゃあないって、その男は言うだろうよ。つまり「どんなふうのことをする場合に、それはそうなるか」っていうような、そんなことを僕は尋ねているのではなかったのだ、僕の問いは、君が知識しているところのもの、そのものをまた君は知識していないのかどうかということだったのだ。ところが今や君は明らかに、君の視ていないものを視ている者として現われている。しかも「視る」ことは「知識する」ことであり、「視ない」ことは「知識しない」ことであるとは、すでに前提としてまさに君が同意していることなのである。しからば、以上の前提からして、何が君に帰結するか、ひとつ計算してみたまえ。

D **テアイテトス** 何はともあれ、私の計算では、帰結はさきに私が出発点として定めたものの反対になります。

---

1 後に「エレクトラ」とか「気づかれぬもの」(dialanthanon)とか「覆いされた者」(enkekalymmenos)とかいう名で呼ばれるいわゆる陥穽推理の一つと同性質のものであろう。エウクレイデス(「解説」登場人物参照)の弟子エウブリデスの発明したものと言われている。Diog. L. II. 10, 108 参照。

**ソクラテス**　うん、たぶん、ところが、何と驚くことではないか、君！　君はもっとたくさんこういう目にあったかもしれないのだ。もしいま誰かがなおこの上に、知識するにもくっきり知識したり、ぼんやり知識したりすることがあるかどうか、同じものも近くなら知識するが、遠くからでは知識しないというようなことがあるかどうか、また同じものをはげしくもおだやかにも知識することがあるかどうかなどと、なお他にも無数の質問を君にかけるとしたらね。これらは、言論界を稼ぎ場にしている戦人足といったような人物が、君の「知識と感覚は同じである」とおくのを待ち構えていて、これを問いかけ、聴くこと嗅ぐことなどのような知覚にまで攻め入

E

って、君をしつっこく論破し続け、ついに君がそのいたく人の冀望するところとなっている知恵のためにどぎもを抜かれて、彼のために足かせをかけられるにいたるまでは、いっかな離さなかったであろうところのものなのだ。そしてそこにおいてか彼は、すでに君を掌中にして、手足の自由を奪ってしまったので、もう今度は、君と彼との間でちょうどよいと思われるだけの金額を身代として、それで君を釈放してくれただろう。(1) さて、それでは――とおそらく君は言うだろう――わがプロタゴラスがおのがともがらのために援軍として語ろうとする言論というのはどんな言論なのであろうか。われわれはそれを言論に言い現わすことを試むべきではないか、どうだ、それに違いないだろう。

**テアイテトス**　はい、まったくそれに違いありません。

## 二〇

**ソクラテス**　彼はいま言われたことで、およそ僕たちが彼に味方して言っている限りのものは、むろんみんな

166 述べるだろうし、また、僕たち〔のだらしなさ〕を軽蔑しながら、次のようなことを言って、応戦するだろうと思う。見たまえ、この人の好いソクラテスは、何かちいさな子供をつかまえて、「同じひとが同じものを〔記憶し〕思い出していてまた同時に知らないでいるということはありうるだろうか」などと尋ね、その児がこれは容易ならん問題だと思って、そしてそう思ってからに、先を見ることができんために、「否」と答えたら、もうそれでこの私というものをその言論でもって笑い物にして見せたのだ。しかし、ソクラテス、さりとは君もずいぶん気楽千万な男だね、それは実際はこうなんだよ。いま君が問い手となって私の何かをしらべてみる場合に、その問いをかけられる者が、もしまさに私が答えるであろうような答えをして、それでやっつけられるのならば、それは私が論破されることになるが、しかし私の答えそうにもないことを答えて、そうなったのでは、論破されるのは、B それはただその問いをかけられた者だけなのだ。それというのは、まず例えば、かつて作用を及ぼされて受けとったことのあるものをひとが記憶し思い出している、その記憶(思い出)というものは、ひとがもはやその作用を受けていない時において、なおその作用を受けていた時のような、何かそうした受動の情態のままで、現にその人のところにあるのだなんて、そんなことを誰かが君に賛同するだろうと思っているのか。なかなかどうして、とんでもないこった。あるいはさらにまた、同じひとが同じものを知っていて、知らないということがありうる

1　「ちょうどよいと思われるだけの金額」については『プロタゴラス』328Bやアリストテレス『ニコマコス倫理学』第九巻(1164ª25)にプロタゴラスのそうした場合が述べてある。「どぎもを抜かれて……いっかな離さず」ということについては『エウテュデモス』276D、言論上で「足かせをかけられる」という言い方については『ゴルギアス』482E参照。

(166)

なんてことは、躊躇（ちゅうちょ）して同意しないだろうと君は考えているのかね。つまり、もしいやしくもかかる同意を容易ならんことに思うならば、「およそひとが同じからぬようにとなりゆく者でありながら、それがそのようになりゆく以前にあったところの、そのものと同じ者である」ということの承認をいつかは与えることになるだろうと君は思っているのか。いや、むしろそれは「ひとが〔なりゆく者とか同じ者とかいうように〕単数で示される一定の者であって、複数で者どもと言われるようなことはないのだ」ということの承認を予想するわけのものだといえるのである。しかもその複数で者どもと言われるのは、いやしくももし同じからぬようになりゆくということ

C

が〔引き続いて〕なりゆくならば、それは数限りない者どもになりゆく――ということの言い方は、互いに言葉尻を取られんように用心することがもし本当に必要であろうならば、その場合しなければならん言い方なのだが――そういうはずの者どももなんだのにねえ！

だが、まあ、それよりは、君は結構な人なのだ――と、こうプロタゴラスは言うだろう――もっと品位のあるやり方(1)をしてはどうだ。そうして直接僕の言論に向かってきて、できるなら、「これは間違っている。われわれの各個になるところの感覚は、決して各個にだけ特別になるものではない」とか、あるいは「たとい各個にだけ特別になるものだとしても、それだからといって、そこに現われているものが、それにかくそれが現われているところの、その者にのみなるのだとか、あるいはまた、あるという語を用うべきものだとすれば、あるのだとかいうようなことは決してあるまい」という論駁（ろんばく）をやりたまえ。それを何ぞや、豚だの狒々（ひひ）だのを話の中へ持ちこ

D

むなんて、それでは君自身が豚の行ない(2)をしているというものだ。いや、それだけならまだしも、聴く者まで口説いて、豚のような行動を僕の書いた物に対してやらせようとしていることになる。ほめた話じゃあない。

すなわち私の主張というものは、たしかに真理は自分が書いた通りであって、われわれめいめいがてんでにあるもの、あらぬものの尺度なのだが、しかしその各個にとってあり、また現われているところのものは、甲と乙とではそれぞれ違っているからして、まさにこの点において、各個と各個との間には非常な差別があるのだということにある。そして知恵および知者の存在を否定するというようなことは、自分の思いも寄らんことである。いや、それどころか、いまわれわれのうちの誰かに現われ、したがってまたあるところのものが不良であるとしたならば、この者のために、ここに変化をもたらして、それに優良な(具合のよい)ものが現われ、またあるようにする者がいるなら、まさにその者こそ知者であるとさえ言いもしているのである。だが、ここで私が言っている

E

ことを、さらにまた語句の上で追及したりしないでくれたまえ。それよりは、私の言おうとしていることが何なのか、いま説明するから、それでもってなおもっと確実に理解してくれたまえ。いいかね、前に(3)どんなことが言われていたか、想い起してみたまえ。すなわち病体の者には、その口にするところのものが苦きものとして現わ

---

1 本篇162Dのプロタゴラスの演説にも「諸君はいずれもりっぱな生まれの諸君である」と言われている。原語は同根の言葉なのである。なお本来のプロタゴラス説の弁明はここから始まるのであって、ここまではテアイテトスの分を答えたわけである。

2 豚は無知の表象と考えられていたらしい。『ラケス』196Dの古注に「犬や豚でも知っているだろう」という言い方が「最も無知な動物でも学ぶことのできるほど容易で分かりよいものについて」用いられたとしてある。『法律』VII. 819D、クセノポン『ソクラテスの思い出』一巻(二の三〇)参照。また自分が何も知らないで人に教える場合に用いられるラテン語の sus Minervam (docet) すなわち「豚がミネルヴァを教える」という言い方も同様の考えに出たものであろうと思われる。なおプロタゴラスがここに言っているのはむろんさきの161C～Dソクラテスの批評に対するものである。

3 一四章参照。

れ、またあるけれども、健康体の者には、その反対があり、また現われると言われていた。さて、ところで、この

167 両者はいずれをもより知恵ある者となすべきではない。なぜなら、それはまた不可能でもあるから。[1] また、病体(びょうたい)の者はかくのごときものを思いなすが故に知恵なき者であるとか、健康体の者はこれと異なるものを思いなすが故に知恵ある者であるとか、そんなふうに決めて言うべきものでもない。ただなすべきは、体の具合(持ち方)はその片一方(すなわち健康体)の方が良いからして、その片一方のものへと変化させるということである。そして教育においてもまたしかり、なすべきは、身(み)の持ち方(持ち前)をその一方から他のより良い持ち方へと変化させることである。ただ異なるところは、この変化をもたらすのに、医者は薬品を用いるけれども、教育者のソピステス[2](知恵の指南者)は言論を用いるのである。では、何がゆえに教育においてもまたしかりであるかというに、それは実に誰か虚偽を思いなしている者が後になって真を思いなすように何人かによってなされるというようなことは少しもなかったからである。なぜなら、およそあらぬものを思いなすということはありえないし、また作用を及ぼされて受けとるところのものにそむいて、これと違うものを思いなすということもありえないのであっ

B て、しかもここに受けとられるもの〔すなわちそれぞれの感覚〕はいつもそれぞれの場合において真なのであるからだ。これに反して、私の思うに、精神の持ち方(持ち前)が劣悪なために、それと同種の(劣悪な)ものを思いなしている者が、ひとの力によって、その持ち方を良好にされ、そのために同様やはり良好な、もっと別のものを思いなすようにさせられる[3]ということはあったのである。そしてちょうどこの後者として現われているものをある人々は事情に通じないためにこれを真なるものと呼んでいるが、自分はしかしその一方を他方のものより良いものだとは言うが、しかし決してより真であるとは呼ばないのである。そしてこれらの知者を、親愛なるソクラ

テス君、蛙なみに言いなしたりする所存は私にはないのである。否、身体に関しては、それを私は医者と言い、植物に関しては、それを農夫と言うのである。すなわち私の主張では、後者もまた、植物の何かが病気にかかっ

C ている場合、これのために、劣悪の感覚(4)を取り除いて、真なることは言うまでもないことであるが、なおその上に、良好かつ健康なる感覚がその中に生ずるようになす者なのである。これに対して、知恵のある卓越した弁論家(5)というものは、国家にとって、不得策(拙劣)なものが〔法律上〕正当であると思われることなく、良好有益なるものが正当と思われるようになす者なのである。それというのは、とにかくいかようなものであっても、おのおののの国家に、正当である、美風であると思われているものは、その国家がそれをそうであると認めている限り、

1 補注B4(四〇八ページ)を見よ。

2 ソピステスというのは、ちょうどpianoの専門家がpianistと呼ばれるように、sophia(知恵)に関してsophistesと呼ばれるのである。『プロタゴラス』317Bや349Aによって見ると、プロタゴラスが始めて自分からソピステスと名乗って人間の教育を仕事にしたということである。むろんこの場合にはソピステスはもはや文字通りの知恵の専門家とか賢いことを知っている人(『プロタゴラス』312C)とかいうような意味だけのものではない。『ラケス』186Cや『メノン』91Bや『プロタゴラス』318E～319Aなどに見られるように、りっぱな市民を作り上げるための知恵者という意味を含んでいるのである。

3 ここの原文は πονηρᾷ ψυχῆς ἕξει . . . αὐτῆς χρηστῇ ἐποίησε . . . と読む。

4 植物の感覚ということについては、『ティマイオス』77B、『ピレボス』22B参照。アリストテレスの『植物について』第一巻($815^b$11-16)には栄養機能があれば欲望があり、また従って満足の快感と饑餓の苦痛感とがあり、しかもこれらは感覚なくしては生じ得ないということからして、植物に感覚や欲情を認める学説が紹介されている。

5 原語はrhetoresで、これに関連して、レトリックという言葉が今日でもよく用いられる。ただしそのレトリックは文字言葉よりも話言葉を主とするものであり、公私の各種専門における説得の技術を意味した。そしてこれにたくみな者が、すなわち弁論家が、政治上の指導権をもつことにもなる。『ゴルギアス』452D～Eを参照せよ。

その国家にとってそうありもするのであるが、しかしこの方面にも知者があって、それは国民にとってそれぞれ劣悪であるところのものの代わりに、良好有益なるものが〔正当なるものとして、また美風として〕ありかつ思われるようになしたのである。そして同じ訳合で、ソピステス（知恵の指南者）もまた、被教育者をそういうふうに教導することができるから、一個の知者なのであって、教育を授けられた者たちからすれば、多額の金銭を提供するだけの値打ちある者なのである。そして、かくのごとくにして、人と人との間には知恵の優劣というものが存するのではあるが、しかし虚偽を思いなすという者はひとりもないのである。だからして君も、一個の尺度であるということには変わりがないのだが、これは、欲すると欲せざるとにかかわらず、がまんしてもらわねばならんのだ。なぜなら、その「人が万物の尺度だ」という説は、以上でもって首尾よく救われることになるからね。(1)(2)

D

それとも、この説に対して根本から異議を申し立てることができるならば、申し立ててみたまえ。それは以上に対抗して、弁論をもって詳細を申し述べるもよし、また質問を用いることが望みなら、質問によってもさしつかえはない。なぜなら、これもまた忌避すべきものではないんで、むしろ心ある者ならすすんでまず何よりもこの方法を追求すべきものなのだからね。ただそれにはこういう注文があるのだ。つまり、質問の中において不正をなすなというのだ。徳に心掛けていると言っておる者が、言論の中で始終不正なことばかりしているというようなのは、はなはだもって不合理なこったからねえ。ところで、こういうようなことの中において不正をなすというのは、競争で掛合をやるのと、問答で言論を開展するのとの区別を乱す場合がそうなのだ。すなわち本来は前者なら、遊戯を事として、できるだけのあげ足とりをするところであるし、また後者——の問答で言論を開展する場合——なら、それはまじめにやって、問答相手の失策も、ただ相手が自分自身でか、あるいはそれまでの

E

交際のおかげですでに自ら見当を間違えておいたものだけに限って、これを指摘して、それでもって相手を正道に引きもどすようにするところなのである。というのは、これを君がもしこうするならば、君の相手は、自分たちが混乱と困惑におちいっても、これを自分自身のせいにして、君のせいにはしないだろう。自分自身をいとわしくは思うであろうが、君には随喜するであろう。そして、もっと別なものになろう、これまで自分があったところのものから解脱しようとする目的で、いとわしい自分自身からのがれて、知恵を慕い求めることになるだろう。それをもし、あの大多数の者がなしているように、これの反対を君がなすならば、君はこれと反対の結果をえるだろう。つまり君は、かかる交際の相手を知恵の愛求者となす代わりに、後年かくのごとき業を仇敵視する

1　たとえば当時のソピステスの書と考えられるいわゆる『ディソイ・ロゴイ』(Fr. 83(DK))の(二の九)以下においては、スパルタ人とイオニア人という同じギリシア人の間でも、またテッサリア人、マケドニア人、トラキア人、スキュタイ人、ペルシア人、エジプト人などの外国人とギリシア人との間でもいかに多くの風俗習慣の相違があるか、またしたがってその一方において美風とされるものが他方において悪風とされる場合のいかに多きものであるかが述べられている。そしてこのことは人々をしてアルケラオス(Fr. 47 A 2(DK))の「正しいとか醜悪とかいうのは自然にそうあるものではなくって、ただ人々が習慣や法律によって認めているだけのものである」という考えに共鳴させることとなる。しかもこれこそすでに一三章に暗示されていたプロタゴラス説の別の側面なのであって、後には(172A～177D)これがプロタゴラス説にとって最も有利な場合と考えられるようになっている。なお『国家』II. 358E, 359A～Bにおいてもグラウコンは法律を社会契約説によって説明し、かかる法律に従うことを正義と規定している。同様の考えは『ゴルギアス』482C sqq.、『法律』X. 889Eなどにも見られる。

2　164Dの「物語るところの説はふいになってしまった」に対立する。プロタゴラスの弁明はこれをもって終るわけである。これに続くプロタゴラスの言葉は自分の説を批判しようとする者への注文であって、二一章以下に開展されるプロタゴラス説再批判の方法を予告するものである。

(168) B ところの者[1]として現わすことになるだろう。だから、もし私の言うことがなるほどとわかるなら、さきにも言われたことだが、君は敵対心や争闘心をすてて、和(やわ)らいだ理解をもって、われわれが「すべてのものは動いている」とか、「各個に思われていることは、その各個が私人であっても公共体であっても、各個にとってまたそうありもするのである」とかいう意見を出すことによって、そもそも何を言おうとしているのであるかということを、われわれと一緒の立場にまで降りて来て、それこそ本当によく見るようにしてくれなければいかんのだよ。そしてそれを基礎にして、そこのところから、知識と感覚が同じものであるか、それともまた違ったものであるか、さらによく見るようにしてもらいたいものだ。だが、今さっきのように、語句名辞の慣用に拠(よ)って、そこのところからやったりするのは、ごめんをこうむりたいね。あの大多数の者どもが互いに種々様々の言論上の行き詰りを C 与え合っているというのは、この語句名辞の類をでたらめに牽強(けんきょう)しているところにあるんだからねえ。

という以上のものが、テオドロス、あなたのお仲間にささげた、私の精一杯の助勢なのです。もとより手持ちの貧弱な私のことであるから、貧弱なことしかできないが、もしあの人自身が生きていたのなら、もっと堂々の陣容をととのえて、これら自分の軍に助勢したことでしょう。

## 二一

**テオドロス**　冗談でしょう。ソクラテス。あなたが今あの人を助けるためにしなすったことといったら、まったくもって若い者はだしの勢いでしたからなあ。

**ソクラテス**　いやありがとう、あなたは私の味方になってくだすった。それなら、私はあなたに言っていただ

きたいことがある。それはさっきプロタゴラスがこう言って私たちを非難していたのをあるいはお気づきだったろうか。つまり、私たちがあの人の言説に対してなしていることはといえば、これはほんの子供みたいな者を相手に言論して、その子の危惧心に乗ずるというようなやり方の勝負争いだというのです。そしてこれは一種の悪ふざけというものだとあの人は宣言しているのでした。そして「万物の尺度」というのは一箇の厳粛な問題なんだから、私たちはあの人のこの言論についてまじめにやらなければならないということを勧告したのです。 D

**テオドロス**　ええ、むろんそれに気づかないでどうしましょう、ソクラテス。

**ソクラテス**　すると、どういうことになりますかね。あなたの御意向では、あの人の勧告通りにしろということになるのでしょうか。

**テオドロス**　ええ、そりゃもうぜひね。

**ソクラテス**　それなら、見らるる通り、ここにいるのはあなたを除いては皆ほんの子供みたいな者ばかりです。だから、あの人の勧告通りにしようというのには、私とあなたが互いに問い手となり答え手となりして、まじめなやり方をあの人の言論についてするということにしなければなりますまい。そうしてまたもや(2)私たちはいまの言論の検討に弱輩相手の遊戯をしたなどという、そういう非難だけは(3)あの人が起こす余地のとにかくないようにしておかなければなりますまい。 E

---

1　かかる「ミソロゴス」(言論嫌い)については『パイドン』89D～90Dに、これを「ミサントロポス」(人間嫌い)と並べて興味ある説明が試みられている。

2　αὖ τοῦτον τὸν λόγον というT写本の読みに従う。

3　μή τοι τοῦτό γε というB写本の読み方をとる。

**テオドロス**　しかし、どうでしょう。それはきっとテアイテトスの方が髯ばかり長いのをはやしている大多数の連中(1)なんぞよりもっとじょうずに吟味の言論について行けるんじゃないんですか。

**ソクラテス**　しかしどんなにしたところで、テオドロス、あなた以上には行きませんよ。まあとにかく、あなたの亡くなったお仲間のことだというのに、自分は少しも味方に立たないで、私にばかり百方そういうことをさせて、それで当り前だなどと考えていてもらってはどうも困ります。何はともあれ、さあ、この上なくすぐれた人よ、あなたは少しばかりつきあってくださらなければならんのです。図形については、果してあなたが尺度でなければならんかどうか。それともすべての者が、天文その他あなたがそれについての優越をうたわれておられるちょうどその事柄に対して、あなたに劣らず、自分たち自身に充分間に合うものなのかどうかという、そのことが私たちにわかるまで、まさにその点まででいいのです。

169

**テオドロス**　いやソクラテス、あなたの側に坐っていて、言論の相手にならないでいるということは容易なことではない。それにしても私は今さっきあなたのことを、私には着物を脱がなくっても勘弁してくれるだろう、そしてラケダイモンの人たちのようにそれを強制したりするようなことは決してなさるまいなどと言いましたが、とんだばかを言ったわけです。あなたはむしろスキロン(2)の方に近いのだと私には思われる。ラケダイモンの人たちなら、脱衣かしからずんば退去を命令するだけなのですが、あなたの演じておられる役割はというと、それはむしろ何かアンタイオス(3)の流儀だと私には思われる。近づいて来る者は誰でもかまわず、いや応なしに、着物を脱がせて言論上の角力の相手をさせ、これをしないうちは放さないというわけなんですからねえ。

B

**ソクラテス**　おお、こりゃ大へんうまく、テオドロス、あなたは私の疢を形容なすった。だがしかし頑強さで

は、私はどうしてスキロンやアンタイオスなんかの比ではない。なぜなら、もうこれまでに私は言論の強い無数C のヘラクレスやテセウス(4)に出会って、それはもう手ひどい打撃をくらわされたんだけれど、それでも一歩も引かずにがんばっているようなわけなんですから。つまり、それほどまでに愛欲の何とも猛烈なやつが私にはとりついていて、これらについてのこの力技をどうしても思い切らせないんですよ。だから、あなたもどうか意地悪をしないで一番もんでやってください。そうすれば、同時にあなたにも私にも利益のあることなのです。

---

1　プルタルコス(Plutarch., De Iside et Osiride 352C)には「髯を生やしたり弊衣をまとったりしたところで哲学者にはなれない」という言葉がある。しかしホラティウスは(Sermones, II. 3, 35)sapientiam pascere barbam(髯は知恵を養う)とも言っている。「髯から知者が生れる」という諺もこれと同じ趣旨のものと解される。E. Leutsch u. F. G. Schneidewin, Corpus Paroemiographorum Graecarum, 1965, II. p. 390. 参照。

2　スキロンはメガラ国の東海岸にあるスケイロニス街道の名前に絡まる伝説的盗賊であって、彼はその岩山と断崖の間の嶮岨(けんそ)な道に陣取っていて、道行く人を呼び止めて無理に自分の足を洗わせ、その最中にこれを断崖から海中に蹴落して、そのところにいる龜の餌食としていたが、最後にテセウスのために同じ方法で殺されることになる。

3　アンタイオスはリビアの王でポセイドン(海神)とゲ(地母神)の間に生まれた巨人と伝えられている。彼は自分の国に入って来る外国人に必ず角力の相手をさせてこれを殺したというのである。そのわけは、彼は母なる大地に身体を触れている限りいくらでも力が出て来るので負けることはなかったからである。しかしヘラクレスはこの秘密を知って、彼をつり上げて地に着かせずに殺してしまった。『法律』VII. 796 A の古注参照。

4　ヘラクレスはドリス系の英雄で、その伝説はアルゴスやボイオティアやテッサリアなどの各地に伝わるうちにいろいろ複雑になってしまったが、もとは怪物を退治し地上の汚れを祓い、黄泉の国に降って不死のりんごを持ち帰ったというようなところが話の本筋であったらしい。
テセウスの伝説も複雑であるが、後代の伝説では彼はアテナイ王になっている。そしてこのスキロンの話は彼がアテナイ王となる前に、その養育の地トロイゼンからアッティカに来る途中の冒険談の中に語られている。後代の伝説では彼はヘラクレスと同型のアッティカ英雄なのである。

**テオドロス**　もう私は何も抗弁はしない。いいから、どうにでも御意のままに引っ張って行ってもらいましょう。万事が万事これらについての決定は、それが何であっても、あなたが割り当ててくださるものをがまんして受けなければならんのが、吟味論難される者の運命なのだ。といっても、それはあなたがご提出になっているあの問題だけのことであって、それ以上は、あなたのために私というものを御用立てするということはできんでしょうけれど。

**ソクラテス**　いや、そこんところまででも結構です。この上は、どうか充分の見張りをして、つぎに述べるようなことのないようにしてください。それというのは、何か児戯に類するような言論をしていながら、ひょっとして、それに気づかないようなことがあって、その点をまた誰かに非難されるようなことがあってはならんのです。

D

**テオドロス**　いや、そのことなら、むろん、やってみるだけのことはできるだけやってみましょう。

## 二二

**ソクラテス**　それではまずこういうのから、さっきも手をつけたやつなんですが、さあ、もう一度やってみるとしましょう。つまり私たちが正しかったか、それとも正しくなかったかを見ようというのです。プロタゴラス説に対して、それは各自を思慮の点では自分だけで間に合う者だということにするから、それがけしからん点で、そこにこの説の不満足なところがあるということにしていましたが、その点がですね。またしたがってプロタゴラスはわれわれに対して、優良不良の区別がつくような事柄についてはこれを取扱うのに他の者より卓越した者がある、そしてこれこそまさに知者であるということを承認することになりましたが、そこのところもです。ど

うです？　これはこうではありませんでしたか。

**テオドロス**　いや、その通りでした。

**ソクラテス**　ところがさて、これがもしプロタゴラス自身この席におって同意を与えているので、われわれが助勢のため彼に代わってこの承認を与えたのではなかったのなら、それはむろん、これをまたもう一ぺん取りあげて確かめたりする必要は少しもなかったことでしょう。しかしながら、いま実際には、われわれが彼に代わって同意するなんてことを越権の沙汰であると見る向きもたぶんあることでしょう。それだからして、ちょうどいまのあのことについては、もっと頼りになる徹底的な同意というものを作る方がいいわけなのです。何しろ、そういうふうになっているか、いないかってのでは、だいぶの違いになりますからなあ。

E

**テオドロス**　それはあなたの言われることは本当です。

**ソクラテス**　それでは、他のものの媒介によらずに、あの人の言っていることの中から、できるだけの近道をして、その同意をわれわれは手に入れることとしましょう。

170

**テオドロス**　というと、それはどんなふうにやるのです？

**ソクラテス**　つまり、こうするんですよ。何でもあの人の主張では、各自に思われていることは、それがそう思われている者にとって、そうまたありもするというのではないのですか。

**テオドロス**　ええ、事実そういうのがあの人の主張というわけです。

**ソクラテス**　それならば、聞いてくださいプロタゴラス、私たちがいま語ろうとするのもまた一個の人間の思いなしなのです。否、むしろすべての人間にそう思われていることなのだと言った方がいいかもしれません。す

なわちわれわれは言うのです、人は誰でも場合によって、あるいは自分を他人より知恵があると考え、あるいは他人を自分より知恵があると考えるものなのです。なかんずく、大々的な危険の場合、すなわち難戦、難病、難航などの場合には、ひとはこれらおのおのの場合に指図(さしず)をしてくれる者に対して、自分たちを救ってくれるであろうという期待から、まるで神々に対するような態度をとるものなのですが、しかもその人たちの優越点はどこにあるかといえば、ほかでもない、ただその人たちが「知っている」ということにあるのです。そして人間の世

B 界には思うにいたるところ、自分たち自身について、あるいは自分たち以外の生物やそのなすところの仕事などについて、教授したり指図したりしてくれる人を求める者どもと、他方また、自分は教授するに充分な者であるとか、指図するに充分な者であるとか思っている人たちとに充ち満ちているのです。すなわちこれらすべての場合において、われわれの言うべきこととしては、人間自身が自分たちの世界には知恵もあるし、また無知もあるということを考えているのだというよりほかに何があるでしょうか。

**テオドロス** ええ、それはそう言うよりほかはありません。

**ソクラテス** それでは、彼らの考えている知恵とは思考の真なるもののことであり、無知とは思いなし(思わく)の偽(ぎ)なるもののことではないのですか。(1)

**テオドロス** むろん、それに違いありません。

C **ソクラテス** それならば、おおプロタゴラスよ、われわれはそこに言われていることをどう取り扱ったらいいでしょうか。われわれの主張としてはさてどっちにしたらいいでしょう。人間が思いなすところのものは常に真なのだとするか、それともまた真のこともあるが偽のこともあるとするか、どっちでしょう。それというのは、

そのどちらをとるにしても、そこから出る帰結は、人間の思いなしというものは常に真であると限ったものではなく、むしろ真偽両様のものなのだということになるらしく思われるからなのです。なぜなら、テオドロス、まあ考えてみて下さい、人は誰一人として他人を無知なやつであると考えたり、他人の思いなしを虚偽であると考えたりするような者はないなんてことを、あなた自身にしたところで、またプロタゴラス周囲の誰にしたところで、どこまでも頑強に主張しようと思う者があるでしょうか、どうでしょう。

D

**テオドロス**　いや、そのような者があろうとは信じられんです、ソクラテス。

**ソクラテス**　それにどうでしょう！　万物の尺度は人間であるということを言うその言論が実際また、それの必然の到着点として、ちょうどいま言われたような結論に到達するのです。

**テオドロス**　して一体それはどういうふうにしてなのでしょうか。

**ソクラテス**　それはいまあなたが何か自分の胸の中で判断して、何かについての思いなしを私に向けて発表するというような場合、むろんあなたにとってはそれはプロタゴラス説からいって真でなければならんとしても、われわれ他人にとってはしかしそれはどうなるのでしょうか。あなたの判断についてわれわれ他人はその批判者となることができないというようなわけなのでしょうか。あるいはまた、われわれ他人はいつでもあなたの思いなすところのものを真であると判定するようなことになっているのでしょうか。それともまた、それぞれの場合

1　同様の規定が 194C～D および 195A にも与えられている。知(知恵)と無知の区別を特に真偽の区別として述べたのは、プロタゴラスの弁明が知と無知の区別だけを認めて、真偽の区別はこれを否定しているので、特にその点を確かめたわけであろう。そしてテオドロスの承認とともに以下においては主としてこの真偽の区別が取り扱われている。

(170)

ごとに、あなたと反対の思いなし(思わく)をして、あなたの判断していること、あなたの思っていることは虚偽であると考えて、あなたに敵対する者が無数にあるのではないでしょうか。

E

**テオドロス**　ええ、そうです。それこれ神明に誓って申しますが、ソクラテス、そういう者どもは、ホメロスの口まねをすれば、もう千万無量あるのです。そしてそういう連中あればこそ、世にあらゆるやっかい千万な事柄を私は背負わされることになるのです。

**ソクラテス**　すると、どういうことになるのでしょうか。あなたのご意向では、われわれはこう言えばよいわけなのでしょうか。いまの場合、あなたがもっておられる思いなしはあなたにとっては真であるが、その無数の者どもにとっては偽であるというふうにですね。

**テオドロス**　そうですね、そうなるのが少なくともこの説からすれば必然らしいようですね。

**ソクラテス**　しかしこれがもしあなたでなくって、プロタゴラス自身の場合だとしたらどうでしょう。というのは、もし「尺度は人」というのをですね、彼自身もそうは思っておらず、またかの多数者もそうは思っていないということになるとしたら——といっても、彼らがそう思っていないということはまさに事実なのですが——

171

すでにその場合には、彼の書きあらわしたかの「真理」なんてものは何者にとってもありはしないのだということが必然となるのではないでしょうか。またもし彼自身はそう思っていたとしても、多数が一緒にそう思ってくれないならば、むろんおわかりのことでしょうが、まず第一に、そう思う者よりもそう思わない者のほうが数は多いわけですからして、ちょうどそれだけ余計にそうあるよりもむしろあらぬのだということになるわけです。

**テオドロス**　それは必然にそうなければなりますまい、いやしくももしほんとうにそれぞれの思いなすところ

に応じて、それごとにあるいはあり、あるいはあらぬであろうというのならばですね。

**ソクラテス**　それから第二の点なんですが、そこになるとこういう大へんややっこしいことがあるのです(1)。あの人には前提として、誰の思いなしもその通りにあることを思いなしているのだということが同意されているから、したがって、自分の思っていることについて、反対の思いなしをする人たちが、彼のは偽りだと考えている、その思いを真であるとして承認することになるだろうと思うのです。

**テオドロス**　事実それはまったくその通りです。

B

**ソクラテス**　そうしてみるとあの人は、自分のを虚偽だと考えている人たちの思いを真であると同意しているのなら、自分自身の思っていることを偽りだといって承認していることになるのではないでしょうか。

**テオドロス**　ええ、必然にそうなりますね。

**ソクラテス**　さてところが、相手方の者どもはというと、彼らは自分たちのが偽りだなんてことを承認するものではありません。

**テオドロス**　ええ、それはむろんそういうことはあるはずがありません。

**ソクラテス**　ところがしかしあの人は、自分の書いておいたことからの帰結で、さらにまたそういう(彼らが自

---

1　この第二の論法は、セクストス・エムペイリコス(Adv. math. VII. 389)によると、「ペリトロペー」(逆手?)と呼ばれ、デモクリトスによってもプロタゴラスに対して用いられたということである。かかる論法の類例は『エウテュデモス』286B〜C、『ゴルギアス』488D、『アクシオコス』370Aのほか、Diog. L. III. 35、『両論』(Dialexeis 4, 16)、アリストテレス『形而上学』第四巻(1008$^a$29, 1012$^b$14)などに見られる。

分たちのは偽りではないという）思いなしまでも真であるとして同意することになるわけです。

**テオドロス** ええ、それは明らかにそうです。

**ソクラテス** そうしてみると、あらゆる人たちが異議の申し立てをするということになるでしょう。まずプロタゴラスにしてからがそうです。いや、これは異議を申し立てるというより、むしろ申し立てられた異議に同意するというところかもしれません。その異議申し立てというのは、何にせよそれを学ばないで人間が――否、人間に限らず犬であっても構わないことになるのですが――とにかく誰彼の区別なくそれについての尺度になれるというようなものは、ひとつだってありはしないのだというのです。そしてこれはもしプロタゴラスが反対論者 c に対してそれの思いなすところを真であるとして承認するならば、その場合には彼その人といえどもこれを承認することになろうという申し立てなのです。どうです？ こういうふうに異議の申し立てがなされるのではありませんか。

**テオドロス** ええ、そういうふうにされますね。

**ソクラテス** してみると、異議の申し立てがあらゆる人々によってなされている以上、プロタゴラスのいう「真理」なるものは何者にとっても真なるものではなく、他の誰かはおろか、プロタゴラスその人にとっても真なるものではないということになるでしょう。

**テオドロス** それでは余りに、ソクラテス、私の仲間だった人をわれわれは追窮が過ぎるというものです。

**ソクラテス** でも、いいですかな、あなた！ それがまた正当以上の追越しになっているかどうか、そこんところは明瞭じゃありませんね。なるほどそれは、あの人は私たちよりも年長なんだから、けだし当然私たちよ

り知者であろうというものです。またしたがってもしすぐこの場へ〔ちょうど舞台に出て来る亡霊のように〕(1)地下からその首のところまでせり出して来るとしたら、私には何という愚かなことを言っている――というのがけだしまた事実なのでしょうが――といって、またあなたを何ということに同意するのだといって、さんざん論駁して、さて首を引っ込めるが早いか、急ぎ退場というわけで、たちまちもう見えなくなってしまっていようという D ものなのです。しかしながら、私たちだけでは何ともいたし方がないんで、私たちの用に立つものといっても、それはいまあるような性質の――それがまあたといどんな性質のものだとしたところでですね、そういう――私たち自身よりほかにはないんですし、私たちに言えることといっても、それぞれの場合に私たちに思われていることそのことよりほかにはないんだと、そう私は思うんです。それだからむろんいまの場合だって、どうです、われわれで言っておこうではありませんか、人と人ではより知恵あることもあるし、またより無知なることもあるということだけは誰でも同意するだろうってことを。それとも、いけないでしょうか。

---

1　ここの文章の解釈はシュタインハルト(H. Müller u. K. Steinhart, Platons sämtliche Werke Ⅲ, 1852, S. 206)の主張に従ったのであるが、それによると昔の芝居にたびたび出て来る亡霊というものは全身を舞台に現わすものではなく、いわゆる「カロンの梯子」(Pollux, Ⅳ, 127, 132)の口から首だけ出してせりふをのべたものではないかということである。なおプロタゴラスについては、彼がすでにこの世の人でないので、この場に現われる仕方を冗談に芝居の亡霊と同じ仕方で言ってみたということのほかに、その場のプロタゴラスの反駁というものも普通の弁論家の例にもれず、ただ自分の言い分だけを演説して、相手のソクラテスには質問の機会も与えずに怱々(そうそう)として立去るようなものであっただろうから、たといプロタゴラスがこの場に現われたところで、結局はその場に居合わせた者が自分たちだけで考えてみなければならないことになるという意味を含ませたものであると見ることができる。

テオドロス　いや、とにかく私にはそれがいいと思われます。

二三

ソクラテス　またそもそもこういうことも言っておいてはどうでしょう？　いまのあの言論は、われわれがプロタゴラスの加勢をしていた時にだいたいその下書き(1)をしておいた、あのやり方で行くと一番よく立つだろうということをですね。つまり大多数の事物は各者にとって思われているその通りにまたありもするのであって、暖かいものだとか、乾いたものだとか、旨いものだとかいう、この型のものは皆そうなのだ、しかしもしどこかの何らかの点でそれが一者の他者に対する優越ということを承認すべきものだとしたならば、それはそのことを健康によいもの悪いものについて主張しようと思うだろう、自分の健康には何がよいかを識って自分自身を医療するということは、すべての婦女子がこれをよくするというようなものではなく、またいわんやすべての動物がこれをよくするようなものでもなく、むしろ一者の他者に対する優越ということがいずれかの点において成立するものであるならば、それはこの点においてであるということを主張しようと思うだろうというのです。

テオドロス　ええ、とにかく私にはそれはそう思われますね。

ソクラテス　それなら、また国家のことについても、それは主張しようと思うことでしょう、何が美風であり、何が陋習であるか、何が正当であり、何が不正であるか、何が敬神で、何が不敬であるかというようなことは、各国家がそれをそう思って自分のところの法に制定すれば、どんなものだって、その各の国家にとって真実またそうありもするのである。そしてこれらのものにおいては、私人も国家も、一者が他者よりも知恵があるという

ようなことはむろん少しもないのである。しかしながら、国家自体の為になる法を制定するか、あるいはまた不為になる法を制定するかという、その点においては、もし何らかの点においてそういうことがありとするならば、国政を議するひとりの政治家は同じ他の政治家にまさり、一国の思いなすところのもの（議定）は他国のそれにまさるということが、真理に照らしてまさにあるのだということをさらにまたそれは同意することでしょう。そして何でも国家が自分のためになることだと思って制定したものなら、いかなる事情にあってもそれはまたためになることであろうなどという、そんな主張をあえてすることは決してないでしょう。これに反して、さっきの私

B

の言うあのものにおいては、すなわち正当とか不正とか敬神とか不敬とかいうことにおいては、人々は頑として次の主張を改めようとはしないのです。いわく「生来（自然には）これらのものには一つとして自己のまさにあるところのもの（すなわち自己の正体）をもつものがないのであって、これらの公けに思いなされたところのもの（すなわち公けの取りきめ）は、それがそう思われたその時に真となり、またそれがそう思われている時間だけ真となっているのである」というのです。そしてその上また言葉の上では何もプロタゴラスの言っている通りのことをすっかりそのまま言っているの(2)ではない範囲の人たちまでが、みな何か次のような仕方でこの知恵をかついで暮らしているのです。だが、私たちはこれは、テオドロス、ひとつの話から他の話へと言論を移して、後にな

C

るほど一段と大物の言論のとりこになるじゃありませんか。

1　二〇章を指す。原語はちょうど下書きと直訳される字義の言葉であるが、実際の意味は習字のために子供たちがその中へ文字を書くために与えられる枠のようなものを指し、一般的には輪郭の意味に用いられるようである。

2　ハインドルフ、シュタルバウム、コンフォードの読み方をとり、ὅσοι γε δὴ . . . λέγουσιν と読む。

**テオドロス**　そのことなら、私たちは時間に余裕のある身の上じゃあないんですか、ソクラテス。

**ソクラテス**　ええ、それは明白に私たちはその通りなのです。またそれでもう幾度かとにかくたしかに、いやはや！　他の機会にも私の気づいたことなのですが、しかし今もやはり感じることがひとつあるのですよ。知恵の探求なんてことに多くの時間をかけた人間が、法廷に出て嗤(わら)うべき弁論家と見られるのは、それはいかにも当然のことなんだということをですね。

**テオドロス**　というと、それはいったいどういう意味なのでしょうか。

**ソクラテス**　それはおそらく、若い時から法廷とか何とかそういう種類のところを徘徊(はいかい)しつづけている者に、知恵の探求とか何とかこういった種類のもので暇を消すことに育てられて来た者を比較するならば、それは家来育ちに比較される場合の自由民育ちのようなものがありはしないだろうかというのです。

D

**テオドロス**　というと、いったいどんなところがそうなのでしょうか。

**ソクラテス**　つまり、こういうところがそれなんですよ。いまのべた知恵の探求者たちには、あなたの言われたあのもの――すなわち時間の余裕ですね――あれが不断にそなわっていて、その言論なども平和のうちに悠々閑々と行われるわけなんです。現に私たちのしている言論から言論への変更はこれでもう三度目なんですが、この人たちだって、もしまさに私たち同様その前にある言論よりも後から来る言論の方が気に入るならば、やはりちょうどこの通りのことをするわけなのです。つまり彼等は、ただ真実あるところのものにぶつかりさえすればいいんで、その話が長くなるか、それとも短くてすむかなんてことには頓着しないんです。ところが、もう一方の人たちはというと、〔時間に制限があって〕水時計の流水(1)にせきたてられるもんだから、いつでもせわしない言

E

173

論をすることになるのです。その上また何でもしたいと思うことについて言論するというような自由は彼らには与えられていないんで、かえってそんなことをしないように、反対側の者が強制力をもって監視しているわけなのです。その強制武器というのは、実際の弁論と比較対照することのできるようにと読みあげられる弁論要領書のことで、これにはアントーモシアー（宣誓口述書）[2]の名があって、そこに書いてあること以外にわたる弁論は禁じられているのです。そしてその言論はといえば、いつもそれは、何か訴訟事件を手中にあずかって裁判官席に坐っているところの主人[3]に向かって、同じ奴隷仲間のことをうんぬんする言論なのです。そしてその勝負事も何ら当てのない道を走りっこするというようなものでは決してないんで、そのコースはいつも自己自身を中心に走っているのです。否、しばしばその競走は生命を賭けて、これを中心に争われることさえあるのです。そしてこれらすべての結果として彼らの緊張と鋭敏とが生まれるのです。主人に阿諛するにはいかなる言論によるべきか、主人に取り入るにはいかなる行動によるべきかという知識が生まれるのです。とはいえ、これによって彼らの精神は矮小となり、また不正直となるのです。いうまでもなく、若いころからの奴隷の境遇というものは、生長し大成することを不可能にするものなのでして、直なところも自由闊達なところも除き去ってしまうものなのです。

---

1　法廷弁論には時間の制限があったことは、201Bにも「少量に限られた水時計の水」として語られている。

2　これは原告被告が互いに自分の申立てに相違ないことを誓うもので、そこにはそれぞれその申立ての内容が記してあったわけである。その書式は例えばDiog. L. II. 40に掲げられているメレトスのソクラテスに対するアントーモシアーについて見ることができるであろう。

3　これは裁判官そのものよりも裁判官として現われる国家社会の全体を指すものと解すべきであろう。国民の総体が『国家』VI. 488 A sqq., 492Bにおいてもかかる主人として取扱われている。

つまり、それは必然に曲ったことをさせるからなのです。それというのは、まだ若くてやわらかい彼らの精神の上には大きな危険が投げかけられて、はなはだしい危惧を覚えさせるからなのであって、それは彼らには、正しさや真実を失うことなしには持ちこたえることができないものなのです。それがために彼らは、一路ただ虚偽に向かい、また互いに不正の仕合いをすることに向かうこととなり、幾度も幾度も拗(ね)じ曲げられたり折りくじかれたりして、ついには了見の少しも健全なところを持つことなしに子供から大人となってしまうのです。そしてそれを自分たちは、知恵者になったとか、人から一目おかれるような人物になったとか思っているわけなのです。

B さてところで、テオドロス、これらの連中は以上に述べたような者どもなのですが、これに対する私たちの言わばおどり(歌舞)の組仲間(1)とでも目すべき者どもは如何(いかん)ということになるとですね、あなたのお考えはどうでしょうか、さっきの話にもどる前にわれわれはこれをすっかり話してしまった方がいいでしょうか、それともまた、これはこのまま捨ておいて、さっきの論に再び向かうようにする方がいいでしょうかしらん、ちょうどまたそうすれば、今し方私たちが言っていた、あの言論の自由というものを過度に乱用しなくってもいいことになるし、またしたがってはなはだしい言論変更をしないでも済むことになりますからね。

**テオドロス** いや、断じてそれはいけませんよ、ソクラテス。むしろそれは今の話がすっかり済んでからのことにしましょう。何しろそれにはまったくおあつらえ向きのことをあなたは言ってくだすったのですからなあ。

C つまりわれわれはこれからお話のある方の組仲間に属するわけなのですが、いやしくもこの仲間と組になっていわば歌舞する者である以上、われわれは言論の下部(しもべ)ではなくって、かえって言論の方がちょうど家来みたいにわれわれへ従属するものなのであって、したがってそれらの言論は、いずれも〔自分勝手に終ってしまったりする

ものではなくって〕われわれにそれが可なりと思われる時に終結せしめられるのをじっと待っているものなのだということになるからです。それというのは、われわれの傍には裁判官も立っていなければ、また劇作家たちについているような、非議したり指図(さしず)したりしようとする監督顔をした観客も立っていないからなのです。

## 二四

**ソクラテス**　なるほどそれなら、ほかならぬあなたのそういうお考えもあることだし、われわれの方の歌舞の音頭をとるほどの者どもについて、われわれは語るとしなければならないのかもしれませんね。音頭をとるほどの者についてというのは、知恵の探求に従事している者だと言っても、それのへぼな連中(2)のことなんぞを誰が何と言えるでしょうか、問題にはなりませんからね。それでその求知者中の求知者というような人たちのことなんですが、何でも彼らは若い時からして、まずアゴラーへ行くにはどの道を行くかということを知らず、また裁判所だとか議会だとか、何か他にも国家公共の会議所となっているところのものの所在も知らずにいるような模様 D

1　単に仲間とか同類とか組とか言うところを特に劇のコーラスに見立てて述べたもので、同様の例は『エウテュデモス』279Cにも見られる。この章の終りに出て来る「観客」とか次章の始めに用いられる「音頭をとる」という言葉などは皆この比喩に関連しているものと考えられる。劇のコーラスはあるいは老人の一団であったり、あるいは若い娘の一団であったりして、それぞれ劇の内容に応じて異なるわけなのであるが、多くの場合主要の対話人物に対して同情的である。ソクラテスとテオドロスの対話に呼応するかかるコーラスの存在を想像して見るのもおもしろい。

2　知恵の探求としての哲学に当る真の哲学者は極めて少なく、その多くは偽物であるから、そういう連中の言行をもって哲学の何であるかを判断してはならないということが、『国家』VI. 489D～496Aに詳しく述べられている。

なのです。そして法律や決議の言論されているのを聞くこともなければ、またすでに文字となっているのを見ることもないようなのです。またそれから、権勢の地位を目当てに徒党を組んで必死の運動をするとか、集会や宴会などを催すとか、さては芸妓を侍らせてどんちゃんさわぎをやるとか、そういったことは彼らの夢にもなそうと思わぬことなのです。そして国内(都内)の人の生まれのよしあしであるとか、あるいはまたひとが父方もしくは母方の祖先から受け継いでもっている汚点の何であるとか、そういったことはいわゆる「海の水は何升」ということよりも、なおさら彼らのあずかり知らぬことなのです。のみならず、これらすべてをこの種の人は知らぬ E ということさえ知らずにいるのです。なにしろ実際、それがこれらから超然としているのは、何も好い評判をとりたいがためではないのです。むしろ事実は、この国都にはただその肉体が寄留のかたちで置かれてあるだけなのでして、その思考はこれら万事を価値の少ないもの、否、まるで無いものと考えて、その軽蔑から、あるいは地面に幾何を研究し、あるいは天上に星度を推考するなど、これを一般にしては、おおよそありとしあるもののおのおのについて、それの全体としての性分すべてをあらゆる方面に探究しながら、ピンダロス[(1)]の言葉のごとく 174 に、その運動は[(2)]「天の外にも地の下にも」及ぶものなのですが、卑近のものには何ひとつ身を下してこれに親しむことをしないからなのです。

**テオドロス** というと、それはどういう意味のことを言おうとされるのでしょうかな、ソクラテス。

**ソクラテス** それはつまり、求知者というものは、ちょうどそのひとりであるタレスが、テオドロス、あなたの前ではあるが、星度推考をして上方を眺めていた時に坑陥に落ちて、トラケ(トラキア)出のきいたふうなあるおどけ婢[(3)]に、「あなたさまは熱心に天のことを知ろうとなさいますが、ご自分の面前のことや足元のことにはお

気づきにならないのですね」といってひやかされたという、ちょうどあの話の通りのものなのだということなのでして、同じ冷評は求知者生活をしているほどの者すべてに当てはまるのです。なぜなら事実この種類の者は、B 近くの者や隣の者について、それが何をしているかということはおろか、それが人間であるかそれともまた何か他の畜類であるかということさえほとんど知らずにすましているのであって、それの知ろうと求めて研究に苦心しているのは、むしろそもそも人間とは何であるか、またこの人間の本性に属するものであって、作用を及ぼしたり受けたりする上において他のものから区別されるのは何であるかということなのです。これはむろん、テオドロス、あなたは私の意味がおわかりになると思うのですが、それともそうはいきませんか。

**テオドロス** いや、私はわかりますよ。それに、あなたの言われることは本当でもある。

**ソクラテス** ええ、それだからつまり、いいですか、あなた! この種類の者は私的に個々人と交わる場合に

1 ピンダロスは前五二二/五一八年の頃に生まれ、同四四二/四三八年頃に歿した詩人。アッティカの隣国ボイオティアのテバイの名家に生まれて、青年時代にアテナイの詩歌音楽美術など各方面の影響を受けた。運動競技の勝利者のために歌うエピニキアと呼ばれる一見不利な詩の形式を用いて縦横に手腕を示した。プラトンのピンダロス引用はヘシオドスやエウリピデスやアイスキュロスとほぼ同数の一一回に及んでいる。なおここに引用されている詩の全文は今日に伝わっていない。ベルク版(T. Bergk, Poetae lyrici Graeci vol. I)では Fr. 277 (DK) としてここの句が掲げられている。

2 B、T写本の通り φέρεται とよむ。

3 古注によれば、昔の召使はトラケまたはカリアの地方から来ていたので、下男や下女のことをトラケ女とかトラケ男とか呼んだということである。ここに物語られているタレスの逸話は Diog. L. I. 34 にも出ている。このトラケ女を「きいたふうな」と呼ぶ意味はタレスをやり込める才気などからも理解されるところであるが、キャンベルは 175 E の「如才なくきちんと」にかけて、単に職業上気のきいたという意味ではないかと言っている。

C おいても、また公に――というのはつまり最初に言っていたことなのですが――裁判所なり、また何か他の場所なりにおいて、足元のことや目前のことについて言論を交えなければならなくなった場合においても、無経験のために坑陥に落込んだり、あらゆる行き詰りを演じたりして、ひとりトラケ女の失笑を買うばかりでなく、またその余の大衆の嗤笑をも受けることとなるのです。しかもその不調法のはなはだしさ！　それは底抜けのばかを思わせるものなのです。実際彼は人を誹謗するにも、何人の悪いところをも無関心のために少しも知らずにいるから、何人についても特にそれの痛いところを突くことが少しもできないのです。それでしたがって、行き詰っ
D て嗤うべき者に見えたりするのです。また人が讃美したり他方の者が大自慢したりする場合にも、彼はそれをおかしがるものだから、しかもそれがわざとではなくって、本当におかしがっているのだとわかるものだから、これはばかだと思われたりするのです。すなわち王侯の位にある者が結構な身分だと称頌される場合、それは彼の考えをもってすれば、豚飼いとか羊飼いとか牛飼いとか何とかいったような牧童のひとりが、たくさん搾取できるから幸福な身分だと聞かされるようなものなのです。しかも彼の認めるところでは、その牧養搾取するところの動物は、かの牧童連のそれよりはなお一層御しがたく、また油断のならぬものであるのに！　それにまたこの種の王侯の位にある者というと、それは時間の真の余裕をもつことがないために、必然に野卑となり、また教養
E を欠く者となるのであって、その点かの牧童連と何ら異なるところなきにいたるもので、城壁をめぐらしたその居住は小屋囲いの山住いにも比すべきものだと見られるのです。また土地のことについて、それが幾万町歩であるとか、否、なおそれ以上であるとかいうことを、何某の所有はかくのごとくである、何と驚くべき多大の所有ではないかというように聞かされる時、それがどんな場合であっても、彼はこの地というもの全体を眺めつけて

いるから、極小の土地のことを聞かされているように思うのです。むろんまた家柄というようなものをありがたがって、何某はその七人からの富裕な祖先(1)の名をあげることができるから、りっぱな家柄の人であるなどと言ったりする者がある場合においては、そんな讃美は、それはまるで鈍い視力と狭い視野とをもっている者のすることであると考えるのです。つまり無教育のために目をいつも全体に注ぐことができず、またそのために、誰の先祖先人だって数えきれぬほどたくさん出ているのだから、その中には誰にだって富者もあり、こじきもあり、王もあり、奴隷もあり、またそれがギリシア人であり、異人でありなどして、幾人も幾人もそういうような者が無数に出ているわけなのだ、ということを思量することのできない者のすることだと考えているのです。そしてこの思量ができずに、祖先二五代の目録を自慢の種にして、自分の家の血統をアンピトリュオンの子ヘラクレスにまでもって行ったりするのは、滅法それは少しばかりのことしか思量できないということ(すなわち極くけちくさい了見であるということ)を明示するものであると彼は見ているのです。しかもそのアンピトリュオンから上へさかのぼること二五代目の人はと言えば、たまたまその人がその場合にあったような人でしかないわけなので175 B あって、またそれから五〇代目の人も同じことなのに、彼らがこの思量をなすことができないで、ものの道理を

1 名門とか家柄とかいうものは実は昔その祖先が有能の人で金持であったということを意味するのだとアリストテレス(『政治学』第四巻(1294a21)、第五巻(1301b4))も言っている。したがって七人の富裕な祖先の名を挙げ得ることはむろんその家柄のりっぱなことを証するものである。

2 『国家』VI. 486 A の有名な文章において、知恵の探求者たる哲学者の精神は常に神的なるもの人間的なるものの全体と総体とに到達しようと努力するはずのものであって、あらゆる時を通じてのあらゆる有を観ることを仕事とするものであることが語られ、ちょうどここと同じようにそれは「少しばかりのことしか思量できないこと」(スミクロロギアー)の正反対として規定されている。

わきまえないその精神にこの空虚な誇りを捨てさせることができないというのは、彼のいかにも笑止千万であるとするところのことなのです。これを要するに以上すべての場合においてこの種類の人間は、一方では高ぶった——と思われるのですが——態度を持していながら、他方ではまた家常茶飯事に無知で事ごとに行き詰るものだから、多数の者の嘲笑を受けるということになるわけなのです。

**テオドロス**　それはまったく実際、ソクラテス、あなたの言われる通りのことが行われていますね。

## 二五

**ソクラテス**　ええ、ですがしかしこれが今度は、あなた、自分の方から誰かを高みへ引っ張り上げるとするんですね。そしてその誰かが「私はお前をどういう不正な目にあわしているというのだ、むしろお前が私にしている不正行為はどうだ」などというい
ざこざから足を洗って、その引っ張り上げてくれる者と共に、正そのもの、不正そのものを、これら二つのものはそれぞれ何であるか、またそれがすべてのものに異なる点、相互に区別される点は何であるかなどと考察する気になった場合、あるいはまた「どうだろうか？　王様になれたら幸福だろうなあ」「あるいはまた、黄金をたくさんもっているとしたならなあ」[(1)]などといったりすることを止めにして、王位について、また一般の人間の幸福と不幸とについて、[(2)]両者がどのようなものであるか、またそのうちから、どのようにして幸福を得、不幸を免れるのが人間の本性にかなうことなのかなどと調べて見る気になった場合、すなわちこれらすべてについて今度は、法廷のかけひきが専門で、抜け目はないが、精神の矮小な者が解答を与えなければならぬといった場合には、今度はあべこべに彼の方がさっきあったことそのままの「返し」を演ずるこ

とになるのです。すなわち高みに釣り上げられて目をまわしたり、地上をはるかに離れたところで、上空から目を放って、不慣れのためにまごまごしたり、行き詰りを演じたり、とんちんかんなことをやったり(3)して、トラケ女その他の無教育な連中には、それと気づくこともないので、嗤われることがないにしても、その育ちが人足どものようなものではなくって、それと正反対だった人々のすべてにとって笑い物となるわけなのです。

さてとにかく以上でもって私は、これら二種類の者おのおのの流儀をお話したことになるのです、テオドロス。

E その一つは、真の意味の自由と時間の余裕とをもって、その中に育てられた人の流儀なのでして、こういう人こそあなたは好学求知の士と呼ばれることでしょう。かかる人にあっては、たとえば夜具類の荷ごしらえをどうするか知らないとか、うまいお菜を作ったり、うまいお世辞を言ったりすることを知らないとかいうふうで、奴隷奉公の仕事に当っては、のろまであるとか無能であるとか思われることがあっても、それはべつに落度にはならないのです。これに反して、今度はまたもう一つの方の流儀になると、これは今のべたようなことの世話は万事

---

1 τ' αὖ πολὺ と読む。

2 Diog. L. VI. 18 によると、アンティステネスは「アルケラオス論または王位論」と呼ばれる論文を書いたことになっている。このアルケラオス王については、『ゴルギアス』470D sqq. に彼が「果して幸福であるかどうか」の問答が行なわれている。しかし幸福の問題で普通に考えられる王は、同対話篇 470E においてもちょっと触れられていることであるが、それはむしろペルシア大王であろう。『エウテュデモス』274A、『ソクラテスの弁明』40E などやデモクリトス Fr. 118(DK) などによっても知られるように、ペルシア大王は人間の世俗的幸福者の代表のように考えられていたのである。したがって幸福論の中に取扱われる王も抽象的一般的な王ではなくって、かかる特殊の内容をもった王であろうと思われる。

3 B、T 写本にしたがって、βαρβαρίζων と読む。

如才なくきちんとやるけれども、衣服をまとうのに、これを自由人の境涯に育った人の作法通り、正しく身に着ける[1]ことは知らないといったような者の流儀なのでして、こういう種類の人間は、なおまた言葉の抑揚を誤らず 176 に、神々であるとか、あるいはまた人々の中の浄福なる者どもであるとかが送るところの、真の生[2]を讃美する心得をも欠く者なのです。

**テオドロス**　すべての人々に、ソクラテス、あなたの言われることを、もし私同様に言い聞かせてくださるならば、人間社会はもっと平和になって、劣等な悪いものはもっと少なくなることでしょうに。

**ソクラテス**　でも、その劣悪なものがなくなるというわけにはいかんでしょうよ、テオドロス、何か知らん、いつもすぐれた善いものにはそれの反対のものがなければならないのですからね。それにまたその悪くて劣ったものが神々の間に居場所をもっているというわけにもいかないし。むしろそれがわれわれの住むこの場所を取巻いて、われわれ限りある生をもつ種族について廻るというのはどうしても必然なのですよ。それだからまた、できるだけ早く、この世からかの世へ逃げて行くようにしなければならんということにもなるのです。そしてその B 「世を逃れる」というのは、できるだけ神に似るということなのです。そしてその神まねびとは、思慮のある人間になって[3]、それでもって人に対しては正、神の前には義なる者となることなのです。しかしながら何しろ、あなた！　なかなかもってまったく容易なことでは、何故にひとがわが身の品性をすぐれた善いものにするように努力しなければならないのか、また何故にこれを劣った悪いものにしてはならないのかという理由は、かくてかの多数者が前者を求めて後者を避けるようにしなければならぬとして語っているようなことのためではないのだ、ということを説き聞かせることはできんのですからしようがありません。すなわち彼らの語るところでは、人に

悪いやつだと思われないためであるとか、善いりっぱな人だと思われるためであるとかいうのでして、このようなことは、私の見るところをもってすれば、まことにいわゆる老生常譚（ろうせいじょうだん）(婆さんたちのたわいもないおしゃべり)なるものなのでして、われわれはむしろ事の真実を次のごとく言うことにしたいものです。すなわち神なるものは、どの道断じて不正のないものであって、およそ可能なる限りの最も正なるものなのである。したがって神に

c 似ることの最上は、われわれの中の誰でもがまたわれわれの側においてできるだけ正しくするという場合よりほかにはないのです。男子がもつ本当の意味のあなどることのできないという性質も、このことを中心にして言われるのであって、また無能であるとか、男でないとかいうことも、これについて言われることなのです。すなわちこれを識ることが知恵というものなのでして、また人が真にすぐれた善い人であるということの所以（ゆえん）をなすものなのです。そしてこれらを識らぬということがすなわち無知というものでして、これこそ明白に人がそれによって、劣悪となる所以のものなのです。これに反して、これ以外に侮（あなど）るべからざるの手腕であるとか知恵である

---

1　ギリシア人の衣服は肌着と上着からできていて、両方を用いることもあるし、また片方だけのこともある。ソクラテスが上着だけ着ていたとすると、それは素袷（すあわせ）とか浴衣がけとかいうくらいのところで、昔は別に珍しいことでもなかったようである。肌着も上着も四角や長方形の布で、肌着にだけ腕を通す穴があいていた。はなはだ簡単な形のものであるだけに、この上衣を身体に合うように、短くはしょり過ぎず、長く垂れ過ぎぬように、じょうずに着るのが一苦労であったらしい。まずその布を取って左肩にかけ、その余りを背中にまわして右肩の上または下に出し、これをもう一度左肩または左腕の上に送るわけであるが、じょうずにしないとすぐに着崩れする心配もあった。その右肩のところの回し方がくふうものなのであろう、原文には「右(肩)に」の文字がある。ただしキャンベルはこれをただ cleverly とか deftly とかいうだけの意味かもしれないと言っている。

2　写本の通り βίον ἀληθῆ と読む。

3　同様の考えは『パイドン』64 A sqq. にも述べられている。

D とか思われているものは、国政を左右する権勢の上に見られるものは俗悪ですし、技術の方面において生ずるものは手先だけの低級なものです。だから不正の行いをする者や神の嘉し給わぬような言行をなす者に対しては、どんなことでもやってのけるというので、これに(侮ることのできない)おそるべきやつだなどという名を許したりしないのが何よりも大へんよいことなのです。なぜなら、このような悪名は彼らを得意にさせるものなのでして、彼らはこれをもって、「俺もこれで人の評判だと、空穴の役立たずではないらしい、この世の無用の場所ふさげではないらしい。むしろこれで我輩も一国一都市において、いやしくも身を全うしようとする者がまさにあるべき体の人間となったらしい」と考えるからです。それだからわれわれは本当のことを言ってやらなければならんのです。彼らは自分たちを無知の者ではない、無能な者ではないなどと考えているが、いずくんぞ知らん、彼らはかく考えているがゆえにかえってますますかくのごとき者なのです。彼らはすなわちわれわれが何よりも識っていなければならぬ不正の刑罰の何たるかを識らないのです。なぜならその刑罰は彼らの考えるような笞撻や死刑ではありません。このようなものは時に彼らも、不正の行いをしながら、その一つをも受けることなしにすむことのあるものなのです。われわれのいう刑罰はこれと異なり、免るべからざるの刑罰なのです。

E **テオドロス** というと、あなたはそれを一体何だと言われるのでしょうか。

**ソクラテス** それはあなた、ものの模範となるものが真実在の世界にはちゃんと定まってあるのでして、一方にはおよそ神なるものが最大幸福の模範としてあり、他方にはおよそ神ならぬものが最大不幸のそれとしてあるという、このかくのごとき事情を彼らは見ることなしに、その迷妄とはなはだしき愚昧とによって、自分たちは気づかないけれども、彼らはその不正な行いのために神ならぬものへ似るとともに神まねびからは遠ざかりつつ

あるのです。そして実にこの罪の報いとして、彼らはそのまねぶところのものと同じような生を送りつつあるということなのです。しかし彼らは、われわれが、彼らの人もおそれる凄腕（すご）などというものから脱却しなくっては、この世を終っても、この世の悪に染まぬ清浄のかの世界は彼らを受けいれてはくれまいから、彼らは依然この世にとどまって、悪しき者は悪しきものの連合（つれあい）というわけで、自分たち自身がある通りの、それらしい世過ぎをいつまでもしていることになるだろうと言ったところで、まったくもって彼らは何でもやってのける大手腕家のつもりで、そんなことは痴人の妄言であるとして聞き流すことでしょう。

**テオドロス**　ええ、それはもうむろん大いにそうでしょうね、ソクラテス。

B

**ソクラテス**　そうですよ！　それは知っているのです、ご同様にね。しかしそうは言っても、彼らにはちゃんと一つこういう場合があるんです。それはすなわち彼らが、その悪評を立てているところのものについて個人の間で言論の受け答えをしなければならん場合に立ちいたって、男らしくもなく逃げを張ったりせずに、むしろ男らしく長時間そこに踏みとどまる気になったその時にですね、いやはや、あなた！　それは徒事（ただごと）ならぬ奇妙ななりゆきで、結局彼らはその言論しようとするところのものについて、自分の不足が自分にわかるようになるのです。そして彼等の例の弁論術なんてものはどういうことなしに姿を消して行って、その結果は小児と何ら異なることなしと思われるにいたるものなのです。(1)

1　長広舌の弁論家にとって一問一答の形式による質問戦は非常に苦手であったらしい。『エウテュデモス』305Dにそのことが語られている。その実例は『ゴルギアス』448B～D, 462B～Eなどにも与えられている。『プロタゴラス』329A sqq. も弁論家のこの弱点について語っている。

(177)

C それはそうとしかしこれらについては、ちょうどついでにお話したまでのことでもあり、もうこれでやめるとしましょう。そうでないと、後から絶えずだんだん多くのものが流れ込んで来て、最初からのわれわれの論議というものは、それの下積みにされて見失われることになるでしょうからね。むしろそれよりはさっきのことに帰るとしましょう。もしあなたにもご異存がないのですなら。

**テオドロス** それは私としては、ソクラテス、今のお話のようなのを聞いているほうがおもしろくないでもないんですがね。なにしろ私のような年齢の者にしてみれば、この方がついて行きやすいですからなあ。しかし何なら、またもういっぺんさっきの議論にかえるとしましょう。

## 二六

**ソクラテス** そうですか、それならさっきの議論ですが、あれは何でもこんなところまで私たちは来ていたのではなかったのでしょうかしら。つまりあそこでわれわれは言っていましたね。実有運動説(すなわちものは本来何であるかといえば、それは運動するものなのであるということ)(1)を唱えて、そして「それぞれの場合におのおのの者に思われていることは、かく思われているその者にとって、またその通りにありもする」と説いている人

D 人が、この主張をとって断じて枉(ま)げようと思わない場合は他にもむろんあるでしょうが、かの正しい(合法的な)ものについては特にそうなのでして、彼らの主張によれば、これがその一番著しい場合なのです。およそ一国一都市が自らにそれと思われたところのもの(すなわち議定したもの)をもって法律に制定した場合、そのものはかく制定した国家都市にとって、それがかく制定されてある限り正しいものでまたありもするのだというのですが、

しかしよきもの（善福）についてはもはや彼らは、およそ一国一都市が自分のためになるものだと思って自分のところの法律に制定したものは、たとい何であっても、それがためになるものだとして定められてあるだけの期間は、またかくのごときものでありもするのだなどと、あえてどこまでもがんばって主張するほど勇敢な者は、もはやひとりもないということをですね。むろんこれで誰かがただそういう（善きものとか為になるものとかの）名目だけを言おうとするのならば、それは別ですが、しかしそんなことをするのは、せっかく私たちが言論しようとしているところのものを茶化すことになろうというものです。どうです、そうではありませんか。

**テオドロス**　ええ、まったくそれに違いありません。

E

**ソクラテス**　そうですよ、何しろここでしなければならないのは、そういう名目だけのことを言論するなんてことではないんで、この名目をつけられている当の事物を観察考究することなのですからね。

**テオドロス**　ええ、それはそんな名目のことではありませんからね。

**ソクラテス**　むしろ何を国家がこの名目で呼ぶにせよ、国家立法の的となるものはきっとこれだろうと思うのです。すなわち国家はどの法律を制定する場合においても、その思慮と実力との及ぶ限り、それを自国にこの上なく為になるようにと制定するものなのです。それとも何かこれより他に、国家が立法によって目指すところのものがあるでしょうか。

---

1　実有（ウゥシアー）という言葉を、いっさいの「ある」を排除しようとする主張に用いるのは、ある意味では矛盾のようにも見えるが、これは真偽の区別を認めないプロタゴラスの主張が「真理」と呼ばれるようなものであろう。

**テオドロス**　いや、そういうものは決してありません。

**ソクラテス**　それなら、そもそも国家はどの国家も皆この目的をいったい常に達成するものなのでしょうか。それとも失敗することだってずいぶんありはしないでしょうか[1]。

**テオドロス**　それは失敗もあると私は思います。

**ソクラテス**　なお、それでは、こういうふうにしたならば、一層同じこの同意がみな誰からも得られるということになるでしょう。それはすなわち問題を、この「ためになるもの」というのがちょうどまたその中に含まれているところの種族全体についての問題としたならばということなのです。そしてこの「ためになるもの」というのは、また将来の時というものについてもあるものだと思うのです。すなわちわれわれは法律を制定する場合、それがこれから先の時に対してためになるのであろうと考えて、これを制定するのですが、その「これから先の」というのはすなわちこれを「将来」と呼んでさしつかえないものなのでしょうが。

B

**テオドロス**　ええ、まったくその通りです。

**ソクラテス**　では、いいですかな、さあそれならわれわれは、プロタゴラスなり、プロタゴラスと同じ説の誰か他の人なりに対して、次のように問いをかけて行くとしましょう。「万物の尺度が人間であるということは、プロタゴラスよ、あなた方のこれは主張なのだが、その万物が白いものとか、重いものとか、軽いものとか、こういった種類のものである場合においては、それはどれにおいても例外はないことになる。つまりこれらのものについては、それがかくあるかあらぬかの分れ目(区別)をきめるものは各人自身にあるのであって、人は〔他から〕どんな性質の作用を受けるにせよ、それの自分が受けた(感じの)ままをその通りに思うと、それでその思いは自

分自身にとって真なるものの思いとなり、またその通り（現に）あることの思いともなるわけです。」どうでしょうか、こういうふうに言っていくのは？　いけませんか。

**テオドロス**　いや、それでいいでしょう。

**ソクラテス**　それならそもそもまた、まさに来りあらんとするところのものについても、おおプロタゴラスよ——とこうわれわれは言うことになるでしょう——そのあるかあらぬかの分れ目を決定するものは各人自身にあるものなのだろうか。すなわち人があるだろうと思ったものは、いかようなものであっても、それはかく思ったその人にまたそもそもその通り生じ来るものなのだろうか。たとえば体温である。いまもし誰か素人(しろうと)の者が自分には高熱が出るだろう、すなわち、それだけの体温があるだろうと思ったとする。そしてまた別に誰かが——それはしかし医者であるとしよう——そんなことはないと思ったとしよう。この場合、将来するところの結果をわれわれは、両者いずれか一方の思いなしの通りになると主張すべきでしょうか。それともまた、それぞれ両方の者に思われた通りになるのであって、医者にとっては、その者は体温も上らず、またしたがって高熱に悩むことにもならないが、その者自身にとっては、体温も上るし、また高熱に悩むことにもなるのでしょうか。(2)

C

1　『国家』I. 339Cにおいてソクラテスは、正義は強者の利益であって、支配階級は自分自身の利益を考えて法律を制定し、これに従うのを正、これに叛くのを不正としているというトラシュマコス説に対して、果してその支配階級は自分たちの真の利益を計ることにおいて誤謬なきや否やを問うて、誤謬の可能をトラシュマコスに承認させている。

2　アリストテレス『形而上学』第四巻（1010ᵇ11）にプラトンのこの例が引用されている。なおこれと同種の問いは『国家』IX. 582Aにも見られる。

**テオドロス**　しかし、そんなことになったらおかしいでしょう。

**ソクラテス**　またしかし、酒のまさにあるべき旨(うま)さまずさについては、酒をつくる農夫の思いなしが有力であ
D　って、弾琴家のそれは無力であると私は思うのです。

**テオドロス**　ええ、それに違いはありません。

**ソクラテス**　また他方、音のまさにあるべき好調不調については、体育家の思いなすところのものが音楽家のそれに勝るというようなことはありますまい。それはまた後になれば体育家その人にもまさに好調であると思われるはずのものいかんを決定するわけなのです。

**テオドロス**　いや、それはどんなにしてみても体育家に勝目はありませんね。

**ソクラテス**　それならまた、いまここに御馳走をして食べようとする者があって、それが割烹(かっぽう)専門家でないとするならば、その御馳走の調理最中に、この者がそのまさにあるべき甘美(うま)さについて下すところの判定というものは、本職の料理人のそれに比して劣勢なものではないでしょうか。すなわち、すでに各人にとって甘美である
E　ところのもの、もしくは甘美であったところのものについては、これをあくまでとやかくと言論の上で言い争ったりするのはむろんまだわれわれのなすべきことでは決してないのですが、しかしながら、各人にとってまさにそれと思われるであろうところのもの、したがってまさにあるであろうところのものについては、どうなのでしょうか、めいめい自分が自分自身にとって一番よい判定者なのでしょうか、それとも、おおプロタゴラスよ、あなたがそれなのでしょうか、ことといやしくも法廷に持ち出される場合の言論のわれわれ各人にとってまさにあるべき説得力については、あなたのあらかじめ思いなされることの方が素人のだれかれのそれより勝っているとい

うわけなのでしょうか。

**テオドロス** むろんですとも、ソクラテス、そのことこそは、あの人が自分は誰にも負けないといって特に力をこめて言明していたことなのです。

179

**ソクラテス** 誓ってその通りでしたよ、結構、あなた！ またそうでなければ、あの人と問答するのに大金を出したりする者はひとりもなかったことでしょう。それにはつまり、自分と交わりを結ぶ者に説いて、〔この方面においては〕たといそれがまさに*ある*べきこと、したがってまたまさに*思われる*であろうところのものについてであるとしても、これをいっそうよく判定するのは占師とか他の何とかではなくって、むしろ自分であるということを信じさせていたのでなくってはならんのです。

**テオドロス** それは至極本当のことです。

**ソクラテス** それなら、また立法も、立法の目的となっている福利（ためになるもの）も将来に関するものなのですから、したがってまた一国の立法がしばしば最上の福利を外す（はず）というのも、それは必然だとして何人もあるいはこれを承認するのではないでしょうか。

**テオドロス** ええ、それは確かです。

B

**ソクラテス** したがってわれわれは、あなたの師なるかの人に向かって次のごとく言うのが至当でしょう。それはすなわち、人と人との間には知恵の優劣があるということと、それからまた、その知恵の優者こそ尺度なのであって、私のような知識のない者は、どんなにしてみても、尺度にならねばならんというようなことはないのであって、さきほど、かの人の代弁として語られた言論は私に対して、欲すると否とにかかわらず、かかるもの

であることを強制しようとしていたけれども、そういうことはないのだということ、このことを必然にかの人は承認しなければならないのだということをですね。

**テオドロス**　それはソクラテス、今のそこのところがプロタゴラス説には一番の弱味だと私は思います。あそこを押えられては手も足も出ませんよ。むろんまたプロタゴラス説というものは、プロタゴラス論者以外の人々によって思いなされることに対しても権威をもたせることになるが、しかしその人々の思いなしはといえば、これはプロタゴラス説を断じて真理にあらずと考えていることが明白なのだったという、この点でもそれは押えてやりこめられることはやりこめられるんですがね。

C

**ソクラテス**　それはテオドロス、こんなことだけなら、押えてやりこめる点はまだ外にもたくさんあるでしょう。つまり、すべての人の思いなしが皆すべて真であるというようなことはないのだというふうにですね。だけれど、各人が〔他から〕現に作用を受けてもっているものについては、その受動の情態から感覚が生じ、またこの感覚にもとづく思いなしも生ずるというわけなのですが、これらを必ずしも真実を伝えるものではないとして取って押えるというのはもっとむずかしいことなのです。だが、こんなことを言って、これはたぶん無意味な話かもしれませんね。なぜなら、これらのものは、ひょっとしたら、押えてやりこめたりすることのできないものなのかもしれませんからね。したがってまた事実は、これらのものをもって明々白々一点の疑いなきものとなし、まさに知識なりと主張している人たちの言葉の通りのものでたぶんあるのかもしれませんからね。そしてもしそうなら、このテアイテトスが感覚と知識を同じものだとおいたのは決して見当違いの主張ではなかったわけなのです。では、まあとにかくもっと近くへ寄って——というのは、プロタゴラスの代弁として語られたかの言論が

D

それを命じておったのですが——そしてその運動実有なるものをとって、これをはじいて、その音には少しの不健全分子もないかどうか、あるいはひびの入ったようなところがありはしないか、検査してみなければなりません。だが、事実それはそうと、この運動実有なるものをめぐっては、ちょっと軽視できない争いが起っているのでして、またこれには少なからぬ人々の参加をも見ているのです。

## 二七

**テオドロス**　いや、それはどうして、ちょっと軽視どころの話ではありません。むしろイオニア一帯では、争いはその上またますます発展の度を加えているところなのです。なにしろヘラクレイトスの徒がえらく勢いこんでこの論の音頭取りをしているのですからなあ。(1)

**ソクラテス**　それだからこそ、どうでしょう、ええテオドロス、それを調べて見ることがますますもって必要となるわけなのです。しかもそれはまさにその人たち自身の先導に従ってこれをそのはじめにたちかえって観察するのでなくってはなりますまい。

E

**テオドロス**　むろん、それはまったくそうしなければなりません。事実なにしろ、ソクラテス、このヘラクレイトス説というものについては——これはあるいは、あなたの言われるがごとくであるならば、ホメロスとかさ

1　ヘラクレイトスの徒については、アリストテレス『形而上学』第四巻(1010a11)やDiog. L. XI. 6. などを参照。テオドロスの特別な感情を交えた具体的な話しぶりは、何か実在の人物を想像させるものがある。

(179) らになお古い時代の誰とかに帰せらるべき説なのでしょうが――これについては、かのエペソス一帯のそれを知ったかぶりしている人たちを直接相手にしたのでは、まるで狂人を相手にするのと少しもかわりがないのでして、言論を交えることは不可能なのですからね。なぜなら彼らは手もなくかの書物の方針通りの運動物なのでして、ただの言論にしろまた言論の問いにしろ、とにかくその上に立ち止まるということや、また静かに順番を守って

180 問いつ答えつするということは、彼らには皆無であるといわんよりは、皆無以下なのです。【ところでこの(皆無以下にあたる)皆無さえもないということですが、これはこの人たちには静止の少しさえもないというのより度のもっと強い言い方なのです(1)。】それはとにかく、むしろもしあなたがその誰かに何か尋ねてごらんになるなら、彼らはまるで箙(えびら)の中からのように、謎めいたちょっとした語句を抜き出して、これを射かけてよこすにきまっているのです。そしてそれの意味を、これは何を言ったのであるか、その説明をお求めになるとしたところで、ただ言葉を新奇なやり方で取りかえたまたもう一つ別のやつであなたは撃退されてしまうことでしょう。そしてあなたは、この連中だれを相手にしたところで、いつになっても何ひとつらちを明けることはおできにならんでしょう。否、彼らが自分たちお互いを相手にする場合においても、それは望みないことなのです。彼らはむしろ、

B 言論の上においても、また自分たち自身の心の中においても、よりどころになるような堅固なものが一つでもあるのをそのままにしてはおくまいというので、そのために大へんな用心をしているのです。それは私の思うに、このよりどころになる堅固なものというのを立止まっているものだと考えるからなのでしょう。そしてこの立止まりこそ彼らの攻撃大いにつとめ、かつ全力をあげてこれをいたるところから駆逐しようとしているものなのです。

**ソクラテス**　それはたぶん、テオドロス、あなたはその人たちの戦っているところをごらんになって、その平和にしているところへは一緒になられなかったのでしょう。それはつまり、彼らがあなたの仲間でないからなのです。しかし私は思うのですが、そういうようなことは、弟子たちに、時間の余裕のある時、説き明かしているのではないでしょうか知らん、それがもし自分の同類にしようとする者であるとしたらですね。

**テオドロス**　弟子ですって！　あなた！　これは驚いた、どんなのがそうか、お目にかかりたいくらいのものです。この類の連中には、ひとりが他のひとりの弟子になるなんてことは決してないことです。彼らはむしろ、C おのおのどこからでもひょいっと神憑り（がかり）にかかれば、それでひとりでに生まれ出て来る者なのです。そしてお互いに自分以外の者を、あいつは何も知ってやしないと考えているのです。とにかくこの連中からは、今も言いかけたことなのですが、彼らにその気がなければむろんのこと、たとい彼らがその気になってくれたところで、首尾ある言論を聴取するということはとうていおできにならんでしょう。それよりむしろ、われわれはこれをちょうど数学の宿題みたいに、自分で受負って考究して行くよりほかはありません。

**ソクラテス**　いや、あなたがそれを言われるのはまたもっとも千万なことです。ただ、そのあなたの宿題なるものは、どうでしょう、われわれがいま受負ってもっているのは、一方からいえばそれはもう大昔の人たちから D 伝えられているものなのではないでしょうか。ただ彼ら古人は、オケアノスとテテュスとがそれ自らを除く他のいっさいを生産するものであり、この両者はまさに流れであるがゆえに、またしたがって何ものといえども静止

1　この括弧内の文章は恐らく、後代の注釈家の注解が誤って本文中に混入したものであろう。

(180)

しているものではないという自分たちの考えを、詩(仮作)の形式を用いることによって、大多数の者には気づかれぬように隠しておったのです。他方これに反して後の時代の人たちは——というのは、われわれはこれら後の時代の人たちからも宿題を受負わされているのですが——もっと知恵のある人たちなので、自分たちの意中をあからさまに打ち明けて見せるという方法(1)をとって、それによって聞く者は、たとい履つくりのような者であっても、彼らの知恵を学得して、ものには動いているものもあるが、また静止しているものもあるというような愚かしい考えはやめて、むしろ万物はみな動くのだということを教えてもらったことから、(その教え主である)彼らに対して不断の尊敬と栄誉をささげてくれるようにとはかっているのです。だが、これはテオドロス、もう少しで私は忘れてしまうところでした。これらとは正反対の意見を公けにしている者がまた別にあったのです。その

E

意見というのは、たとえば「不動なるもの、有の名こそ、万有の世界がもつところの名である」(2)というようなもので、他にも幾多のメリッソス(3)やパルメニデスが、さきの人々すべてに対抗して、自分たちの確信ある主張として語っているものがすべてこれなのです。すなわち「万物は一なるものである。自分が自分自身の中に静止しているだけで、自分がその中を動く場所というようなものはもたない」というのがそれです。そうしてみると、これらの人たちを両方ともすべてわれわれは——というのは、むろんあなたも仲間になって考えてくださらなければならんのですが——どう取扱ったらよいのでしょうか。それはつまり、少しずつ言論を進めて行くうちに、私たちは知らず識らずこれら両派の人たちの中間へ入り込んでしまったというわけなのです。だから、何とか自己を

181

守ってここのところから身を抜くようにしないことには、ちょうど相撲場で線を引いて、これをはさんで敵味方互いに引っ張り込みっこをするあの遊戯(4)で、敵と味方に身体をとられて、しまいに反対側へ引っ張り込まれた者

がそうであるのと同じこと、罰を受けることになるでしょう。私はそれだから思うのですが、まずその一方の人たちから始めて審査をしなければなりますまい。その一方の人たちというのは、われわれのこれまでの言論に目標となった人たち、すなわち流転の人たちのことです。そしてもし彼らの言うことに何か実のあることが明白ならば、われわれは彼らと力をあわせてわれとわが身をこなたに引き寄せるとしましょう。そしてもう一方の人たちの手から逃れる工面（くめん）をしましょう。これに反してもし全世界を静止させる側の人たちの言うことの方が真実だと思われる場合には、今度はまた動かすべからざるもの(5)を動かそうとする人々のところから逃れて、かの人たち B の側に身を寄せるとしましょう。とはいえ、これがもし両派の言うところともに少しの当を得たものもないと明

1　『プロタゴラス』316D～317Cを見ると、プロタゴラスがまた自分のソピステスであることを秘密にしないで、公然と人の教育者であることの名乗りを挙げたと記されている。

2　今日に伝わっているパルメニデス断片中にはこれに似た言葉はあるけれども、しかしそれはここに要求されているような意味の言葉ではないようである。なお原文のοἷονはソクラテスの言葉とする。

3　メリッソスはサモス島の人、前四四一／四四〇年の頃アテナイの海軍を破って盛名があった。プルタルコスの『ペリクレス伝』二六章以下に、アリストテレスの『サモス国誌』を根拠として、このことの記事が出ている。なお、ここにのべられている「場所」の否定による静止論については、アリストテレスの『自然学』第四巻（213b12–14）参照。

4　これはポルクスの『オノマスティコン』第九巻（一一二）に「ディエルキュスティンダ」の名で紹介されている遊戯であろう。主に相撲場その他で行なわれる。子供たちは二隊に分かれて互いに相手方の者を一人一人自分の側へ引っ張り込もうと争うのである。その両方の中間には砂上に線が引かれていて、その線を越えた者は敵方に取られる定めなのであろう。したがってその境界線近くにいる者は敵味方に手をとられて引かれるわけである。

5　この言葉は、古注によると、社寺、祭壇、墓石、境界などについて動かしてはならぬことを言ったものであるという。『法律』III. 684E, VIII. 842E～843A参照。

らかにされるようになったならば、われわれはこの太古大知の人たちを落第させてしまって、自分たちが——とるに足らぬ者の分際で——語ることに何か真実があると考えていたのでは滑稽なことになるでしょう。だから、テオドロス、危険はこんなになかなか大きいのですが、こんな中へわれわれが進んで行くのは果して効いのあることかどうか、ひとつ考えてみていただきたいものです。

**テオドロス**　いや、とてもどうしてがまんのできることではありませんよ、ソクラテス、この人たちが双方おのおの何を言っているのか、よく調べて見ないでおくなんてことは！

## 二八

**ソクラテス**　とにかくあなたが、そんなに乗気になってくださるのだとすると、それは調べてみなければなりますまい。それなら私は動きというものについて、万物は動くと主張している人たちが果して一体それをいかなるものと解しているのか、それを調べてみるのがまず第一だと思う。ところで、私が言おうと思っているのは次のようなことなのです。彼らの解するところでは、動きというものの品種は何か一つだけあるものなのか、それとも、私にそう見えているように、二つあるものなのかということなのです。もっともこれはただ私にそう思われるというだけではいけないのです。あなたも一緒に私の見方へ仲間入りをしてくださらなければいけません。それはどんな目にあわなければならないとしても、それを私たちが共に仲間で受けるようにするためなのです。では私に言ってください。何かがもしひと所から他の所へと場所を変更するなり、あるいはまた同じ場所にあって回転するなりする場合、そもそもあなたはこれを動くと呼ぶかどうか。

**テオドロス**　私としてはそう呼びます。

**ソクラテス**　それなら、これを〔動きというものの〕一つの品種としましょう。次にもし同じ場所にあって、しかも年をとるとか、白から黒になるとか、柔かいものから硬いものになるとか、あるいはそのほか何か違った〔性質の〕ものになるような変化をするとき、これを動きというもののもう一つ別な品種だと言っていいのではないでしょうか。

D

**テオドロス**　ええ、私はそれでいいと思います。

**ソクラテス**　何しろそれよりほか言いようのない（必然の）ことなんですからね。つまり、私の言おうとする動きの品種はこれ二つがそうなのです。一つは〔何か違った性質のものになるという〕変化であり、他の一つは〔場所の〕運動なのです。(1)

**テオドロス**　しかも正しいことなのです。そう言おうとなさるのは。

**ソクラテス**　それならば、これをこう品種分け（しな）した上は、今から「万物は動く」と主張している人たちと問答をして行くことにしましょう。そしてこう尋ねてみましょう。諸君の主張では、すべてのものは運動しまた変化するという両方の仕方で動くことになるのか、それともある一部のものはその両方の仕方で動くけれども、他のものはその片方だけの仕方で動くことになるのか。

E

1　『パルメニデス』138B～Cにも動きはこの二つに分けられている。このほかプラトンで特殊の動きが取扱われているのは『パイドロス』245C～E、『ソピステス』248E、『法律』X．898Bなどである。

**テオドロス**　いや、それはしかし、神明に誓って申しますが、私としては何とも言いようがありませんね。ただ、両方の仕方で動くというのが、たぶんあの人たちの主張ではないかと思うのです。

**ソクラテス**　ええ、しかしもしそうでないとするならばですね、いいですか、あなたも仲間になって考えて下さいよ、彼らの目には動いているものばかりではなく、立止まっているもののあることがあらわとなることでしょう。そして万物は動くと主張するのは、万物は立止まっていると主張するのに比べて、その方が正しいなどということは少しもないことになるでしょう。

**テオドロス**　あなたの言われることは至極ほんとうです。

**ソクラテス**　それならば、それらは動いていなければならないのであって、動いていないというようなことはいかなるものの中にもあってはならないのである以上、万物はむろんあらゆる動きを常に動くということになるわけです。

**テオドロス**　それはそうなければなりません。

**ソクラテス**　では、どうかまあ彼らの次の点を見てください。暖かさなり、白さなり、あるいは何なりの成立ちは、彼らの主張によると、何かこんなようなことになるということを私たちは言いはしませんでしたかしら。つまり、そういうもののそれぞれは、作用を及ぼすものと受けるものとの間に、それぞれの感覚と同時的に運動する、そしてその作用を受けるものは感覚するものになるのであるが、しかし感覚そのものになるのではない、また作用を及ぼすものは〔どんな？　として問われるような〕一定性質のものとなるが、しかし性質というものになるのではないというのです。(1)　ところで、たぶんその「どんなかのということ」(質というもの)というのは変て

こな言葉に聞こえるでしょうし、また同時にここではたくさんのことをいっぺんに言うような言いかたがされているので、おわかりになれないでしょうから、聞いてください、箇々の場合を例にとってみましょう。それはつまり作用を及ぼすものが暖かさとか白さとかいうものになるのではないが、暖かくなったり、白くなったりするということなのです。そしてその他のものもそうだということなのです。というのは、おそらくあなたも覚えておられるでしょうが、前にした話の中で私たちはこういうふうに言っていたのです。何ものも他と没交渉にそれ自体でそれ自体にとどまったまま単一にあるものではない。作用を及ぼすもの、あるいは受けるものといえども、やはりまた然りなのであって、むしろ両者は相互の関係の上に立って、それが一緒になると、そこから感覚と感覚されるものとを産出して、一方のものはどんなかの質のものとなり、他のものは感覚するものとなると、こう言っていたのです。

B

**テオドロス**　そうです、覚えています。どうしてまた覚えていないことがありましょう。

**ソクラテス**　それなら、他のことは、彼らの言っているのが果してこの通りであるか、それとも違っているのか、それはまあそのままにしておいて、ただこれらを私たちが言う所以（ゆえん）のそのものだけは見失わないようにして、以下の問いをすすめて行くとしましょう。万物は、諸君の主張だと、動くものであり、流れているものなのだと

C

1　古注にもあるように、いわゆる「性質」を示すギリシア語「ポイオテース」はプラトンによって始めて用いられた言葉ではないかと思われる(Diog. L. III. 24)。それは「どんな」という疑問形容詞に対する「どんなかの」という不定形容詞から作られたものなのである。ラテン語においてみれば qualitas(性質) は quale(「どんなかの」という不定形容詞)から作られている。

いうのでしょうか。むろんきっとそうだと思いますが、どうでしょう？

**テオドロス**　ええ、その通りです。

**ソクラテス**　それでは、私たちが品種(しな)分けしておいた両方の動きを動くのではないでしょうか。運動すると同時に変化するものなのではないでしょうか。

**テオドロス**　どうしてまたそうでないことがありましょう。他の場合は知らず、いやしくももし真実それが徹底的に動くべきものならば、ですね。

**ソクラテス**　それなら、もしそれがただ運動するばかりであって、変化して違った質のものになることがなかったのならば、私たちはその運動しているものを、流れているにしても、それがどんな質のものであるかを、あるいは言うことができたでしょう。それとも、これを私たちはどういうふうに言ったらよいでしょうか。

**テオドロス**　それでよいのです。

D

**ソクラテス**　ところで、このこともまた、すなわち流れているものが流れていても、それは白いもののままで流れているのだということもまた、そのままとどまっているのではなくって、むしろその点にとどまりがあるのを取り押えられないために、それは変動するのでして、したがって、このもの——すなわち白——そのものにも流失があり、また他の色への変動があるということになると、何かそれを色の名で呼んで、しかも正しい呼び方をしているというようなことは、いったいそもそもありうることでしょうか。

**テオドロス**　してまた何でそのようなことがありえましょう、ソクラテス。いや、この種の他の何ものの名をもってそれを呼ぶにしても、まったくもしそれぞれの場合、人がこれを言葉に言い表わすと、いつもそれは、何

といっても流れているもののことだから、それをくぐり抜けてあらぬ方へ行くものだとするならば、何でそのようなことがありえましょう。(1)

**ソクラテス**　では、感覚についてはどうでしょう、どんな感覚でもいいのですが、たとえば見るとかあるいは聞くとかいうような感覚について、私たちは何を言うことになるでしょうか。それはもしかすると見ること、あるいは聞くことそのことの中にそのままとどまっているものだと言うべきでしょうか。

E

**テオドロス**　いいえ、いやしくも万物が動くのならば、決してそのように言うべきではないのです。

**ソクラテス**　したがって、ものがむしろ見ると呼ばるべきであって、見ないとは呼ばるべきでないということや、むしろまた何か他の感覚の名をもって呼ばるべきであって、そうでないものの名で呼ばるべきではないというようなことは、いやしくも万物があらゆる仕方で動いている限り、それはありうべからざることなのです。

**テオドロス**　そうです、それは事実そういうことのあるわけがないのです。

**ソクラテス**　それに、どうでしょう！　私がその片棒をかついでいたテアイテトスの主張では、感覚はすなわち知識なのでした。

**テオドロス**　ええ、そういう主張でしたね。

**ソクラテス**　したがって、われわれが問われていたのは、何が知識であるかということなのですけれども、われわれが答えたのは、それは知識であったのか、それとも知識ならぬものだったのか、少しもどっちがどっちと

1　『クラテュロス』439Dでも同様の批判がヘラクレイトス哲学に対して与えられている。

(182)

183

決められないわけになるのです。

**テオドロス** たぶんあなたたちの答えはそのへんのことになるのかもしれませんね。

**ソクラテス** われわれがこの答えを正しい答えにしようとしたのは、どうやらすばらしい結果になるらしいのです。何しろわれわれが万物は動くということを証明しようと思って一生懸命になったのは、あの今の(感覚即知識という)答えを正しいものとして示そうとする、ただそのためだったんですからね。ところが、どうも実際に示されたところでは、もし万物がみな動くのならば、答えというものは、人がたとい何について答えるにしても、みな同様に正しいものなのだということになるらしいのです。つまりそれの答えはそれをそういう有様(ありさま)——これはもしまた何なら、かの流転主義の人たちを言論の上で立ちどまらせたりしないために、成行(なりゆき)としてもよいのですが、とにかくその有様——だと言っても、またそうでない有様だと言っても変りがないことになるのです。

**テオドロス** そうです、それはあなたのように言うのが正しいことになる。

**ソクラテス** ただし、テオドロス、「そう」とか「そうでない」とか私が言ったのだけは、その正しいという中には入らないでしょう。というのは、「そう」ということ、このこともまた言ってはならないのです。なぜなら、

B

そうすると、「そう」というのがまたもはや動かなくなるかもしれないからなのです、また他方「そうでない」ということも言ってはならないのです。なぜなら、これもまた動きではないからです。むしろこの説を唱える人たちは何か他の言語を制定しなければならないのです。(1) 今のところ、自分たちの根本的想定にかなうような語句は、「どうということもない」(2) というのがあるいはそれかもしれないが、これを除いては彼らにはないのですからね。これは、ところで、こういう言い方をすれば、不定な言い方になるから、かの人たちには最も適当するで

しょう。

**テオドロス**　いかにも彼らにそれはたいへんしっくり合った言い方の言葉です。

**ソクラテス**　それでは、われわれにとって、テオドロス、あなたのあのご友人の用はもはやおしまいになりました。すなわちわれわれはまだ、人が何らかの意味においてもののわかる人であることなしに、誰でもが万物の C 尺度であるというようなことを、あの人に対して承認するわけにはいかないのです。そしてまた知識すなわち感覚という説に対しても、それが「万物は動く」という道をたどる限りにおいて、われわれはこれを承認することはないでしょう。もしもここにいるテアイテトスがそれを何か違った(3)意味で言おうとするのでないならば。

**テオドロス**　ありがとう、ソクラテス、あなたがそれを言ってくださったので、私は大助かりだ。これまでのことがこれで一段落だとすると、私もまたあなたに答える役はもはやこれで御用済みになっていなければならないのですからねえ。約束では、それは「プロタゴラス説に関することが終ったら」ということになっていたのですから。

## 二九

**テアイテトス**　いや、まだいけません。まずその前に、テオドロス、あなたとソクラテスとで、万物は立ち止

1　言語は法律、道徳、習慣と同じように制定されるものと考えられる。『クラテュロス』388D～E参照。

2　B、T写本のごとく οὐδ' ὅπως と読む。

3　W写本に従って γε をけずり τι をよむ。

(183) D

まっているのだと別にまた主張している人たちを、今しがたお決めになっていた通りに、すっかり調べてごらんになってからでなければ。

**テオドロス** 年若な君が、テアイテトス、私たち年長者に対して協定違反の不正を教えるのかね。まあそれよりは、まだのこっている言論の勘定を、ソクラテスさんに対してどういうふうにしたら片づけられるか、その仕度でもしていたまえ。

**テアイテトス** それはもうソクラテスがそうすることを望まれますのなら！ ですけれど、どっちかと言えば、私の申しあげているいまのことについて、お話をうかがえるのでしたら、それが一番うれしかったのです。

**テオドロス** ソクラテスさんを君が談論に誘うのは、騎兵を平地に誘うことなのだ(1)。だからとにかくまあ問いをかけてみたまえ。そうすれば、それが聞けるから。

**ソクラテス** しかし、テオドロス、そのテアイテトスが話せと言っている事柄に関する限り、私はテアイテトスの要求にはどうも応じられそうもないと思うのです。

E

**テオドロス** いったいそれは何を応じられそうもないと思われるのですか。

**ソクラテス** 私はメリッソスその他の「世界は単一であり、立ち止まっているものである」と言っている人たちに対して、わが身のいたらなさを思う時、これに加えるわれわれの観察が低級なものとなりはしないかと恥じおそれるのです。そしてそれはまだよいとしても、私はこれらの人たちより、ただ一人ある(2)パルメニデスに対してなおさらその畏羞(いしゅう)を感じるのです。パルメニデスという人は、私の見るところでは、ホメロスのいわゆる「畏敬すべく、また畏怖すべき人(3)」という感じがするのです。それというのはですね、私はごく若い時にあの人に会

184

って、ちょっと親しくさせてもらったことがあるのです。その時あの人はもう大へんな齢でした。そして私には、あの人はあらゆる点で高貴な、何か底知れないものをもっているように見えたのです。それですから私は、われわれがあの人の言っている言葉を理解しないことを恐れるとともに、またあの人がどういう考えでそれらの言葉を語ったのかということには、さらになおわれわれの理解の及ばぬものがはなはだ多いのではないかと恐れるのです。その上、そのためにこの言論が始められた一番大事なこと、すなわち知識についての何がいったいそれであるかということは、もしがやがやと後から入りこんで来るこれらの言論にいちいち耳をかしていようものなら、そのために考察ができなくなるだろうということを私は恐れるのです。とりわけ私たちが今よび起こそうとしているものは計り知れないほどの大きな言論となるものであって、もし人がこれを片手間に考察するようなことをしようものなら、それは不当な取り扱いとなるだろうし、またもしこれに充分な取り扱いを与えるとなれば、この方の言論が長くなって、知識に関する方のものを、そのうちにどこかへ見失わせることになるでしょう。しか[4]

1　古注によると、この言葉は何かの技術において自分より優越している人をその競技に誘うときに用いられ、また「騎馬を平野に誘う」とも書かれて、人をちょうどその希望しているものへ誘う場合に用いられるという。

2　ここの「ただ一人ある」は彼の説く「ただ一つある」の教えにかけた洒落ではないかと考えられる。

3　『イリアス』第三巻一七二行、『オデュッセイア』第八巻二二行など。

4　このことは『パルメニデス』篇全篇の予想であって、同書127 A sqq. に詳しく記されている。また同じことは『ソピステス』217Cにも語られている。これがもし史実であるならば、パルメニデスの年代とかソクラテスの青年時代とかを考える大事な材料になるし、またこれがプラトンの虚構であるならば、『パルメニデス』篇と『テアイテトス』篇の創作年代の比較関係を決定する有力な手がかりとなるわけである。

B しそれはどちらも避けなければならぬことなのです。むしろテアイテトスに、まだ知識に関して吐露したいと思うものを腹の中に持っているのなら、それをわれわれは例の産婆術によって分娩させるように試みなければならないのです。

**テオドロス**　何にしても、そうあなたが思われるのなら、そうしなければならないでしょう。

**ソクラテス**　それなら、テアイテトス、あともうこれだけのことを、今までに言われた事柄について考えてみてくれたまえ。つまり、感覚はすなわち知識だというのが君の答えだったが、どうだね、確かそうだったね。

**テアイテトス**　はい、そうです。

**ソクラテス**　それでは、もし誰かが君に次のような問いをかけるとするならば、すなわち人間が白と黒を見るのは何によってであるか、音の高低を聞くのは何によってであるかとこう尋ねるならば、君は眼によって、耳によってと言うだろうと僕は思う。

**テアイテトス**　私としてはそう申します。

C **ソクラテス**　ところで、辞句が気やすく使われていて、それの細かい点まではやかましく詮議（せんぎ）だてのしてないということは、多くの場合その人の生まれの悪くないことを示すものであって、その反対はむしろ下品となるのだが、(1) しかし時にはそれの必要なこともある。たとえばちょうどいまの場合などがそれであって、君の答えるその答えは正しくない点があるから、そこのところで「待った」をしなければならないのだ。というのは、答えは次のどちらが正しいかを考えてみたまえ。すなわちわれわれが依ってもって見るところのそのものが目であるとするのが正しいか、それともわれわれがそれを通じ（用い）て見るところのものが目であるとするが正しいか。ま

た依ってもって聞くところのものを耳とするが正しいか、それとも通じ(用い)て聞くところのものをそれとするのが正しいか。

**テアイテトス**　それを通じ(用い)てわれわれがそれぞれのものを感覚するのがそうだとする方が、依ってもって感覚するところのものをそうとするよりは、ソクラテス、むしろよいように私には思われます。

D

**ソクラテス**　それはそのはずだよ。もしわれわれがちょうどあのトロイア戦争の話に出て来る木馬(2)のようなものであって、その内部に伏せてある感覚はかなりたくさんあるにしても、それらのすべてが帰向すべき何か一つのちゃんとしたものがないとしたら、いいかい、君、それはおそらく容易ならんことになるだろう。この一つのちゃんとしたものというのが、心(魂)と呼ぶべきであるか、あるいはまた何と呼ぶべきものであるのか、それは

1　アリストテレス『形而上学』第二巻(995ª10 sqq.)に、人々は自分の聞き慣れた話し方を求めて他の言い方を理解し難く思うものであるという例のうちから、ある人たちは万事を厳密にやろうとするけれども、ある人々には厳密ということが苦手である、それはその細かい点まで追随できないためか、あるいはまたこせこせと細かい点を突っつくのがけちくさく思われるためである、なぜなら厳密とか精確とかいうことは、商売上の契約などにおけるがごとく、談論においても人によっては下品であると思う者のあるような性質の点があるからである云々と言われている。

2　『オデュッセイア』第八巻四九二行参照。トロイア戦争伝説で、いよいよトロイアの陥落ということになると、これを説明するために、オデュッセウスがトロイアの町(イリオン)からアテナ像(パラディオン)を盗み出して神の保護を失わせる話と並んで、この木の馬の話が語られる。これはオデュッセウスやエペイロスのくふうになるもので、この中にギリシア方の勇士を忍ばせて、これをシノンという者とともに浜辺に残して、いったんギリシア軍は引上げてしまう。トロイアの人々はシノンの虚言を信じてこれを城内に運び入れるが、その際城門を破損する。夜に入ってシノンの手引で勇士たちは馬から出て市内の要所を襲い、外には再びギリシア人が合図を受けて攻め寄せ、ついにトロイアの町をおとしいれるという話である。

しばらくおくとして、われわれがおよそ感覚される限りのものを感覚するのは、それに依るのであって、かの諸感覚はその際あたかも器具(器官)のごとく、それを通じて感覚するに用いられるだけのものとなるのだ。

**テアイテトス**　いや、それははじめの場合のより、今のお話のようにする方がむしろいいと私は思います。

**ソクラテス**　ところで、僕がこれら瑣細の点を君にやかましく言うのは何のためかというと、いいかね、それはこういうことのためなのだ。もしもだね、目を通じては白や黒に達し、他のものを用いれば、また別のものに到るのだとしても、それはしかしいずれもわれわれ自身がもっている何か同じものによってであるとするならば、

E

そしてもしもだね、君が僕の問いに応じて、このたぐいの〔通じ用いられる〕ものはいずれも身体に帰属させることができるようになるとしたら(1)――いや、これはたぶんむしろ君に答えて言ってもらうほうが、僕が出しゃばって君の代わりに余計なことをするよりもよさそうだ。では僕に言ってくれたまえ。暖かいものや硬いものや軽いものや甘いものを君がそれを通じて感覚するところのものは、そもそも君の判定では、身体に属するものなのではないか。それとも何か他のものに属するのだろうか。

**テアイテトス**　決して他のものに属するのではありません。

**ソクラテス**　また、君がある一つの官能(あるいはその器官)を用いて感覚するところのものを、他の官能(あ

185

るいはその器官)を通じて感覚するということは、たとえば聴覚を通じて感覚するところのものを視覚を用いて感覚するとか、あるいは視覚を用いて感覚するところのものを聴覚を通じて感覚するとかいうようなことは、それは不可能であるというのに対して、どうだね、君が同意を表してくれることを当てにしてもいいかね。

**テアイテトス**　むろんそれが私の所存です。またどうしてそうでないことがありましょう。

**ソクラテス**　すると、いま双方のものについて、何かを君が考えているとして、これはその器官の片一方だけを通じてではないだろうしまたさらに感覚するにしても片方だけ用いて、双方についてということはできないだろう。

**テアイテトス**　そうです、それは事実そういうわけがないのですから。

**ソクラテス**　さて、ところで、声と色とについて、そもそもまず第一に君がこれら双方のものについて考えることは、必ずやそれが双方ともあるということであろうと思うが、どうだろうか。

**テアイテトス**　そうです、それが私として考えることです。

**ソクラテス**　それからまた、両者はおのおの互いに異なるものであるとともに、それ自体には同じものであるということも考えはしないかね。

**テアイテトス**　そうです、考えなくって何でしょう。

B

**ソクラテス**　また、双方では二つであるが、おのおのでは一つであるということも？

**テアイテトス**　はい、それも考えます。

**ソクラテス**　それからまた、両者が互いに似ているか、似ていないかということも君は考えてみることができるのではないか。

1　ここの文章はバーネットによらず、ディエスと同じ句読点の切り方をする。文章の解釈はシュミット、ウォールラープのそれに従う。

**テアイテトス**　たぶんできるかと思います。

**ソクラテス**　では、これらすべてのことをこの二つのものについて君が考えるのは、それは何を通じてなのかね。なぜなら、聴覚や視覚を通じては、これらのものについてその共通なものをとらえることはできないからだ。またさらに、われわれの言おうとするところのものに関しては、次の場合などもそれを判然させる手がかりとなる。すなわちこれら双方のものがそもそも塩からいものであるか否かをもし調べてみることができるものとするならば、君はそれをよく調べてみるのには何によるべきであるかを言うことができるだろう。それは君の知っているc ことなのだ。すなわち明らかにそれは視覚でもなければ聴覚でもなくって、むしろ何かそれより別のものによってである。

**テアイテトス**　何でしかしそうでないはずがありましょう。舌を通じての官能こそそれなのです。

**ソクラテス**　そうだ、それがちょうど僕の求めていた答えなのだ。しかしこれに対して、何を通じての官能が君のために、〔いま取り上げられた〕これらの感覚ばかりでなく、あらゆる感覚の対応(性質)に共通するもの(1)を明らかにしてくれるのか。その共通するものに対して君が当てる名前というのは、「ある」とか「あらぬ」とか、ちょうど今し方それら(二つ)についてわれわれが問いを重ねて来た時に用いられたのがそれなのだが、これらすべてに対して君は、どんな器官(器具)を対応させて、これを通じてこそそれらおのおのは、われわれのうちの感覚をつかさどるものによって感覚されるのだとするつもりかね。

**テアイテトス**　あなたの言われるのは、あるということ(有)、あらぬということ(非有)、似ているということ(類似)、似ていないということ(不似)、同じということ(同)、異なるということ(異)などなのでしょう(2)。またさ

D らにそれらについて、一つとかその他の数を言おうとなさるのでしょう。むろんまた奇とか偶とか、その他これに関連するところのものも、あなたのその問いのなかに入っているわけなのでしょう、そもそもわれわれが心でもってこれらを感覚するのは、身体に所属する何ものを通じてであるかという問いのなかに。

**ソクラテス**　うま過ぎるくらいに、テアイテトス、君は僕の言おうとしていることにつきあってくれるじゃあないか。ちょうどまさにそれが僕の問いなのだ。

**テアイテトス**　ですけれど、それを何であるか答えて言うのは、神明に誓って申しますが、ソクラテス、少なくとも私には、できそうもないことです。ただこれだけは申しあげられます。これら（共通）のものには、さきの〔感覚されるものの〕場合のような、あんなふうな各別の器官なんてものは、はじめっから少しもないのではない
E かと私には思われるのです。むしろ、すべてのものについてその共通なるものを、心は自分だけで自分自身を用いて考査するように私には見えるのです。

---

1　ここに「共通するもの」と呼ばれるのは、これまでの例によって示されたように、声や色や味に共通に言えるものを指す。しかしこれは、物の形や大きさや、動いているか止まっているかなどということが、視覚によっても触覚によっても感覚されるというような場合に、「共通の」と呼ばれるのとは意味が異なるのである。後者は今日の心理学が空間知覚の問題などにおいて取扱っているのと同種類のものであろうが、すでにアリストテレス心理学においても、特殊感覚に対する共通感覚の問題として取り扱われているものである。ところがプラトンがここで言う「共通なもの」は視覚によっても触覚によっても共通に感覚されるというようなものではなく、むしろ視覚によっても触覚によっても他のいかなる感覚によっても感覚されることのないもので、ただ視覚の対象についても聴覚の対象についても共通に思考されるだけなのである。感性的なものからきびしく区別された思考の純粋性が求められているとも解されるだろう。

2　補注A1（四〇五ページ）を見よ。

**ソクラテス**　いかにもテアイテトス、君はほんとうに器量をあげたぞ。うん、りっぱな者だ。テオドロスさんの言われていたような、不器量なんてことはない。なぜなら、およそ言論のりっぱな人というものは器量人で、りっぱな人物なんだ。(1) それに君は、器量がよいばかりでなく、また親切者だよ。というのは君がもし、ものには心が自分で自分を通じて考査するものと、身体がもつそれぞれの官能を通じて考査するものとがあると見ているのだとすると、それこそちょうどまた僕自身もそう思い、君にもそう考えてもらいたいと望んでいたことなのだから、そのためには僕はいろいろと大へん長い言論をしなければならなかったのを、しないですむように君がしてくれたわけなんだからね。

**テアイテトス**　いや、ご念には及びません、たしかにそう見ているのです。



## 三〇

**ソクラテス**　それでは、ある(有)というのを君は、そのどちらのほうにおくかね。これは何しろ一番多くあらゆるものについてまわるものだからね。

**テアイテトス**　私なら、それを心が自分だけで(他のものを頼まずに)到達しようとするもののうちにおきます。

**ソクラテス**　どうだね、きっとまた似ているとか、似ていないとか、同じとか、異なるとかいうのもかね。

**テアイテトス**　はい。

**ソクラテス**　では、どうだね、美、醜、善、悪などは。

**テアイテトス**　はい、それらについても心は、それらがまさにあるところのものを、それら相互の関係におい

て観察することがなかんずく最も多いように私には思われます。それは既存(または既往)のものや現在するものを将来するところのものへ関係させて自己自身のうちに勘考するという仕方でなのです。

B

**ソクラテス**　そう、そこでちょっと待ってくれたまえ。これはこうなのではないかね。一方、硬いものの硬さは触覚を通じて感覚し、また軟かいものの軟かさも同様というはずになっているのではないかね。

**テアイテトス**　はい、そうです。

**ソクラテス**　他方これに対して、それら(硬軟)の有すなわち両者のあるということや、また両者が互いに反対のものだということや、さらにはまたその反対ということのある(有)ということなどは、これは心が自分で直接そのもとにおもむいて、これらを相互に比較しながら、われわれのために判別を試みるところのものなのである。

**テアイテトス**　いや、それは事実まったくその通りです。

**ソクラテス**　すると、身体を通じて受けとられて心にとどくものの感覚は、生来これは人間にも動物にも生まれるとすぐそなわってあるものだけれど、これらについて――あるとかためになるとかいうことへの関係をもって――勘考される方のものは、時たっていろいろ多くの骨折りを重ねた結果、教育を通じてやっと、それがちょうどもしそれにそなわるものなら、そなわるようになるのではないかね。

C

**テアイテトス**　いや、事実それはまったくその通りです。

---

1　『エウテュデモス』284C～Dでは、「器量人、すなわちりっぱなすぐれた人」として、「事柄をその通りに語る者」すなわち「真実を正直に語る人」が挙げられている。原語は142B注4に説明されたのと同じである。

**ソクラテス**　それなら、あるということにもすでに到達できないのに、真というものに到達することができるだろうか。

**テアイテトス**　できません。

**ソクラテス**　しかし何かについて、それの真に到達していないとすると、そういう人がそのものについて知識をもっている人だということにそもそもなるだろうか。

D

**テアイテトス**　して、どうしてそういうことがありましょう。

**ソクラテス**　したがって、かの〔身体を通して〕受けとられるだけのものの中には知識は存しないわけなのだ。むしろそれらについての思量（勘考）の中に知識があるのだ。なぜなら、いまのところの様子では、有も真もそこにおいてこそ把捉されうるけれど、前のものにおいてはそれができそうもないからだ。

**テアイテトス**　ええ、そんな様子ですね。

**ソクラテス**　それなら、これとあれとでは、こんなに大きな差異があるのに、どうだね、君はこれを同じものだと呼ぶかね。

**テアイテトス**　とにかく、事実それをそう呼ぶのが正しくないことだけは確かです。

**ソクラテス**　それならばだね、あの見たり聞いたり嗅いだり冷たがったり熱がったりすることに対して、何という名前を君は当てるかね。

E

**テアイテトス**　「感覚する」という名前を私としては当てます。なぜなら、それよりほかに何という名がありましょう。

187

**ソクラテス**　したがって、それらをひっくるめて感覚と呼ぶのかね。

**テアイテトス**　そうです、とうぜんそう呼ばなければなりません。

**ソクラテス**　ところが、このものたるや、われわれの主張をもってすれば、真なるものを把捉するというようなことには与かることのないものなのである。なぜなら、すでにあるということのそれにも与からないものなのだから。

**テアイテトス**　そうです、事実またそういうはずがありません。

**ソクラテス**　したがって、また知識にも与かることはない。

**テアイテトス**　そうです、そのはずがありません。

**ソクラテス**　したがって、どんな場合においても、テアイテトス、感覚と知識が同じだということはないだろう。

**テアイテトス**　それは明らかにそうです、ソクラテス。のみならず、今こそ知識が感覚と異なるものだということは、この上なく明瞭になったわけです。

**ソクラテス**　しかしながら、われわれが問答を始めたのは、そんな、何がいったい知識でないかを発見するなんてことのためでは事実決してなかったのだ。むしろ何がそれであるかを見つけ出すためだったのだ。とはいうものの、進歩がなかったというわけではなくて、これでもうわれわれは知識を感覚の中に求めたりするようなことは全然いらないというところまではやって来ているのだ。それよりは、あの何とかいった名前があるね――ほら心がおよそあるものについて自分だけで(他のものを頼まずに)仕事をしている時に持つ――あの名前のついて

いるものの中で探せということになったのだ。

**テアイテトス**　いや、そのことなら、ソクラテス、私の思うところでは、それはたしか「思いなす(1)」と呼ばれています。

B **ソクラテス**　うん、そうそう、それだよ、君、君の思っている通りでいいんだ。さあ、それでは今から再びはじめにかえって、今までのはすっかり消した上で、ここまで来たからには、前よりも何かもっと展望がきいてよく見えるかどうか、見てくれたまえ。そしてもう一度言ってくれたまえ、何がいったい知識なのか。

## 三一

**テアイテトス**　「思いなし(2)」がすべてそれだと言うことは、ソクラテス、思いなしには虚偽のもあるのですから、それはできないことですが、おそらく、しかし、思いなしの真なるものが知識なのかもしれません。では、これを私の答えだということにいたしておきましょう。つまり先へ行ってみて、今のようには、それがそうだと見られなくなったら、また何か他のものを言って試してみればいいということです。

**ソクラテス**　それ！　それ！　それだよ、そういうふうに、テアイテトス、気軽に言わなければいけないんだよ。最初の時は答えがはかばかしくなかったが、ああいうようなのはむしろいけないね。事実、もし今のように

C やって行くとするならば、われわれは目指して行くところのものを見つけるか、あるいは、まるで少しも知ってはいないことを知っていると思ったりするようなことがより少なくなるか、来るべきものは二つのうちどちらか一つだ。しかも果報としてはこんなのもまんざら捨てたものではないだろうからねえ、それでつまり、今だって

やっぱりそうだ、君の言うのは何だっけね。思いなしには二つの品種があって、一つは真なるもののそれであり、他は虚偽なるもののそれであるから、その真なる思いなしの方を知識だと定めるというわけなのかね。

**テアイテトス** 私としてはそうです。つまり、今度はまたそれが私には知識だと見えるのです。

**ソクラテス** それなら、どうだろう、思いなしというものについて、そもそもこういうのを再び取りあげるというのはまだなお意味のあることだろうか……。

**テアイテトス** とおっしゃると、それはいったいどんなもののことなのですか。

D **ソクラテス** それは今もそうだけれど、むろんまた他の場合だってたびたびのことなんだが、僕を何かこう落着かない気持にするものがあるのだ。そしてそのために、他の人が僕の相手になっていてくれる時でも、僕自身のほかに相手のない時でも、僕はすっかり当惑させられてしまうのだ。僕はわれわれのところに見出されるその患い(わずらい)(情態)がいったい何であって、どんな仕方で生ずるものなのかを言うことができないもんだからねえ。

1 原語はドクサゼイン。ドクサ(思いなし)からの派生語。「思いなす」の「なす」に強調をおくと、ここで求められている意味がでるかもしれない。

2 「思いなし」(ドクサ)という名詞には、いまのドクサゼインの意味、あるいは187に見られるような、自問自答の帰結(結論)という能動的な意味と、もう一つは170Aに見られるような、「……と思われる」と「ある」を結ぶときの、その「……と思われる」を受けるだけの弱い意味とがある。そして「思われる」と「ある」との不一致が対立的に見られる時、ドクサの仮象的な面は、「思わく」とか「臆見」とかいう訳語で示されることがある。170C～D。しかし「思いなし」も「思わく」も、ギリシア原語ほど広範囲には使用できず、ときに併用したり、あるいは拡大的使用をしなければならないこともある。一九三八年版拙訳『テアイテトス』(岩波書店)二〇二ページ注1参照。

**テアイテトス**　とおっしゃるのは、それはいったいどんな患い（情態）のことなのですか。

**ソクラテス**　それは何か虚偽を思いなすということなのさ。今もまだ決心がつかずに、僕は考えている始末なんだが、これにはもう手を触れないほうがいいだろうか、それとも、少し前のとはまた別の仕方でこれの考察をしたほうがいいだろうか。

**テアイテトス**　しかし、ソクラテス、ちょっとでもその必要があると見えるのでしたら、そうするよりほか、何がいったいあるのでしょうか。というのは、さっきあなたとテオドロスさんとで、われわれが今ここでしているような事柄には、何一つ先を急がなければならないようなものはないということを、時間の真の余裕というものについておっしゃっていましたが、確かに間違ったお話ではなかったのですからね。

E

**ソクラテス**　違いない！　君にそう注意されてみれば、それもそうだ。これまでの足跡を後からたどってみるようなものだけれど、たぶんこの場合それも不適当なことではないだろうからね。というのは、少しのものでもよく仕上げるほうが、多くを不充分にやるよりはましではないかと僕は思うのだ。

**テアイテトス**　たしかにそれに違いありません。

**ソクラテス**　さあ、それでは、どうするかね。われわれの主張のなかには、いったい何がまた言われているのだろうか。虚偽の思いなしというものが、われわれの主張だと、それぞれの場合においてあるということになるのかね。つまり、われわれのうちには、その思いなすところのものが真なる者もあれば、他方また虚偽なる者もある、それは自然にそういうふうになっているからだと、こうわれわれは主張するのかね。

**テアイテトス**　そうです、むろんそれがわれわれの主張となるはずなのですから。

188 ソクラテス　さてところで、ものすべてについても、またものそれぞれの場合にしても、ただわれわれにとっては次のことが可能なのではないか。すなわち、それを知っているか、あるいは知っていないかである。というのは、学ぶとか忘れるとかいうことは、これを僕は右二者の中間にあるものとみて、さし当り問題の外にそのままにしておこうと思う。今のところ、われわれの言論には少しも関係がないからね。

テアイテトス　いや、ソクラテス、それを知っているか、知っていないかという以外におのおののものについては、他のいかなる場合も残されてはいません。

ソクラテス　すでに、それならば、およそ思いなす者は、必然に、知っている何かを思いなすか、知っていない何かを思いなすかの、いずれかでなければならない。

テアイテトス　それは必然にそうです。

ソクラテス　さて、ところで、同じものを、知っていて知っていないとか、知らないでいて知っているとかいうことは不可能である。

B テアイテトス　またどうして不可能でないことがありましょう。

ソクラテス　それならば、そもそも虚偽を思いなす人というのは、知っているそのものをそのものであると思わずに、これを何か別の知っているものであると思うのであろうか。すなわち、双方を知ってはいるが、双方を識らない者というわけなのであろうか。

テアイテトス　しかし、それは不可能なことです、ソクラテス。

ソクラテス　しかしながら、果して知らないものをもって、これを別の何か知らないものであると考えるだろ

うか。すなわち、テアイテトスもソクラテスも知らない者にとって、こういうことはありうべきことだろうか、ソクラテスはテアイテトスであるとか、テアイテトスはソクラテスであるとかいうことを思いつくなどということは。

C

**テアイテトス**　して、どうしてそのようなことがありえましょう。

**ソクラテス**　しかし、また、そうかといって、いやしくもひとが何かを知っていて、知らない他のものをそれであると思うなんてことも、また逆に知らない何かを、知っている他のものがそれであると思うこともあるまい。

**テアイテトス**　それはありません。もしあったら奇怪なことでしょうから。

**ソクラテス**　それなら、どうしてひとはなお虚偽を思いなすということができるのだろうか。なぜなら、以上の場合以外においては、なにごとについてもわれわれはそれを知っているか、知っていないかのいずれかであるとするならば、一般に思いなすということそのことが不可能であろうし、また以上の場合の範囲内では、しかしどこにおいても虚偽の思いなしは不可能のように見えるからだ。

**テアイテトス**　それは至極本当です。

**ソクラテス**　それなら、そもそもわれわれが求めているものの観察は、以上の道をとって、「知っていると知っていない」ということで行うのではなくて、むしろ「あるとあらぬ」というのでする方がいいのだろうか。

D

**テアイテトス**　とおっしゃるのは、それはどういうことなのでしょうか。

**ソクラテス**　それは何ものについてであるにしたところで、およそあらぬものを思いなす者は、その思考の方面が他にどんな状態であろうとも、虚偽を思いなす者であるということにならざるをえないというのは、おそら

く異論のないところだろう。

**テアイテトス**　ええ、ソクラテス、それはまたそれでそうらしいですね。

**ソクラテス**　だとすると、どうなるかな。われわれは、テアイテトス、もし誰かがわれわれに向かって、「言われているようなことは、しかしながら、誰にしてみても、果して可能だろうか。つまり人間のうち何人かあらぬものを思いなす者があるだろうか、それをあるもののうちの何かについて思いなすにしろ、あるいは単独にただそれだけを思いなすにしろ」とこう問いかけるならば、何と答えることになるだろうか。これらに対して、さてそれでは、われわれの立場から言われることになるのは、だいたいまあ「少なくとも、思ってはいるが、その思E っているものが真でない場合には、そのことがある」というようなところであろうか。それとも、どういうふうにわれわれは言うだろうか。

**テアイテトス**　いまおっしゃったようなのがわれわれの答えでしょう。

**ソクラテス**　それなら、どこか他の場合にもそういうようなことが実際あるだろうか。

**テアイテトス**　とおっしゃると、それはどんなことがなのでしょうか。

**ソクラテス**　それは誰かが何かを見てはいるけれども、しかし何一つ見ていないというような場合がそれなのさ。

**テアイテトス**　して、どうしてそんなことがありましょうか。

**ソクラテス**　いや、むしろ、何か少なくとも一つを見ているならば、たしかにそれはあるもののうちの何かを見ていることになる。それとも君は、どんな場合にせよ、その一つというのがあらぬもののうちに属すると思う

189

かね。

**テアイテトス**　いいえ、私としてはそうは思いません。

**ソクラテス**　すると、何かすくなくとも一つを見ている者は、何かあるものを見ているわけなのだ。(1)

**テアイテトス**　それは明らかにそうです。

**ソクラテス**　また、したがって、何かを聞いている人は、何かすくなくとも一つを聞いているのであって、またしたがってあるものを聞いているのである。

**テアイテトス**　そうです。

**ソクラテス**　またじつに、何かに触れている者は、何かすくなくとも一つに触れているのであり、そしていやしくも一つに触れているのならば、またあるものに触れているのであろう？

**テアイテトス**　それもまたその通りです。

**ソクラテス**　さてところで、およそ思いなす者は、何か一つは思いなしてるのではないか。

**テアイテトス**　それはそうでなければなりません。

**ソクラテス**　ところで、およそ何か一つを思いなす者は、何かあるものを思いなす者なのではないか。

**テアイテトス**　そうです、私はそれを認めます。

**ソクラテス**　したがって、およそあらぬものを思いなす者というのは、一つもないものを思いなしているのである。

**テアイテトス**　明らかにそうです。

**ソクラテス**　ところがさて、およそ一つもないものを思いなす者というのは、[1]一つも思いなすことのない者なのであるから[2]全然思いなすことすらしていない者なのである。

**テアイテトス**　明白にそのようです。

B

**ソクラテス**　したがって、あらぬものを思いなすということは、それをあるものどもについて思いなすのにせよ、あるいはまた単独にただそれだけを思いなすにせよ、不可能である。

**テアイテトス**　そのことは明らかです。

**ソクラテス**　したがって、虚偽を思いなすということは、あらぬものを思いなすということとは何か別のものである。

**テアイテトス**　そうです。別のものらしく思われます。

**ソクラテス**　したがって、虚偽の思いなしというものは、以上のようなふうにしても、また少し前にわれわれが観察したようなふうにしても、それはわれわれのうちに存するものではないのだ。

---

1　「有」と「一」との不可分の関係については、拙訳プロチノス『善なるもの一なるもの』(岩波文庫)一一ページ参照。またアリストテレスも『形而上学』第四巻($1003^b31$)において、「一」と「有」の不可分を語り、同書第一〇巻($1054^a13$–19)においても、「一」が「有」と大体において同じものを指すということを述べている。拙訳『テアイテトス』(岩波書店)二一〇ページ注10参照。

2　原文には「一つもないものを思いなす」という文章があるだけなのであるが、この文章は同時に「一つも思いなすことのない」という意味にもなるのであって、「全然思いなすことすらしていない」という断定を導き出す媒介役をしているのである。つまり「一つもないもの」は名詞としても用いられるし、また「一つも……ない」というふうに副詞としても用いられるのである。

(189)

**テアイテトス**　そうです、事実そういうふうにしては確かに存するはずのないものなのです。

三二

**ソクラテス**　むしろ、そもそもわれわれがこの名をもって呼ぶところのものは、次のようにして生ずるものがそれなのだろうか。

**テアイテトス**　とおっしゃるのは、どんなにして生ずるもののことなのでしょうか。

**ソクラテス**　それは思いなしが（他の違ったものを思うという）思い違いの一つである時、すなわちひとがある c もの（有）の何かを、その思考上の取り違えから、これをまたあるもの（有）のうちの違った他のものであると主張する場合、これを虚偽の思いなしだとわれわれは言うのである。つまり、こういう場合には、ひとは常にあるもの（有）を思いなしてはいるのであるが、しかし異なる一つのものを思いなす代わりに、異なる他のものを思いなしているのである。したがって、その目当てにしていたものを逸しているわけになるから、当然それは虚偽を思いなす者と呼ばれてよいことになるだろう。

**テアイテトス**　あなたのおっしゃったことは今度は至極正しいように私には思われます。というのは、もしひとが美を思いなして、その代わりに醜を思いなし、あるいは醜を思いなして、その代わりに美を思いなすならば、その時はいかにも真実に虚偽を思いなしていることになります。

**ソクラテス**　ちゃんとわかるよ、テアイテトス、君は僕を甘くみているんだね、何も恐れることはないと思っているんだね。

**テアイテトス** え？ それはいったいぜんたい何のことでしょうか。

**ソクラテス** 僕は思うんだが、君のその「真実に虚偽」という〔言い方〕に対して、僕は文句をつけないだろうと君に思われているらしいね。早いものが遅くとか、軽いものが重くとか、または他の何か反対をもつところのものが、それ自体の性によらずに、その反対のものの性に従って、それ自体と正反対の仕方に生成するなんてことができるものかどうか、問題にすれば、僕にはこれが問題として使えるんだよ。しかし、これはまあとにかく、君がせっかく勇気づいてきたのを無駄にしないために、いまは大目に見ておくとして、さて、君の主張だと、虚偽を思いなすというのは、(他の違ったものを思う)思い違いをすることだとしてさしつかえないことになるのだね。

**テアイテトス** そうです、すくなくとも私にとっては。

**ソクラテス** したがって、君のその思いなしだと、心は思考するに当って、異なった何か一つのものを異なった他のものとして思い定めて、本来のそのものとしては思い定めないことがありうるわけなんだね。

**テアイテトス** そうですとも、むろんそういうことがありうるわけです。

**ソクラテス** それなら、そういうことを誰かが思考の上で行うとすると、その思考は、また必然に、異なる双方のものを思考するか、あるいは異なるものの片方だけを思考するかでなければならないのではないか。

**テアイテトス** ええ、事実たしかにそれは必然です。同時にそれを思考するか、あるいは交代に思考するかです。

**ソクラテス** 結構結構。で、その思考するというのは、そもそも僕の呼びなすところのものが、ちょうどまさに君の呼びなしているところのものなのだろうか。

テアイテトス　それは何をそう呼びなしておられてのことなのでしょうか。

ソクラテス　心が何でも自分の観察するものについて、自分が自分を相手にして委細を分けて話すその言論をそう呼びなしてのことなのさ。もとより、僕がこうやって君に開陳(かいちん)しているのは、別にそれの知識が僕にあってのことではないんだ。ただつまり、心が思考している時の姿というものは、こうしたものだと僕には見えるのだ。その場合に心のしていることは、自分が自分に問いかけたり、答えたり、そしてそれを肯定でしたり、否定でしたりする問答(すなわち言論の語り分け)にほかならないと見えるのだ。そしてそれの決定が——あるいは比較的遅く、あるいはまた比較的急激に魂がそこへ突進することもあるというわけだが——一度得られるならば、心の言うことはすでに同一となって、そこには分裂が見られなくなるのだが、そういう場合これをわれわれはその心の思いなしだとするのである。それだから、僕としては、思いなすというのは言論をのべることであり、思いなしとはそこにのべられた言論のことであると、こう呼びなすしだいなのだ。もっともここにいう言論は、他人に宛てられた言論ではなく、また声に出して語られる言論でもない。沈黙のうちに自己自身を相手としてのべられるものなのだ。(1) 君としては、しかし何とするかね。

190

テアイテトス　私もそういたします。

ソクラテス　すると、もし誰かが異なるものの一つを異なるものの他であると思いなしている場合には、どうもそれはまたその異なる一つのものが異なる他のものであることを自分自身に向かって言っていることになるらしいね。

B

テアイテトス　そうです、それよりほかはありません。

**ソクラテス**　それなら、さあ想い起こしてみたまえ。かつていつか君は君自身に向かって、ものもあろうに美が真実この上なく醜であるとか、不正がこの上なく正であるとか言ったことがあるかどうか。あるいはまた、これがすべての要点なんだが、君は異なるものの一つが異なるものの他で真実あることを君自身に説きつけようといつか試みたことがあるかどうか考えてみたまえ。それとも事実はまるでその正反対であって、夢のなかにおいてさえ、未だかつて君は君自身に向かって、奇数はすなわちあらゆる点において偶数であるとか、あるいは何かこの種類の他のことをあえて言ったことはないのではないか。それともどうなのか考えてみたまえ。

**テアイテトス**　真実はおっしゃる通りです。

C

**ソクラテス**　しかし他の人は誰か、正気の人にせよ、狂気の人にせよ、自分自身を説き伏せようとして、牛は馬でなければならぬとか、二は一でなければならぬとかいうようなことを、まじめに自分自身に向かってあえて主張すると君は思うかね。

**テアイテトス**　神かけて、私はそうは思いません。

**ソクラテス**　それでは、もし以上の、自己自身を相手に言論をのべるということがすなわち思いなすということ

---

1　『ソピステス』263Eや『ピレボス』38C～Eにも同様のことが言われている。『ソピステス』においては主として思考(ディアノイア)と言論(ロゴス)または言論の語り分けすなわち問答(ディアロゴス)との同一性が強調され、『ピレボス』においては言論(ロゴス)と思いなし(ドクサ)または自問自答の形をとる思いなし(ディアドクサゼイン)との同一性が説かれている。『テアイテトス』では三者が一緒に取扱われている。思考と思いなしの交換はまた170Bにもすでに見られたことである。問答と思考との同一性はホメロス『イリアス』第一一巻四〇七行の「ディアレゲスタイ」という言葉の使用などにもすでに見られることなのである。

とであるならば、異なるものの双方を言論にのべるという仕方、すなわちそれを思いなすという仕方で、したがってまた双方をもろともに心で把捉しつつ、その異なるもの(の一つ)が異なるもの(のもう一つ)であるということを述べるのは、したがってまたそう思いなすということは、何人もよくしないところであろう。ここでちょっと君にも勘弁してもらわなければならないのは、いまの(「異なるものが異なるものである」という)語句だ。つまり、これによって僕の言おうとする意味はこうなのだ。醜が美であると思いなしたり、あるいは他に何かかく

D

のごときものを思いなしたりする者はひとりもないということなのだ。

**テアイテトス**　いや、ソクラテス、それは構いませんよ。そしてそれはおっしゃる通りだと私には思われます。

**ソクラテス**　したがって、異なるものを双方とも思いなしながら、その異なる一方が異なる他方であるなどと思いなすことは不可能である。

**テアイテトス**　それはそうらしいようです。

**ソクラテス**　しかし、そうかといって、異なるものの一方だけを思いなして、他のもう一方を少しも思いなしていない場合には、その異なる一方を他のもう一方であるなどとは決して思いなすことはあるまい。

**テアイテトス**　そうです、おっしゃることは本当です。なぜなら、それでは、思いなしていないものまでも把捉していなければならないように余儀なくされるわけでしょうから。

**ソクラテス**　したがって、異なるものの双方を思いなすとしても、また片方だけを思いなすとしても、(違っ

E

た一つのものを違った他のものと思うところの)思い違いは生ずる余地がないわけである。かくて、異なるものを思うのが虚偽の思いなしであるなどともし誰か定める者があろうならば、それは無意味なことを言おうとして

いることになるだろう。すなわち、虚偽の思いなしがわれわれのうちに存するものとしてあらわにされるのは、以上の道においてでもなく、またかの前述の仕方(1)によってでもないというわけなのである。

**テアイテトス** それはそのようです。

## 三三

**ソクラテス** しかしそうかといって、いいかね、テアイテトス、もしもそれの存在があらわにされなかろうものなら、われわれは余儀なくたくさんのとんでもないことを言うのに同意しなければならないようにさせられるだろうよ。

**テアイテトス** とおっしゃるのは、いったいどんなことをなのでしょうか。

**ソクラテス** それは、あらゆる方面に観察を試みた上でないと、君に話してはあげられないね。なぜなら、もしわれわれの仕事がまだ解決の途につかないでいるうちに、いま僕が言いかけたようなことをわれわれが同意して言わなければならないように余儀なくされるならば、僕はそれをわれわれのために面目なく感じようというものだ。それと反対に、もし解決のみちを発見して自由になったなら、その時こそすでにわれわれは笑われる心配のないところに立って、上述のような目にあうのをわれわれ以外の人たちの身の上ごととして語ることになるだろう。とはいえ、これをもし百方手をつくしても解決のみちが見つからなかったとしたならば、思うにわれわれ

191

1 三一章における知不知および有非有の説明を指す。

は、意地も張りも失わされて、ちょうど船に酔った時のように、(1) 踏むなり何なり好きなように取扱ってくれとばかり、いまの(虚偽不可能)説に対して無抵抗に身をまかせることとなるだろう。とにかくそれでは、僕がどうやってわれわれの求めるところのもののなお何らかの解決の途(みち)を発見しようとするか、まあそのしだいを聞いてくれたまえ。

**テアイテトス**　とにかくおっしゃっていただきましょう。

**ソクラテス**　僕の言おうと思うのはだ、われわれがあの時に同意して言った、誰かが何かを知っている場合に、知らないものをその知っているものだと思いなして、それで偽りをなす(2)ことになるなどというのは不可能であるという、あの同意は正しいものではなかったということなのだ。あれはむしろ場合によっては可能だったのだ。

B

**テアイテトス**　すると、あなたのおっしゃるのは、私にもまた、私たちがそれをそういうふうなものであると主張したあのおりに、あるいはこうなのではないか知らんと心に浮かんだことがあるのですが、きっとそれなのでしょうか。つまり、私はソクラテスを見知っているわけなのですが、遠くの方から私の見知っていない他の人を見て、それを私の知っているソクラテスであると思うことが時おりあったというのが、それなのです。すなわち、こういう場合には、あなたのおっしゃるようなことが実際に起こるからなのです。

**ソクラテス**　ところで、われわれがそれに近寄らなかったのは、それだとわれわれは、われわれの知っているものを、知ってはいるが、知っていないということにされるからではなかったのか。

**テアイテトス**　そうです、それなんです、まったくのところは。

**ソクラテス**　それだから、われわれの想定はそういうふうにしないで、むしろこういうふうにしようではない

C か。それはたぶんところによってはわれわれの言い分を通してくれることもあるかもしれないが、またしかし突っ張ってこれを受けいれようとしない場合もたぶんあることだろう。しかしそんなことに構ってはいられない、何しろわれわれは、あらゆる言論を裏表ともにひっくり返して吟味しなければならない(3)ような、そんな余儀ない事情にとらえられているのだからねえ。とにかくそれでは僕の言うことに一理あるかどうか調べて見てくれたまえ。そもそもひとが前には知らなかった何かを後になって学知するということはあることなのではないか。

**テアイテトス** あることですとも、むろんあることです。

**ソクラテス** それなら、またさらに時を違えてそれぞれ異なったものを学知することもあるのではないかね。

**テアイテトス** そうです、どうしてまたそうでないことがありましょう。

**ソクラテス** さあ、それでは、言論をすすめるために、どうかこういう想定をしてくれたまえ。われわれの心のなかには蠟(ろう)のかたまりが〔素材のまま〕あるのだと(4)、こう思ってくれたまえ。それは人によって、どっちかとい

---

1 ソポクレスの『アイアス』一一四二行以下においても、「口でばかり強いことを言っても、それは暴風雨に船を出せなどと強がっておきながら、いざひどい暴風雨になると、着物を被って小さくなり、水夫などに好きなほど踏まれても文句一つ言えない男のようなものだ」という言葉で同じようなことがいわれている。

2 「偽りをなす」は「偽りを言う」「偽りの思いなしをする」等を一括して言い表わす言葉。

3 同様のことが『パイドロス』272Bにも言われている。

4 以下に述べられるものは中世哲学のいわゆる tabula rasa 説の原型とも目すべきものである。『ピレボス』38E sqq. に同種類の考えが述べられている。μαγεῖον には194D～Eの実例によっても知られるように、印刻を意味する場合と、この場合のように、印刻を受ける材料を意味する場合とがある。

えば大きいのもあるし、比較的小さいのもある。また比較的清らかな蠟からできているものもあれば、また比較
D 的きたないものからなるものもある。またどちらかというとひからびたものもあるし、比較的濡かいものもある、
そしてそれのほどよいのもあると、こうしてくれたまえ。

**テアイテトス**　はい、それはそういたしましょう。

**ソクラテス**　それでは、それをわれわれは詩歌をつかさどる雅神(ムゥサイ)たちの母神なるムネモシュネ(記念、記憶)(1)の賜物であると言おう。そしてそのなかへ、何でもわれわれが記憶しようと思うものを、何にせよわれわれの見るもののうちからでも、聞くもののうちからでも、あるいは自分で思いついたもののうちからでも取って、その感覚や思いつきに今言った蠟を当てがって、その形跡をとどめるようにするのだとしよう。ちょうどそれは指輪についている印形を捺印する時のようなものなのだ。(2)そして一たび印刻されたものは、それの形象が蠟上に存する限り、これをわれわれは記憶し、また知識するのであるが、拭い去られたものや印刻されえなかっ
E たものは、これを忘却したり、知識しなかったりするのであるとしよう。

**テアイテトス**　はい、それはそうであるということにいたしましょう。

**ソクラテス**　それならば、それらのものを知識している人が、また見るなり聞くなりしているもののうちから何かを観察している場合、あるいは次のような仕方で虚偽を思いなすことがありはしないかどうか、よく注意して見たまえ。

**テアイテトス**　いったいそれはどんな仕方でなのでしょうか。

**ソクラテス**　それは時には自分の知っているものを、また時には自分の知らないものを、自分の知っているも

のであると思うことによってなのだ。(3) それというのが、こういうことは前には不可能であるということにわれわれの意見が一致していたのであるが、その一致はよくはなかったからなのだ。

**テアイテトス**　今度はそれならどうおっしゃるおつもりなのでしょうか。

192

**ソクラテス**　それは次のように、それらについてはじめからすっかり場合を区別して言われなければならないのだ。すなわち、

一、ひとが何かを知っていて、それの記憶を心のうちに保存してはいるが、しかしそのものを感覚していない場合において、それを他のやはり彼が知っていて、それの形跡をも〔心に〕保存しているが、しかし感覚はしていないところの何かであると思うことは不可能である。二、しかしてまたさらに、彼が知っているところのものを、彼が知ってもいなければ、それの印象を保存してもいないところのものであると思うことも不可能である。三、また、知らないものを、同じくまた知らない他のものであると思うことも不可能である。四、また、知らないものを、知っている他のものだと思うことも不可能である。

---

1　ヘシオドスの『神統記』五四行以下、同じく九一五行以下にこの母子の関係が物語られている。そしてこの関係はホメリダイの『ヘルメス讃歌』二九行にも認められる。その他アイスキュロスの『プロメテウス』四六一行の「ムネーメー」(記憶)も同様の関連において用いられている。プラトンは『エウテュデモス』275Dにおいて、詩人たちが物語の始めにその加護を祈るのはこれら詩歌の神々と記憶の神に対してであることを注意している。

2　アリストテレス『自然学小論集』「記憶と想起について」($450^{a}30$–32)、『霊魂論』第二巻($424^{a}17$)にも同様の比喩が語られている。

3　これは192C〜Dの一五—一七の場合を、あらかじめ総括的に述べたものである。

五、しかしてまた、それが感覚しているところのものを、それの感覚している何か他のものであると思うことも不可能である。六、また、感覚しているものを、感覚していないもののうちの何かであると思うことも不可能である。七、また、感覚していないものを、感覚していないもののうちの他の何かであると思うことも不可能である。八、また、感覚していないものを、感覚しているもののうちの何かであると思うことも不可能である。

B

九、しかしてなおまたさらに、ひとが何かを知ってもいるし、また感覚もしていて、そしてその感覚に符合するようなそれの印影を〔心に〕保存している場合、それらのもののうちの何かを、別にまた彼が知ってもいるし感覚もしていて、そしてさらにまたその感覚に符合するようなそれの印影をも保持しているところのもののうちの他の何かであると思うことは、上述の場合にもまして、もしもそういうことができるならば、さらにもっと不可能である。一〇、また、知っているとともに、記憶も間違いなく保存していて、それを彼が感覚している場合、これを知っている他のものであると思うことは不可能である。一一、また、知っているものを今と同じ条件で感覚している場合、これを彼が感覚しているところの他のものであると思うことも不可能である。

C

一二、また他方、知りもしなければ、感覚もしていないものを、他の知りもしなければ、感覚もしていないものであると思うことは不可能である。一三、また、知りもしなければ、感覚もしていないものを、知らない他のものであると思うことも不可能である。一四、また、知りもしなければ、感覚もしていないものを、感覚していない他のものであると思うことも不可能である。

以上すべての場合は[1]、そのうちにおいて何らか虚偽を思いなすということの不可能なる点において十二分なるものである。それであるからして、残るところ、このようなものが生起するのは、いやしくももしどこか他に場

合がありとすれば、次のような場合においてである。

**テアイテトス**　それはいったいどんな場合においてでしょうか。もしそれらの場合をうかがったなら、そこからもっと何かわかるようになるのでしたら、言っていただきたいものです。と申しますのは、今のところ私はおっしゃることに追いつけないのです。

**ソクラテス**　それは、知っているものの場合において、一五、彼が知ってもいるし、感覚もしているもののうち何か他のものを、その知っているものであると思う場合だとか、一六、あるいは、彼が知らないけれども、感覚はしているもののうちの〔何か他のもの〕を、それであると思う場合だとか、一七、あるいは、知ってもいるし感覚もしているもののうちの何かを、同じくまた知ってもいるし感覚もしているうちの〔他の〕ものであると思う

D

---

1　以上一四の場合を分ける原則は、ソクラテス自らが次章においてこれを明らかにしている。これを見易く記号だけで書いてみると、

| | | |
|---|---|---|
| イ | 1 | A,　A |
| | 2 | A,　−A |
| | 3 | −A,　−A |
| | 4 | −A,　A |
| ロ | 5 | B,　B |
| | 6 | B,　−B |
| | 7 | −B,　−B |
| | 8 | −B,　B |
| ハ | 9 | A+B, A+B |
| | 10 | A+B, A |
| | 11 | A+B, B |
| ニ | 12 | −A−B, −A−B |
| | 13 | −A−B, −A |
| | 14 | −A−B, −B |

ということになる。この場合Aは知を−Aは不知を、Bおよび+Bは感覚および感覚の随伴を、−Bは不感覚を示すものとする。そしてこういうふうにして見ると、全体の構成は極めて単純なものになってしまう。まず一から八までの組合わせについては別に説明を要しないであろう。それはAと−A, Bと−Bの単純な組合わせである。また九から一四までの組合わせについては、その始め三つがA+Bを一方の項として、これに単なるAや単なるBを組合せ、またさらにA+Bを組合わせたものであり、後の三つもまた同じく−A−Bを一方の項として、これに−A−Bや−Aもしくは−Bを組合わせたもので、これはこれなりに一通り場合をつくしていると考えられるのである。

場合だとかいうのが、それなのさ。(1)

**テアイテトス**　これはまたさっきよりも、もっとずっと追いつくのがむずかしくなりました。

## 三四

**ソクラテス**　それでは、さあ、こういうふうにやってみるから、もう一度また同じ話をくり返すわけだけれど、まあ聞いていてくれたまえ。いま僕はテオドロスさんを知っているし、また僕の心の中にテオドロスさんがどんな人であるかを記憶している、そしてテアイテトス君についてもそれは同様なのであるが、さて、どうだろう、僕はこの人たちを見る時と見ない時とがあるのじゃないかね。また時によってこの人たちにさわる場合とさわらない場合とがあるのではないかね。また聞くとか、あるいは何か他の感覚を感覚するとかしている場合もあるにはあるが、しかし時には君たちについて僕が何の感覚も持っていない場合があって、しかもそれだからといって僕が諸君を記憶していて、自分が自分自身の中で諸君を知っている分にはすこしも変りがないというようなことがあるのではないかね。

E

**テアイテトス**　そうです、まったくのところ、そういうことがあります。

**ソクラテス**　それならば、こういうのを、僕が明白にしようと思っているもののうちで、まず第一に頭へ入れておいてくれたまえ。それはすなわち、知っているものを、人は感覚しないでいることもあるが、感覚していることもあるというのだ。

**テアイテトス**　それは真実そういうことがあります。

**ソクラテス**　それから、また知らないものを、人はまた感覚もしていないことがずいぶんあるけれど、しかし感覚だけはしていることもたびたびあるのではないかね。

**テアイテトス**　そうです、そういうこともまたありますね。

**ソクラテス**　それなら、さあ、見てごらん、今度は、どうだね、何とかもっと追いついて来られるだろうか、193 いまソクラテスがもしテオドロスさんとテアイテトス君とを見知ってはいるのだが、そのどちらをも見ていないし、また彼らに関しては他の何らの感覚も彼に存しないとするならば、ソクラテスはいかなる場合においても自分の心の中で、テアイテトスがテオドロスであるなどと思いなすことはあるまい。どうだろう、僕の言うことは一理あるだろうか、それとも無意味だろうか。

**テアイテトス**　いいえ、おっしゃることは何としても本当のことです。

**ソクラテス**　それなら、これがさっき僕が言った〔一から一四までの〕中の第一の場合であったのだ。

**テアイテトス**　ああ、なるほどそうでした。

**ソクラテス**　それから、こういうのが二番目だった。僕が君たちのうち一方を見知っていて他方を見知らぬ場

1　この三つの場合は、これまでの組合わせ形式で示せば、一五、A+B, A　一六、-A+B, A　一七、A+B, A+B となるかも知れない。このうち一五と一七は、既に見られた一〇と九の組合わせ形式と全く同じである。したがってこの組合わせ形式だけで考えれば虚偽は不可能なはずである。三四章の説明によってみれば、虚偽はこれら形式だけで説明されるのではなくて、むしろ感覚と記憶の生理的条件(蠟材の比喩)の欠陥から生ずる感覚と知の不合として別途に説明されている。つまり一から一七までの組合わせ形式は、虚偽の説明にはあまり役立っていないことにもなる。そしてこの生理的条件による説明も、虚偽一般の説明としては不充分であることが、三五章において明らかにされる。

合に、両者いずれをも感覚していないとするならば、知っているその者を知らないもう一方の者であると思うことは、これまたいかなる場合においてもありえないことであろう。

**テアイテトス**　そうです、それはあたりまえのことです。

B **ソクラテス**　また第三には、両者いずれをも僕は見知ってもいないし感覚もしていないとしたならば、その知らない人を知らないもうひとりの誰かであると思うことはないだろう。そして前にあげたこの他の場合は、これで話は二度目なんだから、この調子で順々にすべてこれを聞いてしまったものと認めてくれたまえ。それらの場合においては、僕は君とテオドロスさんとについて、両方を見知っているにしても、両方を見知っていないにしても、また一方を見知っていて他方を見知っていないにしても、虚偽を思いなすことはいかなる場合にも決してないだろうし、また感覚についても、もし君が追いついて来ていてくれるなら、それは同じようなことになる。

**テアイテトス**　はい、それは追いつけるようにしております。

**ソクラテス**　残るところ、それでは、虚偽を思いなすのは次のような場合においてである。すなわち君とテオドロスさんとを見知っていて、例の蠟の上に君たちご両人の言わば指輪印形の跡がたを保存している僕ではあるC が、ご両人を見るのに遠くの方からで、じゅうぶんには見られない場合、〔かつて〕ご両人によって印せられためいめいに独特な跡がた(すなわち印影)を〔いまの〕視覚に映るそれぞれの独特な面影に振り当てて、これ(後者)をそれ自身の〔印したかつての〕足跡に〔ちょうどアイスキュロスのエレクトラがオレステスの足跡に対してなすように(1)〕はめこんで、うまく当てはまらせるようにすれば、そこに再認ということが生ずるわけだから、そのようにしようと骨折ってはみるが、さてもしその場合、目指すそれらが的はずれになって、まるで履物を人々があべこ

べにはいている時みたいに取り違えて、視覚に映る両者おのおのをそれぞれ各自のではないよその印影に振り向けるか、あるいはまた、視覚に映るものが鏡の上で[2]右と左のいれかわりをなして受けるところの患いと同じものを受けて、すっかり間違えるかしたなら、そういう場合にこそ思い違いということや虚偽を思いなすということが結果するのである。

D

**テアイテトス** なるほど、ソクラテス、そうかもしれません。思いなしの受けるその患いはいかにもおっしゃる通りで、あなたのそのお話にはただ感歎のほかはありません。

**ソクラテス** なお、それからまた、僕が別々にご両人を見知っていて、その一方の人は感覚していないけれど

1　アイスキュロス『供養する女たち』二五〇行以下にかけた言葉であろう。少し先に「再認」(アナグノーリシス)という芝居の言葉(アリストテレス『詩学』1452$^a$30)が用いられているのもおそらくこのためであろう。オレステスもエレクトラもアルゴス王アガメムノンとクリュタイメストラの間に生まれた兄妹であるが、父が母とアイギストスという者(父の従弟)の手にかかって非業の最後を遂げたので、これが復讐として自分たちの母を殺さなければならなくなる。アイスキュロスはこの伝説を『アガメムノン』『供養する女たち』『慈みの女神たち』の三部作をもって取扱っている。ここに指されているのは、父の殺される前にポキスの伯父ストロピオスのもとに遣わされていたオレステスが、いよいよ時が来て復讐のために故郷アルゴスに乗り込み、まず父アガメムノンの墓に詣で、毛髪を切って供えるが、そのところへエレクトラが、母クリュタイメストラの命で、母の悪夢を払うために、侍女たちをつれて同じく墓参に来る。オレステスは物蔭にかくれて様子をうかがううち、エレクトラは毛髪に気づき兄が来たのではないかと疑うが、なお決せず、ついに足跡を見つけてこれに己が足を合わせ、その兄の足跡ならんことを思い、やがて兄妹の対面となるのである。なおエウリピデス『エレクトラ』五二四行以下参照。

2　この鏡面上の映像については、『ソピステス』266B〜Cや『ティマイオス』46Cにおいても、それが日常の視覚と逆になることをプラトンは注意している。カントの『プロレゴメナ』一三節にこれと同じ例が用いられている。

も、もう一方の人は見知っているばかりでなく、それに加えてさらにこれを感覚している場合に、もしそのもう一方の人(すなわち後者)を見知ることが、僕の場合においては、与えられた感覚に符合するものでないとするならば、この場合にも上述のことが結果するのである。そしてこのことは、前にこう言って、僕がその時君にわかってもらえなかったことなのだ。

**テアイテトス**　ええ、それはなるほどわからなかったには相違ありません。

**ソクラテス**　さあ、それなら、こういうことをたしか僕は言っておいたはずだ。それはつまり、もしひとがその片一方の者を見知ってもいるし感覚もしていて、かつその見知り具合がそれの感覚と符合するようなものを持っている場合においては、また誰か彼が見知ってもいるし感覚もしているうちの他の者で、この者についてもそれを見知ることがこれまたそれの感覚に符合するようなものを持っているとしたら、これをいまのもう一方の者であると思うことはいかなる場合にも決してないことであろうというのだが、どうだね、ほら、そういうのがあったろう。

E

**テアイテトス**　はい。

**ソクラテス**　しかし、これに対して、そこにおいてこそ虚偽の思いなしが生ずるのであるとわれわれの主張する一つの場合は、思うに、何がただ残されていたかといえば、いま言われていた場合が残されていたのである。それはすなわち、ひとが双方を見知っている上に、双方を見るとか双方の何か他の感覚をもつとかしてはいるけれども、その所持するところの印影は両者各別にそれの感覚と符合することがなくて、ちょうどへたな射手のように、矢を放っても的をはずして、しくじるとしたら、これこそ何とまた虚偽とも名づけられたところのものな

194

のである。

**テアイテトス**　しかも、まことにそれはもっともなことでした。

**ソクラテス**　また、それから、もう一つの場合は、印影の一つには感覚がともなうけれども、他の一つにはこれがともなわない場合に、その感覚の存在が欠けている方の印影を現在あるところの感覚に当てはめる場合であって、すべてこのような場合においては、心は思考するに当って虚偽をなすものなのである。そしてこれを一つにまとめて言えば、およそひとがそれについて未だかつて知りもしなければ、感覚もしたことのないものについては、見たところ、もし何か今われわれが愚かなことを言っているのでないならば、虚偽をなすこともなく、また虚偽の思いなしも存しないようである。しかしながら、われわれがそれについて知ったり感覚したりしているB ちょうどそのもののうちにおいて、思いなしは一転してあるいは虚偽となったり、再転してあるいは真実となったりするのである。すなわちその思いなしによって、〔感覚からの〕いまの形跡とそれ自体のもとの形跡とが真直ぐに真正面へもって来て一緒にされる時は、思いなしの真なる時であるが、これがわきへ曲ると思いなしは偽りとなるのである。

**テアイテトス**　それですと、ソクラテス、ちょうど私たちの求めていることがりっぱに言われているのではありませんか。

**ソクラテス**　それでは、なおこういうのも話してあげたら、君はもっとそう言ってくれることだろうね。すC なわち、真実を思いなすのはりっぱなことであるが、虚偽をなすのはみっともないことである。

**テアイテトス**　そうです、どうしてまたそうでないことがありましょう。

**ソクラテス**　ところが、さて、これらのものは次のようなところから生来するのだと言われている。誰か心のなかのかの蠟が厚くて豊富で滑らかでほどよくこねられたものをもっている場合においては、感覚を通して入って来るものがもし心のこの――それはホメロスが蠟（ケーロス）との類似を暗示して用いた語なのであるが――ケアル（胸）に捺印されるならば、その時、その人々にとって、印影はその中へ清く明らかに写って、深さも充分だ D から永持ちのするものとなる。そしてこのような胸（こころ）の人々はまずものわかりのよいものであるし、それからまたものおぼえもよいものである。それから感覚とその印影との一致を取り違えることなく、その思いなしはむしろ真実となるものなのである。すなわち、その印影は明確で、その在り場所も広くゆっくりしているから、これらを人々はその――印刻としてこれら自身をあとにのこした――もとのものへと敏速にそれぞれすっかり割り当てるのであって、このもとのものがそれこそ実際にあるもの（実物）と呼ばれているのであり、またしたがってこの人たちは「かしこい」とこそ呼ばれているのである。どうだね、それとも君にはこう思われないかね。

**テアイテトス**　いいえ、十二分に事実そう思われます。

E **ソクラテス**　それなら、誰かもしその胸が何と、よろずに知恵あるかの詩人（ホメロス）の讃美した毛深きもの(1)をもつとしたら、その場合はどうだろうか。あるいは汚穢（おわい）にして、その成るところの蠟が清純でないとか、あるいはひどく濡（やわら）かいとか、ひからびているとかする場合はどうであろうか。それは胸がもし濡かければ、ものわかりはよいけれども、ものわすれが多い人たちとなり、またもしそれがひからびておれば、その逆となるわけである。(2)しかしてかの毛深く手ざわりあらき胸をもつ者は、その胸が何か石のようなものであったり、あるいは土なり汚物なりが混じてこれに充満していたりして、それが保持する印刻は不明確なものである。またこれがひからびて

195

いる人の保有する印刻も、刻みが深くないから、不明確である。またそれが濡かい人の印刻も、それが一緒に溶けて流れたりするためにたちまち朦朧となるから、不明確である。もしそれ、以上すべてに加えて、印刻は、ひとが扁々たる小さい心をもっている場合、その居場所が狭小なところから、互いに重なって落合うこととなったならば、その不明確さは以上の場合よりなお一段とはなはだしいわけである。かくて、これらの者はすべて虚偽を思いなす性質のものとなるわけである。すなわち、彼らはいつも何かを見たり、聞いたり、思いかけたりする時に、これらのおのおのを敏速にそれぞれその印影たるべきものに割り当てることができずに、手間どって、極めて多くの場合、割り当て違いをして、見損なったり、聞き違えたり、思い損ねたりするのであって、したがってこの人たちはまたこれで、実際にあるところのものに関して、これを逸して全くの虚偽にとらわれてしまっている者だと呼ばれ、「おろかもの」とされているのである。

B

**テアイテトス**　それに間違いありません。そのことでは、ソクラテス、世にあなた以上のことが言われるものではありません。

---

1　『イリアス』第二巻八五一行、第一六巻五五四行などに「ピュライメネスの毛深き胸」とか「パトロクロスの毛深い誰某」とかいうような言い方がされている。ただし、ホメロスの用語はケアルではなくて、ケールである。そしてこの「胸」にはほとんど意味がなく、「毛深い誰某」ぐらいの意味に用いられる。古注によれば、プラトンは「毛深き」を後の「手触りあらき」と同じ意味に解したのであって、「よろずに知恵あるホメロス云々」は——注釈諸家の注意しているように——むろん何かにとホメロスを引き合いに出す人々への皮肉である。

2　アリストテレス『自然学小論集』「記憶と想起について」($450^a32$–$450^b11$)にもこれと同様の説明がある。おそらく『テアイテトス』のこの場所から借りられたのであろう。

**ソクラテス**　それでは、虚偽の思いなしがわれわれのうちに存するということをわれわれは主張すべきかね。

**テアイテトス**　ええ、強く、強くです。

**ソクラテス**　むろん、また真実な思いなしもかね。

**テアイテトス**　ええ、真実のもです。

**ソクラテス**　すると、いまやわれわれは、何にもましてこれら二通りの思いなしが双方ともそれぞれ確かにあるということで、じゅうぶん意見の一致を見たものと思うのかね。

**テアイテトス**　そうです、十二分たしかにです。

## 三五

**ソクラテス**　いい齢をしながら無駄口をたたいているなんていうのは[1]、おそらく、テアイテトス、始末に困る代物で、不愉快なものだというのが、どうも本当のところらしいね。

**テアイテトス**　はて？　何なんですか？　おっしゃったそのことは、何に関係したことなんでしょうか。

C

**ソクラテス**　それは僕自身のだね、ものわかりが悪いのと、それからどうにも間違いのない無駄口とをもてましてのことなのさ。だって、そうじゃあないか、誰かがもし愚鈍なために、確信をつかむことができず、言論をあっちへひっぱったり、こっちへひっぱったりして、その上その一々の言論に拘泥して、なかなかそれから抜け出すことのできない場合には、他に何という名前を誰かつけることができるかね。

**テアイテトス**　ですけれど、それがあなたの場合には、もてあますって、何ごとをなんでしょうか。

**ソクラテス**　僕がもてあましてるってのは、いや、もてあましているばかりではない、また心配にも思っていることなんだが、それは何と返事したものだろうかということなのだ、もし誰かが僕に尋ねるとしたらだね、「ソクラテス、君は発見したんだって？　本当かい？　虚偽の思いなしっていうものは、感覚相互の間にも、思考相互の間にも存しないものであって、ただ感覚が思考と一緒に結び合わされている場合に存立するものなんだってね」とこう尋ねられるとしたら、僕は、これに肯定の答えをするだろうと思うんだ、何か僕たちが見事な発見をしたかのように得意になってね。

D

**テアイテトス**　私には、ソクラテス、今さっき示し出されたものは別に恥ずかしいものではないと思われるのですが。

**ソクラテス**　「それなら」――ってその人は言うね――「君が言おうとするのは、他方においては、人間というものをわれわれは思考するばかりで、見てはいないとする。他方また馬をわれわれは見てもいないし、触れてもいないで、ただ思考しているだけであり、それについてはわれわれは他に何の感覚もしていないとすると、そういう場合に人間を馬であると思うことは、どんな場合にもありえないことだというわけになるのか」ってね。「そ

1　無駄話とか饒舌とかいう非難はソクラテスが常に世間から受けつつあったところのもので、エウポリスの Fr. 352 (コッホ編)やアリストパネスの『雲』一四八五行にも「おしゃべり乞食のソクラテス」とか「饒舌家たちの家」とかいう言葉が見られる。これに対する皮肉な反発が『国家』VI. 488E～489A や『パイドン』70C、『パイドロス』270A などに見られる。ここの言葉にも一種の皮肉を見ることができるであろう。『ソピステス』225Dでは無駄話を「聞く人は別におもしろいとも思わないのに、自分だけおもしろがって、自分の仕事も忘れる」種類のものと規定してある。

うだ、それが僕の言おうとすることなのだ」って、こう僕は肯定して言うだろうと思う。

**テアイテトス**　ええ、それでまた正しいわけです。

E

**ソクラテス**　「それなら、どうだ」——っていうのが、その人の曰くさ——「一一あるものを、もしひとがただひたすら思考するだけだとしたならば、これを一二だと思うことは、もしその一二がやはりまた思考されているだけのものだとしたならば、それは今の言論からすると、どうだね、どんな場合にもありえないことなのではないだろうか。」さあ、それなら今度は君の答えを聞かせてくれたまえ。

**テアイテトス**　いいえ、それはひとが見るとか触れるとかして、それで一一あるものを一二だと思うことはあるいはあるかもしれませんが、しかし思考のうちにそれが把持しているところの、そのものについてそれをそう思いなすなんてことは、どんな場合にもないことだろうと、こうお答えするまでのことでしょう。

196

**ソクラテス**　それなら、どうかね、君の思うところでは、かつて何人かが自分ひとりで自分自身のうちに五と七とを——といっても、僕が言おうとするのは、人間を七人五人と前においてこれを考察するとか、他の何かそういったものをいうのではないのであって、五と七をそれだけで、(1)つまりそれはわれわれの主張だと例の素材蠟に印刻された記念物なのであって、したがってこれらのものの間にあっては虚偽を思いなすことの不可能なものなのであるが、まさにこのものを、もしやかつて人々のうちで何人かがすでにある時、自分相手の言論において、七と五ではいったいいくつになるのだろうかと自問し、また勘考した者があって、そしてそのうちにはむろんこれを一二だとする者もあることはあるけれども、また他にこれを一一だと思いこんで、一一だと言う者も誰かありはしなかっただろうか。それとも、すべての者がそれを一二であると言いもし、また思いもしているのだろう

か。

B

**テアイテトス**　いいえ、決してそんなことはありません。一一だとする人だってずいぶんたくさんあります。それにもしひとがこれをもっと桁の大きい数で考えるといたしますならば、失敗はもっと多いはずです。と申しますのは、あなたはそれをあらゆる数について言おうとなさっているのだと思うのですが。

**ソクラテス**　うん、それはたしかに君の思ってくれている通りでいい。それならまたひとつ君に気をつけてみていてもらいたいことがある。というのは、その場合に行われることは、かの素材蠟に刻まれた一二のものをちょうどそのまま一一だと思うことではなくって、何か他のことになるのでは、まさかあるまいね。どうだろう？

**テアイテトス**　いいえ、とにかくそれは他のことにはならないようです。

**ソクラテス**　それなら、これはまた元の言論[2]に逆もどりとなったのではないか。なぜなら、およそもしひとが〔計算をするのに〕そういう失敗の難にあうとしたならば、それは自分の知っているものを、やはりまた自分の知っているもので、これとは異なるものがそれであると思っていることになるのだが、それは不可能だというのが

1　「五と七をそれだけで」といっても、これは五自体とか七自体とかいうようなものを指すのではなく、ソクラテスがここで説明しているように、直接感覚物を数えることをせずに、それらがわれわれの心に印した跡形について数えるというだけのことを意味するのであるから、これは暗算の場合などを想像するのが一番よさそうである。

2　三一章（188A〜B）の論を指す。この三一章の知不知の論は、テアイテトスが191Bに挙げているような経験的事実を救うことができなかった。そこで三三章、三四章の感覚と記憶の生理的条件による説明は、この事実を救うかのように見えたが、また誤りという新しい計算上の事実において挫折し、今度はより直接に知不知の原則に抵触することとなる。

(196)
C
われわれの主張だったのである。そしてまさにその故に、われわれは虚偽の思いなしが存在しないということを余儀なくしたのであって、それは同一物を同一人が知っていて同時に知っていないことを余儀なくされないためだったのである。

**テアイテトス**　そうです、この上なくほんとうにです。

**ソクラテス**　だから、何にせよ、思考と感覚との間の取り違えというようなことではなくって、何かもっと別のものを、虚偽を思いなすというのはこれだというふうに、出して見せなくてはなるまい。なぜなら、もしそれがすなわち思考と感覚との間の取り違えであったのなら、思考されるもののみを用いていて虚偽をなすということは決してなかったはずである。ところが、現在の事実は、虚偽の思いなしというものが存在しないか、それともあるいは自分の知っているものをひとは知らないでいることができるかの、どちらかなのである。君は、して、このどちらをとるかね。

**テアイテトス**　困ったものを持ち出して、選べとおっしゃるのですねえ、ソクラテス。

D
**ソクラテス**　ところが、どうもしかし、両方ともおそらく言論(論理)がこれを許さないだろうよ。だが、それでも、構わず何でもやってみなければならないのだからして、どうだろう、恥しらずなことなんだが、こういうのを手にかけてみるとしたら……。

**テアイテトス**　と申しますと、どうすることをなのでしょうか。

**ソクラテス**　それは知識しているということが、たとえてみればいったいどんなふうなものなのであるかを言ってみる気になるとしたら――ということなんだがね。

**テアイテトス**　してまたそれが、何で恥しらずなことなのでしょうか。

**ソクラテス**　君は気がつかないでいるらしいね、僕たちの言論というものは、全体がはじめから、知識の探求ということにあったのだが、それは僕たちが知識のいったい何であるかを知らない者であることを意味しているのだよ。

**テアイテトス**　いいえ、それは気づいております。

**ソクラテス**　したがってそれならば、知識というものを知らないでいて、知識していることがたとえばどんなふうなものであるかを言明するというのは、無恥なことだとは思われないかね。だが、まあいいさ、テアイテトス、なぜなら、ずっと前から僕たちの問答は、潔白さを失って、方々しみだらけになっているのだからなあ。それというのは、幾度も幾度も僕たちは、まだ知識の何たるかに無知な身でありながら、われわれが「見知っている」とか「見知っていない」とか、または「知識している」とか「知識していない」とかいう言葉を用いて、何かお互いに了解し合えるもののように振舞って来たのだからねえ。(1) それにもしよければまだある、現在たった今だって、別にまた「無知である」とか「了解する」とかいう言葉を僕たちは用いてしまっているのだ、「知識」という言葉をもしわれわれが奪われるにしたところで、これらの言葉を用いることは当然許されていいことのようにね。

E

**テアイテトス**　しかし、どんな仕方で、ソクラテス、あなたは問答をなさるのでしょうか、もしこれらの言葉

---

1　三一章および三三章、三四章が知不知の組合わせで論を立てていることはすでに見られた通りである。ただし、三三章191D〜Eにおいて一通り知不知の規定が与えられている。

には手を触れないようにして行くのだとしますと。

**ソクラテス**　どんな仕方もないね、それは僕が反対のための反対をする論争専門家(1)であるのなら知らぬこと、少なくとも今あるままの僕ではねえ。それはこの論争専門家のような人物が今もこの場にもしいたとするなら、彼らはそれらの言葉には手を触れないでみせると言い、僕たちの上には、さしづめ僕の言葉づかいにからんで、手ひどい攻撃を加えたことだろう。ところがさて、僕たちはとうていそういう能のない人間(2)なのであってみれば、どうだろう、君、いいかしらん、知識しているということがたとえばどんなふうのものであるかを僕は構わず言ってみようかしらん。なぜなら、そうするのが、見たところ、僕には何だかききめのありそうな様子に感じられるもんでねえ。

**テアイテトス**　それなら、神明に誓って申しますが、どうぞそれを構わずおっしゃってみてください。そしてもしあなたが今のあの言葉に手を触れずにはおられないとしても、その点はじゅうぶんに諒解が成り立つことでしょう。

## 三六

**ソクラテス**　それなら、当今の言い方では、その知識しているということが何だということになっているのか、それを君はもう聞いているかね。

**テアイテトス**　たぶん聞いているかもしれませんが、しかし、今のところ、それの記憶はありません。

B

**ソクラテス**　何でも、知識を所持していることが(3)それだと言っているような気がするんだが。

**テアイテトス**　ええ、それは本当です。

**ソクラテス**　そこでだね、われわれの方は少し模様を変えて、これを知識の所有(占有)と呼ぶことにしようではないか。

**テアイテトス**　すると、いったいこれとあれではどう違うとおっしゃるのでしょうか。

**ソクラテス**　たぶん何も違わないのかもしれないが、しかしとにかく、僕に思われているところを話して、君にも一緒にしらべてもらうとしよう。

**テアイテトス**　ええ、それはもう私にできることでさえありましたら。

**ソクラテス**　それなら、僕の見るところでは、所有しているということと所持しているということとは同じものではないようだ。たとえば、もし上衣を誰かが買って、それの主となっていたところで、これを携えて(身に着けて)いない場合には、われわれはむろんそれを彼が所有しているとは言うにしても、これを所持しているとは言わないだろう。

**テアイテトス**　ええ、たしかにそれで正しいわけです。

---

1　本篇154D～E, 164C, 165D～E, 167D～168Cなどに引き合いに出されている人物。「解説」登場人物、エウクレイデスの項参照。彼らにとっては言論は曲芸でもあり得たのである。

2　ソクラテスの皮肉。154E, 171D, 203Aなどにおけるソクラテスの同様な言い方を参照。

3　これと同じ知識の規定が『エウテュデモス』277Bにおいても与えられている。むろんこれは知識の定義ではなくして、プロディコス流の言い直しに過ぎない。『パイドン』75Dにもこれに似た規定が与えられている。

(197)
C

**ソクラテス**　では、さあ見てくれたまえ、知識もまた、これをひとはかくのごとく所有はしているが、所持はしていないで、ちょうど誰かが、鳩であるとか他の何であるとかいう野禽を狩猟して、家に鳩小舎をそなえつけて飼養している場合のようなものだとすることができるかどうか？　というのは、ある意味においては、われわれは彼がそれらを、何しろ自分の所有にしてしまっているのだから、いつでも所持しているのだと主張できるように思うのだ。ね？　だって、きっとそうじゃあないか？

**テアイテトス**　はい。

**ソクラテス**　ところが、さて、また別の意味では、彼はこれを一羽も所持はしていないと主張できるのであって、ただそれらについては、確かに一つの権能(または可能性)が彼に所属することとはなるのである。その権能(可能性)とは、彼がそれを自分の家の鳥檻(とりかご)に囲って手飼(手下)となしている関係上、欲する時に、どれでもその時々にそれと意(おも)うものをかりたてて、これをとらえかつ持つことができるし、また再びこれを放してやることもできるという権能(可能性)であり、またそれを、彼がよしと思うだけ、何回でもなすことができるという権能(可能性)なのである。

D

**テアイテトス**　なるほど、それはそういうことがあります。

**ソクラテス**　それでは、さあ、もういっぺん、ちょうどさっきわれわれが何かしら想像上のこしらえ物として一種蠟のようなものを心それぞれのなかにそなえつけようとしていたが、ちょうどあのように今また、それぞれの心に一種鳩小舎(1)みたいなものを作るとしようではないか、そしてそれにはあらゆる鳥類がいれられるものだとしよう、自分たち以外の鳥類とは交わらずに大群をなしているもの、小群をなしているもの、また若干は、単独

であらゆる鳥の間を場合によってどこをでも飛んでいるものなど。(2)

テアイテトス　ええ、そういうのを作るだけのことでしたら、それはもう作られたとしましょう。ですが、それから先はどうするのでしょうか。

E

ソクラテス　それは人がまだ幼い時には、その容器は空虚だと言わなければならないし、鳥類の代りには知識をおきかえて考えなければならんのだよ。そしてもしひとが知識を何でもよし自分の所有におさめて、これをその囲いの中に閉じ込めたとしたら、その知識の対象としてすでにあった事実を彼は学得したとか、あるいは発見したとか言わなければならないのだ。そして知識しているというのはこのことだと言わなければならない。

テアイテトス　ええ、そのことなら、そうだということにしておきましょう。

ソクラテス　それでは、さらにまた、その知識の中から、その欲するところのものを狩猟することと、とらえてこれを把持することと、再びこれを放してやることとは、考えてみてくれたまえ、何という名前を要求する事柄なのだろうか。それははじめ彼がこれを自分の所有におさめつつあったその時のと同じ名前でよいものだろうか、

198

---

1　心を鳩小舎にたとえるこの考えは、ギリシアの造形美術において心が鳥の形で示されていることや、またホメロスが言葉を口から羽ばたきして飛び出して行くもの(ἔπεα πτερόεντα)のように想像し、しばしばこれを「歯の柵囲い」ἕρκος ὀδόντων の中に閉じ込められているように言うところから一転して、『イリアス』第九巻四〇九行ではこの「囲い」を心についても用いている時、すでに準備されていたものと見ることができるのであって、決して突飛な考えではなかったであろう。

2　これら鳥の大群小群はものの種類に対応し、「単独であらゆる鳥の間を場合によってどこをでも飛んでいるもの」はすでに186Aで「あらゆるものに付着してまわるもの」として紹介された有非有、同異、似不似等の最も共通なものを指すのではないかと想像されている。

それとも異なった名前が必要だろうか。いや、それはこうしよう、何を僕が言おうとしているのかは、それでもってもっと確実にわかってもらえるだろう。つまり、数を取扱う技術ということが言われるのを君は認めるかね。

**テアイテトス**　はい。

**ソクラテス**　ところで、この技術だが、これは奇数偶数おのおのすべての知識を狩猟するものだと思ってくれたまえ。

**テアイテトス**　はい、そういたします。

B

**ソクラテス**　ところが、さて、それはこの技術の力によってだと僕は思うのだがね、自分が数の知識を自分の配下(手下)に持っているというのも、また他人にそれをおよそ伝授する者が伝授するというのも。

**テアイテトス**　はい、そうです。

**ソクラテス**　そしてその上、ひとが伝授する場合には、これをわれわれは教えると呼び、伝授される場合にはこれを学ぶと呼び、これに対して、例の鳩小舎中に所有している仕方でそれを所持している者は、これを知識していると呼ぶのである。

**テアイテトス**　いや、事実まったくその通りです。

**ソクラテス**　では、それに対して、これから先はどうなるか、それを今から注意してみてくれたまえ。すなわち、もしひとが数を取り扱う技術の心得において完全だとするならば、どうだね、彼はあらゆる数を知識しているのではないかね。なぜなら、あらゆる数の知識が彼の心のうちにあるわけなのだから。

**テアイテトス**　そうです、いや、それに違いありません。

C

**ソクラテス**　きっと、それなら、およそそういう人というのは、いつにしろたぶん何かを数えるに当っては、自分で自分を相手に〔心のなかで〕直接それらを数えるか、あるいは他の何かを、数をもっている限りの外物のうちから、数えるかするのではないか。

**テアイテトス**　ええ、なぜなら、どうしてそうでないことがありましょう。

**ソクラテス**　うん、ところで、その数えるというのは、ちょうど数はどれほどのものがあるかを勘考することにほかならぬとしよう。

**テアイテトス**　ええ、そういたしましょう。

**ソクラテス**　すると、ひとが自分の知識しているところのものを勘考の対象とするというのは、まるでそれを知らないみたいなものだということを明らかにすることになるが、しかしわれわれのすでに同意したところでは、彼は数すべてを知っているはずなのである。むろん君は、このような異議申し立ての行われるのを聞いて知っていることだと思う。

**テアイテトス**　はい、私は存じております。

## 三七

D

**ソクラテス**　さて、それなら、われわれとしては、依然これを鳩の狩猟や獲得(所有化)などになぞらえながら、こう主張することになるのではないだろうか。その場合の狩猟には二通りあったのだ、一つは所有に先立って、所有するがためになすところのものであり、もう一つは、すでに所有している者が、その自分が以前から所有し

ていたものをとらえて、手中に所持するがためになすところのものなのである。そしてこのことは、学んでひとがそれの知識をすでに以前から自分のものとしていたところのもの、すなわちそれを自分が知識していたところのものにも当てはまることなのであって、もう一度この同じものを学びかえすということができるのである。それはすなわち、ひとがものそれぞれの知識を、以前から所有はしていたものの、ただちにこれを思考間近く(手近く)は所持していなかったのを、改めて把捉しまた把持しようとする場合の学びなのである。

**テアイテトス** ええ、それはわれわれのその主張通りで間違いはありません。

E **ソクラテス** ではちょうどそのことだったんだ、僕がさっき尋ねていたのは、用語の上で、これらについてはどういうふうに言ったらいいのか、もしいま数を扱う技術の心得ある人がまさに何か数えようとしているとか、文字の心得ある者がまさに何か読もうとしているとかするならば、そのような場合には、果して彼は知識している者であるにもかかわらず、その知識しているところのものを、もう一度自分自身のところから学ぼうとしてかかっているのだとすべきだろうか。

**テアイテトス** でも、それは面妖なことです。ソクラテス。

199 **ソクラテス** だが、そうかといってわれわれは、彼にすべての文字またはすべての数を知識しているのだということを許してしまっているのに、彼が読もうとしているもの、数えようとしているものは、彼の知識していないところのものをなのだと言うべきだろうか。

**テアイテトス** いや、それもまた話の筋が通らないことです。

**ソクラテス** それなら、どうだろう君、こうわれわれは言おうかしらん、名前のところは、「知識する」でも

「学ぶ」でも、ひとはこれをその好むところどこへでもひっぱって行くがいい、それはわれわれの少しも関知するところではないのだ。しかしながら、われわれの主張としては、知識を所有していることと所持していることとをそれぞれ異なるものだといったん定めた以上、ひとがその所有しているものを所有していないということは不可能なのであって、したがって〔その限りにおいて〕ひとがその知っているものを知らないでいるということはいかなる場合にも出てこないことなのであるが、しかしどうも、そのもの（すなわち所有している限りにおいて知っているところのもの）について、虚偽の思いなしを把捉するということはありうるのだということになる。なぜなら、当のものの知識を所持しないで、その代わりに異なる他の知識を所持することがありうるからだ。すなわち何かある知識をいつか狩猟するのに、入り交って飛んでいる知識がいろいろあるので、誤って異なる一つの知識を異なる他の知識の代わりに捕捉する場合がそれなのであって、ひとが一一を一二だと思ったのも、してみれば、この場合だったのである。すなわち自己自身の中にもっていた一一の知識を〔同じく自己自身の中にもっていた〕一二の知識の代わりにとらえたのであって、それはたとえば〔鳥檻のなかで〕普通の鳩の代わりに河原鳩をつかまえたようなものなのである。(1)

B

1　これは三二章に出された虚偽の思いなしを一種の思い違いとする考えに一応の説明をあたえたものとも見られるだろう。三二章から三四章までの説明が、知と不知の二項目を使用しているのに対して、ここでは不知の項目を落してしまって、知の内部において、知と知の（所有と所持の区別にもとづく）関係として、虚偽可能の問題を処理しているのが特色である。これは三四章における説明が、知不知以外の感覚と記憶の生理的条件をもちこんだことに対する反省の結果とも見られるが、これまでの知不知の枠のなかで考えるやり方に対しては、皮肉な結果とも見られるだろう。なお鳥をつかまえそこねる比喩については、『エウテュデモス』291B、アリストテレス『形而上学』第四巻（1009b38）参照。

**テアイテトス**　ええ、なるほど、それなら話の筋は立ちます。

**ソクラテス**　うん、ところがさて、これがもしそのとらえようと企てていた知識をとらえたのであるならば、その場合は無偽なのであって、あるがままのものを思いなしているわけなのである。そして事実もしかくのごとくだとするならば、何とまた真実の思いなしもあり、虚偽の思いなしもあるということがわれわれの主張となって、そして先にわれわれがもてあましていたものは、ひとつも邪魔にはならんということにもなるのではないか。C たぶん、それだから、君は僕と主張を合わせてくれることだろう。それとも、君のしようとするのはどういうことなのかね。

**テアイテトス**　いまおっしゃった通りのことです。

**ソクラテス**　つまり、実際のところわれわれは、「知識しているものを知識していない」という難問からは解放されたわけなのだ。なぜなら、われわれが所有しているものを所有していないということは、われわれが何かのことで虚偽をなしているといなとにかかわらず、もはや決して出て来ないことなのだから。しかし、われわれを悩ますものはこれのみにとどまるものではないらしく、どうやら別のもっと始末に困るようなものが傍の方に姿を現わしかけているように僕には思われる。

**テアイテトス**　とおっしゃると、それはどんなものなのでしょうか。

**ソクラテス**　それは知識と知識との取り違えがもしいやしくも虚偽の思いなしだということになろうものなら……。

**テアイテトス**　いったいどうなのでしょうか。

D
**ソクラテス**　まず第一には、ひとが何ものかの知識を所持していながら、無知のゆえにではなくて、自分の所持しているその知識のゆえに、まさにその知識の対象となっているものに無知であるということと、それからまたさらに、それをそれと異なる他のものだと思いなしたり、他の異なるものをそれだと思いなしたりするということがあるというのだが、およそ話の筋の通らない大べらぼうのことって、これがそうでなくって何としよう、知識が傍についていながら、心は何ひとつ識るところのものがなくって、すべてに無識(無知)だというのだからねえ。すなわち、この論からすれば、無識(無知)が傍についていて、それで何かをひとが識るようにされるということも、盲目によってひとが何かを見るようにされるということも、あえて何の妨げもないことになる、もしいやしくも知識がすでにひとをして何らかの場合に無知ならしめるであろうというのならばだね。

E
**テアイテトス**　それはたぶん、ソクラテス、私たちの想定が悪かったからではないでしょうか。あの鳥をただ知識とのみ想定したのがよくなかったのでしょう。むしろ無識(無知識)もまたいっしょに心の中を共に入り交って飛んでいるものと想定すべきだったのです。そしてこれを狩猟する者も、時に知識をとらえることもありますが、時には無知識をとらえることもあって、同じものについて、あるいはその無知識によって虚偽を思いなすことがあり、あるいはその知識によって真実を思いなすこともあると、こう想定すべきだったのでしょう。

**ソクラテス**　いや、これでテアイテトス、君をほめてあげられないというのは、何とも心苦しいしだいなんだが、しかしまあ君の言ったことをもう一度考えてみてくれたまえ。すなわち、それをいま君の言う通りだとしよ

200
う。すると、さてその無知識をとらえた者というのは、君の主張だと、虚偽を思いなすはずになるが、どうだね、事実きっとそうじゃないかね。

**テアイテトス**　はい。

**ソクラテス**　むろん、虚偽を思いなしているのだということを、その上また考えるということはないだろうと思うがね。

**テアイテトス**　ええ、何しろそういうことはありようはずがないのですから。

**ソクラテス**　むしろ、自分の思いなしているのは真実だと考えているのであって、それでつまり自分がそれについてつかまされているところのものは虚偽であるのに、自分はそのものを知っているような気持になっているのだ。

**テアイテトス**　いや、それに違いありません。

**ソクラテス**　したがって、狩猟の結果そこに所持しているところのものを彼は知識だと思うであろうが、無知識だとは思わないだろう。

**テアイテトス**　明らかにそうです。

**ソクラテス**　するとわれわれは、遠道を回ったあげくに、再び最初の難問にぶつかるところへ出てきてしまったわけになる。(1)というのは、また例の口やかまし屋が笑って言うことだろう、「どっちなのだ、すぐれた人たちよ、一、ひとは知識と無知識の各両方を知っていて、その知っている一方のものを、自分の知っているもので、これとは異なる何か他のものがそれだと思っているのか。二、それとも、両者いずれをも知らないでいて、一方の自分の知っていないものを、これとは異なるもので、自分の知っていないもののうちにあるもう一つのものだと思いなしているのか。三、それとも、一方は知っているけれども、他方は知らないでいて、自分の知っている

B

その一方のものを、自分の知らないもう一方のものだと考えているのか。四、あるいは、自分の知らないでいる方のものを、自分の知っている方のものだと考えているのか。それとも、さらにもう一度諸君は私に言おうとするのか、知識と無知識とのさらなる知識がまた別にあるのだということを、そして誰でもこの知識を所有している者は、もう一つ別の鳩小舎とか蠟のこしらえ物とかいうような何かおかしなものをもっていて、その中にこの知識を閉じ込めて、これを所有している間は、たといこれを心のうちの間近なところに所持しているのではないとしても、これを知識してはいるのだということを。そして、何とかくのごとくにして諸君は、それ以上何の得るところもなく、幾度も幾度もぐるぐる回りをしてはたちまち同じところへもどって来るように余儀なくされることであろう」とね。これに対して僕たちは、テアイテトス、何と答えたものだろうか。

**テアイテトス** いや、正直なところ、ソクラテス、何と言うべきか、私にはわかりません。

**ソクラテス** それならば、まだ年若い君を相手の話ではあるが、どうだね、われわれの上にこの言論が加えつ

1 さき(199A～B)の説明では、虚偽の思いなしという不知、無知識が知あるいは知識だけの間において成立することになるというので、その点に異説が出たから、テアイテトスは鳩小舎のなかには知識のほかにも無知識が入っていると想定を意味することを提案した。しかしこれは問題を知と不知の二項目で考えようとするもので、三二―三四章の立場に逆もどりすることになる。さらに知識と無知識とが、あらためて「とらえられる」狩猟の対手物となることは、知識と無知識に対して、その上にまた新しく別の知と不知を考えねばならぬことにもなる。してこの新しい知と不知を考えるためには、また別の鳩小舎みたいなものを考えねばならなくなる。三一章に提起された虚偽の思いなしの可能不可能の問題は、有と非有、知と不知の二途において考えられることが示されたが、三二章以下この三七章までの説明は、知と不知によるものであった。そしてこの二項目だけでは充分な説明の出せないことがここまで来て明らかになる。

つある攻撃は、たしかにあっぱれというべきものではないか。すなわちわれわれはいま知識の探求を打ちすてて、

D

虚偽の思いなしを、それは知識がいったいそもそも何であるかをじゅうぶんに把握しないうちは知ることのできないものであるにもかかわらず、知識よりも先にこれを探求しているのであるが、そういうわれわれのやり方は正しいものではないことを、いまの言論はものの見事に判明させてくれているのではないか。

**テアイテトス**　それは必然に、ソクラテス、今のところ、あなたのおっしゃっているようなものだと思わなければなりません。

## 三八

**ソクラテス**　それでは、もう一度ひとがはじめから言うとしたら、何が知識だということになるのだろうか。というのは、まだ僕たちは閉口することはないだろうと思うんだが、どうだろう。

**テアイテトス**　ええ、あなたさえそうでなければ、なかなかどうして閉口するどころではありません。

**ソクラテス**　では、さあ言ってくれたまえ。いったいぜんたい何がそれだと言ったなら、僕たちは自家撞着を最も少なくすることができるだろうか。

E

**テアイテトス**　私たちが、ソクラテス、さっきから試していたことをです。なぜって、ほかに私としては何もありませんのですから。

**ソクラテス**　というと、どんなことだったかしら？

**テアイテトス**　真なる思いなしが知識だということです。真実を思いなすということであれば、それはとにか

く誤謬を犯すものではないと思うんです。そしてこれにもとづいて生ぜしめられるものはといえば、いずれも善美なものであるということがその結局において示されるからなのです。

**ソクラテス**　うん、それはテアイテトス、例の川越えをするのに道案内人が言ったという、「〔水の浅い深いは、渡ってみれば、水〕そのものが、つまり、はっきりさせてくれるだろう」[1]というやつなんで、いまのことも、われわれがもしそれの探求に歩みを進めて行く場合においては、たぶんそれはわれわれの足許にひっからまってきて、それによって自らわれわれの求めているところのものを明らかにしてくれることになるかもしれないが、これをもしわれわれが何もせずにじっとしているのでは、何一つ判明するものではないのだ。

201

**テアイテトス**　ほんとうにそうです。おっしゃる通りです。何はさておき、その「歩みを進める」ということにいたしましょう。調べてみるといたしましょう。

**ソクラテス**　では、そうするが、調べてみるといっても、このことなら長いことかからなくってもわかる。なぜなら、君とは反対に、徹頭徹尾それが知識ではないということを証拠だてている技術があるからだ。

**テアイテトス**　と申しますと、いったいそれはどのようにしてなのでしょうか。またそれは何の技術でしょう

1　古注によれば、これは人が河へ下りてこれを渡ろうとする時に、先達の人に向かって「水は深いだろうか」とたずねたら、「渡ってみれば分かるよ」という意味で、「水そのものが教えてくれるだろう」と答えたという話から出て、一般に試みてから知られる事柄にこの語が用いられるにいたったということである。この言葉は『ヒッピアス(大)』288Bにも用いられ、また『プロタゴラス』329Bにも現われている。ラテン語の res ipsa declarabit も同じ意味であろう。

か。

**ソクラテス**　知恵にかけては最大の人たちの技術がなのさ、ほら、弁論家とかあるいは特に法廷弁論家とか呼ばれている……。というのは、この人たちが自分たち自身の技術によって行うのは説得なのだが、思うにそれは〔知識を授けることによって〕教えながら説得するのではなくて[1]、自分たちの欲するままのものを何でもひとに思いなさせることによってなのである。それとも君は、誰か教えることにかけて非凡な手腕をもっている者があって、その場に誰も居あわせなかったところで金をひとが奪われたり、何か他の暴行を加えられたりした場合に、その人々の身にふりかかったその出来事の真相を、少量に限られた水時計の水を目前に見ながら、その制限内でなおじゅうぶんに教えることのできるほどの者があると思うかね。

B

**テアイテトス**　いいえ、決してそのような者があるとは私は思いません。むしろ、ただ説得するだけなのだと思います。

**ソクラテス**　ところで、その説得するというのは、君の言おうとする意味では、思いなさせるということではないのか。

**テアイテトス**　ええ、それに違いありません。

**ソクラテス**　それなら、いまもしただ目撃者にのみ知られて、他の仕方では知られえぬ事柄について、正しい説得が裁判官に対してなされたとする場合には、それらの事柄を彼らはその場合ただ聴取によって、真実なる思いなしを把握した上で、判断をして行くわけなのであるが、それは彼らが知識のたすけを借りずに、説得にもとづいて判断したこととなるのである——むろんその場合、彼らが裁判官としての仕事をじょうずになしたとする

C

ならば、その判断は正しい説得にもとづいてなされたわけになるのだけれどもね。

**テアイテトス**　ええ、事実たしかにまったくその通りです。

**ソクラテス**　ところが、何と君！　もしいやしくも裁判事項に関して真実の思いなしと知識とが同じものであったとするならば、いやしくも裁判官が第一流の裁判官なら、知識をもたずに正しい思いなしだけをするということには決してならなかったはずである。してみると今は、この両者はおのおの何か別ものであるらしいということになる。(3)

**テアイテトス**　そのことで、ソクラテス、私はいま思い浮かんだことがあります。以前にある人がそのことを言ったのを聞いたのですが、忘れてしまっておりました。それで、その人の言ったことなのですが、それは真実なる思いなしに言論を加えたもの(4)が知識だというのです。そしてその真実な思いなしだけでは、言論が加わっていなければ、知識の範囲には属さないということでした。つまり、それについて言論の成り立たないものは可知識的なるもの（知識されうるもの）ではない——この可知識的という言葉はその人がちょうどまた用いていた言葉

D

1　『ゴルギアス』454C～455Aにこの点が取扱われている。

2　κατὰ δικαστήρια (Jowett) と読む。

3　両者の区別は、あっけないほどの簡単さで片づけられてしまっている。裁判の常識で、聴取による説得、思いなしは、目撃に代用されてはいるが、両者は同じものとはされないということであろう。しかし両者の区別は、プラトン哲学では、基本的な重要性をもっている。この結論については『メノン』97A、『饗宴』202A、『国家』VI. 506C、『ティマイオス』51Dなど参照。

4　テアイテトスの新しい案、これの意味はようやく四二章になってから述べられる。これは「可知識的」という特別の表現に関するテアイテトスの注意からも感ぜられるように、誰か特定の人の説くところに関連するもののようである。

なのですが――これに反して、言論することを許すものは可知識的であるというのでした。

**ソクラテス**　やあ、これはたしかにすばらしい話だ。ようこそ君はそれを話してくれた。だが、その可知識的なるものと不可知識的なるものとを、さてその人はどういう筋道を通って品種(しな)分けしようとしていたのかね。それをひとつ言ってくれたまえ。はたして君が聞いたことと僕が聞いたことで、僕たちは一致しているかどうかがわかるだろう。

**テアイテトス**　ですけれど、それは私に見つけ出せますかどうでしょうか、わかりません。もっとも、誰か他に話してくださる方がありますなら、それに追随して行くことはできるだろうと――まあ私は思っております。

## 三九

E

**ソクラテス**　では、ご同様夢のような話だが、代わりに今度は僕の方のを出すから、さあ、ひとつ聞いてくれたまえ。というのは、僕がまた別にこういうことをある人たちから聞いていたように思うもんでね。それはつまり、われわれもわれわれ以外のものもそれから合成されているところの、基本的な、たとえばちょうどものの要(1)素みたいなもの(字母みたいなもの)があるのだが、それは言論を受けいれぬものだというのである。すなわち、(2)そのおのおのはそれ自体としてそれ自体にとどまる限り、ただその名前を呼びうるのみであって、それ以上ほかに何もつけ加えて言うことはできないのであって、「ある」とも「あらぬ」とも言うことはできないのだ。なぜなら、そうすれば、すでに「有」(あるということ)とか「非有」(あらぬということ)とかがそれに付加されていることとなるであろう、しかるに、もしいやしくもひとがただまさにそのものだけを言おうとするのであれば、何

一つとして外からもってきてこれに付加すべきものはないはずだからである。いや、その「ただ」とか「まさに」とか「かのもの」とか「各」とか「だけ」とか「それ」とか、その他この種の多くのものがすでに付加されてはならないものなのだからねえ。というのは、これらのものはいたるところに流通して、何にでもつけ加えられるけれども、それはそれが付加される当のものとは別物としてなのだからねえ。ところが、もしいやしくもそのものの言論されることが可能であって、それはそれ自体を言いあらわすべき独自の言論をもっているのだとしたならば、それはそれ自体のほかすべて何ものをもともなうことなしに言論さるべきであったのだ。ところが、いま

B 実際には、これら基本的なもののうちいかなるものも言論をもって語られることは不可能なのである。なぜなら、それにはただ呼名されることだけが属するのであって、それ以外のものは属していないからなのである。つまり、それが受けいれるのはただ名称だけなのである。これに反して、すでにこれらから合成されてしまっているものは、それ自体が組合わされてできたものなので、ちょうどそれらの名称もまたそのように組合わされて、ひとつ

1 以下に語られるところのものが何人の学説であるかに関してはいろいろな議論が行なわれているようである。一時はこれをアンティステネスに関係させる説が有力であった。これが誰か特定人の学説を指すらしいことは、「可知識的」という特別な用語の使用においても、また201Cの「ある人がそのことを言った」とか202Eの「その人が以上すべての」とかいうような、特に誰か個人を指すらしい言い方にも見られることである。

2 原語はストイケイオンであって、字母アルファベット、要素、元素などの意味に用いられる。エウデモスの研究(Simplic., in Phys. I. p. 7, 13)によれば、ストイケイオンを要素の意味にもちいた最初の人はプラトンであるということである。日本語では一語でこれだけの意味になるものが見つからないので要素と字母という別々の訳語を場合場合に応じて用いなければならなかった。

の言論をなしているのである。というのは、言論とは何であるかといえば、名辞(名称)を組合わせたものがすなわちそれだからである。[1] してみれば、ものの要素(字母)となるものは没言論的であり、不可知なものであって、ただ感覚されるにすぎないものなのであるが、これに反して、これら要素を束ねたもの(シラブル・綴り)[2]は可知的であって、語られ[3]もするし、真なる思いなしをもって思いなされもするものなのである。それから、いまもし

C

何人かが何かの真なる思いなしはこれを手に入れたとしても、それについての言論を欠いている場合には、その人の心はなるほどそのものについて真実のところを当ててはいるが、それを親しく知っているのではないこととなる。なぜなら、そのものについて言論の受けこたえができない者は無知識の者であるからだ。[4] ところが、これにもし言論の把握ということがつけ加わるならば、ひとは以上すべてのことが可能となり、知識に対して間然するところのない関係にあることとなる。どうだね、君がかすか夢のような記憶のうちに聞いたというのは、こんなふうなことではなかったかね。それとも違うかな。

**テアイテトス** 事実たしかにまったくその通りでした。

**ソクラテス** では、これで君はいいと思うかね。そして君の立場はこうなるのかね。つまり、真実の思いなしに言論のともなうものが知識であると、ね。

**テアイテトス** ええ、事実すっかりその通りです。

D

**ソクラテス** はたしてそれでは、テアイテトス、いまこんなことで僕たちは、古来まことに幾多の知者たちが見出しあぐんでむなしく探求の中に老いたところのものを、今日この日手に入れてしまったわけなのだろうか。

**テアイテトス** ええ、とにかく私には、ソクラテス、いま語られたことは結構な言説だと思われます。

**ソクラテス**　しかも、それだけについていえば、それがそうあるのはまた当りまえのことなのだ。なぜなら、言論と真なる思いなしをはなれて、何がそもそもなお知識でありえようか。だが、しかし、いま語られたことのうちで一つ、僕には不満なところがある。(5)

**テアイテトス**　とおっしゃると、いったいそれはどんなところがなのでしょうか。

**ソクラテス**　それは、しかも、巧妙を極めた言論だと思われるちょうどそのところがそうなのだ。すなわち、

E ものの要素(字母的なもの)となるものは不可知であるが、これらを束ねたものの種類は可知的だというところがそれなのだ。

**テアイテトス**　それで、つまり、正しくそれは言われているのではないというのでしょうか。

**ソクラテス**　うん、それが、いざ、見てみなければならんことなのさ。というのは、ちょうどその言論の抵当

---

1 『ソピステス』262Dにおいても、「名詞と動詞の組合わせ」に言論の成立を見る考えが引用される。単なる呼名との対立もここと同じである。しかし単なる名詞ばかりの組合わせや動詞ばかりの連続では言論にならぬとしているので、そこにかなりの相違が認められる。なお、『クラテュロス』385C、『定義集』414Dなど参照。

2 シラブルと言えば、人はまず音節とか綴りとかいう意味を思い出すであろうが、しかしこれの原語 syllaba の文字通りの意味はここに訳されたような「束ね」であり「一緒につかみ取られたもの」なのである。

3 「言論をもって」が補わるべきであろう。原語では「没言論的」に「無理数」の意味があり、この「語られる」には「有理数」の意味があるので、「没言論的」に対してこの「語られる」をわざと「言論をもって」を補わずに用いたのかもしれない。

4 『パイドン』76B, 78D、『饗宴』202A、『国家』VI. 506Cを参照されたい。

5 これは本篇はじめの「ほかのことはほどよくいっているのだが、少しばかりわからないことがあってねえ」(145D)という言葉と比較することができるであろう。

にあたるものを僕たちはおさえて持っているのだ。つまりその人が以上すべてのことを言うのに、モデルに用いていた元のものをだね。

**テアイテトス**　とおっしゃると、それはいったいどんなものをなのでしょうか。

**ソクラテス**　文字についていう場合の要素すなわち字母と字母を束ねたものすなわち綴り(音節)とがそれなのさ。それともどうだね、もっと別のものを眼中において、いまわれわれが語っているような説を論者はしたのだと君は思うかね。

**テアイテトス**　いいえ、おっしゃったそのものを眼中においてだと思います。

## 四〇



**ソクラテス**　それでは、さあ、それら〔抵当みたいな物〕を取りあげて、吟味にかけるとしようか、いや、それよりはむしろわれわれ自身を(1)、文字はわれわれが学んだところでは、以上に言われたようなふうに学ばれたのだろうか、それとも、そうではなかったのか吟味するとしよう。いいかね、それではまず第一にきくけれど、字母は没言論的なものだが、その字母を束ねたもの(すなわち綴り)は言論を受けいれるものであるというのは、はたしてそうだろうか。

**テアイテトス**　ええ、たぶんそうです。

**ソクラテス**　いや、それは僕の見るところでも、まったくたしかにその通りだよ。だから、たとえばSOC-RATESという文字についてだね、もし誰かがその最初の綴りを、「SOというのは何であるか、テアイテトス、

言ってみたまえ」と、こう尋ねるとしたら、君は何と答えるだろうか。

**テアイテトス**　S(シーグマ)とO(オー)[2]だと答えるでしょう。

**ソクラテス**　すると、それが君のその綴りの何であるかの言論(説明)なのかね。

**テアイテトス**　はい、とにかく私にとっては、そうなのです。

B

**ソクラテス**　よし来た、それでは、そういうふうにして、またSが何であるかの言論を言ってくれたまえ。

**テアイテトス**　して、どうして字母の字母なんてものを誰か言う者がありましょう？　なぜなら、何しろまた、ソクラテス、そのSというのは、(はっきりした)声音をもたない(無韻の)音の一つなのでして、ただわずかに、舌がシュッと鳴る時に聞かれるような、一種の噪音であるに過ぎないのですし、またさらにこれに対して、声音もなければ、噪音もないといったもの(すなわち黙音)が、B(ベータ)その他の字母の大部分に見られるのですからねえ。ですから、これらのものは没言論的(説明のつかないもの)であると言われていいわけなのです。とにかく、そのうちで一番はっきりと聞き分けられるかの七つのもの(すなわちΑΕΗΙΟΥΩ)にしてからが、声音(韻)はもっておりますが、それ自体が何であるかの言論(説明)は、たといどんなのにしろ、もってはいないとい

1　154E, 171D, 197Aなどにも共通するソクラテス的方法の特色は、何ごともまず自己自身について試してみるところにある。『ヒッピアス(小)』365C～D参照。

2　現在のギリシア語教科書などでは、この文字は「オー・メガ」と呼ばれているけれども、これはギリシア中世紀に始まった習慣であって、プラトンの時代には、このようにただ「オー」(ɔː)と呼ばれていたのである。これらの名称については『クラテュロス』393D～E、同じく426C～427C参照。

う有様なのですからね。(1)

**ソクラテス**　したがって、これまでのところは、いいかね、君も僕も仲間としてだよ、われわれは知識に関して正しかったというわけなのだ。

**テアイテトス**　はい、見たところの様子では、われわれはそうらしいようです。

C

**ソクラテス**　しかし、どうかね、文字の要素たる字母は不可知だとしても、それを束ねた綴りは可知的なのだということは、果してわれわれの示すところですでに正しかったのだろうか。

**テアイテトス**　ええ、それでとにかく正しいようです。

**ソクラテス**　よし来た、さあ、それでは、その綴りだが、われわれはそれをどっちだと言うのかね。二つの字母(SとO)が二つともで綴りなのか、〔同じく〕また字母が二つより多い場合には、その全部をそのままですなわち綴りだと言うべきか。(2) それとも、それらの字母が合成されると、そこに何かちゃんとした一つのもの(単一の形相)ができあがるのであって、綴りはすなわちそれであると言うべきだろうか。

**テアイテトス**　いいえ、それはその全部をそのままでそうなのだと、われわれは言わなければならないように少なくとも私には思われます。

**ソクラテス**　では、SとOという二つについて、さあ、見てくれたまえ。これは二つが二つともで僕の名前の最初の綴りなのだが、さて、どういうものだろうか、その綴りを見知っている者は一般に誰でも、その(SとOの)二つとも見知っているに相違ないのではないか。

D

**テアイテトス**　はい、それに違いありません。

**ソクラテス**　したがって、そのSとそのOを見知っているわけである。

**テアイテトス**　はい。

**ソクラテス**　しかし、どうかな。はたしてそれならば、二つをおのおの別々には見知ることがないのだろうか。そして二つをおのおのどれも知ることがないのに、これを二つとも見知っているというわけなのだろうか。

**テアイテトス**　でも、それは、ソクラテス、容易ならんことです。それでは話の筋が通りません。

**ソクラテス**　しかし、いいかね、二つとも見知っていることになる人は、二つをおのおのどれも見知っていなければならないのだとすると、これから綴りを見知ることになる人は、あらかじめ字母を見知っていなければならないということがまったくの必然になる。そしてかくのごとくにしてわれわれは、この見事な言論に逃げ出されて、どこかへ行かれてしまうことになるだろう。

E

**テアイテトス**　ええ、しかもたいへんまあ突然に！

**ソクラテス**　それはつまりわれわれがその言論を守ることが見事でないからなのだよ。というのは、たぶん、綴りはすなわち字母だとして想定さるべきものではなかったのだろう。むしろ、字母からできてはいるが、それは字母とは異なるものであって、それ自体にそれみずからの単一な形相をそなえもっているところの、一種単独の品種であると、こう想定すべきものだったのであろう。

**テアイテトス**　いや、まったくです。事実、それはたぶんさっきのようなものではなくって、むしろそういう

1　補注A2(四〇五ページ)をみよ。

2　B写本のごとく λέγωμεν と読む。

(203)

ふうなものなのでしょう。

**ソクラテス**　うん、それはまあ調べてみなければならんね。いやしくも一箇の堂々たる大言論をそう意気地もなくやすやすと引渡すべきものではないからねえ。

**テアイテトス**　ええ、それはたしかにそうです。

204

**ソクラテス**　では、それは今われわれの言うがごときものであるとしよう。すなわち綴り(束)は、そこに接合される各字母(要素)から出て、単一なる形相(ちゃんとした一つのもの)として成り立つところのものなのであって、それは文字の場合においても、またその他の場合においてもすべて同様なのである。

**テアイテトス**　はい、すべてそれはそういうことにいたしましょう。

**ソクラテス**　すると、さて、綴り(束)には部分というものがあってはならないということになる。

**テアイテトス**　一体なぜでしょうか。

**ソクラテス**　なぜなら、およそもし部分をもつものならば、必然に、それの全体はただちにその部分全部を合わせたものでなければならぬからである。それとも、この全体もまた、部分から出て、その部分全部を合わせたものとは異なるところの、何か単独の品種をなしているものなのであると、君は言おうとするだろうか。

**テアイテトス**　はい、私の申しますのは、そのほうです。

**ソクラテス**　しかし、一体それでは、全部と全体とは、どっちなのかね、君はこれを同じものだと呼ぶかね、

B

それとも、両者はおのおの異なるものだとするかね。

**テアイテトス**　私には何も明確なことは申しあげられないのですが、しかし忠実に(気軽に)答えるようにせよ

というおおせなのですから、危なっかしいところをあえて申しあげますと、それは異なったものです。

**ソクラテス**　うん、その忠実なということは、テアイテトス、たしかに〔行いとして〕正しい。だが、その答えまで正しいかどうかは、調べてみなければならない。

**テアイテトス**　ええ、それはもうそうですとも、そうしなければなりません。

## 四一

**ソクラテス**　それでは、その全体というのは、いま言われているところでは、全部〔を一体にした総体というようなもの〕[1]とは違うというわけなのだね。

**テアイテトス**　はい。

**ソクラテス**　よし、それでは一体どうかね。その全部を合わせたもの（すなわち総和）と全部を一体にしたもの（すなわち総体）とでは、どこか違うところがあるだろうか。たとえば、われわれが一、二、三、四、五、六と言ってから、また三の二倍とか、二の三倍とか、四加えるの二とか、三加えるの二と一とか言う場合、われわれがC　これらすべてにおいて言っているのは、同じ（ひとつの）ものなのであろうか、それとも異なったものなのであろうか。

1　これからの問答を理解しやすく訳すために、これから同一の原語（ト・パーン）に対して「全部」と「総体」の二つの訳語を用いなければならなくなった。「全部」は「全体」に対して用い、両者の類似性を示す。「総体」は「総和」に対し、その相違は「総体」（ト・パーン）が単数であって、「総和」（タ・パンタ）は同じ語の複数であるというところにある。

**テアイテトス**　同じ（ひとつの）ものなのです。

**ソクラテス**　それははたして六より他のものであろうか。

**テアイテトス**　いいえ、決してそれより他のものではありません。

**ソクラテス**　するとすでにわれわれは、これら各種の言い表わしの上において、その合わせて六つになるものどもを、全部で一体のもの（すなわち総体）[1]として語っているわけなのではないか。

**テアイテトス**　はい。

**ソクラテス**　しかし、逆にまた、[2]これをわれわれが合わせて全部となるところのものども（すなわち総和）として言おうとする場合、そこに言われるのは無実のことなのだろうか。

**テアイテトス**　いいえ、何か言われているようなものがそこになければなりません。

**ソクラテス**　それはそもそもかの合わせて六つになるものどもより他のものであろうか。

**テアイテトス**　いいえ、決してそれより他のものではありません。

D

**ソクラテス**　したがって、すくなくともそれが数（かず）のあるものから成り立っている限りの事物においては、総体と称（とな）えるのも、総和と称えるのも同じものなのである。

**テアイテトス**　明らかにそうです。

**ソクラテス**　では、それらについてはわれわれは次のように言うとしよう。〔総計〕―プレトロンの数〔ある〕というのも〔総体〕―プレトロンというのも同じである。ね？　きっとそうだろう。

**テアイテトス**　はい。

**ソクラテス**　また一スタディオンの数とても同然である。

**テアイテトス**　はい。

**ソクラテス**　それから実にまた〔総勢〕一軍団の数というのも〔総体〕一軍団というのも、すべてまたこの種のものは同様ではないのか。すなわち、それらのものの数の総体(すなわち総数)は、そのままそれらの各事物(すなわちそれらのおのおのであるところの当のもの)の総体なのである。

**テアイテトス**　はい。

E

**ソクラテス**　ところで、これらおのおののものの数というのは、ほかならぬ部分のことではないのか。

**テアイテトス**　ええ、それにほかなりません。

**ソクラテス**　つまり、およそ部分をもつものは、部分から成り立っているものだということらしいね。

**テアイテトス**　はい、そうのようです。

**ソクラテス**　うん、それがさて、その部分を全部合わせたもの(すなわち総和)がすなわちその全部を一体にしたもの(すなわち総体)であるということは、いやしくもすでに総数がすなわち総体であるとすべきであるならば、もうすでに同意ずみのことである。

**テアイテトス**　はい、その通りです。

---

1　キャンベル案により πᾶν τὰ ἕξ と読む。テューリッヒ版プラトン全集、ディエスの読み方。

2　B写本のごとく πάλιν と読む。

**ソクラテス**　したがって、かの全体というのは部分から成り立っているものではないということになる。なぜなら、もしそれが部分を全部合わせたもの(すなわち部分の総和)であるならば、それはすなわち全部を一体にした総体だということになるだろう。

**テアイテトス**　ええ、それは部分から成り立っているものではないようです。(1)

**ソクラテス**　しかし、部分というものが部分であるのは、それが全体の部分であるのではないとしたら、何か他にそれがその部分となるようなものがあるであろうか。(2)

**テアイテトス**　ええ、あります、(全部を一体とした)総体のそれです。

**ソクラテス**　いや、何とも雄々しいことだ、(3)テアイテトス、君のその奮戦ぶりは！　だが、その(総体としての)全部というのは、何一つ欠けているものがない場合の、ちょうどそのものが(総体として)全部なのではないかね。

**テアイテトス**　ええ、むろんそれがそうなのでなければなりません。

**ソクラテス**　ところで、全体(完全)であるはずのものというのも、それから何一つ脱けているものの決してない場合の、同じそのものがそうなのではないかね。そしてもしそれから脱けているものがあるならば、それは完全(全体)でもなければ、全部(総体)でもないということになるのではないか。つまり、それはすでに同じものなのであって、欠脱の結果は、その同じものから出て同時に(不全という)同じもう一つのものとなったのではないか。(4)

**テアイテトス**　はい、今になってみますと、全部と全体とは少しも違うものではないように私には思われます。

**ソクラテス**　さて、ところで、われわれがさっき言おうとしていたのはこういうことではなかったのか。すな

わち、およそもしものに部分があるならば、それの全体であり、また全部であるところのものは、すなわちその部分全部を合わせたものであるだろう。

**テアイテトス**　ええ、まったくその通りです。

**ソクラテス**　それでは、もう一度、さっき言いかけていたことをくり返すことになるが、もしいやしくも綴りがすなわち字母であるというのでないならば、必ずや綴りというものは、その字母を自己の部分としてはもつこ

B

1　これまでの論証はたいへんややっこしい感じを与えるが、その大体のプロセスは次のごときものであろうと思われる。ここの議論は四〇章末(204A～B)の、「全体と全部は異なる」というテアイテトスの考えに対して、「もし全体が全部と異なるならば、それは部分から成るものではないということになるけれども、しかし部分がもし全体の部分でないとしたら、それは何の部分であろうか？　部分はやはり全体の部分であるよりほかはあるまい。すなわち全体は部分から成るものでなければならぬ。しかるに全体が全部と異なるなら、前述のごとく、全体は部分より成るものではないこととなる。したがって、かかる矛盾を帰結する前提は廃棄されねばならぬ。全体は全部と異なるものではない」ということを明らかにするためのものなのである。そしてこれまでのところは、その「全体は部分より成るものではない」ということの論証にかかるのである。

2　『パルメニデス』137C参照。

3　203Eの「意気地もなく」に対する。テアイテトスは次第に問答法に上達し、今やソクラテスの論証計画を最後の一線でくつがえしてしまったのである。ソクラテスは改めて総体(すなわち全部)と全体との同一を別途において示さねばならなくなる。なおテアイテトスの防戦ぶりに対するソクラテスのいろいろな批評の言葉としては154D, 158A, 162D, 163C, 199Eなどを見よ。

4　何か脱けているものがあると、その欠脱によって、ものは同時に全体でもなければ、また全部でもないという結果になる。つまり同じ条件によって同じものが同時に二つの名をもって呼ばれるが、この「全体でない」も「全部でない」も同じ意味に用いられているわけである。したがってまたこの同じ欠脱という条件がないときは、元のものは同じ意味で全体とも全部とも言われることになるわけであろう。「全体」のこの意味については『パルメニデス』137C、アリストテレス『形而上学』第五巻二六章を参照。

とのないものでなければならんのではないかね。またもしそうでなくって、綴りが字母と同じであるならば、綴りの可知的であるというのは、字母と同様の程度において可知的であるということでなければならんのではないか。

**テアイテトス**　ええ、その通りです。

**ソクラテス**　それだから、そういうことの起こらないように、われわれは綴りを字母とは異なるものだと想定したのではなかったのか。

**テアイテトス**　はい。

**ソクラテス**　しかし、どうだろう？　もし字母が綴りの部分でないとするならば、君は、綴りの部分ではあるが、とにかくしかし綴りの字母ではない何か他のものの名をあげることができるかね。

**テアイテトス**　いいえ、どこにもそういうものの名をあげることはできません。なぜなら、ソクラテス、綴りの一部となるようなものどもを何かもし私が認めるとしますなら、字母をさし置いて、他のものにおもむくということは笑止なことだろうと思います。

C

**ソクラテス**　いや、それだからして、まったくのところ、テアイテトス、いまの言論にわれわれがよる限り、綴りというものは単一で部分のない(したがってまた不可分なる)何かちゃんとした一つのもの(形相)であるということになるらしいね。

**テアイテトス**　ええ、そうのようです。

**ソクラテス**　では、どうだね君！　おぼえているかね。少し前にわれわれは、次のようなのを結構な言論だと

考えて是認しておったのだが。つまり、それからしてそれ以外のものが合成されるところの基本的なものには、言論(説明)が付かないのであるが、それはおのおのがそれ自体としてそれ自体にとどまる限り合成を許されないものだからなのであって、すなわち、それについては「ある」(有)ということも、「それ」ということも、それらが異なるもの、外来的なるものとして言われる限り、これに付け加えて言うのは正しいことではないからなのであって、そしてじつに、これ(すなわち不可合成性)が原因となって、それを没言論的(説明のつかないもの)ならしめ、不可知ならしめているのだということであった。

**テアイテトス**　はい、記憶しております。

D

**ソクラテス**　それでは、この原因をさしおいて、そもそも他に何か、それが不可分であり、形相において単一であるということの原因となるものがあるだろうか。というのは、僕としては他にそういうものを見ないのだ。

**テアイテトス**　ええ、他にそういうものが事実ありそうにも見えません。

**ソクラテス**　すると、綴られたものもかの基本的なものも、いやしくもそれがもし部分をもつことがなくって、単一の形相をなしているのだとするならば、同じ品種に帰着してしまうのではないか。

**テアイテトス**　事実それはまったくたしかにその通りです。

**ソクラテス**　したがって、一方、もし綴りが字母の多くをふくんでいて、何かその全体といったようなものであるならば、そして字母はすなわちその部分であるとするならば、その部分全部を合わせたものがすなわちその全体と同じであるということがいますでに明らかとなった以上、綴りも字母も同様に知られ得、語られ得るものだということになるであろう。

**テアイテトス**　大いにそうです。

**ソクラテス**　他方、さて、それがもし単一であり、部分なきもの(不可分)であるとするならば、それが没言論的であり、不可知であるのは、綴りとしたところで同様であり、字母としても同然であるということになる。なぜなら、これらをそういうふうなものにする同じ原因がそこにはたらくこととなるだろうから。

**テアイテトス**　ええ、それよりほかには私は言いようがありません。

**ソクラテス**　だから、これをもし誰かが、綴られたものは知られ得、語られ得るけれども、その要素となる字母はその反対であると言う者があるならば、われわれはこれを是認しないようにしようではないか。

**テアイテトス**　ええ、それはそうしなければなりません、もしわれわれが以上の言論に信頼をおくとしますならば。



**ソクラテス**　ところで、また、どうだろうか。いまのとは反対のことを言う者があるとしたら、はたして君はそれをむしろ是認しないだろうか。君が文字を学ぶ上において、自分自身でわが身の上のこととして知っているところのものから判断するとしてだね。

**テアイテトス**　と申しますと、それはどんなことなのでしょうか。

**ソクラテス**　つまり、君が文字を学ぶ時にいつもやっていたことといえば、字母をおのおの一つびとつ、ただそれ自体だけ、目や耳に訴えて識別するように努めるというだけのことで、それはつまり、それによって、それらが話されたり書かれたりする場合、その配置がどうであっても惑わされることのないようにということなのである。

**テアイテトス**　ええ、おっしゃるそのことは至極本当です。

**ソクラテス**　また、弾琴家の許において学習を最後まで仕上げたということは、音の一つびとつに、どの糸の音であるかと、追随して行くことができるようになったということにほかならないのではないか。そして何人もこれこそが音楽のイロハ(字母・要目)[1]と言われるところのものであることを認めるだろう。

B

**テアイテトス**　ええ、それにほかなりません。

**ソクラテス**　したがって、もしわれわれが以上にあげたような、それの要素もまたその要素を束ねたものも、われわれ自身で実際に経験して知っているところのものから出発して、なおその他のものにまで推測を下すとしたならば、一般に要素類の方がこれを束ねたものより、知るのには、一層はるかに明白であって、それぞれ学の対象となるところのものを究極まで把握するためにも、一層はるかに決定的であると言うべきであろう。そしてもし要素は本性上不可知であるが、これを束ねたものは可知的であるなどと言う者があるならば、われわれは彼をもって、故意にせよそうでないにせよ、児戯の振舞をなしつつある者だと考えるだろう。

**テアイテトス**　まさに、まさにその通りです。

1　「音楽のイロハ」とか「音楽のＡＢＣ」とかいう言い方はクセノポン『ソクラテスの思い出』第二巻(一の一)やイソクラテスの『ニコクレスに与うるの書』一六節(18B)などにも見られる。言語の学習にとって字母が基礎的であるところから、他の学習についても「何々のＡＢＣ」という言い方が用いられるようになったものと思われる。

# 四二

C

**ソクラテス**　ところが、それはまあそれとして、いまのそのことについては、僕の思うに、なおほかにも証明のみちがあることはあるようだが、しかしわれわれはそれらのために、当面の問題[1]としておかれてあるものを忘れて見落すようなことがあってはなるまい。問題とはすなわち「最も究極的な意味において知識であるところのものは、真なる思いなしに言論の付け加わってできると言われているが、それはまた一体そもそもいかなる意味において言われているのか」というのである。

**テアイテトス**　ええ、ですから、とにかくそれを見るとしなければなりません。

**ソクラテス**　よし来た、それでは、その「言論」なるものは、そこに求められている意味からすると、何をそもそもわれわれに対してさし示すものなのだろうか。というのは、三つのうちどれか一つを言おうとしているのだと僕には思われるのでね。

**テアイテトス**　と申しますと、いったいどういうもの三つなのでしょうか。

D

**ソクラテス**　まずその第一は、自分自身の思考を声を通じ名詞と動詞などを用いてあらわにするというのがそれだということになるだろう。それはちょうど鏡面や水面に向かってのように、口を通って流れ出て行くものの中へ自分の思いなしを印影づけることによってなされるものなのだ[2]。それとも、どうかね、君にはこういったものが言論(言挙(ことあげ))であるとは思われないかね。

**テアイテトス**　いいえ、私にはそれが言論(言挙)なのだと思われます。事実とにかく誰でもそういう動作をす

る者がおりますと、われわれはこれを言論(言挙)しているのだと申しますから。

**ソクラテス** ところが、他の方面からすると、それだけのことなら、誰にしたところで、生まれつきの聾唖者でもないかぎり、それぞれの事物について自分の思うところが何であるかを表示するということは、遅い早いの別はあるにしても、だれにでもできることなのだ。そしてこのような事情においては、およそ思いなすところのものが何か正しいものであるならば、その限りのすべての人はその正しいものを把持しているというばかりではなく、これにともなう言論をも所持していることが明らかとなるだろう。そして正しい思いなしはもはやいずこにおいても知識から別にされるものではないこととなるだろう。

E

**テアイテトス** ええ、それはほんとうです。

**ソクラテス** さて、それならわれわれは、目下われわれが考察している(正しい思いなしに言論の加わった)ものをもって知識であると宣言している者に対して、これは虚妄の説をなす者だと認定してしまっていいのかというと、軽々にそのようなことをしてはならないのだ。なぜならば、ひとが以上の説を立てるに当って言おうとしたのは、たぶん上述のことではなくして、むしろこういうことだったのかもしれないからだ。すなわちそれぞれの事物を何であるかと問われた時に、そのものを成り立たせている要素を通じて、問者にしかるべき答えを返すことができるというのがそれかもしれないからだ。

207

1 当面の問題とは、三八章末においてテアイテトスが新たに提議した「真なる思いなしに言論の加わったものが知識である」という説を、果してその通りであるかどうか吟味するということである。

2 同様のことが『ソピステス』263E、『ピレボス』38E、『ティマイオス』75Eにも述べられている。

**テアイテトス**　と申しますと、たとえばどのようなものを、ソクラテス、あなたは言われるのでしょうか。

**ソクラテス**　たとえばそれはちょうどまたヘシオドスが四輪の車について、「とはいえ、車をつくるのにも百の材木がいるのだのに、おろか者めが！　それさえ知らぬ(1)」と言っている、つまり、あれなのさ。その百の材木というのを、何なのか僕も言うことはできそうもないし、君だって言えないだろうと思う。むしろわれわれは、車が何であるかと問われて、車輪、車軸、車台、車較(しゃこう)(車箱)、車轅(しゃえん)などの名を答えることができれば、それで結構だとするだろう。

**テアイテトス**　ええ、まったく事実はその通りです。

**ソクラテス**　うん、ところが、さて、そのわれわれを彼その人は、あたかもわれわれが君の名前を問われて大ざっぱな〔綴りによる〕答えをなしたかのように、笑止な者であるとたぶん思うだろう。われわれの思いなしや言挙は、われわれが答えて言っているところのもので正しかったわけだけれども、しかしそれでもってわれわれは、自分を文字の心得ある者だと思い込み、テアイテトスという名前の何であるかの言論を、文字の心得ある者のごとくに把持し言挙しているのだと思っているわけである。ところが、彼その人の思うところでは、心得のある者

B

(識者)として言論するということは、どの場合でも、あらかじめ真なる思いなしに加うるに、これをおのおのその要素となっているものを通じて極めつくすのでなくっては、決してありえぬことなのである。そしてまさにこのことは、思うに、さきの場合(2)においても語られたことなのである。

**テアイテトス**　ええ、そのことは確かに語られたはずです。

**ソクラテス**　それならば、四輪車についてもまたその通りなのであって、けだし彼その人の思うところによれ

ば、なるほどわれわれは正しい思いなしを所持していることはいるのだけれども、これをしかじかの百材木を通じて車のまさにあるところのものをつまびらかにするの能力ある者に比較するならば、この者の方が右の能力だけを余計にもつこととなり、したがって真なる思いなしに加えてさらに言論(言挙・事挙・枚挙)[3]をも会得したこととなるのである。すなわち思いなすだけの者である代わりにこの者は、成分(要素)を通じてその全体を極めつくす者として、車のまさにあるところのものについての識者となり、技術的処理者となっているのである。C

**テアイテトス** すると、ソクラテス、それはあなたにとって結構承認のできる考えだと思われているのではありませんか。

**ソクラテス** それは僕にとってというよりは、もしや君という人が、僕たちのこの探求の仲間として、それを

1 ヘシオドス『仕事と日々』四五六行。苦労を知らない物持ちをののしった言葉。プラトンは「車に百の材木」という短い一句を引用しているだけなのであるが、それだけでは昔のギリシア人にはすぐ前後が思い出されるであろうが、現代のわれわれには何のことか分からないだろうと思われたので、前後の言葉を補って訳しておいた。

2 200A 以下を指す。

3 言論(logos)は「拾い集める」「数え上げる」の意味をもつ動詞 legein と同根の言葉で、この動詞はそれが特に「出来事を数え上げる」場合に「物語る」(ドイツ語 erzählen)の意味となり、さらに「内容のある話をする」ことや「理由のある主張をする」ことなどにも転じたのであって、名詞「ロゴス」もまた内容とか順序立った話し振りとかいうようなものを主として考える場合の「話」や「論述」を意味するのである。しかしその語源の意味からすれば、この場合のような「枚挙」の意味もまたあり得るわけなのである。ところが訳語「言論」にはかくのごときものの対応は認められないので、ここでは窮余の一策として、「ことあげ」の「こと」を言と事に流通し、かつ「事挙」を強いて「枚挙」の意味に読んでもらうこととした。もとより無理なくふうである。

そう思うかどうかということにかかっているのだ。つまり、それぞれの事物についての言論(事挙)とは、要素を通じてこれをつまびらかにする行程がそれなのであって、まだ要素にまで達していない束ねもの(綴り)であるとか、あるいはこれよりもっと大ざっぱなものであるとかによってなされるところの、かかる行程はまだ没言論的なるものであるということを君は是認するかどうか、ひとつそれを僕に聞かせてくれたまえ。われわれはそれを考察してみたいと思うのだ。

D

**テアイテトス** いや、そのことならご念には及びません。私はそれをすっかり是認いたします。

**ソクラテス** というのは、どうかね、それは誰かひとがとにかく何かある事物を知識している者であるというのに、その者にとって、同じひとつのものが、ある場合には一定の同じものの所属だと思われるけれども、他の場合にはこれと異なる他のものの所属だと思われるとか、あるいはまた、同じものの所属として、時には甲をそれであると思いなし、時には乙をそれであると思いなすとかいうような場合がありうると考えてなのかね。

**テアイテトス** いいえ、決して！

**ソクラテス** それなら、文字を学ぶのに、はじめのうちは君自身もまた他の人たちもそういうことをしていたのを、君は覚えていないかね。

E

**テアイテトス** と申しますと、それは同じ綴りの所属として、あるいは甲の文字を考え、あるいは乙の文字を考えるということや、また同じ文字を、時にはちょうどそれが帰属するところの綴りのなかへ入れることもあるにはあるけれども、時には違う他の綴りのなかへ入れることがあるというような場合のことを、あなたは言われるのでしょうか。

**ソクラテス**　うん、僕の言っているのはそれなのだ。

**テアイテトス**　それならば、神明に誓って申しますが、それは確かに覚えのあることです。また、それなら、そういう状態にある人はまだ知識しているのではないと考えます。

**ソクラテス**　それでは、どうだろうか。そういう時期に、誰かTHEAITETOSというのを文字に書くとして、THとEを書くべきであると思って、そう書いたことは書いたのであるが、また別にTHEODOROSというのを書いてみようとして、TとEを書くべきものと思って[1]、そう書いたとするならば、この場合、われわれははたしてこの者をもって貴君らご両人の名前の最初の綴りを知識している者だと言うべきだろうか。

**テアイテトス**　いいえ、むろんそれは、そういう状態にある者はまだ知っているのではないということを、ちょうどいま私たちは同意したところなのです。

**ソクラテス**　では、第二第三第四の綴りについても、この同じ者がそういう状態にあるのを妨げる事情が何かあるだろうか。

**テアイテトス**　いいえ、断じてひとつもありません。

**ソクラテス**　すると、そもそもその場合、THEAITETOSというのを、順々に書いていくとすれば、それは正しい思いなしを道づれとして、一つ一つ(つまびらかに)字母をたどって(要素を通って)行くという行程をもって

208

1　この例はプラトン時代のギリシア語の発音について、TとTHとがまちがわれ易い発音であったことを示す証拠になる。

書くことになるのではないだろうか。

**テアイテトス** ええ、それは明らかなことです！

B

**ソクラテス** ところが、それでいてその者は、われわれの主張からすると、思いなしの正しい者ではあるが、なお知識を欠く者としてあるのではないか。

**テアイテトス** はい、そうです。

**ソクラテス** しかも言論はといえば、とにかくこれを正しい思いなしと共にもっていることはもっているのだのにね。というのは、その要素となっているもの(すなわち字母)を通る(たどる)という行程をもってその者は書いていたのであるが、その行程こそわれわれが同意して言論(事挙)であるとしたものなのだからね。

**テアイテトス** ええ、それはほんとうです。

**ソクラテス** したがって、せっかくここまで君につき合ってもらったけれど、言論をともなう正しい思いなしではあるにしても、まだ知識と呼んではならぬものが存在するということになる。

**テアイテトス** ええ、おそらくそういうことになるのでしょう。

**四三**

**ソクラテス** してみると、われわれは知識というものを言い表わすのに、最も真実な言論を所持しているのだと思ったのであるが、今の様子では、何とそれは夢の上のことだったのである。われわれはそんな物持ちになったのではなかったらしいのである。それともまだわれわれはそういう悲観的な断定を下すには当らないのかしら。

なぜならば、ひとが言論として定義するであろうところのものは、たぶん以上にいわれたようなものではないのであって、かの三つに分けた品種のうちで、まだ残っているほうのものがそれなのかもしれないからだ。すなわちわれわれがさきに主張したところでは、正しい思いなしに言論の加わったものがすなわち知識であると定義している人は、それら三つのうちのどれか少なくとも一つを言論であるとして定めることになるだろうということだったのである。

**テアイテトス**　ああ、これはいいところで思い出させてくださいました。ほんとうになるほどまだ一つ残っていたのでした。つまり、音声のうちに投写された思考のいわば影のようなものがその一つであり、もう一つは、今しがた言われたばかりの、要素を通して全体にいたるの行程というのがそれなのでした。ところで、その第三のものですが、それは何だとおっしゃるのでしょうか。

**ソクラテス**　それは何も特別なものっていうわけではないので、それをそうだと言う人はたくさんあるかもしれないものなのだ。つまり、何か当面の問題になっているものが、それでもってすべてのものから分かれて別になる標識(しるし)といったようなものをあげることができればということなのだ。

**テアイテトス**　と申しますと、たとえばどういうのが、どういうのの言論であるのか、私におっしゃっていただけるでしょうか。

**ソクラテス**　それはたとえば、こういう例ではどうかね、太陽というものについて、それは大地のまわりを運行している天体のうちで最も光明に富んだものであるということにするならば、それは〔太陽というものを説明するための言論として〕君にとってじゅうぶん是認できるものだと僕は思うのだが……。

**テアイテトス**　ええ、まったく事実その通りです。

**ソクラテス**　それならば、こういう例を出したというのがそもそもそのためであったところのものを、さあ、ひとつわかってもらいたいものだ。といったところで、それはちょうどいまわれわれが言っていたことなんだけれど、つまり、君がもしおのおののものがそれでもって自分以外のものから分かれて別になる、その分かれ目をつくるところの差異(1)を把握するようにしたならば、君は人々の主張にいうところの「言論」なるものを把握することとなるだろう。しかしもし君の触れているのが何か共通なものにとどまるというのであれば、その限りにおいては、ただその共通性をもっているものについて君は語っているだけだということになるだろう。

E

**テアイテトス**　ああ、わかりました。そして私にはそのお話のようなのを言論と呼ぶのがいいと思われます。

**ソクラテス**　ところで、いまもしひとがおよそあるもののうちの――それは何でもいいのだが――とにかくも何かについて、それの正しい思いなしをもっていて、その上さらにそれをその他のものから分かつところの差別をも把握したとするならば、その者は、その時まではそれを思いなす者にすぎなかったのに、いまは、まさにそのものを知識している者になるはずなのだ。

**テアイテトス**　ええ、私たちの主張では、とにかくたしかにそういうことになります。

**ソクラテス**　ところが、さて今になって、テアイテトス、どうも僕は、そこに言われていることはちょうど芝居の書割り(2)を見るようなもので、あまりそれに近すぎるところにいるものだから、何が何だか少しもわけがわからなくなってしまった。遠くの方に離れていた間は、何か一理あることが言われているように僕には見えていたんだのにねえ。

**テアイテトス**　ええ？　それはどういうことなんでしょうか、なぜなのでしょうか。

**ソクラテス**　できるかどうか、とにかく僕の考えている意味をはっきりさせるとしよう。いまこの僕が君について正しい思いなしを所持しているものだとして、これにもし僕が君というものを言い表わす言論を付け加えて把握するとしたならば、僕は君を、何と！　識っているということになるだろうが、もしそういうものを把握することがなければ、僕はただ思いなしているだけのことになるだろう。

**テアイテトス**　はい、そうです。

**ソクラテス**　うん、ところが、そこに付け加えられる言論というのは、君という人の差異というもの(3)を言葉で示すということがそれなのであった。

---

1　ここに差異と訳した原語「ディアポラー」(ラテン訳語 differentia)は、アリストテレスの論理学などで種差と訳されているものに当る。しかしここに言われるのはいわゆる種差ではないように思われる。なぜならここでは別に種も類も語られておらず、以下の実例も個人たるテアイテトスが他のものから区別される差異(個別性)のみを云々するものだからである。

　なおこの差別という言葉に、「おのおののものがそれでもって云々」というような説明が付いているのは、ちょうど『パイドン』65Dや『エウテュプロン』11Aなどにおける「ウゥシアー」(essentia)や「パトス」(passio)の場合と同じように、この「ディアポラー」も新しく特別な意味に用いられるからなのであろう。

2　同様のことが『パルメニデス』165C、『国家』X. 602C～Dなどにも言われている。原語は「遠近画」あるいは「陰影画」であるが、ポティオスの辞典に与えられている説明によって、背景画の意味に解しておいた。

3　これは先の差異(ディアポラー)と大体同じような意味に用いられているようであるが、原語はディアポロテースとあって、少し違うから一応「差異というもの」と訳しておいた。フィチノのラテン語訳では「差異」に対しては differentia「差異というもの」に対して differitas を用いている。そしてこの原語「ディアポロテース」は『国家』IX. 587E にも用いられている。

**テアイテトス**　ええ、その通りです。

**ソクラテス**　すると、僕がただ思いなすばかりであった時分には、どうだね、僕は君が君以外のものから、それでもって分かれて別になるところの、それらのものには一つも思考の上で触れてはいなかったということになるのではないかね。

**テアイテトス**　ええ、いなかったということになるようです。

**ソクラテス**　したがって、僕の思考していたのは、共通なるものの何かなのであって、そういうものは、どれも特に君がもっているというようなものでは決してないのであって、他の誰もが同様に所持しているものなのである。

B

**テアイテトス**　ええ、それはそうでなければなりません。

**ソクラテス**　よしきた、さあ、それではゼウスの大神も聞こし召せ！　いったい全体そういうような事情のもとにあって、僕が他の誰か任意の者を思いなさずに、特に君を思いなすということは、どうしてできたのだろうか。というのは、いま僕が「テアイテトスというのは人間であって、目もあり鼻もあり口もありで、つまりそういうふうにして肢体のおのおのをまた一つ一つ具備している者がそれなのだ」とこう考えているとしてみたまえ。そうすると、そのような考えは、何か僕をして特にテアイテトスを考えさせることになるものなのであって、別にテオドロスとか、あるいはまたいわゆるミュシア人の端くれ(1)といったような者を考えさせることのないものなのだろうか。

**テアイテトス**　いいえ、なぜなら、どうしてそういうことがありましょう。

**ソクラテス**　とはいうものの、これでもし僕がただ目や鼻をもっている者だけを考えるのではなくって、それがまた出目や凹んだ鼻をもっている者であるということまで考えるにしたところで、やはり、僕がそこに思いなすであろうところのものは、何も君と限ることは少しもないのであって、僕自身にしても、また僕たち以外のそういった性質をもつ者たちにしても、同様にその思いなしのうちへ入って来るわけではないのかね。

C

**テアイテトス**　ええ、同様に入って来るわけです。

**ソクラテス**　しかしながら、僕は思うのだが、テアイテトスというものが僕のなかで思いなされるのには、あらかじめ君のその鼻の凹み(2)が、僕のこれまでに見た他のいかなる鼻の凹みからも異なるところの、何か差異的な標識(しるし)を僕の脳裡に記憶のよすが(記念)として印象づけ、固定させておくということがなければならないのであって、いやしくもそれ以前にはありうべからざることであろう。そしてこのことは、君というものがそれから成り立つところの、その他の特質においてもまた然るのであって、君のその鼻の凹みは僕をして、また明日の出会い

1　ミュシアは小アジア北西部の地名。古注によれば、「ミュシア人の端くれ」ということは取るに足らぬつまらぬ者の意味に用いられていたらしい。マグネスやメナンドロスの作品から「一人もいない、ミュシア人の端くれさえもいない」とか「ミュシア人の端くれみたいな者でも敵意を抱いている」とかいうような言葉が引用されている。『ゴルギアス』521Bにも「お望みなら、ミュシア人と呼んでも」というような言い方がなされている。

2　原語「シモテース」は209A注3で挙げた「差別性」「共通性」「性質」などと同形式の抽象名詞。アリストテレス『形而上学』第七巻(1037ª31)、第一一巻(1064ª25)が素材と不可離の概念の例としてしばしばこの語を用いることは人の知るところである。思うにこの「凹み鼻」「鼻の凹み」等の例はアカデメイア(プラトン学派)の内にあってすでに多く用いられていたものであろう。ただし、その用途はアリストテレスのごときものに限られなかったであろうことは、『テアイテトス』のこの例などからも充分察せられるところである。

においても、かの記憶を呼び起こして、正しい思いなしを君についてさせるはずのものなのである。

**テアイテトス**　ええ、それは至極本当のことです。

D **ソクラテス**　したがって、差異というものについては、それの正しい思いなしだって、やはり、それぞれのものについてあるかもしれない。

**テアイテトス**　ええ、とにかくそうのようです。

**ソクラテス**　すると、すでにその正しい思いなしがあるのに、これに加えてさらに言論を把握するというのは、その上、どういうことになるのかね。というのは、ものがどこのところで他から分かれて別になっているかを、その上さらに思いなすようにせよと言明しているのだとしたならば、その指令はまったく滑稽なことになるからだ。

**テアイテトス**　と申しますと、それはどんなふうにしてなのでしょうか。

**ソクラテス**　つまり、それがわれわれに命じているのは、およそ何ものについてであれ、どこのところでそれが他のものから分かれて別になっているかということの、正しい思いなしをわれわれは現在もっているのに、そのものについて、さらにまた、それがどこのところで他のものから分かれて別になっているかの、正しい思いなしを追加取得せよということなのである。そしてそれがもしこういうふうだとすると、こういう指令に対しては、

E 無駄なくり返しについてよく言われる、「革紙の巻き棒を回すようなものだ」[1]とか、いや「臼杵(うすきね)を回すようなものだ」とか、いや「何を回すようなものだ」とかいうようなことを言ってみても、まるで何も言わないのと同じことになるだろう。それよりはむしろ「盲人が側についていて命令を下しているようなものだ」と呼ぶ方が正しいかもしれない。なぜならば、その命令は、われわれが思いなしているだけのものを、これから学知しようとする

に当って、われわれが現に所持しているところのそのものを、さらにその上また取得すべきであると命令するものなのであって、それが目先真暗で何も見えない者に似つかわしいことは、まったく格別のことなのである。

**テアイテトス**　ええ、ですけれど、他方もしも……何でしたっけ？　今さっきの疑問に次いでおっしゃるおつもりだったのは(2)！

**ソクラテス**　もしもだね――ははあ、君はまだお坊っちゃんだなあ(3)――いまのその言論を追加把握するということが、もしもかの差異を思いなすことではなくって、むしろ識ることを命ずるものであるとしたならばだね、知識に関する事柄をいとも見事に言い表わしているこの言論は愉快なことになろうというものなのだ。というわ

---

1　これはラケダイモン(スパルタ)の人々によって用いられたもので、トゥキュディデス『歴史』第一巻(一三一の一)の古注によると、細長い円い棒であって、秘密の命令を外地の軍司令官に伝えるような場合に、薄い細長い革紙(犢皮紙の類)をこの棒の上から斜めに巻きつけて、徐々に下の方まで巻いて来たところで、この棒の上から下へ向かって縦に幾段かの層をなしている革紙の上へ文字を書き下す。そして書き終った時にこれを棒から離して革紙だけを使者に持たせて軍司令官のところへ遣わすのである。途中他の者がこの革紙を見てもでたらめに文字が書いてあるばかりで、意味を知ることはできないわけである。他方軍司令官はまた国許にある巻棒と同じものを別にもっていて、持参の革紙を最初のようにこれに巻きつけることによって命令を知るわけである。ただし、ここではこのような事柄は別に考えられていないようである。古法では次の「臼杵を回すようなものだ」ということについて、これは幾度も同じことを繰りかえしながら何の効果も挙げない人々、もしくは早急に何事かをなす人々に対して用いられる言葉だと説明している。

2　バーネットによらず、バッダムに従って、ここの原文は εἰ δέ γε—τί νυνδὴ ὡς ἐρῶν ἐπύθου と読む。

3　テアイテトスはソクラテスのもう一つの場合に望みをかけているようであるけれども、ソクラテスにはそれがもっと悪いものであることがすでに分かっていたわけなのであろう。それを予見し得ないテアイテトスの無邪気な期待がソクラテスを微笑させたわけである。

けは、その識るということはすなわち知識を何らかの仕方で取得するということなのだ。ね？　きっとそうではないか。

**テアイテトス**　はい。

**ソクラテス**　すると、何が知識であるかと問われて、それが答えるだろうところのものは、正しい思いなしに差異の知識を加えたものというのが、どうも見たところそれらしいようではないか。つまり、いまの説では、そういうのが言論の追加取得ということになるらしい。

**テアイテトス**　ええ、そうらしいようです。

**ソクラテス**　そしてしかもそれはまったく愚かしいことなのだ。知識を「何がそれであるか」とわれわれは探しているのに、差異の知識にせよ、何の知識にせよ、とにかく知識を加えた正しい思いなしがそれであると主張するなんていうのは、おめでたくもまた愚かしいことなのだ。したがって、知識であるのは、テアイテトス、君のいう感覚でもなければ、また真なる思いなしでもなく、そうかといってまた真なる思いなしに言論の加わって

B

できるものでもないということになるだろう。

**テアイテトス**　ええ、そういうことになるようです。

**ソクラテス**　それでは、知識について、どうだね、君、僕たちは産むものを何かまだお腹(なか)のうちにもっているかしら。産もうとする苦しみ(陣痛)がまだ僕たちに残っているかしらん。それとも、産むだけのものはもうすっかり産んでしまったのかね。

**テアイテトス**　はい、それは神明に誓って申しあげますが、それでもうすっかりなのです。すくなくとも私は、

私が私のうちにもっていただけのものというよりは、それ以上のものまであなたのおかげで口にしてしまいました。

**ソクラテス**　すると、そのかぎりのものは全部、かの産婆術がわれわれに対して、これはせっかく生み出されたけれども、虚妄なものだから、養育には値しないと申し渡していることになるのではないか。

**テアイテトス**　ええ、それは事実まったくその通りなのです。

**四四**

**ソクラテス**　それならば、この後、テアイテトス、もし君が他のものをお腹にもつようにしようと試みることがあって、もしそれをもつようになるとしたならば、君は今のこの吟味のおかげで、もっとよいものをもって充たされることになるだろうし、またもしお腹が空のままで産まれるものができない場合には、君は君の知らないものを知っていると思ったりしないだけの思慮深さをもつことによって、いっしょにいる人たちを悩ますような重荷となることが一段と少なくなって、人々とはいっそうよく折合っていけることになるだろう。つまり、僕の技術でできるのは、ただそれだけのことなのであって、それ以上はなんにもできないのだ。そしてまた僕も、他のおよそ過去現在にわたる偉大な驚異すべき人物の知っているようなものは何ひとつ知ってはいないのだ。ただ産を助けるという今のべたような仕事を僕と母とが神から授けられたのだ。母は女の人たちの産を助け、僕は若くて上品な、およそ器量のすぐれた男たちの産を助けるというわけなのだ。では、今はとにかく、メレトスが僕を訴えたので、その公事(くじ)に対してバシレウスの役所(1)に僕は出頭しなければならないが、明朝早く、テオドロス、

ここでもう一度われわれは出会うことにしましょう。

1　バシレウスは九人のアルコン（長官）中の第二位にあって、いわゆる「まつりごと」を司った昔のバシレウス（王）の仕事を代行し、司法の一部をみる。ソクラテスは二人の証人を伴ったメレトスの来訪を受け、バシレウスの許への出頭を求められ、かつバシレウスはメレトスの訴訟を受理したので、ソクラテスはまず予審に付せられることとなるのであるが、これはメレトスの呼出しがあってから五日以内の最初の出頭であるか、あるいは予審期間中のことなのであろう。われわれが『エウテュプロン』の始めにおいて出会うソクラテスもちょうどこのようなソクラテスなのである。

# 『テアイテトス』補注

**補注A** 本文注の補足

**1** 185C～D これらの共通なものは、『パルメニデス』第二部の始め(136B)において、ゼノン的方法の練習問題題目(似不似、動静、生滅、有非有)として語られ、同137C以下においても肯定または否定さるべき述語として実際に何度も用いられている。また『ソピステス』245D以下においても、有、動静、同異、非有が互いに述語づけられる相互関係において論じられている。アリストテレスが『形而上学』第三巻(995b20)においてディアレクティコイが考究に努めているものとして挙げているのも同異、似不似、反対、前後その他のものである。思うにこれら共通なものは、186Aに言われているように、非常に多くの他のものに付着し、言葉の上では広範囲に述語されるものなので、自然人々の考察に上る機会も出て来るわけなのであって、『ソピステス』254Cにはこれが「最大の類」(メギスタ・ゲネー)と呼ばれている。もっともこの最大の類はアリストテレスのカテゴリアイのような意味のsumma generaではないようである。プラトンのその有とか非有とか同と異とかいうようなものは、『ソピステス』の同じ場所において見られるように、有も非有から「異なる」ものであり、非有も有から「異なる」ものであるとか、同も「有」(あるもの)であるが、有とは「異なる」ものであるというように、互いに述語づけられ、互いに包摂されるものであって、決して事物分類の究極を示すようなものではない。

**2** 203B プラトンの単音分類については、『クラテュロス』424Cにも、また『ピレボス』18Bにも大体これと同じことの述べられているのを見ることができる。単音は三分され、その一つは「ポーネー」(vox)をもつものでΑΕΗΙΟΥΩがこれに属し、もう一つは「ポーネー」はもたないけれども、「プトンゴス」(sonus)とか「プソポス」(strepitus)とかをもつもので、ΛΜΝΡ、ΣΖΞΨ等がこれに属し、最後のもう一つは「ポーネー」も「プトンゴス」も「プソポス」も何もないもので、これにはΠΚΤ、ΒΓΔ、ΦΧΘなどが属する。最初のものは「ポーネーエンタ」(vocales)と呼ばれて、今日のいわゆる母音に当るのであるが、その意味が必ずしも同じではないし、これに対立する子音の観念がまだ明瞭に現われていないから、これを母音と訳すのは適当でない。わが国の梵語学者はこれに韻という名前を当てている。第三の部類は今日のいわゆる黙音または破裂音と同じことである。第二類はその中間で、『ピレボス』においては「メサ」(中間音)と呼ばれ、アリストテレス『詩学』(1456b27)において「ヘーミポーノン」(半母音)と呼ばれるにいたるものである。この

第二第三の部類が「シュンポーナ」(consonantes)の名の下に一括されるのはさらに後の時代のことである。ここではできるだけ原語の意味に近い訳語を用いて、今日の術語を避けたのであるが、その結果また「声音の有無」が今日の音声学でいう有声音無声音の区別と間違えられそうになってしまった。プラトンのこの分類では今日のいわゆる有声音無声音の区別は考えられていないので、文字通りの有声音はプラトンではむしろ今日の母音に当り、無声音はいわば子音に当るわけである。

**補注B**　原文についての補注

この訳文の基礎にある原文の読み方、あるいは解釈については、旧訳『テアイテトス』(昭和一三年、初版、岩波書店)の注にくわしくのべてある。その後、岩波文庫版『テアイテトス』(昭和四一年)および『田中美知太郎全集』第一二巻所収の『テアイテトス』で、若干の補正を試みたが、今回も僅かではあるが補足訂正したものがある。ただ本全集や文庫本は、旧訳の注の一部分を選抜したにとどまり、議論にわたるものはすべて省略されねばならなかった。しかし旧訳にないもので、訳文の説明を必要とすると考えたものについて、ここに若干を追加することにした。

**1**　144A　ここのところをリデル、スコットの希英大辞典は sudden and quick to anger と訳しているが、これは他の一般の訳に従ったまでのことかも知れないが、しかしこのように限定してしまうのは行き過ぎではないかと思う。ὀξύρροπος turning quickly, prop. of a delicate balance は一応その通りであって、「はかり」などが瑣細の相違にも鋭敏に反応する場合などを考えればいいわけである。だから、それは「激し易い」という場合にもあてはまるだろう。しかしそれが「怒り」だけに限定される必然性はないように思う。ὀργή はもっとひろく temperament, disposition, mood を意味し得ることは、この大辞典に明らかにされている通りである。特に複数形にその例が多いのではないか。さらにプラトンの原文そのものについて見れば、οἵ τε ὀξεῖς.... καὶ πρὸς τὰς ὀργὰς ὀξύρροποι とあって、ὀξεῖς と ὀξύρροποι が καὶ πρὸς τὰς ὀργὰς(……でも鋭敏、敏感)というように対応するのであるから、訳文はその点の対応も示さなければならないのである。

**2**　155B「あるいは僕が、この齢であって、丈がのびたり、あるいはその反対の変化をしたりすることがないとすると」に対して、コンフォードは、I, being of the height you see, without gaining or losing in size.... という訳をつけている。わざと異を立てたような訳であるが、これは不可能ではないけれども適切とは言えない。「このままの丈である」と「大きさに増減がない」というのは同じことの重複であって、相互に説明し合うこともなく、ただ余計な反覆になってしまう。これに反して、「年齢」と「大きさの増減がない」ということは、それぞれに独立のことがらを指しているから、一方が他方の説明にもなる。さらに「僕がこの齢であって」は

「君は若いから」とも対応して、説明上必要な意味をもつことにもなる。コンフォード訳では「若者の君」という文句が浮いてしまうだろう。リデル、スコット大辞典が、so great, so large の例にこの箇所をあげ、御丁寧にも the size I am の訳を附しているが、このように意味をきめてしまうのはあやまりである。

**3**　159 E～160 A　ここの原文 τοῦ γὰρ ἄλλου ἄλλη αἴσθησις, καὶ ἀλλοῖον καὶ ἄλλον ποιεῖ τὸν αἰσθανόμενον をコンフォードは for to a different object belongs a different perception, and in acting on its percipient it is acting on a person who is in a different condition and so different person と訳し、「ポイエイ」を「作用する」と訳すべきことを主張する。しかしこれも強いて異を立て、意表をつく試みとして興味があるけれども、そのような解釈の必然性はないように思う。まず簡単なことから注意すると、コンフォードは ποιεῖ の主語を ἄλλο と解しているが、そのような必然性はない。すぐ前の文句の主語は ἄλλη αἴσθησις であるから、つづく ποιεῖ の文章の主語も ἡ αἴσθησις ἄλλη οὖσα と解するのが自然である。そしてその前の文章 (ἐγώ.... ἄλλο.... αἰσθανόμενος) の主語は「僕」という感覚者である。だから、ἄλλο を主語にすることはまったく突然のことになるが、その必然性はまったく認められない。なお瑣細なことであるが、コンフォードは ἄλλο.... αἰσθανόμενος· τοῦ γὰρ ἄλλου の原文のつながりをまったく無視して to a(!) different object などと訳しているが、これはかれがコンテクストを忠実に追うことをしていない一つの証拠になるだろう。かれが自分の訳を正当化するために、そのフット・ノートにおいて、Heraclitean principle とか a slight extension of the common usages εὖ ποιεῖν τινα ... とかいうものをかつぎ出しているが、これはいずれも公式論であって、一般的な可能性を指すだけで、この場合にそれを適用すべき必然性を保証するものではない。ここでソクラテスが言おうとしていることは、「感覚する者としての僕は、他のものを感覚するときは、感覚が他のものとなり、感覚者としての僕も他の性質のものにされ他のものとなる」ということを一方におき、これに対して「僕に作用を及ぼすもの、例えば酒は、僕以外の者を相手にするときは、他のもの(味)を生み、他の性質をもつものとなる」を対応させるわけである。原文によって対応をみるなら、それは次のようになる。まず 159 E 7～160 A 1 の文章は、「感覚するもの」(僕)にかかわり、その内容は㋑のうちに含まれる。次に 160 A 1-3 の文章は感覚者に「作用を及ぼすもの」(例えば酒)にかかわるもので、㋺の内容をなす。ここでは㋑と㋺を前後二段の文章に分ち、Iにおける㋑と㋺、IIにおける㋑と㋺を直接対照させることにした。

I)　㋑　ἐγώ.... ἄλλο.... αἰσθανόμενος
οὐδὲν γενήσομαι οὕτως

㋺　τὸ ποιοῦν ἐμὲ.... ἄλλῳ συνελθὸν
οὔτ᾽.... μήποτ᾽....　ταὐτὸν γεννῆσαν τοιοῦτον
γένηται

II)　㋑　τοῦ γὰρ ἄλλου ἄλλη αἴσθησις, καὶ ἀλλοῖον καὶ ἄλ-

λον ποιεῖ τὸν αἰσθανόμενον

㋺ ἀπὸ γὰρ ἄλλου ἄλλο γεννῆσαν ἀλλοῖον γενήσεται

つまりⅠはⅡによって説明(γάρ)されるのであるが、それは、㋑感覚するものは他のものを感覚するときは、今までのと違った他の感覚者となるのであり、㋺作用を及ぼすものも他のものを相手にすれば、今までとは同じでなく、他の性質をもつものとなるということの、何故であるかを説明する文章ということになる。ところで、この説明のポイントはどこにあるかと言えば、㋺においては、当のものが ἀλλοῖον になるのは、ἀπὸ . . . . ἄλλου ἄλλο γεννῆσαν によるとするところにあると言わなければならない。そして㋑において、これに対応するものを求めるとすれば、τοῦ . . . . ἄλλου ἄλλη αἴσθησις にあると見なければならない。ところがコンフォードの訳では、この ἄλλη αἴσθησις が宙に浮いてしまい、どうして「感覚するもの」が ἀλλοῖον καὶ ἄλλον となるかの説明もなく、いきなり「作用を及ぼす」ものが、既に ἀλλοῖον καὶ ἄλλον であるものに「作用」するだけのことになってしまう。強いて説明しようとすれば、暗黙のうちに ἡ ἄλλη αἴσθησις が τὸν αἰσθανόμενον ποιεῖ ἀλλοῖον καὶ ἄλλον のだということを予想しなければならなくなるだろう。コンフォード訳は文章の対応を破り、余計な雑音を入れるだけのものであると言わなければならない。

**4** 166E～167A ここの旧訳は「この両者はいずれも(これ以上)知恵ある者となすべきものではない。なぜなら、それは不可能でもある」としておいたが、他の訳者はいずれも「この両者はいずれも、どっちがどっちより知恵があると見るべきではない」の意味に解している。原文 σοφώτερον . . . . τούτων οὐδέτερον δεῖ ποιῆσαι は簡単であるから、他の言葉を補って考える方が、意味もはっきりしていいわけである。さしあたり οὐδετέρου を補うのが簡単かも知れない。他の訳者はそういう意味に読んでいるわけである。しかしそうすると、次の「また、病体の者はかくのごときものを思いなすが故に知恵なき者であるとか、健康体の者はこれと異なるものを思いなすが故に知恵ある者であるとか、そんなふうに決めて言うべきものでもない」という文章と、ほとんど同じことを言うことになる。むろん「また、……ない」(οὐδέ)はいろいろに取られるから、同じことをまた具体的に説明したものとも解されるだろう。あるいは「知恵ある者」と、「より知恵ある者」と「知恵あらざる者」との区別は、「知恵ある者」と「より知恵ある者」との区別とはちがうという議論も出るだろう。しかし少し後のところで、「教育においても……誰か虚偽の思いなしをしている者が後になって真を思いなすように何人かによってなされる(. . . . ἐποίησε δοξάζειν)というようなことは少しもなかった」(167A)と言われているのを見ると、今の場合も、同一人が「後になって、より知恵ある者にされる」という可能性の否定が言われているのではないかとも考えられる。この場合には σοφώτερον . . . . οὐδέτερον . . . . ἑαυτοῦ ποιεῖν というような文章を考えればいいわけである。このような比較の表現はプラトンの慣用である。『パルメニデス』141A Sqq., 152D その他参照。しかしこの二つの解釈は、簡単な原文のままでは、どちらと

もきめてしまうことはできないだろう。今度の「両者いずれをもより知恵ある者となすべきではない」という、ややぎこちなくあいまいな訳文は、原文の不定性をそのまま訳したわけである。もし明快さが求められるなら、やはり旧訳を取りたいと思っている。

# 『クラテュロス』解説

水地宗明

## 一　登場人物

**ヘルモゲネス**(Hermogenes)　この人は当篇からも明らかなようにアテナイ人で、ヒッポニコスという人の息子であり(384A, 406B)、有名なカリアスという人の弟であった(391B〜C)。父ヒッポニコスの家は代々の名家であり、富裕をもって聞こえてもいて、特にヒッポニコスは、当代ギリシア人中随一の金満家と称せられた。クセノポンによると、彼は六〇〇人の奴隷を所有していたという。また彼の跡継ぎ息子のカリアスの(したがっておそらくヒッポニコスの)家は、プラトンの『プロタゴラス』によれば、アテナイ中で最も大きくて豪奢なものであったという。

しかし弟のヘルモゲネスの方は、当篇のソクラテスのことば(391C)によると、遺産相続の権利がなかったようであるから、彼はヒッポニコスの嫡出子ではなかったのであろう。彼が貧困に苦しんだことは当篇中でも暗示されているのだが(384C)、クセノポンの『ソクラテスの思い出』第二巻(一〇)では、ソクラテスがディオドロスという人物にむかって、ヘルモゲネスが貧窮して生きて行けなくなりそうであるので、救ってやるよう(おそらく、ディオドロスの使用人として雇用するよう)勧めている。また、ソクラテスの弟子のアイスキネスの書いたある対話篇の中では、ヘルモゲネスは金銭に執着する人であって、友人のテラウゲスが困窮しているのを救わなかったとして非難されたという。

哲学の学徒としては、ヘルモゲネスはソクラテスの親密な弟子であったらしい。プラトンの『パイドン』には、ソクラテスの刑死を見守った二〇人近い友人弟子たちの一人として彼の名が見えるし、クセノポンの『ソクラテスの思い出』第一巻

(二)にも、ソクラテスの真の交友として例示された七名余りの人々の中に彼も数えられている。またプロクロスは彼を「ソクラテスの徒」(ソークラティコス)と形容している。

しかしヘルモゲネスは独創的な理論を立てうるような才能の持主ではなかったようである。当篇に登場するヘルモゲネスも「自分は言説を工夫することに巧みでない」と自認している(408B)。

だがヘルモゲネスは、ソクラテスの裁判から刑死にいたるまでの状況を観察しうる位置にあって、後に自己の記憶を資料としてクセノポンに提供したらしい。後者の『ソクラテスの弁明』や『ソクラテスの思い出』は、一部分ヘルモゲネスの証言に基づいているようである。

さて当篇中のヘルモゲネスは、名前がある事物の名前である正当性は、人間の勝手な取りきめ以外にはないと主張する。歴史上の実在人物としてのヘルモゲネスが本当にそのような主張をしたのかどうか、裏づける史料は皆無であるが、概して言えばプラトンは人物描写にかなり忠実であるらしいので、あるいはそのような思想(制定任意説)をヘルモゲネスがいだいたことがあるのかも知れない。ただそれにしても、取りきめ説そのものは当時としても珍しいものではなかったかも知れない。なぜならこの理論は、当篇中でソクラテスによって「通俗的(平凡卑俗)なもの」と呼ばれているからである(435C)。そしてそのためかプロクロスも当篇のヘルモゲネスを、大衆の素朴な思いなしをあんぐりと口をあけて感心している非知識的な人、と酷評している。とはいえ当篇に登場するヘルモゲネスの性格は、同じプロクロスの評言を借りるならば、学ぶことを好み、言論を聞くことを喜び、すなおに真理を愛する人であることが、冒頭から明らかである。

なおプロクロスの注釈によると、デモクリトスが当篇のヘルモゲネスと同意見であったということで、そのために、当篇のヘルモゲネスの主張は実はデモクリトスのそれであると解釈する人たちもある。ただしデモクリトスの意見の内容をプロクロスが正確に知っていたかどうかは疑わしい。もしかしたらデモクリトスが問題にしたのは言語の起源なのであって、正しさではなかったかも知れない。すなわち彼は、言語が自然に存在するものではなくて、人為的に制定されるものだと主張しただけかも知れない。もしそうだとしたら、デモクリトスの主張と当篇のヘルモゲネスのそれとは全面的には一致していないわけである。

他方において、もし歴史的ヘルモゲネスが制定任意説を信じていたとするならば、歴史的ソクラテスはこの問題についてどう考えていたのであろうか。

**クラテュロス**(Cratylos)　まず当篇から推定できることは、この人はアテナイ人で、スミクリオンという人の息子であったということである(429E)。また彼は対話が終ってから田舎へ(多分地所などの管理のために)出かけることになっているので(440E)、何ほどかの財産の所有者であったのだろうか。また彼がヘラクレイトス哲学を信奉していたことは、当篇の多くの箇所(特に440E)から明瞭である。また彼は(ヘラクレイトスのごとく)大衆を軽蔑していたかも知れない(例えば437D参照)。

次にアリストテレスの証言によれば、プラトンは若いときにクラテュロスを先生としてヘラクレイトス派の思想になじみ、感覚対象となるすべてのものは常に流動しつつあって、それらについては知識が成立しないということを学び、この思想を後年にいたるまで保持したという(『形而上学』第一巻987ª32 sqq.)。

また、クラテュロスは最終的には、「二度と同じ川に歩み入ることはできない」というヘラクレイトスの思想(当篇402A)を徹底して、一度ですら歩み入ることはできないと考えたという。そして、事物はたえず流動しつつあるので、言論によってそれを規定することは不可能であると考えて、何も語らないでただ人差指で事物をさし示すのみであったという(『形而上学』第四巻1010ª10–15)。

また、アイスキネスの書いたある対話篇の中に描かれたクラテュロスは、激昂して何かを叫び、口からシューシューと音を発し、激しく両手を振り廻していたという(『修辞学』第三巻1417ᵇ1 sqq.)。

しかし本篇で描かれているクラテュロスは、アイスキネスの描写したほど粗野な人物ではなさそうである。たしかに彼の態度には、重々しさのある反面、傲慢、尊大、もったいぶりがあり、また議論の進展を完全に理解せず、反論されてしまった自己の主張になお固執するなどの欠点が見られるようであるが。

当篇でクラテュロスの姿がいかに描かれているかということは、プラトンが自分の旧師をどのように取り扱っているかという問題でもあるのだが、この点についてもいろいろ意見の相違がある。ある人はクラテュロスの描写をカリカチュアと見

る(J. v. Ijzeren)。ある人は、少なくともプラトンは旧師に対してよい思い出をもっていないと見る(メリディエ)。また一説によると、クラテュロスは多少の敬意をもって取り扱われているが、プロタゴラスほどには尊敬されていないという(リッター)が、別の説によると、クラテュロスはヘルモゲネスのように思いなしにとらわれる人ではなく、知識を追求する哲学者として描かれているという(プロクロス)。訳者としては、当篇に見られる若きクラテュロスの欠点は、プラトンが彼の性格を真実に近く描写した自然の結果であるかも知れないので、作者の側に旧師に対する悪感情があったと見るにはおよばないと思う。訳者の個人的印象では、クラテュロスはソクラテスから必ずしも軽蔑されていず、幾分好意的に取り扱われているように思う。

なお全篇を通じてクラテュロスがことば少なであるのは、プロクロスによると、ヘラクレイトス派の特徴であるという。当篇のクラテュロスは、ソクラテスから「君はまだ若くて力盛んな年代にある」と言われている(440D)ので、二〇歳前後か、せいぜい三〇歳以前と考えられる。ヘルモゲネスもクラテュロスの仲間であるので、ほぼ同年輩と見るべきであろう。プロクロスの注釈書でも、この両名が「若者(メイラキオン)たち」と、またヘルモゲネスが「青年(ネアニスコス)」と呼ばれている。他方ソクラテスは(429Dの彼のことばから見ても)すでに老齢であるらしいことが窺える。

*

当篇に登場するクラテュロスは、一方で万物が流動しつつあると主張しながら、他方で名前は事物の本質を表わすと主張している。しかし万物が流動しつつあるならば、いかなる事物も一定の本質を有しえないから、一定の名前で呼ばれることは不可能であるように見える。そこで、果して歴史上のクラテュロスが名前の正しさは本性的であるというような主張をしたのかどうか、疑わしくもなってくるわけである。その他いろいろな理由から、当篇のクラテュロスは、単に歴史的クラテュロスだけでなく、別の人物をも代表しているのではないか、と疑う人が少なくない。そのような影の人物の候補者として(プロディコスやプロタゴラス、あるいはポントスのヘラクレイデスを考えた研究者もあるが)シュライエルマッハー以来特に有力なのは、ソクラテスの弟子でプラトンより一五歳くらい年長のアンティステネスである。

アンティステネスがクラテュロスの背後に存在すると推定される理由は、次のようなものである。

(a) アンティステネスは『教育について、あるいは名前について』という書を著わして、この中で「名前の考察は教育の出発点(根源)である」と述べたらしい(エピクテトス、I, 17, 12)。他方当篇のクラテュロスも、名前の正しさについての問題は最重要のものであると言っている(427E)。

(b) 当篇のクラテュロスは、虚偽を語ることは不可能であると主張している(429D)。他方、アンティステネスが、他人の言説に反論することや虚偽を語ることが不可能であると主張したことは、アリストテレスその他の人々の証言から確実である。

(c) 当篇でソクラテスは、自分がライオンの皮を被ったと冗談を言っている(411A)が、このことは英雄ヘラクレスを連想させる(411A注2参照)。そしてヘラクレスは、アンティステネスが手本とした人物なのである。

(d) プラトンは他の対話篇においても、あからさまに名前をあげないでアンティステネスを批判しているようである。

以上の根拠のうちには薄弱なものもあるけれども、とにかく万物流動論、名前の正しさについての自然説、虚偽不能論の三つをすべて歴史的クラテュロスが主張したかどうかについて、若干の疑問が存するわけである。

## 二　議論の解剖

全篇は大別して二部分に分かれる。第一部(一―三七、383A～427D)は主としてソクラテスとヘルモゲネスとの対話であり、第二部(三八―四四、427D～440E)は主としてソクラテスとクラテュロスとの対話である。

第一部では、名前の正しさとは各個人の自由な取りきめであるとするヘルモゲネスの主張をソクラテスが反駁して、名前の正しさは本性的でなければならない(つまり、名前は名づけられる事物の本性を表わすべきである)ことを論証しようとする。

第二部では、名前の正しさは本性的なものであるとするクラテュロスの主張に対して、ソクラテスが、現実には名前の正しさはある程度使用者間の取りきめに依存することを説明する。

第一部はさらに(序論部における論争点の記述を除いて)二つの部分に区分されることができる。すなわち、

(a)名前が恣意的に定められるべきでないことをソクラテスが、いわば理論的、一般的に名前というものの本質から論証する部分(二―一〇、385A～390E)と、

(b)具体的に、実例に即して、そのことを実証しようとする部分(一一―三七、391B～427D)とである。

(a)の要旨。ヘルモゲネスの名前規約説は、次の二要素を含む。すなわち、(一)同一の事物が各国語でそれぞれ違った名前で呼ばれることが多いのであるから、各社会で公共的に用いられている名前は、人々の取りきめによって定められたものである(385E)。

(二)同様に各個人もまた、気ままに事物に対して私製の名前を与えることができる。

ソクラテスの批判は、まず(二)に対して行なわれる。各人が気ままに私製の名前を用いるならば、思想の伝達は不可能になり、言語の社会的機能は失われてしまう(二、385A)。

次にソクラテスの批判は(一)、(二)に対して共通に、しかし主として(一)に対して向けられる。

①言明(平叙文)には真偽の別がある。したがって、言明の最小部分である名前にも真偽の別がある。(名前が名づけられる事物の本質を表わしていないならば、その名前を含む言明も真でありえない、というわけである。)とすると名前は気ままにではなく、真であるふうに定められるべきであろう(三、385C)。

②事物は客観的な、固定した本質を有している。そして作用も事物の一種である。したがって、作用は作用と作用対象との本性に合致するふうに行なわれるときにのみ成功する。ところで「言明する」ことは一種の作用であり、「名づける」(名をいう)ことは言明する作用の一部分である。それゆえ名づけることも気ままにではなく、本性に即して行なわれるべきである(四―六)。

③名前は事物の本質を識別し教示するための道具と規定される。そしてこの道具をうまく制作できるのは、法と

慣習を定める技術を知る者のみである(七―八)。

④ 制作技術者が制作するばあい、手本とするのは例えば「梭自体」とでも呼ぶべき理念的なものである。同様に立法技術者も「名前自体」を手本として名前を定める。そのばあい梭自体は一つであるがそれぞれの用途に応じて多種多様の(異なる形相をもつ)梭が制作されるように、名前自体は一つであっても、それぞれの事物を表現するために(同一言語内で)形相を異にする多数の名前が定められる。さらに、同一の事物に対して各国語において異なる名前が与えられている事実は、素材(音節)の相違によるものであると説明される(九)。

⑤ 立法者が制作した名前を上手に使用できるのは、問答法を知る者だけである。そして、あらゆる技術的制作物がその使用者の監督下に制作され、できばえを判定されねばならないように、名前を定める仕事も問答法を知る者によって監督されなければならない。

以上で、名前の成立根拠は本性的(自然的)なものであり、命名は特別の知識を有する者のみが正しくなしうる仕事であると結論される(一〇)。

(b)の要旨。① 考察は、名前の正しさについてのホメロスの意見を探ることから始められる。そして『イリアス』に見える川、鳥、丘、人の名九つ(うち七つは原意説明なし)が取り上げられる。その結果、子の名は親の名と同じ名であるべきこと。その理由は、親と子が等しい本性をもつのが自然であるから、ということ(ただし不自然に親に似ない子が生まれたばあいは、子の本性にふさわしい名が与えられるべきこと)。つまり、名前は名づけられるものの本性を表わすべきこと。そのばあい、文字や綴が違っていても、二つの名前が同じ(意味の)名前でありうること、などが明らかになる(一一―一四、391D～394E)。

② オレステスとその先祖の英雄たちと神々との名前八つの説明(一四、394E～396C)。

③ 英雄や人間に与えられた固有名詞は、当人の本性を表わさないことが多いとして回避される。そして永遠に存

在するはずのものの名前の原意が考察される。まず、〝神〟、〝ダイモン〟、〝英雄〟、〝人間〟、〝魂〟、〝からだ〟の六つの名前(一五—一七、397B~400C)。

④〝ヘスティア〟以下神名およそ二二、ついでに〝酒〟も(一八—二四、400D~408D)。

⑤〝太陽〟などの天体の名、〝火〟、〝水〟などの自然物、自然現象の名(ついでに〝犬〟も)、あわせて一四(二四—二五、408D~410E)。

⑥〝思慮〟、〝正義〟など徳性と悪徳の名(脱線して、いくつかの他の名前も)、利益と損害に関する名前など、およそ三五。あわせて〝日〟と〝軛(くびき)〟も(二六—三一、411A~419B)。

⑦〝快〟、〝苦〟など感情、意志、思考に関する名(動詞を二つ含む)およそ二三(三二、419B~420E)。

⑧〝名前〟、〝真〟、〝偽〟、〝有るもの〟などの名、七(三三、421A~421C)。

⑨以上で取り扱われたものはすべて複合語である。ソクラテスはここで、複合語(派生した名前)が事物の本性を表わすためには、それを構成する単純な名前(最初の名前)が事物の本性に似ていなければならない、と結論する。そして最初の名前として字母を考え、アルファベット二四(旧綴字法で二一)文字中一四字(うち一字は旧アルファベットになし)の原意を推定する。あわせて〝動き〟と〝止まり〟の二語の説明(三三—三七、421C~427D)。なお、これに先立ってソクラテスが、理想的だが自分には遂行できないと述べた方法(有るものと字母とをそれぞれ区分した上で相似た字母や綴を相似た事物に与える方法)にも注目すべきである(三五)。

以上で(第一部は終了し)ソクラテスはクラテュロスの主張を彼に代わって根拠づけたことになり、クラテュロスも大体の賛意を表する(428C)が、ソクラテスは自分の言ったことを再吟味しなければならないとして、クラテュロスを対話の相手に引き出すことに成功する。

第二部におけるソクラテスとクラテュロスとの対話は、次の三部分に区分されることができる。

(a)(三八―四一、427D～435D) ここでは、名前と事物との相似性は、いかなるものであるかが考察される。そして事物の本性を完全には表現しない名前も、その事物の名前でありうること、名前の成立根拠が取りきめにも依存することが示される。なお、その途中で虚偽を語ることはできないというクラテュロスの意見にふれられ(429C sqq.)、虚偽の名づけがありうることが示される。

(b)(四二―四三、435D～439B) ここでは「名前の原意(すなわち真意)を知る者は、事物の本質を知るのであり、事物の本性を教示する方法としても、認識する方法としても、これ以外のものはない」というクラテュロスの主張が反駁される。そして事物認識の最良の方法は、事物をそれ自身によって、あるいはある事物を相似た別の事物を通じて知る方法であると結論される。(なお、すべての名前の原意が整合してはいないことを示すために、九つの名前の原意が考察される)。

(c)(四四、439B～440E) ここでは、ヘラクレイトスの万物流動説に反対してソクラテスが、美そのもの、善そのものなどと、これらを対象とする認識は、流動するものでないことを暗示する。

＊

なお当篇におけるクラテュロスの主張の内容は十分に明瞭ではないが、その要点をまとめると、およそ次のようなことになるだろう。

(1) ひとつの名前はひとつの事物に対応していて、その事物の本質を表現している。そうでないものは名前ですらない。したがってすべての名前は名前であるかぎり正しい(429B)。

(2) むろん名前は命名者によってつけられたものである。しかし名前が名前であるのは、ひとえに、当該事物の本性を表わすかぎりにおいてである。単なる取りきめでは、名前は生じない(383A, 434A)。

(3) ひとつの事物が、ギリシア語の名前、ペルシア語の名前など、多数の名前で名づけられることがあるように見

える。しかし真実の名前は、万国共通のものである(383A〜B)。(このばあいクラテュロスは、名前の意味のようなものを考えているのかもしれない。)

(4) 名前aが事物Aを、名前bが事物Bを表わすとして、人が誤ってaをBに適用することはありうる。しかしこのばあいでも、aはAを表わすのであり、そのかぎり真である。その意味で、われわれは虚偽を語ることも、虚偽の名前を言うこともできない。しかしまた、aをBに適用する人は、無意味な発声をしているにすぎないとも言える(429D, 430A)。

(5) 万有はつねに流動変化しつつある。そして、すべての名前がそのことを表わしている。そうでないものは、名前ですらない(436C)。

(6) 太古の命名者――それは人間以上のものであったかもしれないが(438C)――は事物について完全な知識をもっていた(436B〜C)。その証拠に、すべての名前の意味は互いに整合している(436C)。

(7) われわれは事物の本性を他人から学ぶにしても、自分で発見するにしても、名前の原意を学ぶか発見することによって、そうするほかはない。事物認識の唯一の方法は、名前の意味を知ることなのである(436A)。

ソクラテスは、以上のすべての点を批判したようであるが、しかしある点には幾分の制限を加えたにとどまり、ある点には全面的に反対したように思われる。

＊

なお、第一部(b)で、名前の原意を推定するためにソクラテスが使用した手法には、次のようなものがある。

(1) 名前の現在の形は、原形から文字が除かれたり、加えられたり、(その語の内部で)転置されたりしてできあがっているばあいが多い(399A, 414Cなど)。特に、長い表現が短縮されることが多い(415D, 416B, 421A)。

(2) アクセントが変化することもある(399A, 416B)。

(3) このような変化の原因としては、第一に、おおげさな、あるいはもったいぶった語形や、美しい発音を好む人間の心理が考えられる(400B, 404D, 414C〜D, 418C〜D, 426Dなど)。また、時のたつうちにいわば自然に変化することもある(414C, 419D, 421D)。
(4) 古いアッティカ語から原意を推定できるばあいがある(398B, 410C, 411E, 418B, 420B, 426C)。
(5) もとは一つの表現であったものが分断されて二つの名前になっているばあいがある(396A, 410D)。
(6) アッティカ方言以外のギリシア語方言から、原意を推定できるばあいがある。イオニア方言から(412B, 417C, 426Cなど)、ドーリア方言から(401C, 409Aなど)、ラコニア弁から(412B)、テッタリア弁から(405C)など。なおエレトリア弁にも言及されている(434C)。
(7) 外国語の名前がギリシア語にはいってきているばあいがある(409D sqq., 416A, 421C)。

## 三　題名と主題について

『クラテュロス』という題名は、おそらくプラトン自身が与えたものであろう。分量の上から言えば、クラテュロスが対話する部分は全篇の約四分の一にすぎないのであるが、にもかかわらず当篇が『ヘルモゲネス』とではなくて、こう題された理由は、一つには、ヘルモゲネスとソクラテスとの対話部分においても、クラテュロスの主張の意味を解明(あるいは発展)させることが主要なモチーフとなっているからであろう。

次に「名前の正しさについて」という副題は、だれか後代の学者が書き加えたものであろうと推定されているのだが、当対話篇の主題の簡明な表現として、まったく適切なものであるように思われる。

では名前とは何であろうか。『ソピステス』では、名前とは「作用(動作)の主体を表わす語」というふうに定義されている(なお当篇 423E, 423B, 421A 参照)。名前の具体例としてまず思いつくのは、ギリシア人のばあいでも、

やはり固有名詞であったようであるが、そのほかに普通名詞やさらに形容詞(分詞を含む)までも、当篇では名前として取り扱われているようである。その理由は、ギリシア語では形容詞に冠詞を前置することによってそれを名詞化し、文の主語となすことができたからであろう。

もっとも、名前の正しさについて言われたことは、動詞などについてもほぼあてはまるはずであり、現に当篇中でも、まれには動詞(述べことば)の正しさにも言及されている(420C, 426E, 431Bなど)のであるから、しばしば行なわれているように、この副題の意味を「語の正しさについて」と拡大解釈しても、さしあたって大きな支障はないのかも知れない。(名前と述べことばを区別したのは、われわれの知るかぎりプラトンが最初である。その他の品詞の区別を彼は試みていない。)

次に、名前の正しさとは、それぞれの名前をして、ある事物の(正当な)名前たらしめる理由である。そしてその理由がどこに存するか——例えば名前の事物に対するある関係に存するか、あるいは名前を定める者の気ままな意志に存するか——これが当対話篇の主題なのである。

誤解のないように付け加えておくと、当篇の主題は「言語の起源について」ではない。すなわち、言語が自然に発生したか、人為的に作り出されたかというような問題を主として論じているのではない。名前が人間によって(あるいは人間以上の者によって)制定されたものであることは、三名の対話者が一様に承認していることなのである。問題は、制定された名前が正しい名前である理由は何か、ということなのである。けれども他方、名前の正しさについて議論を戦わせる人たちが、名前の発生起源について全然ふれないことも困難であるだろう。だから当篇中にも、名前の起源についてのプラトンの意見の暗示のようなものが散見するわけである。

## 四　対話設定年代

当篇の対話が行なわれたと想定されている(?)年代を推定することは容易でない。

(1) 当篇ではヘルモゲネスの父ヒッポニコスはすでに亡くなっているらしい(391C)が、彼の没年は前四二一年からそう以前ではないことがわかっている。

(2) 409A～Bで「アナクサゴラスが最近唱えた説」に言及されているので、アナクサゴラスの没年を前四二八年とすると、設定年は四二八年を仮に下るとしても、あまり多くは下ることができないように思われる。ただし「最近」という語を幅広く解釈することも可能であろう。

(3) 当篇中で何度か言及されている新式アルファベット(398D注3参照)は、前四〇三年に公式に採用されたのであるから、対話設定年は同年からソクラテスの没年(前三九九年)までの間に限定されそうである。ただし新式アルファベットは、公式改訂以前にかなり早くから民間では使用されていたらしいので、この手がかりも決定的なものではない。

(4) 本篇の対話の当日、ソクラテスは早朝からエウテュプロンといっしょにいたと述べられている(396D)。もしこの記事が『エウテュプロン』篇でのソクラテスとエウテュプロンとの対話を指しているとするならば、当篇の設定年代は『エウテュプロン』篇のそれと同じく前三九九年となる。ただしこの時期には、実在人物としてのヘルモゲネスとクラテュロスは、青年の時期をとっくに通り越していたはずである。

結局決定的なことは言えないのであるが、プラトンが対話年代を一応設定していたとすれば、前四二〇年前後(ソクラテスは五〇歳くらい)か、三九九年ころ(ソクラテスは七〇歳くらい)のどちらかではあるまいか。

## 五　執筆年代

プラトンが『クラテュロス』篇を著わした年代については、研究者の意見は必ずしも一致していないし、訳者自

身も定見を有しない。ここでは二、三の代表的な考え方を紹介するにとどめる。

(1) いわゆる文体統計的研究の示すところでは、当篇はプラトンの初期作品群に属する。この点を承認するかどうかが第一の問題であるが、今日大半の研究者はこの説を支持しているようである。

次に、同じく文体統計的研究によれば、当篇は初期作品群のうちでも後の方で、そして『饗宴』よりは少し前に書かれたことになっている。ところで『饗宴』は前三八五年から二、三年の間に書かれたとする説が有力であるから、当篇の著作年代の推定下限は前三八三年(プラトンが四四歳ころ)となる。

(2) 内容的に見ても、当篇は『エウテュデモス』篇と不可分であって、後者の直後に、あるいはせいぜい一、二の対話篇を間にはさんで書かれたと見る人が多い(例えば、レーダー、ヴィラモヴィッツなど)。また『饗宴』や『パイドン』に見られるイデア論と当篇で暗示的に言及されるイデア論(399 A sqq., 439 C sqq.)とを比較するならば、当篇がこれらの対話篇より先に書かれたものであることは明らかだとする学者も多い。

ところで『エウテュデモス』篇の執筆年代は一説(メリディエ)によると前三八六年頃であり、『饗宴』のそれは前記したように前三八五—三年であるから、当篇は前三八五年頃、すなわちプラトンが四一、二歳の頃、第一回シシリー旅行(遅くて前三八七年)から帰国し、アカデメイアの地に学園を開設した(前三八五年頃)時期に書かれた、ということになりそうである。

(3) 他方において、当篇は内容的に見て『テアイテトス』篇や『ソピステス』篇と密接に関連している点があることも否定できない事実であって、主としてそのために(またその他の理由からも)当篇の執筆年をこれらの対話篇のそれに近づけようとする説も存在する。ところで『テアイテトス』は前三六九年かその翌年に(すなわちプラトンが五六、七歳の頃に)書かれたと見るのが普通であるから、この説によると、当篇の執筆年は前二説に比して十数年遅くなるわけである。

## 六　プラトンの真意

(a) 当篇は直接的には名の正しさについて検討することを主題としているのであるが、しかしプラトンは何を目的として、あるいはどのような観点から、この主題を取り扱っているのであろうか。

解釈の大きな分かれ目は、当篇の目的が主として認識論的なものであるか、単に言語学的なものであるかという点である。

前説に従うならば、当篇におけるプラトンの主要な関心事は、認識に対して名(あるいは一般にことば)の果しうる役割である。

しかしそのうちの一つの解釈(例えばツェラー)によると、プラトンの結論は完全に否定的である。名は認識に対して何らの寄与もなしえない。事物(あるいはイデア)の認識は、問答法によってのみ可能なのである。

しかしながら当篇第二部で名前の認識論的価値に対してソクラテスの示した不信は、現実の言語に向けられたものである。そして現実の言語に対する批判は、あるべき理想的な言語を念頭においた上で行なわれているのであるとすれば、プラトンは『国家』篇において理想の国家を構成したように、理想的な言語の可能性に想到して、それの暗示を当篇で与えているのではなかろうかという説(Th. Benfey、一八六八年)も出て来ようというものである。

しかしまた、プラトンは現実の言語の欠陥を、理想的言語を考案することによってではなく、まさに問答法によって克服しようとしたのであるとする解釈(例えばアーペルト)も、わたしたちを首肯させるところをもっている。問答法の二大手法である区分と定義によって、わたしたちの有する概念とそれを表現する名が整理され、よく区別され、秩序づけられ、定義されるのであるから、意味あいまいな箇々の名の欠陥は補なわれうるわけである。

問答法自体がしかし、名を使用し、名を必要とするものである。それゆえに問答法を学ぼうとする者は、まず名

の本来の機能、現実の名の欠点や限界などを心得ておかなければならない。その意味において、当篇は問答法的対話篇なのであり、問答法を学ぼうとする者は、名の正しさについての考察から始めなければならないとする解釈(プロクロス)もある。

なお、プロクロスはまた次のような〃深遠な〃解釈を下している。わたしたちの魂には模写する能力があって、名を用いて事物を模写する。この魂の作用を記述するのが当篇の目的である。ただし自然が奇形を生むことがあるように、魂も模写に失敗することがあるので、現実には事物の本質を正しく表現しない名も存在するわけであると。

これらの解釈と対照的なのは、当篇の主要目的を単に言語学的なものとみなす解釈である。例えば、プラトンは本篇において言語学のような学問の基礎を築こうとした、あるいは、より具体的に言えば、当篇の中心問題は語の構成の原理についての研究であるというような説(M. Leky)、あるいは、当篇は主として語源を取り扱い、語源以外にはほとんど何も取り扱っていないというような解釈(D. Ross)などである。

当篇が文法学的言語学的問題にふれ、言語についての一般的考察をも行なっていることは、一見して明らかな事実である。文法学も言語学も未発達あるいは未発生の時代に、哲学者はいわばすべてをみずから創造しなければならなかったわけである。そしてプラトンは、自己の取り扱ったすべての問題に、大きな関心をいだいていたのであるかも知れない。しかしながら哲学者プラトンの最も大きな関心は、やはり事物の認識に向けられていたのではないだろうか。

＊

なお当篇の内容には批判的否定的な面が大きいように見えるので、執筆の動機は、何者かの所説に対する反発にあったのではないかと考える人が少なくない。そのばあい批判の対象としては、例えばヘラクレイトス派、前記したアンティステネス、プラトンの甥スペウシッポスの弟子で、語源研究に熱心であったかもしれないポントスのヘ

ラクレイデス(この人の父はエウテュプロンという名前であったと伝えられる)、あるいは語の原意を知ることによって事物を知ろうとする傾向を有したプラトン自身、あるいはプラトンの弟子たちなどが考えられている。またヘルモゲネスの規約説を批判することによって、プラトンはデモクリトスを批判しているのだと見る人もある。あるいはまた、プラトンは特定の人物をではなく、むしろ多種多様の思潮を複合的に念頭におき、それらを批判しているのではないかとする見解(メリディエ)もある。ただし当篇の内容が単に否定的であるのではなく、積極的で、しかも重要な主張をも含んでいるとするならば、執筆の主要な動機が単に他説を反論しようとする欲求にあったとすることは、もちろん誤りであるだろう。

*

(b) 名前の正しさについての、当篇中のソクラテスあるいは著者プラトンの真意についても、研究者たちの見解は一致していない。むろんソクラテスがヘルモゲネス説かクラテュロス説の一方に単純に賛成しているのではなくて、両説を批判しつついわば第三のテーゼを提示していることは一読して明瞭であるけれども、その第三のテーゼの内容が十分に明らかではないのである。

ある人々(例えばシュタインタールやアーペルトやロビンソンなど)によれば、プラトンの真意は結局規約説(もちろんヘルモゲネスのそれとは異なる形のものではあるけれども)にある。(シュタインタールによると、第一部でソクラテスが主張した本性説の根拠の多くは、第二部において撤回されたのである。)

また別の人々の意見では、現実の名前には多分に規約的な面があるけれども、理想的な名前は本性的であるべきだというのが、プラトンの真意であるという。

仮にもし同一事物を指す二つの名前があって、一方は単なる規約に基づいて使用されており、他方は事物の本性を体現しているとするならば、どちらがより望ましい名前であろうか。当篇中のクラテュロスもソクラテスも、相

一致して後者を望んでいる(434A)。(ただソクラテスの意見では、現実に存在する名前は、そのような理想的なものではないのである。そして理想的な名前を制定することの可能性は当篇では肯定も否定もされていない。あるいはむしろ、暗黙のうちに肯定されているかのごとき印象をすら受ける。)

したがって、少なくとも当篇の末尾を書いている段階でプラトンは、名前の本性的な正しさというものが可能であり、望ましいものであると信じていたという(グロートなどの)意見も傾聴に値いするように思われる。また、現実に存在する名前のうちにも、できるかぎりは事物の性状を写し取ろうとしているものがあることを、ソクラテスは承認している(435C)。わたしたちは、象形文字である漢字のうちに、いっそう明瞭にそのことを見てとることができるであろう。

*

(c) 分量の上で全篇の半ば以上を占める語の原意の説明に関しても、プラトンの真意はどこにあるのか明らかでない。

かなり多くの研究者(例えばシュタルバウム、ジョウエット、メリディエなど)の解釈によれば、プラトンはこの部分で当時のだれかある人物(あるいは学派)の原意解釈の手法を模倣しつつ、これを批判しあるいは嘲弄しているのである。この解釈の根拠は、(1)ソクラテスが自分の発言をエウテュプロンから受けた霊感のせいにして、しかもこの霊感を悪いつきもののように取り扱っていること(396Dsqq.)、(2)説明そのもののなかにも時おり明白な冗談が含まれており、またしばしば愚弄的な調子が感じられる、などである。なお(3)原意説明の多くが、今日の語源研究者の観点から見て誤りであることも、多くの人のつまずきの石であるかも知れない。

しかし別の人々(古代の多くの読者、近代では例えばショイブリンなど)は、当篇の原意説明をプラトン自身まじめに信じていたと見る。その根拠は、(1)プラトンは他の対話篇中でも同様の原意説明を試みていること、(2)当篇中

の原意説明にも、今日的観点から見ても正しいと思われるものがかなりあること、などである。ちなみにメリディエ(一九三一年)の試算では、説明された語数一一二ないし一四〇ばかりのうち、正しいと思われるものは二二ほどである。

さて、この問題を完全に解決することはほとんど不可能であるけれども、訳者としては次の諸点を指摘して読者の参考に供したい。

(1) 原意説明の大部分がプラトンの創意にかかることは、本文中のヘルモゲネスのことば(413D)から、おそらく明らかであろう。むろんこの事実は、他の人物あるいは学派が語の原意についての思索に耽溺していて、プラトンはその手法を模倣したにすぎないということの可能性を妨げるものではないが。

(2) (現実の)名前の原意が事物の本質を必ずしも表示していないことは、ソクラテスによって指摘されている。人名について(397B)、神名について(401A)、大多数の名について(436B, 439C)。名はむしろ、名づけた人の願望や事物についての意見を表現しているのである。

(3) では、命名者の事物についての見解を探るという意味での原意研究に、プラトンは成功したとみずから信じていたのであろうか。原意説明が恣意的になりやすいこと、せいぜい蓋然的な結論しか得られないことは、ソクラテスが明言している(414D～E)。

けれども他方ソクラテスは、多数の名前の原意がヘラクレイトス的世界観を指向していることを承認している(437D, 439C)。してみるとプラトンは、名前の原意の探り当てに自分がある程度は成功していると信じたのではなかろうか。

とはいうものの、いくつかの名前のばあいには、プラトンは原意の探り当てよりも、むしろそれを機会に自己の哲学的見解などを、おもしろおかしく表明することを目的としているのではないかと疑われるふしがある。〃ハデ

ス〃の説明（403 A sqq.）や〃パン〃の説明（408 B sqq.）、〃美しい〃の説明（416 B sqq.）などがその例である。

(4) 原意説明の際にソクラテスが用いたいろいろな手法（420ページ参照）は、言語学的に見て首肯されるべきものが多く、当時としては卓見である。これらをすべて戯れと解釈することは困難であろう。一説（メリディエ）によれば、言語学的に正しいものであっても、プラトンの見地からして学問的であるとは必ずしも言えないという。確かに、名の原意の探り当てが結局事物の認識に役立たないとするならば、プラトンの見地からすれば、原意説明の成果も哲学的価値を有しないことになるだろう。しかしだからといって、原意説明のための努力のすべてが単なる戯れにすぎなかったと結論することはどうであろうか。プラトンはおそらく、これらの手法の確立に真剣に取組んだのであろう。当対話篇が西洋言語学史の最古の、かつ重要な文献となりえた主要な理由もそこにあるのではなかろうか。

(5) ソクラテスは、原意説明の際の自分の〃知恵〃をエウテュプロンからの霊感に帰した。この事実は二様に解釈することが可能である。先にも言ったように、多くの研究者はこれを、原意説明が歴史的ソクラテスに似つかわしくないからだとか（ヴィラモヴィッツ）、説明内容をプラトン自身が信じていないからだと、解釈する。しかし注目しなければならないのは、ヘルモゲネス（413 D）やクラテュロス（428 C）が、この責任転嫁を額面どおりには受け取っていないという事実である。しかも他方においてこの両名とも一致して、ソクラテスの〃知恵〃がいわば神がかり的なものであることを承認している（396 D, 428 C）。そしてプラトンにあっては、神がかり的状態は必ずしも悪いものではなくて、真実を探り当てるための不可欠的な要素とみなされることがある。そこで、エウテュプロンへの責任転嫁は、実はソクラテスの単なる卑下にすぎないのであって、乗り移っているのは、より高貴な真のミューズである、とも解釈することが可能である。

＊

結局当対話篇は、アプロディテとディオニュソス二神のごとく(406B〜C)戯れ好きなプラトンの手によって、まじめの中に戯れが混じり、戯れの中にまじめが織り込まれていて、両者は識別不可能なまでに交錯し、解釈者を困惑させているわけである。

なお原意説明部分は、近代の一般の読者には退屈に感じられるのが普通であるようだが、それはわれわれのギリシア語の知識の不足によるもので、古人にとっては当篇はユーモアにあふれたおもしろい読み物であったかも知れないことを、付け加えておきたい。

(付記) ソクラテスやプラトンの時代に用いられたギリシア文字は、現在大文字と呼ばれている字体にだいたい一致するらしい。いわゆる小文字は、ずっと後の時代に幾多の変遷を経て生じた字体である。

使用文献(主要なもののみ)

Proclus, *In Platonis Cratylum Commentaria*, Leipzig 1908.
L. F. Heindorf, *Platonis Dialogi Tres : Cratylus, Parmenides, Euthydemus*, Berlin 1806.
G. Stallbaum, *Platonis Opera Omnia*, Vol. V. Sect. II, Gotha 1835.
H. Steinthal, *Geschichte der Sprachwissenschaft bei den Griechen u. Römern*, Bd. I, 2. Aufl. Berlin 1890.
C. Ritter, *Platon*, Bd. I, München 1910.
U. v. Wilamowitz-Moellendorff, *Platon*, 1919 (5. Aufl. Berlin 1959).
O. Apelt, *Platons Dialog Kratylos*, Leipzig 1922.
L. Méridier, *Cratyle* (ビュデ版、プラトン全集 V, 2), Paris 1931.
A. J. Festugière, "Antisthenica" 1932 (*Études de Philosophie Grecque*, Paris 1971).

P. Friedländer, *Platon*, Bd. II, 3. Aufl., Berlin 1964.
Pauly-Wissowa, *Realenzyklopädie d. klass. Altertumswissenschaft* :
Bd. VIII, 2. 1913 Artikel „Hipponikos (3)"
Bd. X, 2. 1919 Artikel „Kallias (3)"
Bd. XI, 2. 1922 Artikel „Kratylos" (J. Stenzel)
P. Edwards ed., *The Encyclopedia of Philosophy*, New York 1967 :
Art. "Semantics, History of" (N. Kretzmann)
Art. "Cratylus" (C. B. Kerferd)
R. Robinson, *Essays in Greek Philosophy*, Oxford 1969.(『クラテュロス』に関する二論文を含む)

# 『テアイテトス』解説

田中美知太郎

## 登場人物

**エウクレイデス**(Eucleides)　本篇および『パイドン』59Cなどによって知られるように、ソクラテスの弟子または親しい仲間の一人。『パイドン』ではソクラテスの臨終に立会った内輪の人数中に名を挙げられている。Aulus Gellius, Noctes Atticae VI 10には、彼が熱心なソクラテスの弟子として、メガラにおいて市民のアテナイへ行くことが死刑をもって禁じられていた時にも、非常な危険と困難とを冒してソクラテスのもとに通ったということの逸話が語られている。またプラトン学派のヘルモドロスによれば(Diog. L. II. 106)、ソクラテスの死後プラトンはじめ他の仲間の人たちが避難したのはメガラの彼のもとにであると言われている。彼の年代は詳細の点は不明である。彼の出生地については、大体これをメガラと見てよいように思われる。

彼の学風については、彼がパルメニデスの哲学に親しみ、ソクラテス派の重要問題であった善を、それは英知とか神とか理知とかいうようないろいろな名前をもって呼ばれているけれども、実は単一なものなのであると宣言し、かつまた善に対立するものの存在を否定したということが、上述のディオゲネス・ラエルティオス第二〇巻(一〇の一〇六)に報告されている。同様の証言はキケロ(Academica II. 42)の中にも見出される。すなわちキケロによればエウクレイデスに始まるメガラ派の哲学は、プラトンからも多くのものを借りてはいるが、その系統はむしろクセノパネス、パルメニデス、ゼノンの流れを汲むものであって、善をもって常住単一にして相似でありまた同一であるものと為したということである。

**テルプシオン**(Terpsion)　エウクレイデスと同じように、前出の『パイドン』においてはソクラテスの臨終に立会ったご

く内輪の人数の一人となっている。そしてその同じ場所において、彼もまたメガラから来た人として記されている。そのほかには彼に関する記録はほとんど見られないのであるが、ただプルタルコスの「ソクラテスのダイモーンのしるしについて」(De genio Socratis XI. 581 A～B)に、ソクラテスのダイモーンのしるしというのは実はくしゃみの占いなのだという説が語られていて、そこにテルプシオンの名前が引合に出されている。

**ソクラテス**(Socrates)

**テオドロス**(Theodoros)　キュレネの人。アリストテレス学派のエウデモスが編んだ幾何学史 Fr. 84(DK)によると、その年代は大体においてアナクサゴラス(前五〇〇―四二八年)と同じ頃だということになっている。すなわちこれによると彼の活動期は五世紀中葉のアテナイにおけるいわゆるペリクレス時代に一致するわけである。かれはこの対話篇(146 B, 162 B, 177 C)の中において、すでに七〇歳位の高齢にあるソクラテスを前にしてなおしばしば自己の老齢を云々するところを見ると、たぶんソクラテスよりは年上であったのではないかと思われる。

テオドロスが特に幾何学者として盛名のあったことは、本書中(143 E)にも述べられているが、なお前出のエウデモス幾何学史にも、またプラトン『ポリティコス(政治家)』257 A やクセノポン『メモラビリア』第四巻(二の一〇)にも同様のことが述べられている。特に本篇第五章に語られているところでは、テオドロスはいわゆる無理数の問題の幾何学的な取扱いを$\sqrt{2}$以外の場合にも拡張することによって、ギリシア数学史上に重要な一役を演じていたことが知られるのである。なお幾何学のほかに、本篇(145 A, C～D, 169 A)では、天文、算術、音楽等が彼の学問として数えられている。これらの学問の系統については、イアンブリコスの「ピュタゴラス的生活」(L. Deubuer 版 p. 146)末に彼の名がピュタゴラス派の中へ数えられてあるから、あるいはピュタゴラス派の伝統をつぐものではないかとも想像されるのであるが、イアンブリコスだけの証言ではまだ充分でない上に、本篇中には別にその暗示も与えられていないので、明確なことは何も言えないように思われる。

**テアイテトス**(Theaitetos)　本篇第二章によって知られるように、アテナイ・スゥニオン区の人エウプロニオスの子。Suidas の辞書によると、黒海地方のヘラクレイアで教えたことがあるらしい。ソクラテスの弟子とも、またプラトンの弟子とも記されているが、ソクラテスの弟子というのはおそらくこの対話篇による推測であろう。ディオゲネス・ラエルティオス

第二巻(五の二九)にも同様の場合が見られる。彼の学問は哲学、天文学、数学の各方面に及ぶもののごとくであるが、特に数学上の仕事は重要でもありまた著明でもある。エウデモスの幾何学史では、ヒッポクラテスや本篇の対話人物テオドロスなどにつづくプラトン時代の大数学者として、わがテアイテトスの名がレオダマスやアルキュタスの名とともに挙げられている。そして学者はいわゆるユークリッド(エウクレイデス)の『幾何学原論』中第一〇巻と第一三巻の重要な部分をテアイテトスによるものであるとなし、さらにまた人によっては第七巻、第八巻の中にまでテアイテトスの仕事を見る者があるくらいである。プロクロス(Proclus in Eucl. lib. I ed. Friedl. p. 68)によれば、いわゆるユークリッド(エウクレイデス)は多くのものをエウドクソスとテアイテトスから取って、これを完成させたのだということである。それはともかくとして、本篇の第五章においても取扱われ、また古注(Euclidis Elementa ed. Heib. Vol. V. p. 450)がテアイテトスの発見と明記している『幾何学原論』第一〇巻の定理九においても取扱われている、かの無理数に関する研究がテアイテトスの数学的業績として高く評価さるべきものの一つに属することは疑いないところである。またエウデモスの語るところでは、テアイテトスはかの mediales とか apotomae(apotome)とか binominales(ex duobus nominibus)とか呼ばれる無理数の線分——これについては Aristoteles(?), De lineis insecabilibus 968b20; Eucl. Elem. X. 21, 36, 73 など参照——をそれぞれ幾何学的、算術的、音律的比例中項の対応によって区別したということである。さらにテアイテトスのもうひとつの重要な仕事は立体幾何学上のもので、Suidas の辞典には、彼がプラトンの立体と呼ばれる五つの立体について書いた最初の人であると記されている。もっともユークリッド第一三巻の注のはじめ(Eucl. El. ed. Heib. Vol. V. p. 654)には、その五立体のうち立方体とピュラミッド形と一二面体とは既にピュタゴラス学徒によって取扱われ、テアイテトスによるのは八面体と二〇面体だけであって、これがプラトンの立体と呼ばれるのは、『ティマイオス』54D～55C にそれが語られているからだと書かれてある。おそらく Suidas の記事はテアイテトスが始めてこれら立体の数学的性質を充分学問的に取扱ったということを意味するのであろう。

テアイテトスの年代については、この対話篇によってみると、その生年はだいたい前四二〇—四一五年頃ではないかと思われる。というのは、この対話篇にあらわれるテアイテトスはしばしば(142C, 143E, 144C, 146B, 168E) μειράκιον(メイラ

キオン)と呼ばれているが、これは一〇代の二〇に近い方、いわゆるハイティーンの者を指すと考えられるからである。したがってソクラテス最後の年(前三九九年)に彼がこの年齢であったとすれば、その生年はむろん前四二〇―四一五年頃となるわけである。Suidas の辞典に彼の活動期をペロポンネソス戦争後と記し、エウデモスが彼をレオダモスやアルキュタスと並べて語っているのもだいたいにおいて同じ方向を指すものと見ることができよう。次に彼の死の年もまたこの対話篇によって決定することができるように思われる。なぜなら本篇第一章によってみると、テアイテトスはこの時のコリントス付近の戦闘による傷病で間もなく死んだと思われるのであるが、その戦闘の年を知ることによってわれわれは彼の死の年を確かめることができるからである。ところでその戦闘の年については、これを前三九四年とする説と前三六九年とする説の二説が有力なのであるが、前説ではテアイテトスはわずか二一から二五歳位で死んだことになり、彼が為したと思われる前述の数学上のいろいろな重要の仕事が説明困難となるように思われる。またもしSuidas の記述を信じて、テアイテトスがプラトンの弟子となったり、黒海地方のヘラクレイアで人々に教えたりしたと考えるなら、説明の困難は一層多くなるわけである。したがって今日では前三六九年説の方が一層有力である。

一

この対話篇は、プラトン著作を『法律』に近い後期著作と、『饗宴』や『パイドン』あるいは『ゴルギアス』などに代表される前期著作に分けるとき、その中間に位するものとして、『パルメニデス』や『パイドロス』などと共に、例外的な取扱いを受けている。対話篇のはじめに言われているコリントス戦争は、たぶん前三六九年のそれであろうと推定されるので、この対話篇が書かれたのは、その戦争の記憶もまだ生々しい前三六八―七年の頃であろうと考えられている。プラトンがおよそ六〇歳の頃で、シケリア島に二〇年ぶりで再渡航する前後ということになる。文体的特長を見ると、対話篇は終りに近づくにしたがって、後期著作のそれを示すことが知られるので、こ

の著作の完成には比較的長時間を要し、その間に中断があって、後の部分は後から付加されたものではないかという推測も生じている。実際の内容についても、最初の部分と最後の部分とでは、議論の仕方もちがうようにも感じられるからである。しかしそれだからといって、全体に統一性がないと考えるのは、速断のあやまりとなるだろう。いま全篇の内容を概観すると、それが三つの部分に区別されることは、誰しも認めるところである。対話篇のテーマは、副題にも示されているように、「知識について」なのである。そして「何が知識であるか」(145E, 146E)という問いに対して、三つの答えが出されるのであるが、その三つの答えの吟味が、この対話篇の三つの部分を構成することになる。吟味の結果は否定的であって、この対話の最後の部分において、

「知識であるのは、テアイテトスよ、君のいう感覚でもなければ、また真なる思いなしでもなく、そうかといってまた真なる思いなしに言論の加わってできるものでもない」(210A～B)

という言葉で、三つの答えがことごとく否定されている。三つの答えとは、見聞がすなわち知識であり、ひとは何かを感覚すれば、すでにそれを知ったことになるというのが、その第一の答えである。しかし感覚だけでは、色や音はとらえられるが、色もあり、音もあるということは、すぐにはとらえられないというようなことから、感覚すなわち知識とすることの不足が指摘される。そして今度は、そのような有無、異同、数などの思考が、知識の第二の答えとなって登場する。しかしわれわれは、自分の思うことがすべて正しいとは言えない事実を知っている。したがって、われわれの思いなしが、すべてそのまま知識であると言うことができないので、正しい真なる思いなしだけを取って、これを知識とするわけである。しかし思いなしの真なるものが、そのまま知識と言えるかどうか。法廷で行なわれる正しい裁判は、必ずしも知識によるものではなく、正しい説得と正しい思いなしだけで行なわれるという事実は、両者の区別を示すと言わなければならないだろう。誰も居あわせないところで被害を受けたというような事件については、裁判官はいろいろの状況や証拠から、正しい思いなしをもつことはできるにしても、そ

れは事実の直接的な知識とはちがうのである。それは当事者以外に知りようのないことなのである。

これに対して、第三の答えは、一つの思いつきとして語られるのであるが、正しい思いなしは、それだけでは未だ知識でないけれども、これにロゴスを加えれば、すなわち知識となるのではないかという説である。しかしロゴスとは何か。その一つの意味は、思っていることを口外すること、ことばに直すことで、すぐに得られるものがロゴスであるということになる。しかしこれは安易なことであって、口外するだけのことなら誰でもできるが、知識はそのように容易ではない。これだけでは正しい思いなしと知識とは、ほとんど区別がないに近いだろう。そこでロゴスの第二の意味が考えられる。それは数えつくすということで、ロゴスには「かたる」ことと、「かぞえる」こととの二義が考えられるから、後者の意味を取ったことになるだろう。しかしここでは、さきの場合にロゴスの「かたる」意味が、単に口外することにおきかえられたように、「かぞえる」ことも、例えば一つの名前を構成している字母の一つ一つを、ただなぞるだけのことにされてしまう。これもまた安易なことであって、誰でもこのような仕方で、何でもきわめつくすことができるだろう。そこでまた別にロゴスの第三の意味が考えられることになる。ロゴスは数えつくすことよりも、ものとものの差異をはっきりさせるものとも考えられるからである。しかしここでも、それはソクラテスとテアイテトスという、鼻のかっこうまでよく似た二人の人物の差異というような簡単な事例で考えられることになる。そうすると、このような差異だけなら、ロゴスを待つまでもなく、われわれはテアイテトスなり、ソクラテスを思い浮かべるとき、すでに正しい思いなしとして持っているのである。したがって、ロゴスを加えるというようなことは、まったくの蛇足に過ぎないということになる。

## 二

このようにして、『テアイテトス』における知識の問題は、以上の三つの答えと、それの反論によって、極めて

簡単に取扱われていると見ることができる。またしたがって、この対話篇の内容が、ただこれだけのものであるなら、すべてはまったくあっけないことになってしまうだろう。しかしこれらの議論は、全対話篇のわずかの部分を占めるに過ぎないのである。いま『テアイテトス』全篇をステファヌス版の頁数で勘定すると、一四二頁から二一〇頁まで、総計およそ六八頁になる。このうち右の三説を直接反駁した議論はというと、

一、184B5～186E の二頁強
二、200E～201C の一頁弱
三、206C～210A の四頁弱

という、極小部分を占めるに過ぎないのである。それなら、その他の部分は、いったい何の議論をしているのであろうか。

まず最初の「感覚がすなわち知識である」という説についてみると、この主張はすでに 151E において与えられているのだけれども、それが以上の比較的短い議論で、最終的に否定されてしまうのは、ようやく 186E においてなのである。その間の三五頁にわたる議論は、それなら何なのか。最初テアイテトスが、ソクラテスの「何が知識なのか」という問いに対して、「感覚」がそれだと答えたとき、

「まことにどうも、君が知識について語ったのは、容易ならん説のようだて。プロタゴラスの説がまたそれらしいんでね」(151E～152A)

というように言って、ソクラテスは話を別の方へもって行く。テアイテトスの主張は、単純にそれだけのものとして受けとられずに、もっとひろい思想的関連においてとらえられ、それの吟味批判も、そのような思想的な背景から、より根本的に試みられることになるわけだ。プロタゴラス説は

「あらゆるものの尺度であるのは人間だ。あるものについては、あるということの、あらぬものについては、あ

らぬということの」(152A)

というプロタゴラス自身の言葉で直接的に与えられているが、それと感覚知識説とのつながりは何なのか。見たり聞いたりする感覚は、誰でもできることなのだから、そのような感覚がすなわち知識であるとするならば、誰もひとから学んだり、教えてもらったりしなくても、自分自身の見聞だけで間に合うことになる。ひとは感覚がはたらいていれば、誰でも何でも知っていることになる。プロタゴラスの命題は、人間のこの知識的自足性を主張したものであって、めいめいが万物の尺度で、それぞれの見聞に従って、何かを思えば、それがそのままあるわけで、誰の考えることも、その感覚する通りに、真実なのだということを主張したものだと解される。

しかしプロタゴラス説は、その帰結においてはこのように感覚知識説と一致するところがあるにしても、その意味するところは、ただそれだけにつきるのではない。それが主として言おうとしていることは、ものはそれ自体で何かであるのではなくて、われわれめいめいとの関係において、それを見聞する者にとっての何かであるにすぎないということなのである。しかしながら、この相対性の主張は、その前提として、何ものもそれ自体で何かであるのではないという、もう一つの根本的主張を含むものであった。そしてプラトンは、このような自体的な有を徹底的に否定する立場として、すべてを生成の流れのうちにとかしこんで、何ものをも固定させまいとするヘラクレイトス説を考える。何ものもそれ自体であるということはないというプロタゴラス説の前提が、ここにおいて極端化され、徹底されるわけである。しかしこの極端において、ヘラクレイトス説はいかなる知識も不可能にし、いかなる立言をも無意味にする。何かについて何かを言うことは、すでにそれを固定化することであるが、しかしその時はもう言われた当のものは流動して、すでにそれではなくなっているからだ。そして知識が成り立つためには、何らかの自体的な有を固定しなければならなくなるとき、プロタゴラス説の主張にも制限がついて来ることになる。なぜなら、難病や難戦、あるいは難航の場合などにおいて、われわれは誰でも自分で間に合うようなものではなく

て、それぞれの道に明るい専門家の助けを求めなければならないのであるから、プロタゴラス説はそこで重大な修正を受け、知識ある者だけを尺度と認めなければならなくなる。これを逆に言えば、知識が成り立つためには、別にそれ自体のあり方をもつものがあって、それはわれわれめいめいの勝手な思わくによって左右されるものではないということを認めなければならないのである。

## 三

プロタゴラス説はあらゆるもののあり方を、主客の相関関係において成り立たせるものと解されるとき、近代的な新しさをもつとも見られるだろう。そしてこのような相対化において、ものがそれ自体で何かであるようなあり方が全面的に否定されて、それがわれわれにとってほとんどまったく無抵抗なものにされるとき、万有の主観化が完了して、徹底した観念論の立場ができ上がることになる。しかし相対化もそれによって意味を失うことになるだろう。相対化の一方の極が無になってしまったのでは、相対は成立しないからである。したがって、どこかにわれわれとは独立の自体的なあり方が残されることになる。いわゆる「物自体」は、そのような主観化の残余として考えられねばならなかったところのものである。しかしそれは観念論にとってのスキャンダルである。だから、その立場からは抹殺のいろいろな工作がなされなければならなかったのである。しかし自体的なあり方というような問題は、主観客観というような関係方式だけで処理しきれるものなのかどうかが、そもそもの問題なのである。プラトンのイデアは、端的に美が美であり、人が人であることの自体的なあり方なのであって、これは現象の背後にあるというあり方でもなければ、未だ現実化されない可能性というようなものでもないのである。それはむしろ自明的な自体性であり、あらゆる自体的なあり方の極北というところである。またしたがって、それがいかにして知識され、われわれに相対化され得るかが、別の困難な問題となるだろう。しかし『テアイテトス』においては、それ

自体で何かであることの否定が、いかなる結果を生むかが論じられているのであって、自体的なあり方をするもののほうは、当面の問題としては取り上げられてはいない。『テアイテトス』にはイデア論が出て来ないと言われたりするわけもそこにある。ここではその前提的な問題が取り扱われているのだとも解されるだろう。自体的なものの相対化、あるいは相関関係は、イデア論の問題として『パルメニデス』や『ソピステス』で論じられることになる。これはまた、この対話篇(181A, 183E)では保留されているエレア派哲学の批判の仕事としても考えられるだろう。問題は知識化だけに限られるものではないのである。

いわゆるヘラクレイトス説の批判的摂取とでも呼ぶべきものが、プラトン哲学の成立にとっての重要な布石をなすということは、アリストテレス『形而上学』第一巻第六章などの叙述によって、すでに伝統的な常識となり、教科書的な哲学史のうちに公式化されている。しかしそこに実際に考えられていた内容と意味は、ほとんど理解されていないと言ってよいだろう。自体的にあるものの否定ということを中心として、この対話篇で展開されているプロタゴラス・ヘラクレイトス説の批判は、あらゆる相対主義的思考の根本批判として、今日もなおまったく新鮮であると言わなければならない。プラトンはわれわれの日常的経験におけるプロタゴラス説の真実性を充分に認めた上で、われわれの学問や技術を成立させる知識が、プロタゴラス的相対主義では説明されないことを明らかにするのである。そしてその頂点をなすものは、皮肉にも「プロタゴラスの弁明」(166A~168C)のうちに最初のヒントが与えられ、その後さらに重ねて(171E, 177C~179B)取り上げられているプロタゴラス説の例外としての「善」の、それ自体としてのあり方の認識であろう。何が正であり、何が不正であるかということも、何が見好いことであり、何がみっともないことであるかということも、国家社会の風習や法律によって、それぞれに違っていて、それはその国家社会にとってそうあるだけの、相対的なものだと考えられるかもしれない。しかしそれらの風習や法律によって定められていることが、その国家社会にとってためになるものであり、利益になるものであるかどうか

ということは、もはや法律や習慣で定めることはできない。そこに立法の仕事を主とする政治のむずかしさというものがある。また同じく各個人も、何がほんとうに自分のためであり、自分の幸福となるかを知ることはできない。それは自分が勝手に考えてきめることのできるものではなくて、それはそれとしての自体的なあり方があって、それを知らなければ、どうにもならないことなのである。そしてこれらはいずれも将来にかかわるものが主となるが、将来の予測については、誰でも尺度となり得るのではなくて、そこには専門の知識が要求されることになる。われわれは将来をいろいろに予測しても、未来はそれ自体のあり方をもって、われわれを失望させたり、意外の驚きにおとしいれたりするだろう。未来はプロタゴラス説の限界を示す広大の領域なのである。そこでは誰でも知者になれるというようなプロタゴラス説の安易さは、たちまちのうちに破砕されてしまうのである。

## 四

かくて、この対話篇の第一部においては、感覚即知識説を直接単独に取り扱う議論に対して、これをプロタゴラス・ヘラクレイトス説に結びつけて、これを大がかりな包囲陣を布いて批判する議論の方が、圧倒的に大きな比重を占めていることが見られる。プロタゴラス・ヘラクレイトス説関係は、152A～183C の三一頁余であるに対して、最後のところで感覚即知識説だけを取り扱った部分は、すでに見られたように、184B～186E の二頁強にすぎないからである。そしてこのような構成は、第二部にも第三部にも共通するところのものなのである。第二部においては、「正しい思いなしが知識である」という説の吟味よりも、「そもそも虚偽の思いなしというものはあり得るか」という、虚偽可能の問題が主に取り扱われているのであり、第三部においては、その正しい思いなしにロゴスが加わるか、加わらないかで、知識であるか否かをきめようとする考えがもち出された時、これを特にＡＢＣなどの字母と、それの組み合わせ(綴（シラブル）)の例で考える別の学説、すなわちＡあるいはＢの絶対単純なものは、それ自体だけに

とどまる限り、ただ名前を呼ぶよりほかはなく、名前を組み合わせて綴るロゴスは、それら単純要素の組み合わされたものについてのみ可能であるとして、「単純要素は不可知であるが、それを束ねたものは可知的である」と唱える学説が、まず最初に吟味されることになる。これは第一部のプロタゴラス・ヘラクレイトス説、第二部の虚偽不可能説などに対応する一つの迂回であり、横道の議論であると言わなければならない。一部の学者はここに批判されている学説をアンティステネス説と見たこともあるが、その当否はしばらくおき、それが特殊の議論であることは明らかである。それは誰かほかの人から聞いた説なのだが、夢のなかの話みたいで、前後の事情ははっきり記憶していないというようにも言われている。このような特別の説明つきで導入された学説に対し、批評もまた限定されたものとならざるを得ない。例えばSOというシラブル(束)は、SとOを二つ合わせたものが、そのまますなわちそれなのか、それともSOという一つのシラブルは字母のSやOとは全く別の、それ自体一つのものなのかという二つの場合が区別されて、前者ならSOを知る者は、またSとOを知る者であって、SもOも知らずにSOを知ることは不可能だし、後者の場合なら、シラブルも字母も、それぞれに単一なのであるから、字母が単純だから不可知だと言われるなら、シラブルもまた単一性の故に不可知でなければならないと批判される。つまり単純者もそれの組み合わせ(シラブル)も、ともに可知的であるか、あるいはともに不可知であって、一方のみを可知的、他方を不可知と区別することはできないということになる。これは字母とシラブルについての可知と不可知の議論であって、一般的な知識論でもなく、それはロゴスに関係させることができるけれども、またしかしロゴスに関係させないでも、それだけで考えることのできる議論なのである。それらの議論に深入りすることは、だから「当面の問題を忘れ」(206C)させることになるとして、ソクラテスも早々に話を本題にもどさなければならなかったのである。

だから、この対話篇は三部に分かれて、何が知識であるかを、一、感覚、二、正しい思いなし、三、正しい思いなしに言論(ロゴス)の加わったものの、どれで答えるかによって、三段につみ重ねられて、一つの連続をなしているけれど

も、しかしその三部それぞれにつけ加えられた余談のようなもの、一、プロタゴラス・ヘラクレイトス説、二、虚偽可能の問題、三、単純要素とその束との可知不可知の区別の議論の三つは、相互に直接連続することもなく、たがいに内容もまったく異なっていると言わなければならないだろう。しかもこのように横道へそれた議論の方が、対話篇の大部分を占めているのだとすると、全体はテーマの形式的統一性をもっているにしても、実際の内容は混雑していて、これを統一的に理解することは容易ではないと考えられる。

## 五

しかしながら、他方またプラトンの対話篇というものは、どれも単純に一つの議論だけを展開するというようなものではなく、むしろ別方面の議論を導入することによって、全体的には多次元的な立体的構造を示すのが常であるから、この『テアイテトス』だけをこのような多次元性の故に理解困難であると考えるのも正しいことではないだろう。第二部の虚偽不可能の問題をとってみると、これは第一部の議論とはまったく独立別箇の取り扱いをされているけれども、しかし問題そのもののつながりからすれば、プロタゴラス主義の考えと表裏の関係にあることが知られるだろう。なぜなら、もしプロタゴラスの説くように、各人が万物の尺度なのなら、誰の思うことも、その通りにあるわけで、虚偽の思いなしというようなものはあり得ないということになるからである。第一部では、すべての思いなしが必ずしも真なのではないというふうに、プロタゴラスの主張を否定する議論が展開されたけれども、第二部では、それなら虚偽の思いなしは、どうして可能なのか。そういうものはあり得るのかどうかという、むしろ反対側からの批判が展開され、第一部と第二部で一つのアポリア、アンティノミーが成立するようになっているとも見られるだろう。プラトン自身も第二部の議論が、「前とはまた別の仕方で考察する」(187D)ものであるにしても、やはり「もう一度これまでの足跡を後からたどる」(187E)ようなものであることを感じていたのである。

これに反して第三部の議論は、全く特殊の議論であって、第一部とも第二部とも直接の関係はないように思われる。しかしながら、それの

「おのおのはそれ自体としてそれ自体にとどまる限り、ただその名前を呼び得るのみであって、それ以上ほかに何もつけ加えて言うことはできないのであって、『ある』とも『あらぬ』とも言うことはできない」(201E)

という説明は、第一部のヘラクレイトス批判と対応するものがありはしないだろうか。ヘラクレイトス主義を徹底化することによって、一切は生成の流れのうちに解消され、それ自体においてあるものは、すべて否定されてしまったのである。そしてそれによって立言(ロゴス)のすべてが不可能になり、学問や知識も成立しなくなったのである。ところが逆にまた、この第三部では、おのおのはそれ自体にとどまる限り、やはりロゴスをもち得ず、名前を呼び、感覚することはできても、知ることはできないと主張されているのである。202B参照。すなわちこの点において、第一部と第三部の間にも問題関連があり、あるいはアポリアのごときものが成り立つと考えられるかもしれない。*字母のAやBは、それ自体としては、ただ感覚され、名前を呼ばれるだけであるが、イデアの自体的有も、われわれの精神が純粋にそれ自体となって、直接これに触れることができるだけであり、「美は美」という自同性で呼名されるだけだとも考えられるからである。したがって、この特殊な学説の批判は、また間接的にイデア論の批判にもなっていると解されるかもしれない。これに対して、自体的なるものがどういうふうに相互に結合されて、イデアの共同体をなすかということは、さきにも注意されたように、プラトンが『ソピステス』などで新しく取り組まねばならなかった問題なのである。しかしながら、『テアイテトス』に関する限り、プラトンはこの三部では、第二部の場合と異なり、このような問題の重複について何の注意も与えていない。したがって、この部分の議論にイデア論の問題を読みこむのは、解釈の行き過ぎ、あるいは逸脱となるだろう。しかしまたプラトン哲学一般の理解あるいは解釈としては、なおいろいろな問題のつながりをここに探ることが許されていいだろう。

＊　このような第一部と第二部、あるいは第一部と第三部との間のアポリア、アンティノミー構成は、制作年代を同じくすると考えられる『パルメニデス』の構成とも共通するものがあると考えられるだろう。

## 六

この対話篇の三つの部分は、同じ長さ同じ分量なのではなくて、

一、151E～186E　三五頁
二、187B～201C　一四頁
三、201C～210B　九頁

のごとく、第一部が最も大きな比重を占めている。そしてそこに取り扱われているプロタゴラス・ヘラクレイトス説の批判も、関連するところの最もひろい問題を取り扱い、その実践的な意味も深刻であると言わなければならないだろう。多くの人たちの生活は、ある意味ではプロタゴラス主義の部分的実践にほかならないとも考えられるからである。またこの第一部の思想は、プラトンの前期著作に共通するものが少なくない。この対話篇を最初から読んで行くと、第一部に対する序の部分にあたる、そもそもの問題の提出(145C～D)と、それの間違った受けとり方(145C～147D)が、すでに『メノン』(71E～72E)、『エウテュプロン』(6D)、『ラケス』(191A sqq.)などでおなじみのものであることに気づかれるだろう。また172D以下のエピソードにおける哲学と世間との対立は、『国家』六巻と七巻、『ゴルギアス』(484C～486D)などに語られているものと対応すると言うことができるだろう。その他こまかい点にわたって、他の前期著作との対応もいろいろと指摘される。これに対して第二部の内容は、むしろ後期著作『ソピステス』の議論に関係するところが最も深いのではないかと考えられる。虚偽不可能説というものは、ひとはあらぬものを考えることはできないのであって、何かあるものを考えなければならないから、したがっ

てどんな考えにも実があって、虚偽はないというような議論によるのが普通であって、『ソピステス』はそのような難問の解決を試みたものであるが、『テアイテトス』はもっと別の可能性を探り、結果は不成功であっても、『ソピステス』の議論のために準備的な意味をもつと考えられるからである。ここでは「ある」と「あらぬ」の代わりに、ひとは何かを知っているか、知らないかであるという、「知」と「不知」をつかって議論を展開することが行なわれる。それの基本的な型はこういうことである。すなわちひとは自分の知っているAを、同じく自分の知っている別のBであると思うことは、かれがAとBを知っている限り、不可能である。なぜなら、それはAとBを知っていて、また知らないということになるからだ。またAもBもまったく知らないのに、AをBであると考えつくこともあり得ないし、知と不知がはっきりしている限り、知っているAを、少しも知らないBであると考えつくこともできない。しかもひとが考えるのは、知っているものか、知らないものかのどちらかであって、それ以外ではないとすると、虚偽の思いなしの生ずる余地は全くないということになる。また同じことは感覚についても言えるのであって、ひとが現に感覚しているAを、また同じように現に感覚しているBと間違えるというようなこともあり得ないのである。もし虚偽が生ずるとすれば、それは感覚によっていったん与えられたものをさらに記憶しているような場合、それを知ってはいるのだが、その記憶がぼんやりしていると、現にまたそれが感覚されても、それと記憶が一致しないようなことが起るので、そこに虚偽が可能になると考えられるのである。つまり感覚と記憶との不一致が、虚偽を生む条件となると言ってもいいだろう。しかしこれが虚偽の一般的な説明となり得るかといえば、そうはいかないのである。ひとが計算を間違えるような場合には、感覚は加えられなくても、われわれの思いなしだけで、つまり頭のなかだけで考えていても、なお虚偽が生ずることを示しているからである。プラトンはこの場合の虚偽を説明するために鳩小舎の比喩を用い、いったん獲得された知識だけでも、そのなかでまた再捕獲する場合の失敗があり得ることを注意する。これは知っていて知らないということは、作用だけで考えれば、直接的

には不可能であるとしても、すでに知っているものを知らないでいることはあり得るという説明なのである。しかし知っているはずのものを、いま現に知らないことがあるということの説明に、鳥かごの中に小鳥を所有していても、いま現にそれを所持してはいないという、所有と所持の巧妙な区別を用いても、結局ひとはすべてを知っていて、不知ということはどこにもないはずなのに、結果的に不知が出て来るということになるので、そこにひとつの背理を認めなければならないことになる。しかしそうかといって、「知」のほかに「不知」をも前提し、鳥かごのなかにもまた別に「不知」を入れるとすれば、それは要するに、すべてを「知」と「不知」に分けた時の、最初のアポリアがまた現われてくるだけだということになる。したがって、虚偽の成立を「思いなし」の領域において説明することは、一般的には成功しないわけである。むろん感覚との結びつきにおいては、その可能性が部分的に示されたけれども、プラトンはそれを感覚の条件——例えば「遠くの方からで、充分には見られない」(193C)ような場合——で考えるよりも、むしろ記憶の条件(194A, 194C～195A)から説明することに主力を注いでいる。これは一見奇異な印象を与えるものであるが、問題が虚偽の「思いなし」に関するものであり、「思いなし」(ドクサ)と「感覚」が区別される(187A)ことになった今は、この「思いなし」の範囲で問題を解くことが要請されているからだと考えられる。またしたがって、知識というものも「思いなし」と等置されるものとして、蠟板の上の印刻にたとえられるような記憶のレベルで考えられているわけだ。しかし本来的に言えば、はたして知識がそういう形で考えられていいかどうかが問題なのであって、プラトン自身もその点を自覚し、自己批判(200C～D, 196D)していることなのである。

## 七

かくて、虚偽がどうして生ずるかということは、それ自体哲学的にもきわめて興味のある問題なのであるから、

この第二部の議論も第一部のそれに劣らず、一般的な問題関連のうちに理解されなければならないのであって、それだけの意味深さをもっていると言うことができるだろう。むろんこの種の問題は、プラトンの前期著作『エウテュデモス』(283E)、『クラテュロス』(385B)でも触れられていることなのであるが、これを本格的に取り上げているのは『テアイテトス』と『ソピステス』においてであると言わなければならないだろう。その故にまた、この二つの対話篇を特別の関係において一括し、プラトンの知識論あるいは認識論を、この二篇に限定して考察したりすることも行なわれている。しかし『テアイテトス』全篇は、もっと複雑な構造をもち、プラトンの他の著作との関係も一つだけに限られるものではないから、このような取り扱いは誤解を招くと言わなければならないだろう。虚偽可能の問題も、『ソピステス』ですべてが解決されてしまうわけではなく、プラトンの知識論は、もっと広範囲に考察されなければならないものだからである。

この対話篇の第三部は、第一部第二部にくらべて分量も少なく、そこに取り扱われている字母とシラブルの論も、プロタゴラス・ヘラクレイトス説や虚偽不可能論にくらべると、まったく特殊の議論であって、それほどひろい関心に訴えるものではないと言われるだろう。またプラトンの他の著作との関連も、この部分の「全部」と「全体」の区別の議論(204A～205A)などに、『パルメニデス』(137C～D, 157D～E)の論法を思い出させるものがあるのと、真なる思いなしにロゴスを加えたものという知識の規定が、『メノン』(97E～98A)の、思いなしの真なるものから知識が生まれるためには、ものの理由となり、原因となるものを、ロゴスをはたらかせて推理把捉することが必要であって、これによって一時の思いつきにすぎないものが、人の心につなぎとめられるのだというように言われているのを、ちょうどまた思い出させるだろう。しかしこれらの対応は、『テアイテトス』をこれらの対話篇に直接むすびつけるものとなるかどうかは、簡単に言えないように思う。問題のつながりが同じではないからである。単に思ったものがたまたま当っていたというだけの、真なる思いなしあるいは思わくから知識というものをきびし

く区別するのは、『メノン』(97A)、『饗宴』(202A)、『国家』(VI. 506C)、『パイドロス』(247D～248B)、『ティマイオス』(51D)などにおいて、一貫して示されているプラトンの根本思想の一つなのであって、いわゆるイデア論はこの区別と成否を共にすると言われているのである。だから、『メノン』においても、両者をむすぶ条件は「アナムネーシス」(想起)と言いかえられていて、それはむしろ両者を区別するきびしい条件になっていると見なければならない。それは第二部末の裁判の実例にもとづく、やや常識的な区別とはちがっているのである。また第一部末(185D～186B)においても、たましい(心)が自分だけで自分自身を用いて到達しようとするものが語られるとき、『パイドン』(65C～66A)などの先例によって、われわれはイデアの認識や想起(アナムネーシス)を期待するのであるが、プラトンはレベルを一段さげて、これを「思いなし」の段階にとどめてしまう。総じて『テアイテトス』では、知識は感覚や思いなしに等置されるようなレベルで、テアイテトスの顔や車の材木、あるいは蠟板の刻印や鳩小舎の鳩、見知っている人と見知らぬ人の区別や算術の計算などの実例について考えられるだけなのである。だから、知識をイデアの想起のみに限定するような、やかましい条件から考えれば、このようなものの中に知識が見出され得ないことは、はじめから分かりきっていたとも言われるだろう。つまり『メノン』と『テアイテトス』とは簡単には結びつかないのである。しかしプラトンの知識論は、『テアイテトス』のこのような消極性とその否定的な結論だけで考えられていいものかどうか。むしろわれわれはこれをもっとひろく、プラトンの全哲学のなかで、どのような意味をもつものか考えてみなければならないだろう。『ピレボス』(55C～62D)には、知識や思いなしを含む全体の総括と評価のごときものが与えられているが、それはイデア論的な区別を堅持しながらも、なおかつひろやかな展望をもつことの可能性を教えるものとも解されるだろう。

## 八

なおこの対話篇の構成と形式については、多くの説明を必要としないであろう。プロロゴスは、エウクレイデスとテルプシオンという、メガラ出身のソクラテス派の二人物の会話となっているが、われわれはその会話の内容によって、この対話篇がコリントス戦争で戦病死したと考えられるテアイテトスに捧げられたものであることを察知することができる。そして本篇の長い対話をエウクレイデスが筆記に残しておいたことも、またテルプシオンがそれを読んで聞かせてくれと熱望するのも、かれらがパルメニデス、ゼノン、メリッソスなどのエレア派の論理的傾向を受けついだメガラ派の人たちであり、この対話の内容が論理的傾向のものであることを思うとき、プラトンの設定は巧妙なものであると感心させられる。それはしかし反面メガラ派に対する批判の意味もふくまれていると解されるかもしれない。本篇の対話はテオドロス、ソクラテス、テアイテトスの三人であるが、数学者として問答法を苦手とするテオドロスを、はじめのうちは局外におきながら、やがてこれを問答のなかに引きこむ次第は、一つの劇的な波乱をなすわけで、この対話篇が前期著作と同じように、充分くふうされた作品であることを語っている。対話は本論に入る前に、他のソクラテス的対話篇と同じように、ソクラテス的な「何か」の問いの説明が、テアイテトスの答えそこないを通して与えられる。そしてそれにからませて、テアイテトスの人となりのほめ言葉が実証され、無理数を定義したテアイテトスの数学上の功績が紹介されている。そしてさらにソクラテスの産婆術のくわしい説明があり、全体の対話はこの産婆術の実演という意味を与えられ、この対話篇の最後のところに、その効用がのべられている。つまり形式的には、これによって一貫した完結性が与えられていることになる。そして内容的には、「何が知識か」という問いに対する三つの答えに従って、全体が三部に分けられることはすでに見て来た通りである。さらに話がいつも横道にそれて、全体が混雑したものになることについても、二三章から二五章にかけ

ての(172D～177C)の長いエピソードが、時間に束縛されずに、何でも好きなことを、ゆっくりと議論する哲学者の特権について語っているので、われわれもその点について文句を言うことができず、むしろ寛大にならなければならないことになる。プラトンは用意周到の劇作家なのである。またこのエピソードに示されている法廷弁論と哲学的対話との相違を通じて、時には戯画の滑稽さをまじえながらも、プラトンはきびしくわれわれの生活を批判する。それはパイドンにおける「死の練習」に対応するもの、『ゴルギアス』『国家』における政治と哲学との否定的相関関係を、あらためて考えさせるものとも見られるだろう。しかしまた人間は悪を離れることができないとするペシミズムが、ここにその一端を現わしているとも考えられるだろう。『テアイテトス』は全体として、前期ソクラテス対話篇の形式とエートスを保ちながら、既に後期著作の論理と共に心理をも示していると言うべきであろうか。

## 使用文献

テクスト校定本

M. Schanz, *Platonis opera quae feruntur omnia*, Vol. II, fasc. I, Leipzig, 1883.

A. Diès, *Platon, Œuvres complètes*, Tom. VIII-2e partie, *Théétète*, (L'edition Budé), Paris, 1967. (仏文対訳つき)

H. N. Fowler, *Plato, Theaetetus*, (Loeb Classical Library), London, 1931. (英文対訳つき)

テクスト校定と注釈

L. F. Heindorf, *Platonis Dialogi Selecti*, Vol. II. Berlin, 1805.

G. Stallbaum, *Platonis Theaetetus*, Gotha, 1839.

L. Campbell, *The Theaetetus of Plato*, Oxford, 1861.

L. Campbell, *The Theaetetus of Plato*, 2 ed. Oxford, 1883.

パピュロス断片(注釈を含む)

*Anonymer Kommentar zu Platons Theaetet* (Papyrus 9782) bearbeitet von H. Diels u. W. Schubart, 1905.

注　釈

H. Schmidt, *Kritischer Kommentar zu Platos Theätet*, (Jahrb. f. klass. Phil. Suppl. IX, Leipzig, 1877) S. 405～565.

H. Schmidt, *Exegetischer Kommentar zu Platos Theätet*, (Jahrb. f. klass. Phil. Suppl. XII, Leipzig, 1881) S. 77～190.

M. Wohlrab, *Platonis Theaetetus*, Leipzig 1891.

翻訳と注釈

O. Apelt, *Platon, Theätet*, (Die Philosophische Bibliothek 82), Leipzig, 1955.

F. M. Cornford, *Plato's Theory of Knowledge*, London, 1935.

J. McDowell, *Plato, Theaetetus*, Oxford, 1973.

田中美知太郎訳『プラトン　テアイテトス』(一九三八年、岩波書店)

翻　訳

フィチーノ(M. Ficinus)、シュライエルマッハー(F. Schleiermacher)、ジョウエット(B. Jowett)のものなどいろいろあるが、ほかに、

H. Müller u. K. Steinhart, *Platons sämtliche Werke*, Bd. III, Leipzig, 1852.

M. J. Lewets, *The Theaetetus*, Glasgow, 1928.

E. Salin, *Platon, Theätet*, Bonn, 1946.

## ナ 行



## ハ 行



## マ 行

## タ 行

## サ 行

# 『テアイテトス』索引

数字と ABCDE は，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字と BCDE(A は数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

# 『クラテュロス』語源索引

ギリシア語アルファベット順による．本文中に複数形で出ているものも単数形に改めた．

## マ　行



## ヤ　行



## ラ　行



## ワ　行

## ナ　行



## ハ　行

## サ　行



## タ　行

## カ　行

# 『クラテュロス』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

## ア 行

プラトン全集 2　　第3回配本(全15巻　別巻1)

1974年12月5日　発行

¥3300

訳　者　水地宗明(みずちむねあき)
　　　　田中美知太郎(たなかみちたろう)

発行者　岩波雄二郎

東京都千代田区一ツ橋2-5-5

発行所　株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　精興社印刷・牧製本